4

メタルギア ソリッド 4

ガンズ・オブ・ザ・パトリオット

シナリオ・ブック

目次

【ご注意】
本書は、開発中のシナリオを元にして作成しているため、
ゲーム上の表現とは若干異なる場合があります。

ACT1
Liquid Sun

液体の太陽

【字幕】

―戦争が日常化した近未来、何処かのありふれた戦場―

【中東潜入前／ポリデモ】　中東郊外～廃墟南部

――戦場に赴く民兵の一団。４台のトラックが廃墟を行く。

――１台目のトラックの荷台に揺られるスネーク。

――各トラックには民兵が所狭しと乗り込んでいる。荷台の左右の外側にも板につかまって数名の民兵が乗っている。それぞれ手にＡＫ。一台に一人程度、ＲＰＧ７を持った兵士がいる。

――その画に重ねてＯＦＦでスネークの声。

「戦争は変わった。

国家や思想のためではない。

利益（資源）や民族のためでもない。

金で雇われた傭兵部隊と造られた無人兵器が、

果てしない代理戦争を繰り返す。

命を消費する戦争は、合理的な痛みの無いビジネスへと変貌した。

戦争は変わった。

ＩＤ登録された兵士たちは、

ＩＤ登録された武器を撃ち、ＩＤ登録された兵器を使う。
体内のナノマシンが彼らの能力を助長し、管理する。
遺伝子の制御、情報の制御、感情の制御、戦場の制御。
全ては監視され、統制されている。
戦争は変わった。
時代は抑止から制御へと移行し、大量破壊兵器によるカタストロフは回避された。
そして戦場の制御は歴史のコントロールをも可能にした。
戦争は変わった。
戦場が制御管理された時、戦争は普遍のものとなった」

――各トラックに一人、金で雇われたオペレーターが乗っている。オペレーターの服装はスネークに似せる。スネークもオペレーターに扮して乗り込んでいるという設定（そのためスネークの人種がそぐわないのも他の民兵にとって疑問にもたれない）。
――周囲は砂漠からだんだん街中へと変わっていく。４台のトラックは戦場となった中心街へ入っていく。ゲートをくぐった入り口でトラックが停止。隣の民兵がＲＰＧ７の手入れをやめて降りる。飛び降りて闘う民兵達。
――ＰＭＣ側も応戦。屋上からスナイピング、物陰からアサルトライフル。民兵達は次々と撃たれ、倒れていくがひるまずに前進する。
――スネークも降りる。上空はカナードが旋回。後方から追加のトラックが到着、続々と降りてく

る民兵。

——2台目のトラックはメイン通りの手前で停車。3台目は運転手を狙撃され、ゲートに衝突する。これでゲートは塞がり、後戻りが出来なくなる。

——トラックから降りたスネーク（顔は見せない）、試すようにAKを何発か撃つ。

——弾薬の中に不良品が混じっている。不良弾薬のせいで、排莢不良トラブルが起こる（弾丸が銃身から出ずに残ってしまい、薬莢も膨らんで薬室に張り付いてしまい、手動でも抜き出せない状態）。

——仕方なく、AKを捨てる。

【PMCvs反乱軍1／インタラクティブデモ】 中東郊外

——通りでのPMCと反乱軍（民兵の銃撃戦）。

【PMCvs反乱軍2／インタラクティブデモ】 中東郊外

——モーキャプデータを使用。戦場感が出るよう演出する。

【中東潜入1／ポリデモ】 中東郊外〜廃墟南部

——前ゲームのHDの状況を継続。4台目の民兵が3台目の荷台を乗り越えてステージに入ってく

る。民兵達はＰＭＣに撃たれ、次々と倒れていく。この時点では民兵は劣勢。通路前のスナイパーとアサルトライフルが壁になって民兵達は先に進めない。
――ホフクでトラックから出てきたスネーク。銃撃戦をかいくぐり、トラックの背後を通り抜け、通りの反対側へ移動する。トラック下から戦場が見える。３人のＲＰＧ部隊が通りの向こうのＰＭＣのスナイパーを攻撃。民兵は優勢になる。スネークは南西角まで移動。

【中東潜入２Ａ／ポリデモ】　中東郊外～廃墟南部

※スネーク位置が南の場合

――通りの様子を覗き込むスネーク。遠くで月光が鳴く。サインを送ると各々撤退を始めるＰＭＣ兵。民兵達は警戒し、上空を見渡す。
――突如ハイジャンプで落下してくる月光！　踏み潰される民兵達！　身構えるスネーク。

【中東潜入２Ｂ／ポリデモ】　中東郊外～廃墟南部

※スネーク位置が北の場合

――通りの様子を覗き込むスネーク。遠くで月光が鳴く。サインを送ると各々撤退を始めるＰＭＣ兵。民兵達は警戒し、上空を見渡す。
――突如ハイジャンプで落下してくる月光！　踏み潰される民兵達！　身構えるスネーク。

【月光が民兵掃討&トラックを蹴飛ばす月光/インタラクティブデモ】 中東郊外

――この前のデモから、そのままつなぐ。カメラのデモデータだけが終了し、スネークとカメラが動かせる状態。

――民兵の一団の前方に着地した月光がゆっくり立ち上がり頭部で民兵たちを一掃していく。民兵は月光を射撃するが歯が立たない(攻撃が効かないことを説明)。スネークが巻き込まれたら吹き飛び、民兵は即死。

――別の月光が通り真中の2台目トラックを蹴り倒す。周囲の民兵は巻き込まれて下敷き。

【壁破壊月光/インタラクティブデモ】 中東郊外

※スネークがステージ北東に進んだ時に発生。

――建物二階の壁を月光が破壊し、飛び降りてくる。

【中東潜入3/ポリデモ】 中東廃墟北部の建物内

――入り口に隠れると煙草を咥え、火をつけるスネーク。その肩に血が落ちてくる。

――見上げると上に民兵の死体を咥え、両足で壁に突っ張って空中に留まっている月光!

【主観ボタン】 スネーク主観で月光を見ることが出来る。

――後退しながらＡＫを撃って抵抗するスネーク。月光は背後を追ってくる。
――その先の建物に入るとスネークの真横の壁が大破！　横殴りに飛んで来る瓦礫。すぐさまその土煙の中からもう一機の月光の蹴りが飛んで来る。それをギリギリでかわすスネーク。だが纏っていた布が引き剥がされる。
――横っ飛びでかわして着地するスニーキングスーツ姿のスネーク（ソリッド・アイなし）。

【字幕】オールド・スネーク　大塚 明夫

――隣の部屋に逃げるが、更に壁をやぶって月光が突入してくる。
――出口なく、階段を上るスネーク。月光の触手がスネークの足を掴み、スネークは階段に倒れる。
――スネークを狙う月光の機銃。その鼻先を、足で押しやり逃れるスネーク。
――月光、さらに上がろうとするが階段が崩れて落下する。
――粉砕された天井にぶら下がり、スネーク、間一髪で二階へ逃れる。そのあとを月光が這い上がってくる。
――眼下に飛来する二機目（シーン冒頭の月光）、月光と目が合い慌てて元来た方へ戻るスネーク。飛来した二機目の月光は両足を開脚して壁を上がってくる。
――スネークは隠れ場所を目線で探す。目の前にダンボール。その背後、一機の月光が二階へ顔を出す。変質していくオクトカムのアップ（スネークの部位寄り）。
――登り切る月光、二階に頭を出す。後ろからも！　月光つめよる！

ダンボールの印刷「隠れる場所はない」

——二階フロアを索敵する。人影がなくなった⁉

——月光主観、タバコの灯が見える。触手でタバコを掴んでよく観る月光。サーマルに切り替えても熱反応なし。スネークの姿はないが、瓦礫の隅にぽつんとひとつ、埃まみれの段ボール箱が置かれている。怪しい！

【主観ボタン】月光達が見える。スネークがダンボール内にいない事がわかる。

ダンボールの印刷「秀夫に場所はない」

——ズーム。臭いを嗅ぐような仕草。二機で両側から段ボールを挟む。一歩前進、段ボールを踏みつける月光（一機目）。

——中からゴロゴロと大量のスイカが出てくる。スネークはいない！

——近くで鳴った民兵の銃撃音＋咆哮音！　に反応し、二機はうなずいて、咆哮して答える（合図）！

ジャンプして飛び去る二機の月光。

——スネーク、月光を追ってベランダへ。かなたに煙る戦場が見える。タバコを拾って一息つくスネーク。戦場を見渡す。スネークの頭上を通り過ぎる数機のカナードローター。

——ゲームタイトル表示。

——ベランダから飛び降りるスネーク。着地した近くにＡＫが落ちている。トラップに注意するス

ネーク。銃器の下にディレクター&プロデューサー名。それからメーカー名の表記。
——画面ごとF.O.（Fade out）

【プロローグ墓地（回想）／ポリデモ】米国無縁墓地

【字幕】３日前

——朝靄、晴れ、春先やや肌寒い、米国某所の無縁墓地。ＭＧＳ３ラストシーンの墓地と同じ場所だが、50年の歳月を経て様変わりしている。整地され、新たに建物も建てられたが人気はなく、うち捨てられ、訪ねる人も少ないといった印象。ビッグボスが植えた花（潔白）が半世紀を経て、墓の周囲に咲き乱れている。戦犯者や戦場犯罪者、陰の英雄が葬られている。
——スーツ姿のスネーク、ＢＩＧＢＯＳＳ（ザ・ボスの隣）の墓に敬礼。
——その後方にゆっくり降りてくるヘリ、望遠。花（潔白）が空に舞う。スネークのネクタイ、髪の毛、スーツが揺れる。
——ヘリから身をかがめて降りてくるオタコン。ローターは回転したまま。やや小走りにスネークに近寄るオタコン。

スネーク　「オタコン、死者が目を覚ますぞ（騒々しいので）」
オタコン　「スネーク、急いでくれ」

スネーク　「?」
オタコン　「（深刻な表情のまま）懐かしい顔がお待ちだ」

――メガネを指で直すオタコン。

【字幕】オタコン　田中 秀幸

――オタコンの後について歩き出すスネーク。

スネーク　「オタコン、検査の結果は?」
オタコン　「プロテオーム分析はポジティブ。でもｍＲＮＡ解析ではシロだ」
オタコン　「皮膚の萎縮や動脈硬化…、急速な老化の症状はウェルナー症候群に似ている」
オタコン　「だけど…、どんな検査でも、原因は特定できなかったらしい」
スネーク　「それで?」
オタコン　「その…」
オタコン　「…老衰の経過から判断すると、長くみても、その…」
スネーク　「せいぜい一年ってところか?（無感情。死を畏れてはいない）」

――自分の掌を掲げて見る。そこには深い皺が刻まれている。

オタコン　「ああ…（目線をそらす）」

――そこに墓場に咲き乱れる花、花びらを見て、感傷的になるスネーク。空中に舞う花びらを掴み取る。

オタコン　「スネーク、他の医者を…」

スネーク　「普通の医者ではダメだ。俺は普通の人間じゃない（クローン）。ＦＯＸＤＩＥ（フォックスダイ）の事もある（仕組み）」

【フラッシュバック】ＦＯＸＤＩＥ

オタコン　「ああ、そうだね（済まなそうに）。でも、ナオミの行方はわからない…」

スネーク　「ナオミか…」

【フラッシュバック】ナオミ

――ヘリ内に乗り込むスネーク。中からキャンベル（私服）が出迎える（操縦席にパイロット、コパイ）。

キャンベル　「スネーク」
スネーク　「大佐！」
　　——握手する二人。
キャンベル　「その呼び方は止してくれ」
スネーク　「（スーツに視線を送りつつ）そんな格好をするのは娘の結婚式だけかと思っていた。今は何を？」
　　——触れたくない話題（娘＝メリル）のように表情を曇らせるキャンベル。気を取り直して目を上げ、
【字幕】ロイ・キャンベル　青野 武
キャンベル　「…私はいま、国連安保理の補助機関に籍を置いている。ＰＭＣ査察委員会の分析、評価部門だ」
スネーク　「何年か前に決議を通った奴か」
キャンベル　「スネーク、私はそこで…ある情報を耳にしたのだ」
スネーク　「？」

キャンベル　「奴の居場所がわかった。中東だ」

スネーク　「（表情が固くなる）」

——飛び立つヘリ。

キャンベル　「詳しくは機内で話そう。いま奴を止めなければ…（表情を曇らせ、言葉を濁すように）もう後はない」

——乗り込んだオタコンが扉を閉める。

——スネーク、オタコンの顔をみる。オタコン軽く頷く（決意）。

オタコン　「ああ、リキッドが動き出した（見つかった）」

【フラッシュバック】リキッド

キャンベル　「奴は蹶起の準備を進めている」

スネーク　「…」

——キャンベルは身を乗り出す。

キャンベル　「スネーク、中東の紛争地帯に潜伏する、リキッドを追え」

――スネーク、真っ直ぐ正面を睨む。

【実写目玉焼き1／ムービー】 ノーマッド内

――音先行でＦＩ。玉子はサニーが飼っている三羽の鶏（ソリッド、リキッド、ソリダス）から毎朝収穫する。コンロに乗ったフライパンを真上から捉えるＵＰ。

サニー 「（ＯＦＦ）今日の玉子は二個…、ソリダスちゃんはお休み」

――サニーの腕が画面にイン。玉子を割る。目玉焼きを焼くフライパンの上俯瞰のアップ。玉子二個で卵黄は二個。二つ目がうまく割れず、一つ卵黄は潰れる（リキッドの失敗を暗示）。同時に、少女の鼻歌がＯＦＦ（off-screen）で聞こえる。よく聞くと円周率を歌っている。

サニー 「７８９２５、９０３６０」
サニー 「…１３３０５３０５」
サニー 「４８８２０、４６６５２…」

【章タイトル表示】
ＡＣＴ１ Ｌｉｑｕｉｄ Ｓｕｎ 液体の太陽

滑走路・ノーマッド

【ブリーフィング／サードパーソンデモ】

――以下、デモ中はカメラ演出あり。

――ノーマッド（輸送機）のカーゴは長期移動に対応できるように内装が施されている。二階建てになっていて、一階がリビング（会議室）、スパコンの「ガウディ」、オタコンの作業机、簡易医療ベッド。二階はシャワー、トイレ、簡易キッチン、ベッドなど最低限の居住空間が作られている。上下は急な階段で繋がっている。

――一階リビングにいるキャンベル、オタコン、スネーク。サニーは二階。

――ノーマッドの外観は映さずに、カーゴ内から入る。ノーマッド内のドリーショットを左記キャンベルの台詞に重ねる。

――機内をカメラはゆっくり進んでいく。どこからか聞こえてくるキャンベルの声。鶏の籠、ガンラック。日常的なものと、戦場的なものが交互に映っていく。日常的なものは主にサニーのもの。機内には生活臭が漂っている。様々な機材にまみれて、ぬいぐるみやスニーカーなどが散在している。ワンショットで進むカメラ。

キャンベル　「（ＯＦＦ）例のマンハッタンの事件（プラント事件）をきっかけに世論の反発が強まり、我が国では他国への表立った軍事介入が困難となった」

キャンベル　「（ＯＦＦ）それ以来、ＰＭＣを中心とした軍隊の民営化が進んでいる」

スネーク　「ＰＭＣ（Private Military Company）…民間軍事請負企業か」

キャンベル　「(OFF) そうだ。PMCは国家や思想に立脚しない、営利目的の民間企業だ」
キャンベル　「戦地への傭兵派遣のほか、兵器の調達、現地民兵の訓練…彼らは戦争そのものを請負い、それを利益に変えている」
キャンベル　「(OFF) 依頼主(クライアント)は米国を始めとする先進諸国、正規軍を持たない小国政府、武力による政権交代を目論む反政府軍、テロリストに至るまで…」
キャンベル　「(OFF) 米州、アジア、オセアニア、アフリカ、欧州、中東…」
キャンベル　「(OFF) PMCの台頭による代理的な戦争はいまや、世界中に拡がっているのだ」

——冒頭では飛行機内であることを意識させず、窓のない暗い、不自然な部屋、程度に思わせる。硬質な軍事施設と生活臭をだす。
——目玉焼きの乗った皿を持って階段を下りてくるサニー。下ではキャンベルとスネークが話している。オタコンはメタルギア・Mk.Ⅱを起動チェック。カメラはまだオタコンやサニーを映さない。カメラの前に唐突に置かれる目玉焼き。

サニー　「で、でき…(うまく云えない)」
オタコン　「サニー、後で食べるよ」

——皿を持ったまま、オタコンを食い入るように見るサニー。背後にスネーク。

【字幕】サニー　井上喜久子

——キャンベルはスネークに話を続ける。

スネーク　「（ＯＦＦ）（自嘲気味に）傭兵なら、いつの時代にでも存在しているだろう。ＰＭＣにしても、前世紀から棚上げになってる課題だ」

キャンベル　「（ＯＦＦ）いいや、スネーク。彼らは私たちの知る傭兵とは大きく異なっている」

——サニー、再びオタコンにアタック。

サニー　「で、出来たよ（今度は言える）」

——オタコンはキーボードを叩いて、メタルギアＭｋ．Ⅱの調整中。

オタコン　「悪い、今は手が離せないんだ（嘘）」

——と、Ｍｋ．Ⅱの開閉モニターを振ってバイバイをするオタコン。

——皿を持って、フンっ！　と怒りながら、戻っていくサニー（言葉にならないセリフ）。

——サニーの背後に二人の人物。ここでキャンベルとスネークの表情が見える。

キャンベル「米国防省が推奨する戦場管理システムの登場が、旧来の傭兵とPMCとの間に決定的な違いを生んだのだ」

――サニー、キャンベルとスネークにアタックするも二人は無視。

キャンベル「システムの開発はアームズテックセキュリティ」
スネーク「アームズテック？　あのAT社の事か？」
キャンベル「AT社は近年、兵器開発からセキュリティツール開発に軸足を移し、ATセキュリティを設立…成功を収めた」

――あきらめたサニー。両手が一杯なので、二階への階段をうまく上れない。オタコン、心配そう(すまなそう)に見上げる。

キャンベル「兵士一人一人の個人情報や部隊のミクロな情報は言うに及ばず、戦況に応じたマクロな情報統合さえも可能になったのだ」
スネーク「つまり、リアルタイムな戦場の制御が実現した？」
キャンベル「(うむ)その結果、PMCはシステムと共に全世界で爆発的に普及した」
キャンベル「事実、システムに制御されたPMCの投入により、戦場での虐殺や人権侵害は大

幅に軽減された」

スネーク　「『戦場浄化』というプロパガンダ」

——サニー、二階のキッチンにあがり、乱暴に皿（目玉焼き）を置く。すると、流しの上に灰皿がある。よく見るとスネークが吸ったタバコの残骸。上には煙草の箱。キッチンの換気扇が回っている。怒りを露わにするサニー。サニーが灰皿に触れたことで、一本の煙草が床に落ちて加速しながら転がる。怒りに任せてそれを踏んづけるサニー（MGS3HALO降下前の反芻）。サニー、2階から身を乗り出して、スネークに注意！　この後ノーマッド外観。

サニー　「スネーク、また（タバコ）吸ってたでしょ？　ここは禁煙なんだから！（うまく云えない）」

——バツが悪そうなスネーク。先を続けるキャンベル。

キャンベル　「（咳払い）それだけではない。各国政府や軍隊、反乱組織に至るまでが、コスト高で融通の利かない自国の正規軍より『安全で、使いやすい』ＰＭＣを頼るようになるまでには、それほど時間はかからなかった」

——オタコンはＭｋ．Ⅱを完成、床に置く。

キャンベル　「同時に、正規軍の縮小傾向が世界中に見られた」

——F.O.

【PMC実写映像／ムービーデモ】滑走路・ノーマッド

——グラフ、数字や図形、写真、新川イラストを表示。軍隊のデータ、PMCに依存してゆく様のデータ。PMCの実写映像＋世界地図とPMCの分布図。

キャンベル　「信じがたい事だが、PMCと正規軍との間では、規模の逆転現象が起こりつつある」

キャンベル　「今やPMCは正規軍に成り代わり、紛争地帯で活動する軍事力の60%以上を占めている」

スネーク　「60%…」

キャンベル　「…世界の軍備はPMCに大きく依存しているのが現実なのだ」

スネーク　「そもそもPMCを認めたのも国連決議じゃないのか」

キャンベル　「だが米政府はその国連決議案を棄権している」

キャンベル　「米国はその意思を明確にすることなく、強引にPMC採用を推し進めたわけだ」

キャンベル　「蹶起（けっき）の情報を手にするまではな」

——グラフ、数字や図形、写真、新川イラストを表示。戦争経済の図。武器の生産、需要、供給、輸出など、武器産業の株価上昇。

スネーク　「アメリカは世界に武力を輸出しすぎた。ツケがまわってきたんだ」
キャンベル　「その通りだ。今やアメリカは戦争を経済活動のひとつにしてしまった」
キャンベル　「経済アナリストの間では、右肩下がりの石油経済を補填する意味で〝戦争経済〟などとも呼ばれている」
キャンベル　「だが私としては座視しているわけにもゆかん。ＰＭＣにとって市場の拡大とは、すなわち戦火の拡大であり、それは戦災難民の増加をも意味するからだ」
スネーク　「戦争孤児と少年兵の問題？」
キャンベル　「（うむ）ＰＭＣ兵が専門化する一方で若年齢化も進んでいる」

——グラフ、数字や図形、写真、新川イラストを表示。少年兵の映像。

スネーク　「正規軍からスピンオフした傭兵に無人兵器、少年兵…新冷戦における代理戦争」
キャンベル　「各地で無数に点在し、なおも増加するＰＭＣのうち、世界で大手と呼ばれるＰＭ

Cは現在5社ある。アメリカに2社、フランス、イギリス、そしてロシアにそれぞれ1社」

――グラフ、数字や図形、写真、新川イラストを表示。5つのPMCの図。データ。マーク。装備、軍備。

キャンベル「そして我々の調査によればこれら最大手のPMC5社が、ダミー会社を通じ、たった1社のマザーカンパニーによって運営されていることがわかった」

――グラフ、数字や図形、写真、新川イラストを表示。それぞれのPMCのお金の出入りを追跡して行く。アウターヘブンのマーク。5つのPMCがひとつになる。

キャンベル「その大手5社を束ねるマザーカンパニーの名は、『アウターヘブン』」
スネーク「『天国に見放された世界(アウターヘブン)』？　まさか！」
キャンベル「そうだ。…リキッドだよ」
スネーク「リキッド‼」

――リキッドの新川イラストを表示。

キャンベル「奴はその強大な軍隊を率いて、蹶起(けっき)の準備を進めているのだ」

スネーク「奴は死んだはずだ」
キャンベル「その遺志はかつてオセロットと呼ばれた男の肉体（からだ）の中で生き残っている」
――オセロット、ビッグボスの新川イラストを表示。
キャンベル「リキッドは戦火を更に拡大し、かつてビッグボスが唱えていた理想郷を実現させるつもりなのだ」
スネーク「戦士が唯一、生の充足を得られる世界…」
キャンベル「そうなる前になんとしても奴を阻止せねばならん」

【ブリーフィング／サードパーソンデモ】滑走路・ノーマッド

――ここからユーザーはMk．Ⅱを自由に動かせる。
――キャンベル乗り出して、
キャンベル「いいか、スネーク。手段は問わない。リキッドの蹶起（けっき）を阻止しろ。その為には奴を…（口篭もる）」
スネーク「大佐」

スネーク　「俺にこう言いたいんだな」

スネーク　「〝奴を〟…、〝リキッドを殺せ〟…と」

　　　──オタコンもキャンベルの顔を見る。

キャンベル　「すまない。これは正義ではない」

キャンベル　「あくまで非正規の…、殺しの依頼だ」

キャンベル　「世界的な大企業の一経営者に対する暗殺」

　　　──深刻な話題を気にするサニー。上から下を覗く。

スネーク　「どうして俺に（依頼する）？」

キャンベル　「PMCの軍事力、そしてそれが生み出す経済効果」

キャンベル　「戦争は20世紀で言う石油に継ぐ、世界経済を支える柱となろうとしている」

キャンベル　「冷戦時代、米国のシンクタンクが警鐘を鳴らしていたレポート、戦争の機能論とは、比較にならないほど深刻な事態だ」

スネーク　「アイアンマウンテンのデルファイ法のことか」

キャンベル　「しかし、あれは机上の空論でしかない。現実ははるかに重い」

キャンベル「各国は事態を危惧しながらも、戦争経済の破綻を恐れ手が出せないでいる。国連でさえもな」

スネーク「虫のいい話だ」

――いらだつスネーク。ポケットからタバコを取り出して、口に咥える。サニーが上からそれを見て、首を振る。オタコンも首を横に振る（ここでは吸うな）。

キャンベル「…スネーク、今回の任務はかつてのような米軍からの命令でもなければ、国連として正式に依頼出来るものでもない」

――スネーク、タバコが吸えないので、禁断症状。立ち上がって歩き出す。

キャンベル「だが、蹶起(けっき)を目論んでいるリキッドから目を背ける事も出来ん。放っておけば、奴は大いなる脅威となるだろう」

――キャンベル、立ち上がってスネークのタバコを取りあげる。

キャンベル「スネーク、私は君以外に頼れる人物を知らない」

――スネークはキャンベルの目を真っ直ぐに見すえる。タバコを取り戻して、

スネーク　「わかった（ある程度納得）。話を聞こうか？」

——スネーク、席に座る。キャンベルも座る。

キャンベル　「そもそも、（リキッド）蹶起の情報は、我々国連の調査結果を受けて動きだした、米特殊部隊の調査によりもたらされた」

キャンベル　「彼らはリキッドの動向調査を続行し、今から約18時間前に中東（の某国）で奴の姿を捕えた」

——リキッドの写真。衛星写真。データなど。ズームするとリキッドの姿もある（初見でははっきりとわからない）。話を詳しく聞こうと、オタコンも近くに座り、話に加わる。

オタコン　「中東（某国）…少数派民族による反政府軍と現政府軍との間で、内戦状態にある地域だ」

キャンベル　「政権側の軍隊はリキッド傘下にあるＰＭＣのひとつがその中核をなしている」

——状況を飲み込んで、うなずくスネーク。

スネーク　「反政府軍は？」

キャンベル　「現地民兵が少数の戦闘員（オペレーター）に訓練や現場指揮を依頼している」

キャンベル　「もちろん現地傭兵派遣会社（PMC）の兵士も加わっているようだ」

オタコン　「雇われ者同士の代理戦争だね…」

キャンベル　「PMC対PMC。泥沼の戦局。典型的な戦争経済の犠牲となっている」

キャンベル　「スネーク、君は反政府軍に雇われた戦闘員（オペレーター）の一人として輸送トラックに紛れ込み、
現地に潜入してくれ」

キャンベル　「そしてまずは、情報提供者であるRAT PT 01（ラットパトロール・チームゼロイチ）と接触して欲しい」

スネーク　「鼠（ラット）パトロールか。動きは速そうだ」

――スネーク、我慢できずライター（火）を探す。しかし、ポケットからは「火種」は見つからない。

キャンベル　「陸軍のPMC監査機関、犯罪捜査局（CID）に所属する特殊部隊だ」

スネーク　「犯罪捜査局（CID）…、まさに軍のネズミだな（軽蔑）」

キャンベル　「いいや、信用するに足る連中だよ」

スネーク　「知り合いか?」

キャンベル　「多少な」（隊長がメリルと知っている）

スネーク　「多少？」

キャンベル　「現地への移動手段だけは国連の物資援助に託(かこつ)けて、米軍の支援を取り付けられる。だがそれ以外のどこからも、いかなる保護も、保障も、受けることは出来ない」

——階段を降りてくるサニー。サニーに聞いて欲しくないオタコンは追い返す。

キャンベル　「そして現地にも君の関与、ひいては国連関与の証拠も残してはならない」

キャンベル　「この事が外に漏れれば大きな『火種』になる」

スネーク　「火種ねぇ…」

キャンベル　「スネーク」

キャンベル　「頼めるか。リキッドの抹殺を（遂に言葉にした）」

——オタコンを見るキャンベル。オタコンも決意の表情で頷く。

スネーク　「ただし、俺はＰＭＣとは違う。カネはいらない」

キャンベル　「ありがとう」

スネーク　「その代わり、『火種（タバコの火）』を貸してくれないか」

——スネーク、タバコを顔の前に上げて云う。キャンベル、オタコン、勘弁してくれと首を横に。

スネーク　「わかった。『火種』は俺が探そう」
　　　　　――スネークは、モニターに移っているリキッドを鋭い表情で睨みつける。

【オタコン無線前／ポリデモ】　中東廃墟北部の建物内

――回想から月光に襲われた場所の下で佇んでいるスネークに戻る。太陽にしばし見とれるスネーク、無線機のＣＡＬＬ音で我に返る。耳に手を添え、しゃがむスネーク。

【ゲーム基礎説明１／強制無線デモ（オタコン）】　中東市街地

――無線画面にオタコンウインドウ。オタコンはノーマッド（輸送機）の自分の机より。

スネーク　「こちらスネーク、聞こえるか？」
オタコン　「状況はどう？」
スネーク　「市内に潜入したところだが、やけにＧＥＣＫＯが多い」
オタコン　「ＡＴ社製の無人二足歩行兵器『月光』だね。製品名はＩＲＶＩＮＧ。各ＰＭＣに爆発的に普及していて、今じゃ、戦車より実働数が多い」

オタコン「装甲が硬いうえに動きも速い。見つからないようにするのが一番だよ」

スネーク「わかってる。何しろ無人機だからな。そのうち、人間様も職にあぶれるかもな」

オタコン「それにしてもこの投入数は異常だね。そこの戦争価値以上のものがある。きっとリキッドが現地入りしたせいだ」

スネーク「(うなずき) 奴は本当にここにいるのか?」

オタコン「まずは米軍の情報提供者に会って、状況を聞いてみるしかない。それでスネーク」

スネーク「ん?」

オタコン「君が現地入りする前に、Mk.Ⅱを使って斥候をしておいた。この先に停めてある」

スネーク「Mk.Ⅱ?」

オタコン「僕とサニーで作った遠隔機動端末だ。現地の地図や戦況について情報が得られる。まずMk.Ⅱと合流して欲しいんだ」

スネーク「ああ、わかった」

オタコン「合流地点をマーキング(◎)しておく。そこで待ってるよ」

【ストライカー行進＆ＰＭＣ巡回／インタラクティブデモ】中東郊外

――ストライカーが前方からやってきて停車。中からＰＭＣが降りてきて、周囲を巡回し始める。ストライカーを攻撃し破壊することも出来る（攻撃するとデモはキャンセルされる）。

――ゲームへ。

【Ｍｋ．Ⅱ登場／ポリデモ】中東郊外

――路地から廃墟と化した建物内部に入るスネーク。建物内は無人。近くでは戦闘も起きていない。

――アサルトライフル（ＡＫ１０２）を構え、警戒しながら建物内部に入るスネーク。壁に張り付くと窓から外の様子を伺う。

――その背後、室内に気配を感じるスネーク。アサルトライフルを向ける。

オタコン　「僕だよ、スネーク」（無線）

――音声はスネークの耳元から聞こえている。リアルタイム無線の声の主との関連付けをここで教える。

――近付いてくるＭｋ．Ⅱ。

――モニターが開き、オタコンが映る。音声はＭｋ．Ⅱのスピーカーから。

オタコン　「僕だよ、スネーク」

スネーク　「（AKを下ろし）オタコン…！」
オタコン　「スネーク、待たせたね。これがメタルギアMk.Ⅱ（マークツー）だ」
――膝をついてMk.Ⅱをよく見ようとするスネーク。くるっと回って見せるMk.Ⅱ。
スネーク　「メタルギア？」
オタコン　「ああ。REX（レックス）と同じ、メタルギアだ」
【フラッシュバック】メタルギアREX
オタコン　「だけどこいつは兵器じゃない。君の活動をサポートする遠隔機動端末なんだ」
スネーク　「お前はどこに？」
オタコン　「もちろん、ノーマッド機内だ」
オタコン　「そっちの様子はMk.Ⅱ（マークツー）で見ているよ」
スネーク　「（涼しげなオタコンの様子を見て。危険が低くて羨ましい）俺も手先が器用ならな」
オタコン　「そう言うなよ。民兵に扮していた君の代わりに、いろいろ差し入れ（アイテム）を持たせたんだ」

――Ｍｋ．Ⅱのボディが開き、アームでソリッド・アイを取り出す。

オタコン　「まずは、こいつを左眼に装着してくれ」

――受け取るスネーク。

スネーク　「まるで眼帯だな」

オタコン　「ソリッド・アイ。レーダーなどの情報を立体的（とびだシッド）に表示する、万能ゴーグルだ」

オタコン　「光増式（こうぞうしき）暗視装置への切り替えもできる」

――片目に装着してソリッド・アイ越しに世界を観るスネーク。この間、ソリッド・アイの主観映像。Ｍｋ．Ⅱがデータで見える。

――カメラ切り返すとスネーク、下を向いて後頭部から手を下ろす。

――ソリッド・アイを装着した。

――窓外からの物音に気づき、窓の外を見るスネーク。

――民兵部隊が目前の道に走りこみ、物陰に隠れて応戦している。ソリッド・アイを通して、民兵の所属、ＬＩＦＥゲージ、ロックオンカーソルなど様々な情報が表示される（ゲーム仕様に合わせる）。

スネーク　「反乱兵が上がってきた」

オタコン　「数では政府軍のPMC（プレイング・マンティス）に勝っているみたいだ」

スネーク　「地の利もあるだろう」

オタコン　「スネーク、いくら潜入任務（スニーキング・ミッション）といっても、この状況じゃ身を守るものが必要だ」

——スネークに近付くMk.Ⅱ。アームでハンドガン（Operator）を取り出し、地面に置く。

——拾ってチェックするスネーク。

スネーク　「Operator（オペレーター）か」

オタコン　「制音器（サプレッサー）をつけておいた」

オタコン　「こっちは麻酔銃だ」

スネーク　「ご親切に」

——Mk.Ⅱ、アームで麻酔銃（Mk.2ピストル）を取り出し、地面に置く。スネーク、麻酔銃を腰のホルダーに差し、オペレーターを拾ってチェックする。

オタコン　「システム施行前の銃だよ。奇跡的に回収を免れた分だ」

オタコン　「いまは管理外のまともな正規銃は、入手し辛いからね」

——外で迫撃砲の音が響く。窓外の様子を伺うスネーク。

スネーク「一緒に来るか？」
オタコン「もちろん、ずっと追跡しているよ。こいつを使ってね」
――一旦ステルス化して見せ、再び実体化するMk．Ⅱ。
オタコン「目立たないようにステルスをオンにしておく。必要なときはSTARTボタンのメニューで呼び出してくれ」
スネーク「わかった」
オタコン「スネーク、この地でリキッドを発見した情報提供者は、この先にいるはずだ。合流ポイントに向かおう」
オタコン「ソリッド・アイ右上のレーダーに、マークを表示しておいた」
オタコン「外は戦場だ。気をつけて」
――ゲームへ。
オタコン「スネーク、少し遠回りになるけど、迂回ルートの情報を送った」
オタコン「レーダー上のマーク（◎）を参照しながら進んでくれ」

【スライダーによるビル破壊／インタラクティブデモ】中東郊外

――レイジング・ビーストのスライダーが登場。クラスター爆弾を投下し、ビルは倒壊する。ビルは遠景。カメラが見える位置に入ったら発動。

【スライダーを拾って仲間に話す民兵／インタラクティブデモ】中東廃墟地下

――攻撃した場合、スライダーは床に落とし、通常ＡＩに移行する。別の部屋には、ＰＭＣの武器を持っていて自慢している兵もいる。

【ビーストの噂をする民兵／インタラクティブデモ】中東廃墟地下

――机に向かってビーストに関する噂をしている民兵二人組。

【ドレビン登場１／ポリデモ】中東市街地・倒れたビルの横

――地下を出ると横倒しビルの手前、建物の一階部分の、シャッターの締め切られた部屋にドレビンがいる。

――ハンドガン（Operator）を構え、前後を警戒しながら階段を上がるスネーク。

――室内はシャッターの閉じた、飾りのない部屋。剥き出しのコンクリートと砂塵、埃。天井の窓

から光が差し、空中の埃が舞っているのが見える。それ以外に光はなく、室内はぼんやりと薄暗い。ドレビンはこの光の向こう側、暗がりにいるため肉眼では姿を確認することは出来ない。

――階段を上がった目の前の床に絨毯がしかれ、冷えた「炭酸飲料」が二本入れられたバケツ（氷入り、ボコボコの金属製）がある。炭酸飲料はスチール製の500mlサイズ。辺りに空のスチール缶が3本以上はある。その横に一丁のアサルトライフル（M４）が置かれている。左手には停車したストライカーの側面、「EYE HAVE YOU」のマークが目に入る。

――ハンドガン(Operator)を上げ、あたりを警戒しながら階段を上るスネーク。絨毯の中央にスポットライトが当たっている。暗闇から毛のない手長ザルがぬっと現れ、ちょこんと絨毯の上に鎮座する。サルはバケツからスチール缶を抜く。M４を横目に見ながら、近づくスネーク。サルの背後にドレビンがいるが、暗くて見えない。M４が欲しいスネーク、手を伸ばそうとするが、サルが気になる。そこで暗闇から声がする。

ドレビン　「いいブツだろ？」

――サルがしゃべったようにも見える。目を疑うスネーク。サルはプルタブを開けて、ラッパ飲み。スネーク、サルに銃を向ける。ゲップをするサル（サルの額にもドレビンと同じ傷がある）。

ドレビン　「待て。銃口を向けるな」

――声がした方向、サル背後の暗がりに銃を向けるスネーク。ドレビンがにやりと笑う。暗闇に白

目と歯だけが白く光る。ドレビンはスネークの方に近付いてくる。

――サル（名はリトルグレイ。劇中では名前を言わない）、炭酸飲料を持ったまま、装甲車に走っていく。

――胸の白いネッカチーフ（角にD893の刺繍）を右手でつまみ出し、白旗の代わりに振って見せながら両手を上げる。ドレビンは暗がりから、光の下に来る。その姿がスネークに確認できる。

ドレビン「俺は、敵じゃない」

――ドレビンは世界を股にかける闇の武器商人。表情は見えない。ブランドものの豪華スーツを身に纏い、装甲車を乗り回す。

ドレビン「そして、まだ味方でもない（忍者のセリフ）」

――ハンカチをゆらゆらさせると、ハンカチの中から手品のようにグレネードが現れる。武器をスネークにかざす。

スネーク「民兵でもPMCでもないな（何者だ？）」

ドレビン「武器、兵器の卸売り販売業者だ」

ドレビン「おっと心配には及ばない。全て武器洗浄（ロンダリング）をしている」

スネーク「武器…洗浄（ロンダリング）？」

——グレネードを床に置き、上にハンカチをかける。ハンカチを取るとグレネードが消え、リンゴが現れる。

ドレビン　「ＰＭＣが使っているようなＩＤ銃を、ＩＤが一致しなくても使えるノンＩＤ銃にハックするんだ」

スネーク　「ドレビン？」

ドレビン　「つまり、武器洗浄屋(ガンロンダラー)ってとこだ。ドレビンとでも呼んでくれ」

スネーク　「ドレビンってのは俺たちの総称だ」

ドレビン　「他にもいるのか？」

スネーク　「世界中にな。逢ったことはないが。俺はドレビンの８９３番だ」

ドレビン　

【字幕】ドレビン　藤原 啓治

——ネッカチーフを胸のポケットにしまうドレビン。

ドレビン　「あんた…、ＰＭＣの登録社員じゃないだろ？　力になるよ」

——と、言いながらＭ４を拾いあげる。Ｍ４をスネークに差し出す。

ドレビン　「挨拶がてらのプレゼントだ」

――警戒しながらM4を受け取るスネーク。

――スネーク、マガジンを引き抜き、チェンバーをチェックする。マガジンを抜いてボルトを引いた状態（弾が装填されていない状態）にしてから銃口をチェック。マガジンには弾丸がフル装填されている。

ドレビン　「M4。M16サービスライフルから発展した米軍制式採用のカービンモデルだが…」

ドレビン　「そいつは大手のPMCにも普及している高級モノだ。官給品と違って精度も高い」

ドレビン　（銃口をチェックしているスネークに対して）もちろんフリーフローティングだ」

ドレビン　「（しつこく銃口をチェックしているスネークに対して）心配すんな、接着剤なんて詰めてない」

スネーク　「ハイダーはCQC対応か」

ドレビン　「そいつの魅力はカスタマイズパーツが豊富なことだ。様々なニーズに合わせてカスタマイズ出来る」

スネーク　「フリップアップサイトにレールシステム…悪くない」

ドレビン　「お客さん（プレイヤー）には初心者も多いからな」（ユーザーのこと）

ドレビン　「必要ならアフターマーケットに出ているパーツも用意するよ」

——スネーク、Ｍ４をぐっと力強く構えて、

スネーク　「フレームもリジッド。妙なガタツキもない」
ドレビン　「引き金を引いてみな」

——手際よくマガジン挿入、初弾装填、銃を構えて明後日の方向を狙うスネーク。引き金に力を入れるが…、

スネーク　「引けないぞ」
ドレビン　「あれ？　おかしいな」
スネーク　「何がおかしい？」
ドレビン　「（気づいて）あんた旧世代のナノマシン使ってるんだろう？」
スネーク　「旧世代？（思い当たる）」
ドレビン　「システム用とぶつかることがあるんだ」
スネーク　「お前、いったい何者だ？」

——バケツから炭酸飲料を取り出して一口、喉を潤す。そしてゲップをするドレビン。

ドレビン「本業はAT（アームズテック）セキュリティの社員でね。製造管理部門を担当してる。ID登録されて出荷される前のチップが入手できるんだ」

――炭酸飲料の缶を差し出してスネークにもすすめる。スネーク、首を横に振る。

ドレビン「AT社にも裏の顔がある」
ドレビン「あんたも見たところ正規の兵士じゃないな」
ドレビン「だが、明らかにシロウトでもない」
ドレビン「システム施行前のナノマシンが入ってるってことは…、元米軍か…？」

――警戒するスネーク。

ドレビン「何の目的か知らないが、この辺りをうろつくなら備えがいるだろう？」
ドレビン「どうだ、商売（ビジネス）の話をしないか。あんたの役に立つよ」

――オタコンから強制SEND。耳に手をあてるスネーク。

【ドレビンについて1／強制無線デモ（オタコン）】

中東市街地・倒れたビルの横

スネーク　「オタコン、どう思う？」

オタコン　「苦手なタイプだけど、ＩＤ銃を使うにはそいつの力がいるようだ。今サニーが調べてくれたんだけど…」

オタコン　「ドレビン、戦争経済界では有名な武器洗浄人（ガンロンダラー）だよ」

オタコン　「ドレビンは主に、小規模なＰＭＣや現地民兵を顧客に、銃火器の密売を行っている戦争経済のビジネスマンだ」

オタコン　「ソマリア、バルカン、レバノン、ダルフール、チェチェン、チモール、…ペルー、パンジャブ、カシミール、コロンビア…。随分手広くやってるみたいだね」

スネーク　「だが奴は何故そんなことが出来るんだ？」

オタコン　「ノンＩＤ銃とはＩＤ認証チップを偽造チップと交換して、ＩＤ認証のプロセスなしで使えるようにした銃だ」

オタコン　「でもそれだけじゃ、システム側にもチップの交換の記録が残ってしまう」

オタコン　「ドレビンはＡＴセキュリティの社員という立場を利用して、記録を抹消出来るようなコネを内部に持っているんだろう」

スネーク　「もしかして『愛国者達』がからんでいる？」
オタコン　「どうかな。システム運営の背後に『愛国者達』がいるなら、ドレビンのような手合いはむしろ目障りなはず」
スネーク　「信用出来るのか？」
オタコン　「ドレビンはあくまで戦争経済を生業とする戦争生活者（グリーンカラー）だ」
オタコン　「情には決して流されない。自分では手を汚さない。信じているのはお金だけだ」
オタコン　「深入りはせず、必要なものと必要な情報だけ手に入れる、というのはどう？　あくまでビジネスの関係として」
スネーク　「了解」

【ドレビン登場2／ポリデモ】　中東市街地・倒れたビルの横

ドレビン　「さて、商談は成立か？」
――表情を変えず、ドレビンを見ているスネーク。否定しないのでドレビンは続ける。
ドレビン　「じゃあＤｒｅｂｉｎ，ｓ Ｓｈｏｐの話を始めよう。ここは戦場だ。商品は山ほど

転がっている。あんたはこれから戦場で沢山の銃器を手にするはずだ」

ドレビン　「あんたが手に入れた余分な銃を俺が買い取ろう。そのポイント(DP)分だけ、サービスを提供する」

スネーク　「サービス？」

ドレビン　「ＩＤ銃を洗浄(ロンダリング)してロックを解除(アンロック)してやる」

ドレビン　「それから俺が入手した武器の販売だ。ちょっと来てくれ」

――ストライカー後部ドアを開き、中に入るドレビン。後に続くスネーク。

――ストライカーの中はラックが置かれ、びっしりと銃火器が並んでいる。大型の自動販売機がある。

――壁面の至る所にＢＢと、ＢＢに殺された民兵の写真が貼られている。兵士は四肢が逆関節に折られていたり（マンティス）、頭部がひねりつぶされていたりと（オクトパス）かなり無残。ＢＢは動きが速くてブレていたり、遠景で小さかったり、ピンボケで輪郭しかわからなかったり、かなり不鮮明。ネッシーやＵＦＯの写真のよう。

――ドレビンが猿のリトルグレイを連れた、「捕まった宇宙人」風の写真も。世界の絶滅動物や奇形動物などの写真がある。

――またドレビンは歴代メタルギアのボスキャラマニアでもある。新生ＦＯＸＨＯＵＮＤ、コブラ部隊（白黒）、デッドセルの写真もある。

――モニターには世界地図。世界各国の商品売り上げが商品毎に円グラフで示され、さらに別ウィ

ンドウには各国のドレビンの営業成績が棒グラフで示されている。
——ドレビンの席の横にサルのベッド（寝床）がある。そこに座って、おとなしく炭酸飲料を飲んでいるサル。
——ドレビンは魔法瓶大の温度調整された白い医療ケースから、パックされた注射器を取り出す。

ドレビン「ノンＩＤ銃を使えるようにするには、あんたの体内にある旧世代のナノマシン活動を抑制する必要がある。じゃないとシステムに干渉するんだ」
ドレビン「こいつを打たせてくれ。抑制用のナノマシンだ」
——注射を打とうとするドレビンを左手で遮るスネーク。

ドレビン「安心しろ。痛くはない。注射は苦手か？」
——ナオミのセリフを思い出して、その言葉に抵抗をやめるスネーク。誤魔化しながら近づいてスネークの首に注射を打ち込むドレビン。
——サルも横でゲップする。

スネーク「（注射を打たれ）く…ああぁーっ‼」
ドレビン「よし。これでノンＩＤ銃も大丈夫だ」

ドレビン「来いよ」

——ストライカーを出る二人。

——ストライカーの前でＭ４のマガジンをチェックし、引き金を引くスネーク。Ｍ４から一発発砲。

ドレビン「ほらな。撃てるだろ？」

ドレビン「この先『ＬＯＣＫＥＤ（ロックト）』と表示されたＩＤ銃を手に入れたら、いつでも俺に言ってくれ」

ドレビン「どんな銃でも洗浄（ロンダリング）してやるよ。ポイント（ＤＰ）は戦争価格の変動に応じて洗浄（ロンダリング）するごとにいただくけどな」

——ドレビン、残った炭酸飲料を飲み干す。またゲップ。

ドレビン「やっぱり炭酸がきついな（ナノマシンに影響する）」

スネーク「繁盛してそうだな」

ドレビン「まあな。戦争に依存している戦争経済、戦場の徹底管理システム」

ドレビン「システムのＣＯＤＥ（コード）は法になり、制御は厳格になった。お陰で法を破る奴の旨みが増したんだ」

――周囲の片づけを始めるドレビン。

ドレビン「戦争経済のおかげで需要は増え続けている」

ドレビン「PMCや正規軍にID銃を売りながら、テロリストや非正規軍には裸の銃（ネイキッド・ガン）を売る」

ドレビン「しかもID銃は横流しができない。このシステムははなから武器屋が儲かるように作られているんだ」

――バケツごと、ストライカーにしまう。

ドレビン「軍隊の民営化はPMCを肥大化させ、肥大化したPMCは兵士と民間人の境界を曖昧にしていくだろう」

ドレビン「やがて全人類が戦争生活者（グリーンカラー）になる」

ドレビン「いや、全人類が代理戦争に荷担する」

ドレビン「戦争経済のおかげで俺は美味いメシが食えるんだ」

――ドレビン（うれしそうに）スネークに近づきながら、

ドレビン　「あんたもそうだろ？　戦争生活者（グリーンカラー）」

——スネーク、俺は違う！　と否定の態度（ドレビンを睨みつける）を取るが。

ドレビン　「わかるよ、その眼。ずっと戦場を見てきた眼だ」
スネーク　「わかったような事をいうな」
ドレビン　「照れるなよ。俺もそうさ、戦場（ここ）で育った。外の世界には興味がない」
ドレビン　「さて、じゃあ必要ならいつでも呼んでくれ。うちはスピード経営も売りの一つでね」
ドレビン　「（ひとさし指と中指で自分とスネークの両目を順に差して）『ＥＹＥ　ＨＡＶＥ　ＹＯＵ！』」

——ストライカーで立ち去るドレビン。スネークはそれを見送ると、手に入れたばかりのＭ４を構えながら部屋を出る。

——部屋を出ると強制無線ＣＡＬＬ。

【ドレビンについて２／強制無線デモ（オタコン）】中東市街地・倒れたビルの横

オタコン　「悔しいけど、ドレビンの言っていることも一理ある」
オタコン　「世界は戦争に、いや、戦争経済に依存している。戦争がなくなるとどうなる事やら」

スネーク　「オタコン、ドレビンも言っていた戦争価格って、どういうことだ？」
オタコン　「ＰＭＣや軍需産業はもちろん、それを取り巻く生産、流通、エネルギーなんかの需要によって変動する市場価格のことだ」
スネーク　「ほう」
オタコン　「高騰する一方だから、投資家にも注目されている」
オタコン　「現地での戦闘が激化したり、長引いてくると戦争価格は上昇する」
オタコン　「恐らくドレビンへの支払いも、この価格に連動しているに違いない」
オタコン　「戦闘が激化、長期化しているときはサービスの価格も上がる」
オタコン　「つまり戦闘が落ち着いているときほど、お買い得ということだね」
オタコン　「スネーク、ドレビンとの取引にはＭｋ．Ⅱを使おう」
オタコン　「ドレビンはこの地にいる言わば〝露店〟だ」
オタコン　「Ｍｋ．Ⅱには、スネークとドレビンを繋ぐ運搬役になってもらう」
オタコン　「Ｍｋ．Ⅱの武器メニューにドレビンの項目(Drebin's Shop)を加えておくよ」
オタコン　「スネークが同じ武器を複数入手すると、二挺めからは自動的にドレビンへ売却され、弾薬はそれぞれの残弾数に追加される」

オタコン　「つまり弾だけ手に入れて、銃本体はドレビンのポイントになるんだ」
スネーク　「ああ」
オタコン　「入手したポイントを使って、ＩＤ銃のロックを解除したり、新しい武器を購入することができる」
スネーク　「よくわかった」
オタコン　「恐らくドレビンは、スネークのような武器回収係を何人も抱えているに違いない」
オタコン　「サービスの提供と引き換えに、武器を回収してくれるフリーの戦争生活者（グリーンカラー）をね」
スネーク　「今のところ奴に頼るしかないか」
オタコン　「よし、じゃあ情報提供者のラットパトロールと合流しよう」

【ジョニードラム缶デモ／ポリデモ】　中東郊外

——壊れた壁穴から通りに出ようとすると、スネークの目前から民兵1が現れ、通りに出て行く。スネーク、咄嗟に身を潜める。
——道沿い、壁際にドラム缶が置かれているあたりに歩いていく民兵1（通り向こうの様子を伺おうとしている）。民兵1が接近したあたりで、ドラム缶からお腹を壊したような音が聞こえ、直後にビクっとドラム缶が動く。

民兵1　「ン…?」

——警戒して銃口を向けながらドラム缶に近付く民兵1。

民兵1　「おい！　誰かいるのか!?」

——（ひっくり返そうとして）ドラム缶に手を伸ばす民兵1。

ジョニー　「（ドラム缶の中から）何するんだ！　まだ…出てない…」

——手がドラム缶に触れると、突然ドラム缶が倒れて中から兵士（アキバ（ジョニー））が飛び出す！

民兵1　「うわっ（臭い）」

——中にいたアキバ（ジョニー）（姿ははっきりと見せない）、慌てて奥へかけていく。

ジョニー　「ひゃぁ…」

民兵1　「待て！」

——民兵1、アキバ（ジョニー）を追って走り去る。

——様子を見ていたスネーク。アキバ（ジョニー）が倒した勢いでドラム缶が足元に転がっている

のに気づく。ダンボール箱とドラム缶を見比べるスネーク。

【主観ボタン】ドラム缶の中をのぞき込める。

——スネークは屈んでドラム缶に手を添える。スネーク、じっとドラム缶を見て、にやりと笑う（これは使える！）。

——ポリデモ終了時、ゲーム画面に戻ったらアイテム取得時の演出。取得ＳＥ、中央にドラム缶の説明文。

——ゲーム開始。

【ストライカー増援／インタラクティブデモ】中東郊外

——ストライカーがやってきて停車。中からＰＭＣが降りてくる。戦闘中ならそのまま戦闘。戦闘中ではないなら、そこから巡回。

【スナイパーにやられる民兵／インタラクティブデモ】中東郊外

——そのすぐ先で、民兵が門から出て行き、スナイパーに狙撃される。

【メリル登場／ポリデモ】　中東市街地・廃墟ビルの最上階の部屋

——情報提供者との接触ポイントであるビル最上階に来るスネーク。最上階は半分屋上の空間。ビルは半壊し、周囲の建物同様に廃墟化している。

——スネークが屋上部分から近付いてドアから室内の様子を見ると、瓦礫やゴミが散乱する中に、机、その上の紙資料。周りには椅子が散在している。瓦礫に隠れてバックパックなどの荷物が見える。慎重に近付きドアをくぐるスネーク。

——直後、ドア裏に気配を感じてその方向を見る。アキバ（ジョニー）、スネークが入ってきたドアを勢いよく蹴飛ばし、ドア裏から現れスネークに銃口を突きつける。スカルキャップでアキバ（ジョニー）の顔は見えない（このときドアは閉まる）。

ジョニー　「銃を捨てろ」

——ジョニーの銃口は震えている。

ジョニー　「銃を捨てろ」

——スネーク、持っていたオペレーターを床に置きながら、ゆっくりと身体を回転してジョニーに向かい合い、両手を上げる（ＭＧＳ１のメリル登場シーンを髣髴とさせる）。

ジョニー　「（小声で）…行け！」

——ジョニーのほうへ振り返るスネーク。

ジョニー「…動くなよ！」
スネーク「安全装置（セイフティ）がかかっているぞ新米（ルーキー）」
ジョニー「新米（ルーキー）だと？　俺はこの道10年のベテランだ！」

【フラッシュバック】ＭＧＳ１メリル画像

——余裕たっぷりの表情でジョニーの手元を見てみせる（目で指す）スネーク。どうしても気になったジョニーは思わずセイフティを見てしまう。その隙にジョニーの銃を掴むスネーク。
——スネークＣＱＣ！　ジョニーは空中に円を描いて地面に叩きつけられる。この間に銃を奪ったスネーク。間髪入れず、倒れたジョニーに銃を向けるスネーク。銃口を顔面に近づける。

ジョニー「うっ……！」
スネーク「これでよく10年も生き残ってきたな」
女兵士「（ＯＦＦ）そこまでよ！」

——スネークにデザートイーグルの銃口が向けられている。銃の先を目線で追うスネーク。そこには女兵士が…、

――女兵士、目線はスネークに向けたまま、

女兵士　「ビッグボスかぶれのCQC使い？」

――スネーク、女兵士（メリル）に銃口を向けたまま、アキバの近くに移動し、膝で彼の首もとを押さえつける。

ジョニー　「（スネークに踏まれたうめき。この後しばらく苦しみ続ける）」

女兵士　「銃口をはずしなさい！」

――メリル、銃口をポイントしたまま、スネークの前に進み出る。

女兵士　「さあ、ゆっくり。変な気は起こさない方がいいわよ」

――女兵士、スネークの額に銃を突きつける。銃口を男から外そうとしないスネーク。

――スネークの目の前にメリルの胸のFOXHOUNDのマークが来る。

スネーク　「FOX（フォックス）（HOUND）？」

――スネーク、銃口をそらす。

――女兵士、眉をしかめてスネークを凝視する。

女兵士　「…スネーク？」

——女兵士の目を見るスネーク。

——女兵士、銃を降ろして、スカルキャップを脱ぐ。

【フラッシュバック】メリル

【字幕】メリル・シルバーバーグ　寺瀬 今日子

スネーク　「メリル⁉」

メリル　「（本当に）スネークなのね？（うれしい）」

——メリル、スネークに近づく。スネークの老化に気づき、戸惑いを隠せない。

メリル　「その顔、一体どうしたの？（老化の事）」

——スネークに近づいて顔に触れようとする。

——身を引いて拒絶するスネーク。

スネーク　「（いいにくそうに）急激に老化が進んでいる。原因はわからない」

――眼に涙をためるメリル。やはりスネークへの気持ちは消えていなかった。それに気づくメリル。

メリル　「そんな…」

――スネークに背を向けて涙を見せないメリル。

――スネーク、場の空気を打ち消すように、

スネーク　「メリル、君が米軍の情報提供者なのか？」

――メリル、哀しみを断ち切り、振り向く。

メリル　「じゃあ、あなたが、国連が寄越した調査員？」

――部屋の奥の物陰から銃を構えたエド、ジョナサンが現れる。

――それを手を上げて制するメリル。未だに地面で仰向けになっているジョニーに向かって叱咤する。

メリル　「アキバ！（何やってるの!?）」

ジョニー　「隊長！　うっ！（メリルに殴られた）」

ジョニー　「すみません…」

――ジョニーは起き上がる（「アキバ」は秋葉原好きなジョニーの愛称）。

——メリルの周りを囲むように勢ぞろいするＲＡＴ ＰＴ ０１。ビシッと決まったポーズではなく、ひとつにまとまって立っている感じで派手にはしない。

メリル　「私達は、ラットパトロール・チーム０１（ＲＡＴ ＰＴ）」

メリル　「ＰＭＣの内部監査機関のひとつ、犯罪捜査部（ＣＩＤ）（Criminal Investigation Command）の所属よ」

スネーク　「ＦＯＸＨＯＵＮＤ（猟犬）からＲＡＴ（鼠）部隊か…」

——スネーク、独り言を言い、ジョニーに銃を返す。

スネーク　「ほらっ、返すぞ」

——ジョニー、銃を返してもらって喜ぶものの、お腹がなり、座り込む。

スネーク　「おい、どうした？」

スネーク　「大丈夫か？」

ジョニー　「…ちょっと…腹が…」

スネーク　「腹か？」

――ジョニー、お腹をこわして尻の辺りをおさえる。

スネーク「下痢か？」

――画面F.O./F.I.

――時間経過。

――机前の椅子に座るスネーク。机の上には未使用の薬莢、周辺の地図、衛星写真、ノートパソコンなどが散乱。

――部屋の奥にはエドが座り、武器の手入れをしている。ジョナサンは仮眠中（二人はスカルキャップなし）。

――メリルはエドとジョナサンのいる場所から女の写真を持ってスネークに近付いてくる。

――リキッドが写された数枚の写真を手にとり、目を細めて近付けたり遠ざけたりしているスネーク。老眼で見え辛い。写真をかなり近づけた後、老眼の様に遠くに離す。

【主観ボタン】スネークの老眼化がわかる（ピントがぼけている）。

――この間、主観ボタンでスネークの視界で写真を確認できる。

メリル「彼が現地入りしてから、もう四日になる」

メリル「この数日間、いつもこの女と一緒よ」

――持ってきた写真を見せるメリル。フードに隠れた女の顔。ややピントが甘く、この写真では誰かよくわからない。

メリル　「戦闘員には見えない。たぶん何かのアドバイザーか、研究員ね」

――写真を覗き込むため顔をスネークに近づける。メリル、スネークの変わり様に悲しくなる。そっと肩に手を置く。

――スネーク、メリルの手をどけ、室内を目でさっと一望する。メリルはスネークの向かいに回りこみながら会話。

スネーク　「ところで、君が01(ゼロイチ)部隊の隊長だって？」

メリル　「おかしい？　紹介するわ。無線手兼スナイパーのエド」

【字幕】エド　飯塚 昭三

――やや離れた場所に座って銃の手入れをしているエド。こちらに関心も寄せない。

メリル　「寝ているのはジョナサン」

【字幕】ジョナサン　田中 秀幸

――ジョナサンは椅子に座って足を投げ出し仮眠中。一瞬はっとして首を起こす。後頭部のビックリマーク（「！」型のモヒカン）が見える。
――また眠りにつくジョナサン。

メリル　「彼の背後には立たない事。後ろを取られるのが嫌いなの」
――メリル、スネークの正面に座りながら、

メリル　「それから…」
ジョニー　「隊長…！」
メリル　「（表情が険しくなり）あれはジョニー。みんなアキバって呼んでいる」
――入り口に立っている（外から戻ってきた）ジョニー。スカルキャップをつけている。お腹が痛いので腹を押さえる。「グー」となる。

ジョニー　「隊長、センサーの取り付け終わりました」
【字幕】ジョニー（アキバ）　福山潤
メリル　「（ジョニーを見もせず、溜息）アキバ、ご苦労様」

――以降、ジョニーは窓の隙間からスコープを出して表を見張っている。こまめに手元のキーボード（ウェアラブルコンピュータ）に記録を打ち込んでいる。
――メリルの顔には当時と変わらないあどけなさが残るが、当時より凛々しく、一部隊を任されている頼もしさ、力強さが表情に出ている。ついじっとメリルに見とれるスネーク。

【主観ボタン】主観ボタンでメリルが見える。

スネーク「（メリルを見て）立派になったな」
メリル「（嬉しくない）誰かさんに鍛えられたお陰かしら。突然行方をくらました伝説の英雄に」
スネーク「（気まずい表情）…」
メリル「あなたは部隊を離れた。だけど私は、ずっとあなたとＦＯＸＨＯＵＮＤに固執してた（０１部隊のマークもＦＯＸＨＯＵＮＤのまま）」
メリル「あの頃私は、あなたに認められたいと思っていた」
メリル「（女の子風に云うと）あなたに振り向いて欲しかったのね」
――遠くを見るようなメリル。老いたスネークに眼を戻すと、現実に戻る。深刻になっていったメ

リルの表情が、力が抜けたように冷静に戻る。

メリル　「でも忘れたい過去よ。もう恋愛ゴッコは懲り懲りなの」

――気を取り直したように見えるが、実は体内ナノマシンの精神安定作用が働いた。

メリル　「それで？　あなたの目的は？」

スネーク　「各ＰＭＣの脅威査定（スレットアサスメント）だ」

メリル　「ある噂を聞いたけど。暗殺者がＰＭＣ経営者を狙ってるっていう」

スネーク　「（驚いてみせて）ずいぶんと物騒な話だな。俺は国連の要請で、難民保護活動における結果と影響を調査しているだけだ」

メリル　「（不審）それだけ？」

スネーク　「現役引退の身には充分だ」

メリル　「確かに彼は蹶起（けっき）を目論んでいる。でもＡＴセキュリティのシステムがある限り成功は有り得ない」

スネーク　「どうしてそう言い切れる？」

メリル　「軍にもＰＭＣにも、戦場活動を行う全ての兵士達には、リアルタイムで彼らを監

視するシステムが導入されているからよ」

メリル「そのために、兵士各個体は体内に注入されたナノマシンによって、完全にＩＤ管理されている」

【メリル・システム説明／ムービー】

中東市街地・廃墟ビルの最上階の部屋

――ＰＭＣや兵器などの実写映像。パソコン画面にイメージイラストやグラフなどが表示されているもの。パソコン画面にウィンドウが開いているような表現。

メリル「ナノマシンが、各兵士のＩＤとリアルタイムな個人情報を24時間チェックしているの」

メリル「兵士ごとの現在位置、移動速度、残弾数、負傷箇所、命中率、糧食(レーション)残量、水分の摂取量と残量、発汗量、心拍数、血圧、血中糖分、酸素量…」

メリル「ナノマシンから得られる体調コンディション、各感覚器官から得た痛み、恐怖などの刺激」

メリル「体内で起きた全ての反応データはシステム中枢のＡＩに集められる」

メリル「司令本部はこれを監視することで、より正確で合理的な判断を迅速に出せる上、

兵士一人一人の危機管理もできる」

メリル　「米軍関係者、同盟国正規軍、ＰＭＣの兵士…警察機関にも適用が始まっている」

メリル　「この導入を承認されなければ、ＰＭＣは各国へ派兵することが許されない」

スネーク　「君の体内にもシステムのナノマシンが？」

メリル　「勿論。私達０１（ゼロイチ）部隊も例外じゃない」

メリル　「四六時中見られているみたいで、初めは気持ち悪かったけど、もう慣れたわ」

メリル　「現場にもメリットが多いの」

メリル　「状況把握が的確だから作戦行動中の混乱も減ったし、ナノマシン同士の相互通信で仲間との連携もスムースになった」

メリル　「システムの利点はそれだけじゃない。ＰＭＣに対する安全保障の役割もある」

スネーク　「安全保障」

メリル　「そう。ＰＭＣは国籍やイデオロギーに因らない戦闘集団よ。愛国心や野心のために戦っているわけじゃない」

メリル　「戦争の目的は彼等には関係ない。あくまでも誰かのために代理で闘う兵力、いわば商品」

メリル「だからクライアントを裏切って敵についたり、戦闘放棄や非人道的な行動に出ることもあり得る」
メリル「それを管理、制御するため、銃火器や軍用車輌はシステムのＩＤ認証がなければ使用できなくなっている。いま普及しているもの全部に」
メリル「だからもし、ＰＭＣがテロ行為やクーデターを起こそうとしたら、強制的に武器、兵器をロックすればいい」
メリル「彼らは攻撃も進軍も、一切の戦闘行動が出来なくなる」
メリル「しかも彼等の位置情報や人数、戦力もナノマシン管理によってこっちに筒抜けよ」
メリル「監視を逃れるために、各兵士体内のナノマシンを全て抜き取ったとしても、同時にＩＤを失うことになるから武器が一切使えなくなる」
スネーク「そのシステム…『愛国者達』の関与は？」
メリル「らりるれろ？　らりるれろって何の事？（ワードプロテクトがかかっているため〝愛国者達〟が発音できない）」
スネーク「わかった。システムは完璧なんだな？」
メリル「そうよ、このシステムは愛国者達の息子(サンズ・オブ・ザ・パトリオット)と呼ばれている」

スネーク　「サンズ・オブ・ザ・パトリオット…」

メリル　「そう。サンズ・オブ・ザ・パトリオット（SOP）」

メリル　「SOP（ソップ）を管理するAIは開発元のATセキュリティでも国防省（ペンタゴン）でも最重要機密。
　それを第三者が操作出来るなんて事はありえない」

スネーク　「さっきID銃を洗浄するという武器洗浄屋（ガンロンダラー）にあった。システム（SOP）にも抜け穴はある」

メリル　「武器洗浄屋ってせいぜい数百人、草の根でしょ？」

メリル　「PMCや全軍隊を操作できるわけではない」

メリル　「リキッドは大規模な軍隊を組織する為に、まずPMCとしてシステム（SOP）に登録しなければならなかった」

メリル　「確かに彼の持つPMCは数で米軍を上回るかもしれない」

メリル　「だけど登録されている限り、兵士達の行動は常に監視されていることになる」

メリル　「リキッドが動き出してから米軍が即時対処すれば、力で抑え付けることが出来る」

スネーク　「力で抑え付けるか（米国らしいやり方）」

メリル　「私達はリキッド蹶起（けっき）の噂を聞きつけた陸軍特殊作戦コマンド（ARSOC）の指示で、PMC周辺の調査にあたっていた」

メリル　「SOP（ソップ）で監視されているといっても現場では細かなトラブルが絶えない」

メリル　「素行の乱れ、命令不服従、契約違反…」

メリル　「私たちはシステムのバックアップとしてPMCの監査を行っているの」

メリル　「PMCの査察は常に戦場で行う。だから武器携行、使用も許可されている」

メリル　「現に、ここ数ヶ月で5つの査察部隊がやられてる。彼…リキッド傘下のPMCに潜入していた連中よ」

スネーク　「では、君らも見つかれば…」

メリル　「ええ、鼠は駆除される。でもそんなミスは犯さない（自信）」

メリル　「PMCに紛れて戦場を転々としながら、ようやく私達はリキッドに辿り着いた。彼を見つけるのに、3ヶ月もかかった」

【ビル脱出前／ポリデモ】　中東市街地・廃墟ビルの最上階の部屋

メリル　「リキッドの発見を上層部に報告すると、国連の調査員に情報を与えるように命令された」

メリル　「それがあなたとは知らなかったけど」
スネーク　「大佐は言ってなかったのか？　俺を寄越すと」
メリル　「大佐？」
メリル　「（表情が怒りに変わり）まさかキャンベルのこと？」
スネーク　「ああ」
メリル　「これはキャンベルの指示なの？」
スネーク　「聞いてないのか」
メリル　「冗談でしょ？　私は伯父に協力を？」

――立ち上がりうろつきだすメリル。悪態をつきながら周囲のものにあたりちらしている。

スネーク　「メリル（落ち着け）」
メリル　「冗談じゃない！」
メリル　「（荒い呼吸。軽いパニック状態）」

――警戒し、腰を上げるＲＡＴ　ＰＴ　０１の面々。心配げに腰を浮かすジョニー。スネークを睨んでいるジョナサン。

メリル　「あんなやつ、親父でもない！」

——「親父」のセリフに驚くスネーク。

スネーク　「メリル…？」

——メリル、やや落ち着きを取り戻し、蹴飛ばした椅子を戻して座る。

——スネーク、メリルに語りかける。

スネーク　「メリル、知ってたのか？（キャンベルが親父だという事）」

【主観ボタン】ソリッド・アイで見ると体温やデータが変化しているのがわかる。

——ナノマシンの感情コントロール。人間の感情変化としてはちょっと急で不自然、という程度の描写。

メリル　「（平常心で）ええ、必知事項（ニード・トゥ・ノウ）（Need to know）の原則を破ったの」

——スネークはメリルの目を覗き込む。完全にメリルは落ち着いている。

スネーク　「君はまだキャンベルを伯父と？」

メリル「あなただってまだ大佐って呼んでる」
スネーク「血の繋がった父親だろう?」
メリル「関係は伯父と姪のままよ。私は認めない、あんな女たらし」
スネーク「メリル（言葉が過ぎる）」
メリル「あいつ…再婚したの」
スネーク「キャンベルが?」
メリル「相手は私くらいの歳の女。子供もいるって話よ。あいつには血の繋がった娘とやり直す気なんてまるでない」（「女」とはローズ）
スネーク「（スネークを睨みながら）男はみんな自分勝手。エゴイストよ」
メリル「む…（自分のことも言われてるので言葉が返せない）」
エド「（小さいが、強い声で）隊長…!」

——机の上のランプが点灯しているのを示すエド。メリルは表情が固くなる。
——以下やや小声で、

エド「20人はいる。奴らここのPMC、Praying Mantis（プレイング・マンティス）の兵士じゃない」
エド「カエル達だ（ヘイブン兵）」

メリル　「私兵部隊ね」

　　　　　――廊下。駆け込んでくる兵士達の足元のアップ。

ジョニー　「最悪だ…マジやばい。…うっ」

　　　　　――腹が鳴るジョニー！　お腹を押さえる。

メリル　「尾行(つけ)られたの？」

スネーク　「いや」

メリル　「アキバ！」

　　　　　――ジョニーを疑うメリル。慌てて近付くジョニー。

ジョニー　「いやいや、スコープレンズの反射光が見つかったのかも…。ね、こいつがほら…」

ジョニー　「(あっ) ちょっと待…、僕の、ミス？」

　　　　　――一同、ジョニーの失態を (繋がっているように) 責める視線。

　　　　　――地面に跪くジョニー。嘆き始める。地面に頭を打つ。

ジョニー　「ジョニーのミスじゃない！　ジョニーのミスじゃない！　ジョニーのミスじゃな

い！」

――ジョニー、額を床に打ち付け、

ジョニー　「（痛っ！）くそっ！」

――メリル、ジョニーを引き上げ、平手打ちで活を入れる。

メリル　「馬鹿！　移動するわよ」

スネーク　「リキッドの居場所は？」

メリル　「この先のキャンプ。生き延びたら詳しく教える」

――スネーク、メリル共にハンドガンをチェック。

メリル　「ついて来て」

――中腰で走り、ドア横に張り付くメリル。

――スネークはドアの反対側につく。すばやく目で表の状況を見る。

――メリルの目線の向こう、続けざまにカタパルトで射出され屋上から侵入してくるヘイブン兵。まるで空飛ぶカエル。

――屋上のテント部分の布に着地し、床へ滑り降りてくる兵士たち。カタパルトで飛んできたヘイブン兵たちが床に着地、抜刀して立ち上がる。

メリル「(それを見ながら舌打ち)」

――ドア沿い、万全の準備でメリルのまわりにワンニーで集まるエド、ジョナサン、ジョニー。

メリル「Eye contact(アイ・コンタクト)!」

――メリルは素早く全員の目を確認する(メンタルケア)。

メリル「相手はリキッドの私兵部隊よ。躊躇なしで撃って」

メリル「階段を使って一階裏口から脱出する」

メリル「ルートは状況で変更するわ。私がポイントマンになる。はぐれないで。いい?」

エド、ジョナサン「了解」

――ジョニーは恐怖で答えられない。

メリル「アキバ! 深呼吸しなさい。わかった?」

ジョニー「了解」

――ジョニー、息を吸うとまた腹が鳴る！

――メリルはいたずらっぽくスネークを見て、

メリル　「伝説の英雄が一緒よ。腕前に見とれないで」

――鼻で笑うエド。

――メリルは真顔に戻り素早く目線で表を確認。

メリル　「ムーブ！」

――ゲームへ。

【戦闘中、トイレに行きたがるジョニーとジョナサンとの会話／インタラクティブデモ】

廃墟ビル２Ｆ

――基本は戦闘中の会話とおなかを痛がるジョニーのモーションを再生。

――会話中、メンバーの誰かが攻撃を受けた場合、ジョニーはその場でお漏らし。この時、起きているメンバーが台詞でリアクションをとる。

――階段を警戒しながら降りていく０１部隊。先頭のメリルが敵を発見。

メリル　「コンタクト！」

——配置についてしばらく銃撃。

メリル　「カバー」

——メリル、隠れてマグチェンジする。

エド　「クリア」
ジョナサン　「クリア！」
ジョニー　「トイレ、トイレ……！」
ジョナサン　「トイレは壊れてんだ、そこでしろ！」
ジョニー　「ムリだよ」

——メリルマグチェンジ終了。

メリル　「レディ！」

——再びしばらく銃撃。

エド　「カバー！」

——エドがマグチェンジに入る。

メリル　「クリア！」
ジョニー　「エド、エド…」
エド　「祈れ！」
ジョニー　「誰にだよ…神…？　紙…」
ジョニー　「隊長…隊長！」
メリル　「うるさい！」
ジョニー　「隊長！　もう出ます…」
メリル　「じゃまよ！」

——メリルに腹を蹴飛ばされるジョニー。

ジョニー　「あっ！…ああ（お漏らし）…。クリア…」

——鼻をつまんで咳き込むエドとメリル。

メリル　「アキバ！　風下に行きなさい！」
エド　「お前…（「信じられない」という意味で）」
エド　「早く行け！　クソぼうず！」
ジョナサン　「わかってるよ…」
　「グレネード！」

【トイレの壁を爆破するヘイブン兵／インタラクティブデモ】中東市街地・廃墟ビル2F

——ジョニーがトイレ前を通過する際に発動。トイレの壁が爆破され、ヘイブン兵が攻撃を仕掛けてくる。
——ジョニーは爆風で飛ばされ、一定時間気絶状態。

メリル　「どきなさい！」
オタコン　「スネーク、アキバが気絶してしまったよ！」
メリル　「大丈夫？」
メリル　「起きて！」

【赤外線トラップを解除するジョニー／インタラクティブデモ】中東市街地・廃墟ビル2F

――トイレでの戦闘が落ち着いた後、メリルがトラップを解除するよう指示。
――ジョニーは腕のコンピュータからスイッチを押し、トラップを解除する。
――解除後、メリル達は1Fへの穴の中に飛び降りる。

【壁から突っ込んでくる装甲ドーザーと進入してくるヘイブン兵／インタラクティブデモ】中東市街地・廃墟ビル1F

――1Fカウンターからスネークが出てきた方向に向かったところで発動。
――北側の壁を破り、装甲ドーザーが突っ込んでくる。脇からはヘイブン兵が進入し、そのまま戦闘へ。ヘイブン兵は途中に攻撃を受けたら、そこからAI制御。

メリル「クリア！」
ジョニー「おえ…」

【エレベータドアをこじ開け、下に降りるRAT PT 01／ポリデモ】

中東市街地・廃墟ビル1F

——ジョニー、エレベーターの高さにしばらく躊躇。

ジョニー「（ため息）」

メリル「アキバ！」

——ジョニー、仕方なく飛び降りる。

【ビル脱出後1／ポリデモ】

中東市街地・廃墟ビルB1

——出口を発見、その前で止まり、後方に手で合図して、隊員を先に行かせるメリル。ジョニーは臭いを消すために後回し。外に出たエド、地下の物陰からメリルの裏を取って突如ヘイブン兵の残党が襲ってくるのに気付く。ジョナサンが後方から肩を撃たれる。

——左右から二名のヘイブン兵！

——メリルはエド、ジョナサンのセンスを共有する。瞬時に誰が誰を撃つかを検討。3人はほぼ同時、確実に撃つ。メリルは左、エドは右。ジョニーは知らぬ顔。戦闘が終わるまでわからない。後方を取られたジョナサンは逆鱗！　ヘイブン兵に弾丸を数十発食らわせる。

ヘイブン兵　「ぐぁ！」

——その場に倒れるヘイブン兵。止めようとはしないメリル。ジョナサンはマグが空になるまで撃ち続けるが、抑制剤が効いてきて収まる。冷静にマグチェンジ。
——振り返ってスネークを見るメリル。

メリル　「各隊員の体内に注入されたナノマシンのネットワークで、仲間の五感を〝感じる(SENSE)〟ことが出来る」

メリル　「まるで自分の感覚のように」

——ジョナサンの負傷した肩を見るスネーク。見るからに痛そうだが、ジョナサンは気にもしていない。ナノマシンによる痛覚の抑制が働いている。

メリル　「そして痛みも制御できる」

——冷静に治療を施すジョナサン。後頭部の「！」をうしろからなで上げてにんまりする。

スネーク　「これもシステムのお陰か」

メリル　「SOP(ソップ)システムのお陰でチームが文字通り一心同体となっている」

メリル　「約1名、協調性のないもの（ジョニー）もいるけど」

――ジョニーを一瞥するメリル。
――ジョニー、自分の臭いを嗅いで顔をゆがめている。

メリル「どう？　英雄の時代は終わったのかもね」
スネーク「俺は英雄じゃない。これまでも、これからも（殺し屋の成れの果てだ）」
メリル「（懐古的な目つき）変わらないわね、スネーク」
メリル「でも、その身体じゃ…大丈夫なの？」
スネーク「このスーツはマッスルスーツも兼ねている。まだ動ける」
メリル「リキッドのキャンプはこの先よ。地図にマークしておく」
スネーク「ああ」

――メリルは隊員一人ずつに近付いて顔をチェック（メンタルケア）。
――ジョニーは緊張して顔が赤くなる（目だし帽なので目のまわりだけ）。

メリル「アキバ！」
メリル「ひとりの失態はチームの命取りになる」
ジョニー「すみません、隊長…」

――メリル、ジョニーの肩を叩くとスネークに目線を送る。

メリル「じゃあ」

――手で仲間に合図するメリル。歩き出すメリルについていくＲＡＴ ＰＴ ０１。
部隊を見送るスネークにＣＡＬＬ！

【ビル脱出後２／強制無線デモ（オタコン）】

中東市街地・廃墟ビルＢ１

スネーク「オタコン、リキッドの居場所がわかった」

オタコン「ああ、確認したよ。そこから北に行ったところだ」

オタコン「…スネーク、メリルは変わったね。頼もしくなった」

スネーク「ああ、どこまでシステム(SOP)のせいかわからんがな。本来なら訓練や経験を重ねて初めて得られる感覚(SENSE)を、簡単に体得している」

スネーク「どうやらシステム管理下の兵士に、経験はいらんらしい。数年前に流行ったＶＲ訓練で得た経験さえもな」

オタコン「ああ。ＰＭＣ需要の拡大は、より安価で、優秀な兵士の安定供給を実現させたみ

たいだ。お陰で少年兵の問題もより表面化してきた」

スネーク　「ナノマシンは急性ストレス障害(ASD)や心的外傷後ストレス障害(PTSD)をも抑制できるのか？」

オタコン　「どうだろう？　多少の心理制御は可能じゃないかな」

スネーク　「そうか？　さっきの兵士…アキバはパニクってたぞ」

オタコン　「技術的には、兵士の人格特性を最適化できるはずだ」

スネーク　「あの大男(ジョナサン)もまるで痛みを感じていないようだった」

オタコン　「経験や精神力を、ナノマシンで表層的に補っているんだ」

スネーク　「だが兵士にとって、それだけでは不十分なはずだ」

オタコン　「時代は変わったんだよ、スネーク。メリルのようにね」

スネーク　「…（ため息）」

オタコン　「スネーク、PMC(ブレイングマンティス)のキャンプに急ごう。メリルの情報によれば、そこにリキッドもいるはずだ」

——スネークはメリルから聞いたリキッドのいるキャンプへ向かう。

【戦車登場／インタラクティブデモ】　中東市街地

――スネークが南北に延びるメインストリートに近づいたら発動。民兵の操る戦車が瓦礫を越えてやってくる。

【BB部隊登場／ポリデモ】　中東市街地

――民兵とPMCの激戦区を抜け、PMCキャンプ近くの通りに出ると、背後からの物音（民兵達の怒号）が聞こえ物陰に隠れるスネーク。物陰から通りを警戒する。

――通りの瓦礫を乗り越えて民兵を引き連れたブルドーザー、装甲ドーザーが現れる。バリケードを破壊し、通りを進む装甲ドーザー。

――民兵たちが次々と瓦礫を乗り越えて後に続いていく。民兵達の大歓声！　進軍を進める民兵。

――通りの真中で不自然に停まる装甲ドーザー。装甲ドーザーはキャタピラが空回りし、地面の砂を巻き上げている。民兵はギアを入れなおす。それでも進まない。

――と、装甲ドーザーが押し戻されている。装甲ドーザーを操縦する民兵、焦って前下を見る。

――装甲ドーザーを止めているのはウルフ。四つ足しかみえない。

――兵士達はウルフを撃つ。弾を跳ね返すウルフ。ウルフが押して、装甲ドーザーが傾く。

民兵1　「ひいぃいい!!」

――装甲ドーザーの操縦士は慌てて運転席から飛び降り、逃げ出す。
――ウルフに銃を向ける民兵達。
――そこに上空から影が飛来。見上げる兵士達。レイブンが急降下してくる！

民兵2　「ビ、ビースト‼」

――レイブン、上空から低空飛行で滑空、ウルフを狙っていた下の民兵達は吹き飛ばされる（翼で切断される）。
――残された民兵、レイブンを撃ちながら建物の残骸に身を隠す。
――レイブン、優雅に翼をかたむけ、旋回でよける。

レイジング・レイブン「（怒り）カァァー！」

――後ずさりした兵士の背後が変形（オクトカム）して、オクトパスが現れ、兵士は触手で潰される。他の兵士、狙いを変更、オクトパスを狙ってRPGを準備する。
――そこにマンティスの高周波スクリーミング。RPG兵士（雇われのオペレーター）、操り人形の様になり、身体の間接がバラバラ（首、胴体、四肢が不自然に折れ曲がる）になる。一人の兵士はゆっくりと空中へ持ち上げられる。

民兵3　「ひぃいいいいい‼」

――1メートルくらい浮いた後、マンティスの悲鳴！　民兵、ボロ人形のようにグシャリと潰れる！

民兵3　「ひでぶ‼」

――〝キラリ〟と民兵の頭上に糸が見える。

スネーク　「馬鹿な」

――呆れるスネーク。スネーク、屋上を見上げる。

【主観ボタン】屋上にマンティスの陰。浮遊している。

スネーク　「あれは（マンティス）？」

――屋上のマンティス、マンティス人形を操っている（他のビーストも操られている）。周囲の民兵を触手で蹴散らすオクトパス。レイブン、凱旋門状のアーチを爆撃、破壊し、下の民兵たちを下敷きにする。ウルフはハイスピードで兵士達を闘牛の様に蹴散らして（体当たり）行く。はじき飛ばされた兵士！　人形のようにバラバラになって落下する兵士！

――空からはレイブン、中央地上はオクトパス、地上周囲はウルフ。アクションのバリエーション。最後にウルフ、立ち止まり、装甲ドーザーに体当たり、装甲ドーザーは横転して爆破。

――マンティスは高見の屋上から見下ろし、攻撃中止の振り。やや操られたような動きで攻撃をやめ、

解散するＢＢ部隊。レイブンは兵士の死体の胸に乗っている。そこから羽ばたいて飛び去り、ウルフは瓦礫を軽やかに飛び越えて立ち去り、オクトパスは触手を使って擬態しながらオラウータンのように建物の向こうへ。マンティスは操り人形の最後の挨拶のように頭を垂れると、屋上を立ち去る。

【リキッド登場１／ポリデモ】　中東キャンプ

——キャンプの入り口、物陰から中の様子を伺うスネーク。

スネーク　「（立ち止まって一呼吸）」

——廃墟化したオフィスビル（役所）の駐車場にいくつものテントが並んでいる。その外側には整然とトラックが並んでいる。トラックの荷台にはそれぞれ月光が積載され、その上にかけられたフードから折りたたまれた脚部が覗いている。

——スネークの横でＭｋ．Ⅱがステルスを解除する。

スネーク　「（小声で）オタコン、そこで待ってろ」

——Ｍｋ．Ⅱ、頭を伸ばして頷く合図、ステルスをオンにする。内部へと入っていくスネーク。

——テント周囲にはＰＭＣ兵士達。キャンプの外は戦場のため、物資補充や兵員補給など指令塔的な役割として慌しく動き回っている。トラックからコンテナを運んでいる者、治療を受けている者、

列を作って走っている（加勢するため移動中）者などがいる。本部テントでは無線機に向かって何か叫んでいる兵士。
——見張りの目を盗んで中へと進むスネーク。前方、やや上方を見てはっとする。

スネーク　「ん…？」

【主観ボタン】ソリッド・アイを双眼鏡モードに。リキッドを見ながらズーム。
——リキッド登場。2階バルコニー。裏からナオミらしき人物も。それを見つけるスネーク。リキッドの外見はオセロットだがその態度、様子、雰囲気、受ける感覚（SENSE）はリキッドそのものだ。
——背中を向けていたリキッド、何かの気配を察知したようにこちらを向く。
——こちらを向ききるリキッドのUP！

【字幕】リキッド・オセロット　銀河 万丈

スネーク　「リキッド…！」

【フラッシュバック】リキッドとオセロット
——スネークはリキッドへ向かい、物陰（テント）を伝ってジリジリと接近する。銃（Operator）を握り締めるスネーク。

――向こうの建物の中にメリルを発見。メリルもこっちを見ている。遠めに無線を準備しているのが見える。

――同時に強制ＣＡＬＬ。

【リキッド登場２／強制無線デモ（メリル）】 中東キャンプ

――画面はＲＡＴ ＰＴ０１。

メリル　「やっぱり」

メリル　「スネーク、リキッドを殺す気ね」

スネーク　「それが俺の使命だ。どうする？　メリル？」

メリル　「私の任務はＰＭＣの査察。警備ではないわ」

メリル　「ただ見届けるだけよ」

メリル　「いい、手助けは出来ない…私は秩序を守る兵士」

スネーク　「ああ」

【リキッド登場3／ポリデモ】　中東キャンプ

――メリルの部隊を見ると、メリルが片手を上げて親指を立てているのがわかる。物陰を伝ってスネークの方へ向かって近付いてくるメリル部隊（結果的にキャンプの中に入り込んでくる）。リキッドを見ると、キャンプを見渡しながら無線で何らかの指示を出している（PMC全体に向けての実験）。

リキッド「始めろ」

――スネークはさらにリキッドへ接近しようとするが、同時に各方位から月光の咆哮（牛の声）が聞こえだし、警戒して足を止める。上空を見上げるスネーク。メリルの部隊も警戒して足を止める。
――突然、兵士達ががっくりと膝を落とし、苦しみ出して嘔吐をはじめる。兵士の叫び声が聞こえる。物資を運んでいた兵士も力なくその場に崩れ落ちる。兵士達の叫び声が増えていく。一斉に混乱の波紋が広がる。
――メリル達も同様に苦しみ出す。周囲の兵士が連鎖反応のように声を上げながら倒れる。
――それを眺めるリキッドと女性。女性は動揺している。
――キャンプ内のPMC傭兵部隊の行動に次々と異常が現れだす。泣き喚く者、ただ叫ぶ者、狂ったように笑い続ける者、互いをののしりあう者、嘔吐、失禁、気絶…。次々と精神崩壊を始める兵士達。その場で痙攣を始める兵士がでる。
――GOP（ガンズ・オブ・ザ・パトリオットの略）で苦しむ兵士達。
――メリルの部隊を見ると彼等も跪き、様子がおかしい。ジョニーだけは正常、おろおろと仲間達

を交互に見ている。

——たちまち混乱状態に陥るキャンプ。

メリル「(すすり泣きがだんだん激しい号泣に変わっていき、やがて痙攣、倒れる)」

エド「(笑いが激しくなり、やがて痙攣、倒れる)」

ジョナサン「(恐怖による怯えが激しくなり、やがて痙攣、倒れる)」

アキバ「(心配そうに仲間に声を掛ける)」

——リキッドは周囲を見渡すと、期待に沿わない結果に苛立ちながら吐き捨てるように、

リキッド「そう簡単にいくとは思っていなかったが…」

リキッド「そうか、なかなか面白い結果だ…」

——混乱を縫ってリキッドに近付こうとするスネークだが、スネーク自身も身体に変調をきたしだす。目もうつろ、口には一筋の唾液、咳き込みだし、視界が揺らぎ、足取りがおぼつかなくなっていく。リキッドに銃口を向けるスネーク、だが目が霞みターゲットできない。

——リキッドがサングラスを外して、こちらを見る。朦朧とした意識の中、目が合うスネーク。リキッドは語りだす。

リキッド「兄弟！　久しぶりだな」

スネーク　「リキッド…」

——よろけ、倒れそうになるが、両足を広げてふんばるスネーク。

リキッド　「喜べ！」

——銃を向けようとするスネーク。肩に力が入らない。周囲の兵士に肩がぶつかり、よろめきながら一歩ずつリキッドに近付こうとするスネーク。

リキッド　「俺たちは親父（BIGBOSS）のコピー（クローン）ではなかった！」

——以降主観画面。左スティックで視界を動かすことが出来る。主観画面は水で滲んだようなエフェクト。視界がぼやける。心拍音。深いリバーヴの中ではっきりとリキッドの声が聞こえてくる。

リキッド　「運命という束縛から解放される！」

リキッド　「スネーク！　兄弟よ！　俺たちは自由だ！」

リキッド　「見ていろスネーク」

リキッド　「俺は、自らの原点（ビッグボス）を超える！」

スネーク　「はあ…はあ…（ふらつきながら歩く呼吸）」

——なんとか操作してリキッドに近づくスネーク。しかし、膝をついて動けなくなる。主観は動かせる状態。

スネーク　「うう…」

——膝をつく時点でいったん背景をぼかし、カメラ強制アングル。地面を映すことでモーションをリセットする。倒れたスネークの視界の中、女の足が近付いてくるのが見える。

——ナオミは苦しむスネークのところまで来る。はっきりとナオミの顔を見るスネーク。

スネーク　「ナオミ…?」

【フラッシュバック】ナオミ

——ナオミは立ち止まると自分の首筋に注射を打ち込み、空になった圧縮注射器をスネークの傍に放る。注射針に血液。

ナオミ　「スネーク、運命に縛られたく無ければ」

ナオミ　「運命を辿って来なさい」

——以下カメラ強制（主観終了）。

——リキッドの背後にヘリが現れる。ハッチは開いたままで、中にはナオミ。リキッド、外してい

たサングラスをかけてにやりと笑う。サングラスにスネーク、映り込み。

——動けないスネーク。

リキッド　「はっ！」

——とかけ声と共にヘリに乗り込むリキッド（跳躍）。リキッドを載せたヘリがバルコニーの裏側から上空へと飛び立つ。遅れてお立ち台の向こうに隠れていた月光の群れが一斉に跳躍して消えて行く。

——地面に伏せた状態で、遠い意識の中、それを見ているスネーク。身体を動かそうとするが痺れたように、思うように動かせない。周囲にはまばらに兵士が倒れている。

スネーク　「（倒れたまま、コホコホと力なく咳き込む）」

——スネークの視界に駆け寄ってくるジョニー。

ジョニー　「スネーク！　おい、大丈夫か？」

ジョニー　「つかまれ！」

——ジョニーがスネークを抱きかかえる（主観状態）。主観なので肩を貸してくれるジョニーが見えない。

——F.O.

ACT1「Liquid Sun　液体の太陽」無線集

■中東：グラウンド・ゼロ　オタコン

【戦場は危険】リアルタイム無線

※ゲーム開始地点でじっとしていると発生

オタコン「どうしたんだい？　そこはもう戦場だ」

オタコン「いつまでも見とれていたら、危ないよ。早くその場から離れるんだ」

【基本練習】任意無線

※「戦場は危険」を聞いた後でSEND。初回のみ

（1）初回のみ

オタコン「スネーク、まずは僕が無線で指示する通り、基本操作を練習するんだ。今回から新しく増えた操作もある。戦闘に巻き込まれてしまう前に、十分慣れておいた方がいい」

オタコン「僕の言葉をよく聞いて、その通りにやってみて」

オタコン「それから、短い情報は受話オンリーモードで受信してもらえるように、君の無線機を設定しておいた」

オタコン「これはそのまま電波管制（エムコン）にもなるから、君の位置が不用意に特定される危険も減らせる」

（2）二回目以降

オタコン「スネーク、基本操作の練習は十分な自信が持てるようになるまでしっかりやっておいた方がいい」

オタコン「敵に追われてからじゃ遅すぎるからね」

【移動方法】任意無線

※「基本練習」を聞いた後でSEND。初回のみ

オタコン「移動には左スティックを使う」

オタコン「傾け方によって、歩き、走りを使い分けられる」

オタコン「体を十分慣らしておいてくれよ」

オタコン「それから、移動速度が上がるほど、立てる物音が大きくなる事は気に留めておいてくれ」

【姿勢変更】任意無線

※「移動方法」を聞いた後でSEND。初回のみ

オタコン　「姿勢を変えるには×ボタンだ」
オタコン　「長く押すとホフク状態、短く押せば〝しゃがみ〟と〝立ち〟に切り替わる」
オタコン　「実際にやってみて、しっかり把握しておいてくれ」

【トラックの下を進め】リアルタイム無線
※「基本練習」を聞くｏｒしばらく時間が経過すると強制的に発生
オタコン　「スネーク、トラックの下を行こう」

【基本練習２】任意無線
※トラックの下を通るデモの後でＳＥＮＤ
オタコン　「スネーク、ＰＭＣと民兵の戦闘が激しくなってきている」
オタコン　「今の内に、しっかり基本操作を練習しておくんだ」

【武器入手】リアルタイム無線
※Ｍｋ．Ⅱ接触前に武器を入手すると発生
オタコン　「武器を拾ったね」

オタコン　「武器を使うには、まずスタートボタンでメニューを開いて〝ＷＥＡＰＯＮＳ〟で身につけるんだ」

【潜入ミッション】リアルタイム無線
オタコン　「スネーク、僕らの立場は変わっても、これまで通りの潜入ミッションであることに変わりはない」
オタコン　「見つからないように進む。基本は変わってないよ」

【ＴＰＳ】リアルタイム無線
※一定時間経過後に鳴らす
オタコン　「銃を構えたときにＲ３ボタンを押すと、肩越しのカメラ視点を左右に切り替えられる」
オタコン　「状況に応じて使い分けるといい」

【主観撃ち】リアルタイム無線
※一定時間経過後に鳴らす
オタコン　「武器は主観状態でも撃つことが出来る」
オタコン　「武器を構えた状態で主観ボタン（別バージ

ヨン：アクションボタン）を押すと、照準器越しの精密射撃体勢に入るんだ」

オタコン　「ターゲットの特定部位を狙い撃ちたいときは、このテクニックを使うといい」

オタコン　「それとスネーク、主観での攻撃態勢時も移動は可能だ。よく覚えておいてくれ」

【予備の弾薬について】リアルタイム無線

※敵に遭遇する前に弾倉が空になった場合

オタコン　「無駄弾の撃ちすぎだよ、弾倉が空じゃないか」

オタコン　「予備の弾薬は、民兵が使っていた武器から入手できる。落ちている武器を拾うか、民兵から直接武器を奪ってもいい」

オタコン　「それから、ひょっとしたらだけど、民兵が放棄していった弾薬箱が見つかるかも知れない」

オタコン　「先へ進む前に、予備弾倉を補充しておくんだ」

【月光から逃げろ1】リアルタイム無線

オタコン　「月光（アーヴィング）と接触しないようにして、北へ向かってくれ」

【月光から逃げろ2】任意無線

※「月光から逃げろ1」を聞いた後でＳＥＮＤ

（1）初回

オタコン　「スネーク、月光が民兵の掃討を開始した！」

オタコン　「危険だ！　何とかして月光の近接攻撃から逃れるんだ！」

（2）二回目以降

オタコン　「月光の目を逃れるんだ、スネーク」

オタコン　「敵の配備状況などからみると、北の方が比較的安全なようだ」

オタコン　「北へ向かってくれ」

【月光は強い】任意無線

※「月光から逃げろ2」を聞いた後でＳＥＮＤ

オタコン　「圧倒的だな……」

オタコン　「スネーク、民兵達の戦いぶりじゃ月光には歯が立たないようだ」

オタコン　「下手な巻き添えを食わないように、気をつけてくれよ」

【月光と戦うな】リアルタイム無線
※月光に銃を使い、かつダメージを受けたら
（1）
オタコン「スネーク、戦闘は避けるんだ！」
（2）忠告にもかかわらず戦闘を続けたら
オタコン「スネーク、戦っちゃダメだ！」
（3）更に戦闘を続けたら
オタコン「今のままじゃ勝ち目はない。逃げるんだ！」

【北へ進め1】リアルタイム無線
※北へ向かわずうろうろしていたら
（1）
オタコン「スネーク、聞こえなかったのかい？　北だよ、北へ進むんだ」
（2）
オタコン「スネーク、北側が安全だ。北へ進め！」
（3）
オタコン「月光に注意して進むんだ」
（4）
オタコン「スネーク、北へ向かうんだ」

【北へ進め2】任意無線
※「北へ進め1」を聞いた後でSEND
オタコン「スネーク、そこから北へ進むんだ」
オタコン「判ったね」

■中東：レッドゾーン・北西セクター

【メタルギアMk．Ⅱと合流せよ1】任意無線
※強制無線デモ「ゲーム基礎説明1」（P33参照）を聞いた後でSEND。初回のみ
オタコン「スネーク、まずMk．Ⅱ(マーク・ツー)との合流を急いでくれ」
オタコン「オクトカムの機能を使って敵に見つからないように気をつけながら、僕の誘導に従って進んでくれ」

【メタルギアMk．Ⅱと合流せよ2】任意無線
※他に言うことがない場合
（1）
オタコン「Mk．Ⅱ(マーク・ツー)と合流するんだ、スネーク」
オタコン「ルートは僕が指示する。僕の言う通りに進んでくれ」

（2）ランダムで以下追加
オタコン　「オクトカムの機能もうまく使ってくれよ」

【オクトカム基本説明】任意無線
※「メタルギアMk.Ⅱと合流せよ1」を聞いた後でSEND。初回のみ

オタコン　「オクトカムは、地表や物体表面の見た目をそっくり擬態する、新開発のカムフラージュ技術だよ」
オタコン　「使い方はシンプルだ。スーツを着たまま壁や物体に張り付いたり、ホフクするだけでいい」
オタコン　「有効に活用してくれ」
オタコン　「ところでどう、実際に着た感想は?」
スネーク　「思ったほど着心地は悪くない」
オタコン　「そいつは壁や地面の色、模様、凹凸（オウトツ）まで擬態することが出来るんだ」
オタコン　「迷彩パターンの現地調達とでも言えるかな」
スネーク　「カムフラージュ（迷彩服）で十分だ。俺はカメレオンじゃない」
オタコン　「違うよスネーク。カメレオンじゃないんだ」
オタコン　「オクトカム、つまり蛸（オクトパス）の擬態を参考にしたカムフラージュだよ」
オタコン　「蛸は〝海の忍者〟と呼ばれることもある。彼らは周囲の色だけじゃなくて、形状まで擬態して敵の目を欺くことが出来るんだ」
オタコン　「そのスーツは自然界の擬態技術にヒントを得たんだよ」
オタコン　「それに、自在に身体の色を変えられる蛇がいる事を知らない?」
オタコン　「ボルネオのカプアス・マッド・スネーク」
オタコン　「カリマンタン（ボルネオ）島のカプアス川で発見された毒蛇なんだけど、赤褐色の体を白色に変化させることがあるらしい。スネーク、蛇も擬態するんだよ」
スネーク　「ステルス迷彩はないのか? 昔、お前が着てたような」
オタコン　「目の錯覚を利用するステルス迷彩は、赤外線センサーを備えた月光の眼（カメラ）には意味をなさないんだ」
オタコン　「オクトカムならマイクロ・ペルチェ・アレイ（micro peltier array）

の吸放熱調整で、周囲の赤外線放射と着用者の体熱放射も同調させられる」

オタコン「つまり敵の赤外線センサーに対してもカムフラージュ効果をなんとか発揮してくれるって訳だ」

オタコン「無人機が多く投入されているいまの戦場ではオクトカムの方が優れているはずだよ」

オタコン「ただし歩いたり走ったりして、動きや音が大きくなると敵に見つかる確率は上がるから注意して」

オタコン「それからこのスーツは、君の身体にかかる荷重を軽減し、筋力も増強してくれる」

オタコン「内側には、微弱電流を流すことで細胞内のリン脂質生成を促す、回復促進機能もつけている」

オタコン「負傷時のLIFE（ライフ）ゲージ回復力を高めてくれるはずだ」

オタコン「体力の衰えはそのスーツがなんとかカバーしてくれるよ」

スネーク「（むっとする）年寄り扱いはするな、オタコン」

【故障AKについて】任意無線

※「オクトカム基本説明」を聞いた後でSEND。初回のみ

オタコン「スネーク、最初に君が持っていた銃（AK102）トラブルだけど」

オタコン「見る限りあれは弾薬側の問題のようだね」

スネーク「弾薬側の？」

オタコン「きっと現地製の安物弾薬（チープアモ）だったせいだろう」

オタコン「異常燃焼を起こした為に腔圧（こうあつ）が上がりすぎて、薬莢が薬室（チャンバー）に張り付いたんだと思う。かなりのレアケースに当たっちゃったんだね」

スネーク「（「当たった」を受けて）運は悪い方だと思っていたが」

オタコン「意外にも幸運の持ち主だったみたいだよ。銃本体には何の問題も無かったはずだ。今後はあんなこと起こらないと思うよ」

【月光解説】任意無線

※「故障AKについて」を聞いた後でSEND。初回のみ

スネーク「オタコン、あの二本脚のシロモノだが、これまでのメタルギアに比べるとかなり雰囲

気が違うな」

オタコン「うん。だけど厳密に言うとそいつらはメタルギアじゃないんだ」

スネーク「メタルギアじゃない？　どういうことだ」

オタコン「君がこれまで対峙してきたメタルギアは、基本的に核戦力の中核として整備されるべく開発、製造されてきた機体ばかりだった」

オタコン「例外的にRAYという存在があったけど、あれだって元々は、世界各国に出現したメタルギア亜種を撃退するために産み出された、対メタルギア兵器だ。核戦略の枠組みの中で、その重みをはかられる存在であることに変わりはない」

オタコン「だけど、冷戦の終結から既に四半世紀。世界は激化する地域紛争や非対称戦をくぐり抜けて、いまや戦争経済の時代に突入している」

オタコン「メタルギアという兵器の存在意義、概念も時代に合わせて変化、いや進化したんだ」

オタコン「核攻撃プラットフォームとしての機能に加え、小回りがきいて、市街戦闘に大量投入可能、歩兵に随伴・協働できる能力を持つメタルギアが求められ、それに対する回答として生まれたのが月光だ」

オタコン「月光の場合、派生型や任務内容によっては、核兵器の搭載オプションを必ずしも備えない。だから正確にはメタルギアじゃないんだ」

オタコン「過去の、核攻撃を主任務としたメタルが全廃されたというわけじゃないけど、今の世界で二足歩行兵器と言えば月光タイプを指すと思って間違いない」

オタコン「サイズが小さくなっても、こいつは獰猛な猛獣だ。決して軽くみちゃダメだよ」

スネーク「ああ、侮るつもりはない」

【スレットリング説明】任意無線

※「月光解説」を聞いた後でSEND。初回のみ

オタコン「スネーク、君の体を囲んでいるのは脅威(スレット)リングだ」

オタコン「脅威(スレット)リングは、君が感じた周囲の気配を視覚化したものだ」

オタコン「しゃがみ、ホフク状態で意識を集中すると、

完全なリング状になる。その際、気配が大きいものほど高い波で示される」
オタコン「君に対して敵意を抱いた相手は色で示される」
オタコン「有効に活用してくれ」
オタコン「それから気力が低いときには感覚も鈍る。リングの見え方も変わってくるだろう」
オタコン「覚えておくといい」

【ゴミ箱の使い方】任意無線
※「スレットリング説明」を聞いた後でSEND。初回のみ
オタコン「スネーク、そのエリアにはゴミ収集用のダストボックスが設置されているようだね」
オタコン「そのサイズなら、中に隠れることも出来るだろう。敵をやり過ごすために役立つかも知れない」
オタコン「ダストボックスの中に入るには、ボックスの正面に立って△（アクション）ボタンを押すんだ」
スネーク「正面に立って△（アクション）ボタンだな。判った」
オタコン「中に入ってから外の様子を伺うには、コントローラを傾けるんだ。その状態から主観攻撃をすることも可能だ」
オタコン「外に出たければ、もう一度△（アクション）ボタンを押せばいい」
オタコン「スネーク、判ってるとは思うけど、隠れる瞬間を見られていたら意味はないよ。気をつけてくれ」

【ゴミ箱の中で】任意無線
※ゴミ箱の中にいる時にSEND。初回のみ
（1）「ゴミ箱の使い方」を聞いている場合。（3）に続く
オタコン「どう、うまく隠れられた?」
スネーク「ああ、言われた通りにやってみたぞ」
（2）「ゴミ箱の使い方」を聞いていない場合。（3）に続く
オタコン「スネーク、今どこにいるんだい?」
スネーク「ゴミ箱の中だ」
オタコン「ゴミ箱?」
（3）
スネーク「……どうも生活ゴミの収集用ボックスに入ったようだ」

オタコン　「え、どうしてそんなこと判るの」
スネーク　「かなり臭いがきつい。これは恐らく、残飯の腐臭だろう」
オタコン　「残飯……」
スネーク　「それに、俺の鼻先を虫が這い回っているしな」
オタコン　「え」
スネーク　「ゴキブリのようだ。何匹かウロチョロしてる」
オタコン　「……ウェ……」
オタコン　「スネーク、こっちに来る前には、臭いを落としてくれよ！」
スネーク　「気をつける」
オタコン　「だけど……気持ち悪くないの？」
スネーク　「敵の目を逃れるためだ、これ位のことは仕方ないさ。む、今度は俺の股の間を何かが……」
オタコン　「……うわわわ、想像しちゃった。スネーク、外の安全が確認できたら、早めに出た方がいいかも」
スネーク　「そうだな。確かに長居したくなる場所じゃない」

オタコン　「だろ？」

【匂いが付いた】任意無線
※「ゴミ箱の中で」の後に、ゴミ箱から出てＳＥＮＤ。初回のみ
オタコン　「スネーク、羽虫がたかってるじゃないか。ずいぶん匂いが付いてしまったようだね」
スネーク　「（鼻をつまんだ声）ああ。クサい」
オタコン　「自分が臭いなんて嫌だろう？　スネークの精神面にもいい影響はないと思うよ（気力ゲージ下がる）、それに、匂いをまき散らせば、辺りにいるＰＭＣや民兵達に君の存在を感づかれてしまうかも」
オタコン　「匂いは風下に流れるから、風下の敵には特に注意が必要だ」
スネーク　「（鼻をつまんだ声）判ってる。偵察任務で匂いの怖さは身にしみて理解してる」
オタコン　「だったら早めに匂いを消すように努めてくれ」
スネーク　「（鼻をつまんだ声）ああ」

【匂いを早く消すヒント】任意無線

※「匂いが付いた」を聞いた後でSEND。初回のみ

オタコン「スネーク、君の体から出ている匂いだけど、どうにかして早く消した方がいいよ」

スネーク「(鼻をつまんだ声)そんなことは判ってる。だがどうすればいい」

オタコン「どうすればいいかって? ……うーん」

スネーク「(鼻をつまんだ声)シャワーなんてここには無いぞ」

オタコン「シャワー……。……そうだ、それで行こう!」

スネーク「(鼻をつまんだ声)なに?」

オタコン「体についてる匂いの元を落とせばいいんだ」

スネーク「(鼻をつまんだ声)だからどうやって」

オタコン「地面に転がるんだ」

スネーク「(鼻をつまんだ声)転がる?」

オタコン「うん。確か、馬は自分の体に付いた汚れを落とすために、地面の上で転げ回るんだって何かで読んだことがある。君もそうすればいい。きっと匂いの元もこすり落とされると思う」

スネーク「(鼻をつまんだ声)砂浴びのことか」

オタコン「砂浴びっていうんだ。要はシャワーだよね、馬の」

スネーク「(鼻をつまんだ声)……まあ、そういえなくもないか」

オタコン「やってごらんよ。きっと効果がある」

スネーク「(鼻をつまんだ声)了解」

【匂いを消した】任意無線

※「匂いを早く消すヒント」を聞かずに、匂いを消した

オタコン「スネーク、さっき君、羽虫がたかってただろ? 多分ゴミ箱の臭いが付いちゃってたせいだと思うんだけど、今は羽虫がいないね」

スネーク「そうだな。言われてみれば、臭いもしなくなっている」

オタコン「何かした?」

スネーク「(記憶をたどる)……転がった、かな」

オタコン「転がった?」

スネーク「何度か繰り返して転がった後に、羽虫が消えたように思う」

オタコン「……なるほど。転がることで体に付着していた悪臭の原因がこすり落とされたのか。それで臭いがしなくなって羽虫も消えたんだ」
オタコン「スネーク、今後体に臭いが付くことがあったら、地面を転がるといい。それで臭いは消せるだろう」
スネーク「わかった、覚えておこう」

【PMCについて】任意無線
※「ゴミ箱の使い方」の後でSEND。初回のみ
オタコン「現場に展開しているPMCについての情報だ」
オタコン「彼らはプレイング・マンティス社。英国に拠を構える、世界5大PMCの一つだよ」
オタコン「業務内容は戦闘員の派遣、兵站・物流サービスの提供、各国軍隊に対する教育・訓練……、PMCのイメージから連想されるものはたいがい網羅している」
オタコン「イラク戦争でも、米国政府と契約したプレイング・マンティス社は多数の戦闘員を戦地に送り込んだ」

オタコン「現地政府が正規軍ではなく、イギリス企業であるプレイング・マンティス社に対抗勢力の討伐を依頼したのも、彼らの持つ経験を高く買ってのことなんだ」

【見つかったら増援】任意無線
※「PMCについて」の後でSEND。初回のみ
オタコン「スネーク、しつこいようだけど繰り返しておくよ。敵には見つからないように気をつけるんだ」
オタコン「敵は君の姿を見つけたら、展開する兵員の数を増やすだろう」
オタコン「そこでの君は完全な孤立無援だ、どこへも逃げ込める場所はない。だから……」
スネーク「(判った判った)オタコン、心配しすぎだ。ヘマすればどんな目に遭うか、俺自身が一番よく知ってる」
オタコン「……ならいいけど。ともかく、不利な状況に追い込まれないよう慎重に行動してくれ」

【不要な戦闘は避けろ】リアルタイム無線
※ストライカー出現デモ後
オタコン「不要な戦闘は極力避けるんだ」
オタコン「そこにいるのは、どちらの勢力も君の敵じゃない」
オタコン「戦闘自体が無意味なんだ。いいね」

【ストライカー突破はムリ】リアルタイム無線
※ストライカーの近くで
（1）まだ発見されていない段階
オタコン「(スネークの無茶をいさめるように) そこは危ないよ、スネーク。迂回して進んだ方がいい」
（2）既に発見されている段階
オタコン「スネーク、突破は無理だ！　別の道に迂回するんだ！」

【ID銃説明】任意無線
※ドレビン接触前にPMCの武器を拾った後でSEND。初回のみ
オタコン「スネーク、PMCの兵士が使っているのはID銃だ」
スネーク「ID銃？」
オタコン「武器リストにLOCKEDと表示されているだろう？」
スネーク「ああ」
オタコン「ID銃にはロックがかかっている。そのままでは引き金を引くことが出来ないんだ」
スネーク「じゃあどうすればいい？」
オタコン「ID銃は兵士体内のナノマシンIDを識別してロックを解除する」
オタコン「システムのナノマシンを保持していない者、保持していても使用権限がない者は、ID銃の認証をパス出来ない」
スネーク「じゃあ、PMCの銃は俺には使えないのか？」
オタコン「そういうことになる。スネークもシステムには登録されていないからね」
オタコン「武器や兵器だけじゃない。システムは車輌、軍事施設など全てに対してこのID管理でセキュリティをかけているんだ。PMCも正規軍もIDなしでは戦えない」

オタコン「兵士を個別認証する、ナノレベルのドッグタグというわけだ」
スネーク「それじゃあＩＤ銃は拾っても使い道がないな」
オタコン「少なくとも、今のところはね。でも何かの役に立つかもしれないよ」

【戦場広告】任意無線
※「ＩＤ銃説明」を聞いた後でＳＥＮＤ。初回のみ
スネーク「それにしてもオタコン、この広告の数はどうなってる」
オタコン「……ああ、戦場広告のことか」
スネーク「戦場広告？　そういうのか、あれは」
オタコン「巷ではね。兵器やＰＭＣなんかの戦争経済関連の広告はそう呼ばれている」
オタコン「軍事の民営化は、その行き着く必然として各ＰＭＣや軍需産業間での激しいシェア争いを招いた。市場の拡大とパイの奪い合い……。その結果生まれたのが、僕らが普段の生活で目にするのと変わらない、あふれるほどの広告の山だ」

スネーク「しかし、何でも名前を付ければいいってもんじゃないだろう」
オタコン「君にとってはそう感じるだろうけど、いまや戦争経済は世界を動かす巨大なうねりだ。ネット広告やテレビＣＭと同じように、それを必要とする人間も確実にいるんだ」
スネーク「（バカバカしい）世も末だな」
オタコン「確かにね……。でもそれが現実だよ」

【ローリング促し】リアルタイム無線
※ローリングでないと進めそうにない場所で鳴らす
オタコン「走りながら×（ホフク）ボタンを押すとローリングする」
オタコン「小さいくぼみや障害物を越えたり、敵の攻撃をかわすのに役立つ」

■中東：レッドゾーン
【情報提供者の待つ建物へ向かえ1】リアルタイム無線
※Ｍｋ．Ⅱ合流直後
オタコン「スネーク、月光のいた場所は避けていこう」

オタコン　「少し遠回りになるけど、迂回ルートの情報を送った。レーダー上のマーク（◎）を参照しながら進んでくれ」

【情報提供者の待つ建物へ向かえ2】任意無線

※「情報提供者の待つ建物へ向かえ1」を聞いた後でSEND。初回のみ

（1）初回のみ

オタコン　「スネーク、情報提供者との合流地点に向かうんだ」

オタコン　「いいかい、周辺での戦闘は激しさを増してきている。レーダーやMk.Ⅱ（マーク・ツー）の機能を活用して進んでくれ」

（2）二回目以降、言うことがない場合（2）か（3）を鳴らす

オタコン　「スネーク、情報提供者であるアメリカの特殊部隊と合流するんだ」

オタコン　「どの方角へ行けばいいのかはレーダーで確認してくれ」

（3）

※二回目以降バリエーション

オタコン　「情報提供者の待っている建物へ向かうんだ」

オタコン　「進むべき方向はレーダーに表示されているよ」

【Mk.Ⅱ基本説明】任意無線

※「情報提供者の待つ建物へ向かえ2」を聞いた後でSEND。初回のみ

オタコン　「Mk.Ⅱ（マーク・ツー）は、君のミッション遂行をサポートする為に用意した」

オタコン　「武器・アイテムの運搬、偵察、君のコンディションチェック、マップデータの提供、周囲の戦況分析など、多岐に渡るサポート能力を持たせてある」

オタコン　「カムフラージュの設定、装備の変更もメニュー画面で実行可能だ」

オタコン　「メニュー画面へ入るには、STARTボタンを押せばいい」

※プラス初回のみ、以下が続く

オタコン　「このメタルギアMk.Ⅱ（マーク・ツー）には、ずっとスネークを追走させる」

オタコン「必要な時はいつでも呼び出してくれ」
スネーク「ところでオタコン、何故わざわざメタルギアなんて名前を?」
オタコン「名前をメタルギアにしたのは、REX(レックス)を開発した過去を忘れないためだ。だけどMk.II(マーク・ツー)は大量破壊兵器じゃない」
オタコン「君の活動をサポートする遠隔機動端末だよ」
オタコン「テクノロジーをうまく使えば有効利用できるって事を証明したい」
オタコン「きっと半世紀も経てばMk.II(マーク・ツー)みたいな相棒が社会を豊かにしているはずだ(スナッチャーの事)」
オタコン「今じゃ、スナイパーの観測手の3割はロボットだ」
オタコン「アシモフのSFではないけど、『鋼鉄都市』の時代が実現したんだ」

【Mk.IIの操作方法】任意無線
※「Mk.II基本説明」を聞いた後でSEND。初回のみ
オタコン「Mk.II(マーク・ツー)の操作方法を簡単に説明しておくね」
オタコン「移動は左スティックを使って行う」
オタコン「右スティックはカメラ視点の移動」
オタコン「マニピュレータを使った電撃攻撃は、L1(構え)ボタンで構え、R1(攻撃)ボタンで実行する」
オタコン「何かスイッチがあれば、マニピュレータでオン・オフすることが出来るし、近くに壁があればその壁を叩いて音を立てることも出来る」
オタコン「ステルス迷彩のオン・オフには×(ステルス)ボタンだ」
オタコン「R3ボタンを押すと、主観カメラ・俯瞰(フカン)カメラの切り替えを行う」
オタコン「以上述べた操作法の詳細は、〝Briefing〟でいつでも確認できる」
オタコン「必要に応じて参照するんだ」

【武器の切り替え】任意無線
※「Mk.IIの操作方法」を聞いた後でSEND。初回のみ
オタコン「スネーク、君が入手した武器は、まず一旦バックパックに収容される。武器を使うためには、身につけなくちゃいけない」

オタコン「まず、STARTボタンでMk.Ⅱ(マーク・ツー)のメニュー画面に入り、〝Weapons〟を選ぶ」

オタコン「そこで画面の武器一覧から、使いたい武器にカーソルを合わせ、決定ボタンで選択する」

オタコン「装備品の場合は、メニューの〝Items〟で同じようにすればいい」

オタコン「一度に身につけられる武器や装備品には限りがある。よく考えて必要な物を選んでくれ」

オタコン「操作法が判らなくなったら、Mk.Ⅱ(マーク・ツー)のメニュー画面の〝Briefing〟で確認できるよ。必要に応じて開いてくれ」

【戦況の変化1】任意無線

※「武器の切り替え」を聞いた後でSEND。初回のみ

オタコン「スネーク、そこは戦場だ。状況は刻々変化するということを忘れないでくれ」

オタコン「君の潜入に好都合な場合もあれば、その逆もあるだろう。自分にとって有利な状況を見逃さず、積極的に利用するんだ」

オタコン「例えば、戦闘に集中している連中は、背中が留守になりがちだ。彼らの背後を迂回していくのも一つの手だと思う」

【Mk.Ⅱ操作時の注意点1】任意無線

※「戦況の変化1」を聞いた後でSEND。初回のみ

オタコン「マニュアル操縦時のMk.Ⅱ(マーク・ツー)は、無線で君とリンクしている」

オタコン「ただ、この操縦電波の到達範囲に関しては、送信回路に減衰器(アッテネータ)をかまして故意に短くしている。距離は環境によって変動があるから、はっきりした数値は示せないけど、どんなに行っても50メートルを超えることは無い」

スネーク「なんだってわざわざそんな事するんだ。遠くまで操作できた方が便利だろう」

オタコン「もちろん僕が操作するときは十分な出力の電波を使ってるよ」

オタコン「だけど君の場合、DF(方向探知)の危険性を常に意識する必要がある。高出力の電波放射を一定時間続けるような危険は犯せないんだ。「俺はここに居るぞ！」って大声で喚くようなものだからね」

オタコン　「だから、Mk.Ⅱ（マーク・ツー）は君の身近で使うことを心がけてくれ。それさえ守れば、Mk.Ⅱ（マーク・ツー）は君の役に立ってくれるはずだよ」

【Mk.Ⅱ操作時の注意点2】任意無線
※「Mk.Ⅱ操作時の注意点1」を聞いた後でSEND。
初回のみ

オタコン　「スネーク。こんなこと言うまでもないんだけど、一応念のため」
オタコン　「Mk.Ⅱ（マーク・ツー）の操縦中、君はほとんど無防備だ」
オタコン　「Mk.Ⅱ（マーク・ツー）を使うときは、敵から発見されにくい場所に隠れてからにした方がいいだろう」

【戦況の変化2】任意無線
※「Mk.Ⅱ操作時の注意点2」を聞いた後でSEND。
初回のみ

オタコン　「いま民兵とPMCの戦闘は膠着状態にあって、その区域ほぼ全体が両軍からの銃火にさらされている」
オタコン　「これじゃ、いくら君でも危険だ」
オタコン　「でも、その戦局のバランスを崩すことが出来れば……」
スネーク　「……戦闘のホットスポットをどこかへ押しやれるかも知れない」
オタコン　「そうだよ、スネーク。一方の戦力の要になっているような兵器を破壊したり出来れば、潜入するのにより有利な状況を自ら作り出すことも出来るんじゃないかな」

【Mk.Ⅱはステルス装備】任意無線
※「戦況の変化2」を聞いた後、しばらくしてSEND。
初回のみ

スネーク　「オタコン、Mk.Ⅱ（コイツ）にはステルス機能がついているのか？」（オクトカムスーツにはつけてくれなかったのに）
オタコン　「ああ。Mk.Ⅱ（マーク・ツー）は機械だから有害電磁波も関係ないし、表面積が小さいからコストも安く済むんだ」
オタコン　「そのかわり無人兵器の熱源探知には見つかってしまうけどね。このことは君もよく覚えておいてくれ」

【ソリッド・アイ】任意無線

※「Mk.Ⅱはステルス装備」を聞いた後、しばらくしてSEND。初回のみ

オタコン「君が左目に装着しているのはソリッド・アイだ」

スネーク「3Dメガネか……。子供の頃、『とびだシッド』とかいうおもちゃの3Dメガネがあったような……」

オタコン「とびだシッド？　うーん、それのことはよくわからないけど」

オタコン「ソリッド・アイは様々な機能を備えた万能ゴーグルなんだ」

オタコン「ENVG（エンハンスド・ナイト・ビジョン・ゴーグル）同様の暗視機能や、単眼鏡機能に加えて、必要に応じて色々な情報を表示することも出来る」

オタコン「視界に入った兵士、兵器などの視覚的情報を手がかりに、対象物のデータを引き出すことも可能だ」

オタコン「例えば対象が兵士の場合、体温、心拍数、発汗量などから各兵士の感情、コンディションを推定して表示する」

オタコン「ソリッド・アイの機能切替は装備品ウィンドウで行ってくれ」

【ソリッド・アイの機能】任意無線

※「ソリッド・アイ」を聞いた後でSEND。初回のみ

オタコン「スネーク、ソリッド・アイの暗視（NV）モードを使うと、敵の残した足跡をはっきりと視認することが可能だ」

オタコン「この特性を活用すれば、敵の巡回ルートを効率よく推し量ることが出来るだろう」

【ベースラインマップ】任意無線

※「ソリッド・アイの機能」を聞いた後でSEND。初回のみ

オタコン「レーダーはスネークに頼まれた通りに作ったよ」

オタコン「画面右上に表示されている『ベースラインマップ』はスネーク自身が感じた感覚を、無意識も含めて視覚化したものだ」

オタコン「周囲の音、温度、湿度、匂いなどを総合、増幅して表示する。つまり〝気配〟を数値

化したものだ」

スネーク　「〝気配〟？　近接感覚の事か？」

オタコン　「そう呼び換えてもいいかな」

オタコン　「気配が強いものほどレーダー上では明るく表示される」

オタコン　「ただし周囲が戦闘状態にあったり、騒がしかったりして場の気配（ベースライン）が高いと気配を感じ辛くなってしまう」

オタコン　「周囲が静かなら君自身が目立ち易く、場が乱れている時は紛れ込み易いかわりに、各脅威にも気付きにくくなるということだ」

オタコン　「兵士のような生き物、無人兵器などの動体は気配が強いためレーダーに明るくはっきり映る」

オタコン　「それから、レーダーにはスネーク自身が周囲に発している波紋（気配）の強さも表示されている」

オタコン　「スネークが目立っている状態であるほど、レーダーには明るく、大きくスネークの存在が示される」

オタコン　「逆に、音を立てなかったり、動かなかったり、オクトカムで周囲に同化している状態であればレーダーには小さく表示され、「より敵に見つかり辛い状態」であることを示す」

【民兵について】任意無線

※「ベースラインマップ」を聞いた後、しばらくしてSEND。初回のみ

オタコン　「プレイング・マンティスと対峙している民兵は、現地の小規模なPMCに所属する傭兵達だ」

オタコン　「その多くは地元民であるようだけど、純粋な民族対立の熱情だけで銃を取ったわけじゃないようだね」

オタコン　「失業率も年間を通じて高く、貧しい家庭も多い」

オタコン　「そんな環境で十分な教育も受けられずに成長し、職を求めて外国に行く機会もなかなか得られない彼らにとって、PMCというのは数少ない稼ぎ先の一つなんだ」

スネーク　「命の危険と引き換えに……か」

オタコン　「決して賞賛できるようなことではないと思う

よ。でもだからといって、戦場の兵士たちを頭から否定するのも違う気がする。……難しいところだね」

【土地について】任意無線

※「民兵について」を聞いた後、しばらくしてＳＥＮＤ。初回のみ

オタコン「そこは冷戦期に不正規戦の姿をした東西両大国の代理戦争が行われていた場所だ」
オタコン「冷戦が終結すると今度は、遠い過去からくすぶっていた民族対立の炎が燃え上がって内戦が勃発、未だに政情は不安定なままだ」
オタコン「長く続く戦乱に国土は荒廃、疲弊して、食糧事情は芳しくない。経済も弱体化が著しく、先進各国からの援助で何とか支えられているような状態だよ」
オタコン「そんな有様にもかかわらず現政権はＰＭＣを雇い入れ、反政府勢力……、彼らは〝テロ組織〟と呼んでいるけど……、その討伐作戦を展開している」
オタコン「確かに安全保障は大事なことではあるけど、でも……」
スネーク「銃弾を買う金があれば、国民のためにパンを買え……か？」
オタコン「そう思ってる人は少なくないと思うよ」
スネーク「……そうだな」

【カムフラージュ】任意無線

※「土地について」を聞いた後、しばらくしてＳＥＮＤ。初回のみ

オタコン「Ｍｋ．Ⅱ（マーク・ツー）のメニュー画面に「Ｃａｍｏｕｆｌａｇｅ（カムフラージュ）」という項目がある」
オタコン「ここではオクトカムの状態を管理する。オクトカムの設定を変更したいときはここを開くんだ」
オタコン「オクトカムには特定の迷彩パターンに固定する固定モード（マニュアル）と、リアルタイムにその場所のパターンに変更する自動モード（オート）がある」
オタコン「使いやすいものを選ぶんだ」

【スライダーによるビル破壊】任意無線

※スライダーのビル破壊後にＳＥＮＤ。初回のみ

オタコン「連中、随分派手なことしでかしたな、ビルを丸々倒壊させるなんて……。恐らくビル自体の老朽化もすすんでいたんだろうけど……」

■中東：民兵アジト

【暗い場所ではソリッド・アイ1】リアルタイム無線
※開始直後
オタコン「暗い所だね」
オタコン「ソリッド・アイの暗視(NV)モードをオンにするんだ」

【暗い場所ではソリッド・アイ2】任意無線
※「暗い場所ではソリッド・アイ1」を聞いた後でSEND。初回のみ
オタコン「スネーク。もし光量が少なくて、肉眼ではモノが見えにくい場所に出たら、ソリッド・アイの暗視(NV)モードを使うといいよ」

【PMCの傭兵四人組】任意無線
※オペレーターと高位民兵の話を立ち聞きした後にSEND。初回のみ
スネーク「オタコン」
オタコン「ああ、僕も聞いたよ」
スネーク「新式装備の特殊部隊……一体どんな奴らだ……？」
オタコン「PMCが雇い入れた傭兵か何かかな」
オタコン「……もしそいつらと遭遇するようなことがあったら、十分に気をつけてくれよ」
オタコン「それとスネーク、四人組の一人はUCAV(無人機)を操ってるって言ってたけど……」
スネーク「ああ、部下が破片を拾ってきたともな。あいつらの目の前に置いてあったのがそうだろう。ビルを爆撃してたやつと同じ形をしていた」
スネーク「ナリは小さくても、侮れない攻撃力だ」
オタコン「全くだ。こいつらに捕捉されたりしないように、気をつけてくれ」

【民兵服入手】任意無線
※「中東民兵服」入手後に発生
オタコン「反乱軍戦闘員の服を手に入れたんだね」

オタコン　「それを着ていれば、民兵に怪しまれずに行
　　　　　動できるだろう」
オタコン　「状況に応じてうまく利用するといい」
オタコン　「ただ、いくら味方の格好をしていても他の
　　　　　民兵に危害を与えてしまえば、せっかくの
　　　　　効果も無くなる。注意するんだ、いいね」

【変装ムダ】任意無線
※民兵服を着たまま民兵を撃った後、まだ民兵服を着ている
いると
オタコン　「スネーク。さっき反乱軍戦闘員の格好をし
　　　　　たまま、民兵を攻撃しただろう？」
オタコン　「君は彼らにとっては仲間の仇だ。もう変装
　　　　　の効果は無いよ。オクトカムを使うんだ」

【ロックを外す武器商人】任意無線
スネーク　「武器のロックを外す……？　そんなことが
　　　　　本当に出来るのか、オタコン」
オタコン　「ごめん、僕も詳しくは……。少し時間をく
　　　　　れないか、ちょっと調べてみるよ」
スネーク　「何か判ったら知らせてくれ」

オタコン　「もちろんだ、スネーク」

■中東：廃墟

【廃ビルを抜けろ1】リアルタイム無線
※開始直後
オタコン　「スネーク、情報提供者との合流地点に急ご
　　　　　う」
オタコン　「まずはその崩壊したビルの向こう側へ出る
　　　　　必要がある」
オタコン　「ビルの中を抜けていくんだ」

【廃ビルを抜けろ2】任意無線
※「廃ビルを抜けろ1」の後でＳＥＮＤ。初回のみ
オタコン　「スネーク、情報提供者との合流地点へ向か
　　　　　おう」
オタコン　「合流地点は、その崩壊したビルに面した通
　　　　　りの先だ」
オタコン　「まずはビルを抜けて、向こう側へ出てくれ」

【ドレビンとの取引】任意無線
※「廃ビルを抜けろ2」を聞いた後でＳＥＮＤ。初回のみ

オタコン「スネーク、僕としてはいささか……いやかなり不本意だけど、しかし取引は取引だ」
オタコン「以後、Mk．Ⅱ（マーク・ツー）がドレビンとの接点として機能する」
オタコン「君が何か既に持っているのと同型の武器を拾うと、装填された弾薬だけ君の手元に残り、武器本体はドレビンの管理下に移る」
オタコン「ドレビンは武器の価値をはじき出し、その価値に応じたポイントが積み立て（デポジット）される」
オタコン「このポイントを使ってドレビンから新しい武器を購入したり、あるいはID銃をノンID銃にすることが出来る」
オタコン「Mk．Ⅱのメニューに、ドレビンの項目（Drebin's Shop）を追加してある。時々チェックするようにね」

【廃ビルの抜け方1】リアルタイム無線
※なかなか廃ビルから抜け出せない人のためのヒント
（1）
オタコン「スネーク、外へ出る道筋が判らないようだね」
オタコン「これから音声誘導するよ。僕の指示通り進んでみて」
（2）階段を上がってローリングするところ
オタコン「そこから北西の方角にローリングだ」
オタコン「大きく開いた穴の中へ飛び込んでくれ」
（3）壁に出来た穴を抜けるとき
オタコン「その壁に開いた穴を抜けて」
（4）張り付きで進まないと落ちる場所
オタコン「気をつけて、そこは足場が狭い」
オタコン「張り付いて進むんだ」

【廃ビルの抜け方2】リアルタイム無線
※なかなか廃ビルから抜け出せない人のためのガイド音声
（1）
オタコン「その階段を上がるんだ」
（2）
オタコン「よし、そこから北西に向かって飛び降りるんだ」
（3）
オタコン「壁や天井は崩れやすくなってる筈だ。注意してくれ」
（4）

オタコン　「その段差を上がって、奥へ進んでくれ」

【廃ビルの抜け方3】リアルタイム無線
※何度も道を間違えている場合のガイド音声
(1)
オタコン　「出口から遠ざかってるよ」
(2)
オタコン　「スネーク、ここはスタート地点だ」
(3)
オタコン　「さっき通ったよ、ここ」
(4)
オタコン　「その方向じゃないみたいだね」
(5)
オタコン　「民兵の足跡をたどってみたらどう?」
(6)
オタコン　「足跡は、ソリッド・アイの暗視(NV)モードを使えばはっきり見えるはずだよ」

■中東：ダウンタウン

【合流地点へ急げ1】リアルタイム無線
※廃ビルから出た開始直後

オタコン　「スネーク、情報提供者との合流地点に急ぐんだ」
オタコン　「進むべき方向は、レーダーのマーク(◎)を参照してくれ」

【合流地点へ急げ2】任意無線
※「合流地点へ急げ1」を聞いた後でSEND。他に言うことがない場合
オタコン　「スネーク、先を急ごう。情報提供者との合流地点へ向かってくれ」
オタコン　「目的地(◎)の方角はレーダーで確認できるよ」

【ドラム缶の使い方】任意無線
※ドラム缶入手後にSEND。初回のみ
オタコン　「スネーク、それ(身を乗り出して凝視する)……ドラム缶、かい?」
スネーク　「ああ」
オタコン　「……そんなかさばるモノ。一体どうするつもりなの」
スネーク　「かさばる?　少なくともこの位なければ、

俺が入るには小さすぎる」

オタコン「え？　……ああ、そういうことか」

スネーク「こいつなら中に潜んで敵をやり過ごすことが出来るし、段ボールとは違って、緊急時には横になって転がり移動も出来る」

オタコン「なるほど……それはいいかもね……」

オタコン「ドラム缶に隠れるには、アイテムとして装備すればいいだろう。転がるには×ボタン（ホフク）を押して横たわり、後は通常の移動と同じ様に操作すればいいと思うよ」

オタコン「いい物を拾ったね、さすが現地調達のプロフェッショナルだ」

【ゲージについて】任意無線

※「ドラム缶の使い方」を聞いた後にSEND。初回のみ

オタコン「画面左上にある2つのゲージのうち、上にあるのはLIFE（ライフ）ゲージだ」

オタコン「もうお馴染みだよね」

オタコン「ゲージが減少したら食糧を食べるといい。あるいは安全な場所に隠れて、オクトカムスーツの機能がLIFE（ライフ）を回復してくれるのを待つんだ」

オタコン「LIFE（ライフ）ゲージの下にあるのは気力ゲージだ」

オタコン「気力ゲージが低いと銃を構えたときの手ぶれが大きくなったり、LIFE（ライフ）ゲージの回復が遅れたり、レーダーの感度が鈍くなったり……と、君の戦闘能力に悪影響が出てしまう」

オタコン「ゲージ残量には気を付けるんだ」

【壁への張り付き方（旧ビハインド）】任意無線

※「ゲージについて」を聞いた後、しばらくしてSEND。初回のみ

オタコン「壁に張り付くには、壁の前で△（アクション）ボタンを押すんだ」

オタコン「張り付いたまま壁の端まで移動すると、そこからのぞき込みや飛び出し撃ちが出来る」

オタコン「状況に応じてうまく使うんだ」

【ホフクからの移動、転がり】任意無線

※「壁への張り付き方」を聞いた後、しばらくしてSE

ND。初回のみ
オタコン「ホフク状態でL1ボタン（構え）を押して、左スティックを左右に傾けると、その方向に平行移動する」
オタコン「平行移動中に×ボタン（ホフク）を押せば、転がることも出来る」
オタコン「これなら目立たずに移動出来るよ」

【気力ゲージの回復方法】任意無線
※「ホフクからの移動、転がり」を聞いた後、しばらくしてSEND。初回のみ
オタコン「精神的コンディションの低下は戦闘能力の低下に繋がる」
オタコン「つまり、気力ゲージが低いときは、戦闘行動にも支障が出てくるはずだ」
オタコン「そんなとき気力ゲージを回復するには、君自身のストレス・マネジメントが重要になる」
オタコン「大まかに言えば、戦闘で張り詰めた精神状態を何らかの方法で休ませてやればいい」
オタコン「静かな場所で休んだり、食事を摂ったりするといい。遠くの景色を見たりするのも有効だし、気力回復に役立つアイテムもあるかも知れない」
オタコン「気力ゲージは、臭う場所、暑い場所など、環境の良くない所にいると消耗するのが早い」
オタコン「自分がいる環境について、注意するのを忘れないでくれ」

【ストライカー出現】リアルタイム無線
※ストライカー出現時
オタコン「ストライカーだ！　PMCが増援を送り込んできたんだ」
オタコン「PMCの防御ラインに厚みが増した。突破は困難だ」
オタコン「ストライカーからも銃撃してくるだろう。十分気をつけてくれ」

【スナイパー兵注意1】リアルタイム無線
※スナイパーの銃撃がある辺りで
オタコン「スネーク、気をつけて、PMCのスナイパーだ」
オタコン「やっかいだな……連中の背後に回りこむル

ートでも見つかれば、対処できるかもしれ
ないけど……」

【スナイパー兵注意2】任意無線
※「スナイパー兵注意1」を聞いた後でSEND
オタコン「そのエリアにはPMCがスナイパーを展開
している」
オタコン「狙い撃たれたりしないようにね、スネーク」

【PMCの航空攻撃】リアルタイム無線
※アドヴェント・パレス前で
オタコン「スネーク、PMCの航空攻撃だ！」

【どうして戻る?】任意無線
※一旦ビルに入った後で、戻ってSEND。初回のみ
オタコン「スネーク、どうして戻ってきたんだい?」
オタコン「情報提供者の隠れているビルに戻るんだ。
彼らと合流しなくちゃ」

■中東：アドヴェント・パレス

【情報提供者まであと少し】任意無線
※ビル内でSEND
オタコン「情報提供者との合流地点まであと少しだ」
オタコン「その廃ビルはPMC、民兵どちらも占拠し
ていない無人の廃墟のようだね」
オタコン「合流地点は上の階にある。レーダーで目的
地（◎）を確認しながら、慎重に進むんだ」

【赤外線トラップの説明】リアルタイム無線
※赤外線トラップの近くで
オタコン「スネーク、どうやらトラップが設置されて
るみたいだ」
オタコン「それは赤外線センサーで起爆する爆弾のよ
うだ」

【赤外線トラップの説明】任意無線
※「赤外線トラップの説明」を聞いた後でSEND
オタコン「スネーク、仕掛けられている赤外線センサ
ーから、微弱な電波が放射されているのを
計測した」

オタコン「恐らくセンサーの設置者、つまり情報提供者が、リアルタイムで作動状況をモニターしているんだと思う」
オタコン「赤外線センサーを使ったトラップは、そのまま放っておこう」

■中東：アドヴェント・パレス（ヘイブン・トルーパー戦）

【出口を目指せ！】任意無線
※開始直後にSEND
（1）初回のみ
オタコン「スネーク、敵はかなり大規模な掃討部隊を投入してきてる」
オタコン「一刻も早くその場を逃れた方がいい」
オタコン「ビルの外へ出るための出口は、少なくとも2階より上にはない」
オタコン「メリルたちと協力して、何とか切り抜けてくれ。そして出口を目指すんだ！」
（2）二回目以降は、（2）か（3）を鳴らす
オタコン「外への出口は下の階層にある」
オタコン「メリルの01部隊と協力して、敵を排除しながら進んでくれ！」
（3）
オタコン「ビルの外へ脱出するんだ」
オタコン「下の階層へ行けば、外への出口がある」
オタコン「敵の包囲を突破しつつ、メリルの01部隊と一緒に下へ降りるんだ！」

【01部隊と離れるな】リアルタイム無線
※メリル達から離れた場合に鳴らす
（1）
オタコン「スネーク、メリル達から離れすぎだ」
オタコン「彼女たちと行動を共にするんだ！」
（2）
オタコン「スネーク、01部隊と離れないようにするんだ！」
（3）
オタコン「スネーク、メリル達と歩調（テンポ）を合わせて！」
オタコン「単独では勝ち目はないよ」

【アキバを待て1】リアルタイム無線
※01部隊到着前に赤外線トラップ前に到着してしまった場合
オタコン　「待ったスネーク、そこにアキバがセットしたトラップが残ってる！」
オタコン　「トラップは壁に埋設されていてMk.Ⅱ（マーク・ツー）での処理は不可能だ」
オタコン　「アキバに解除させよう。彼が来るのを待つんだ！」

【アキバを待て2】任意無線
※「アキバを待て1」を聞いた後にSEND
（1）初回のみ
オタコン　「スネーク、アキバの仕掛けたトラップが残っている。そのトラップを解除しなければ、1階には降りられない」
オタコン　「トラップは壁に埋め込まれていて、Mk.Ⅱ（マーク・ツー）では手が出せない」
オタコン　「アキバの到着を待とう、スネーク。彼に解除してもらうんだ」
（2）二回目以降
オタコン　「スネーク、アキバを待つんだ。トラップは彼に解除させよう」

【アキバ気絶】リアルタイム無線
※戦闘中、アキバが気絶した時
オタコン　「スネーク、アキバが気絶してしまったよ！」

【SOP凄い】任意無線
※メリル達の凄い戦いっぷりをしばらく見た後でSEND
オタコン　「スネーク……メリル達、なんていうのかその……（言葉がない）」
スネーク　「……同感だ、オタコン。特殊部隊の世界（コミュニティ）でもトップクラスの連中は、訓練次第でアレに近い動き方が出来るようにはなるが……。しかしメリル達はそれ以上……戦闘がまるで機械の流れ作業のようだな」
オタコン　「サンズ・オブ・ザ・パトリオット……なんてシステムだ」
スネーク　「少なくとも味方でいる内は頼もしいが」
オタコン　「だったら、メリルを怒らせない方が身のためだね」（SOPで感情抑制出来ることは

まだ知らない）

スネーク　「全くだ」

オタコン　「大丈夫かい？（苦笑）君、前科あるよ」

スネーク　「……（同じく苦笑）」

■中東：アドヴェント・パレス駐車場〜クレッセント・メリディアン

【地上に出ろ1】リアルタイム無線

※開始直後にビルの地下にいると

オタコン　「よし、スネーク。地上に上がってくれ」

【地上に出ろ2】任意無線

※「地上に出ろ1」を聞いた後にSEND

オタコン　「スネーク、まずは地上に出るんだ」

オタコン　「地上への出口を探してくれ」

【メリルのエンブレム】任意無線

※「地上に出ろ2」を聞いた後、しばらくしてSEND。初回のみ

オタコン　「ねえスネーク、不思議に思ったんだけど、メリルが付けていたワッペン、あれって FOXHOUND（フォックスハウンド）のだよね」

スネーク　「ああ、そうだったな」

オタコン　「メリルの所属は01部隊だろ？　いくらFOXHOUND（フォックスハウンド）に愛着があるからって……」

スネーク　「（割り込む）隠密性を旨とする特殊部隊は、全く無関係なエンブレムを着用したりする。ドクロのワッペンだとかな」

オタコン　「偽情報（ディスインフォメーション）ってこと？」

スネーク　「そんなとこだろう」

オタコン　「それだけなのかな。まだ未練があるのかもしれないね……」

スネーク　「どうだかな」

オタコン　「（君じゃなくて）FOXHOUND（フォックスハウンド）にだよ」

スネーク　「（むっとして）わかってる」

オタコン　「過去を大事にするのもいいけど……幸せになって欲しいな、メリルには」

【リキッドの居場所】任意無線

※地上に出た後でSEND

オタコン　「リキッドの居場所は、この先にあるPMCキャンプだ」

オタコン「少しでも早く奴にたどり着きたいところだけど、民兵とPMCの戦闘はかなり激化してる」

オタコン「これまでと同じように周囲の戦闘状況を味方につけながら、慎重に先へ進むんだ。いいね」

※二回目以降

オタコン「スネーク、リキッドはその先にあるPMCのキャンプにいる」

オタコン「あと一息で奴に手が届く」

【民兵の装甲車輌】任意無線

※戦車出現後にSEND。初回のみ

スネーク「オタコン、民兵は装甲車輌も装備していたようだ」

オタコン「ああ、そいつはBMP3。旧ソ連で開発された歩兵戦闘車(IFV)だ」

オタコン「MBT(主力戦車)と比較すれば防御力に難はあるけど、中口径の機関砲弾レベルなら十分に防げるだけの装甲を備えている」

オタコン「PMCからの銃撃を防ぐバリケード代わりとして利用できる」

オタコン「PMCに妨害されず前進するために、そいつの存在をうまく利用するといい」

【歩兵戦闘車を盾にして進め】任意無線

※「民兵の装甲車輌」を聞いた後でSEND。初回のみ

オタコン「スネーク、リキッドのいるPMCのキャンプまで、その歩兵戦闘車(IFV)を盾代わりにして前進するといい」

【装甲車輌撃破】任意無線

※ジャベリンで装甲車が撃破された後の最初一回だけ

オタコン「BMP3が撃破された」

スネーク「PMCの対戦車班の仕事だ。なかなか見事な働きだったな」

オタコン「確かにね。でも、君が盾として利用できる存在が失われてしまった」

オタコン「敵からの銃撃や流れ弾にも気をつけてくれよ」

スネーク「ああ。チープキルだけはまっぴらご免だ。慎重に行くとしよう」

【ＢＢ部隊登場】任意無線

※ＢＢ部隊登場後にＳＥＮＤ

オタコン　「スネーク、さっき民兵を蹴散らしていった奴ら……」

スネーク　「負傷した民兵が話していた、特殊部隊とやらだろうな」

オタコン　「瓦礫で道もふさがれてしまったね。スネーク、そこからリキッドのキャンプへ真っ直ぐ向かってくれ」

【リキッドまであと少し】任意無線

※「ＢＢ部隊登場」の後にＳＥＮＤ

（１）（２）か（３）に続く

オタコン　「リキッドのいるキャンプまであと少しだよ、スネーク」

※以下をランダムに挿入

（２）ランダムに挿入。（３）に続く

オタコン　「位置はメリルがくれた」

（３）

オタコン　「レーダーのマーク（◎）を参照して進んでくれ」

【スネークがＣＱＣを使える話】任意無線

※ＢＢ部隊登場後、しばらくしてＳＥＮＤ。初回のみ

オタコン　「スネーク、いつからＣＱＣ（Close Quarters Combat）、近接戦闘術を使えるようになったんだい？」

スネーク　「訓練自体はＦＯＸＨＯＵＮＤ（フォックスハウンド）時代に受けていた。だが実戦で使ったことはない」

オタコン　「ずっと封印していたってこと？　何でだい？」

スネーク　「俺にＣＱＣを教えたのは、当時ＦＯＸＨＯＵＮＤ（フォックスハウンド）の指揮官だった男だ」

オタコン　「……ビッグボスか」

スネーク　「部隊を裏切った男、戦犯者に教えられた技術だ、使う気にはならん」

スネーク　「それに、当時にしてみればＣＱＣは早すぎた概念だった」

スネーク　「グリーンベレー、ＳＥＡＬｓ（シールズ）、ＣＩＡの準軍事（パラミリタリー）チーム、どこでも採用されていなかった」

オタコン　「今年に入って、国防上極秘事項に指定されていたビッグボスの情報がなぜか解禁になったよね」

オタコン「今回の情報公開によってビッグボスの活躍は出版物やネット、マスコミを通じて世間一般にまで広まり、ＣＱＣは再評価されるようになった」
スネーク「戦争犯罪者が一転して、英雄に」
オタコン「冷戦の時代、６０年代に活躍した伝説の戦闘諜報員ビッグボスは、今や、一部でカリスマ的人気だ」
スネーク「真実を知らない連中ほど騒ぎたがるもんだ」
オタコン「スネーク、君がＣＱＣの封印を解いたのは、ビッグボスの技術がもう彼だけのものではなくなったから？」
スネーク「情報だけで広まった見様見真似の技術が、兵士達の間で浸透しだしている。だが身体で覚えたものとは違う」
オタコン「……親父さん、いや（スネークに気をつかって）ビッグボスの技術を、正しい形で広めたくなった？」
スネーク「そうじゃない。後の時代に遺してはいけないものもある」
スネーク「ただ歪んだ形でＣＱＣを覚えた兵士達を相手にすると、自然に身体が動いてしまう。それだけだ」
オタコン「そうか。目には目を…というわけでもないんだろうけど、相手が仕掛けてくるならやられっぱなしでいる理由もないもんね」

【民兵とＰＭＣの違い】任意無線
※「スネークがＣＱＣを使える話」を聞いた後、しばらくしてＳＥＮＤ。初回のみ
オタコン「スネーク、民兵とＰＭＣとでは様々な点で異なっている。その違いを常に意識しながら、適切に対処するんだ」
オタコン「ＰＭＣの装備は、潤沢な資金を背景に最新鋭のものが主体だ」
スネーク「そうみたいだな。ウェポンシステム、コンバットスーツ、タクティカルベスト、通信機器……全てがだ」
オタコン「加えて、彼らにはＳＯＰ（ソップ）が導入されている。システムを介して連携を取りながら戦う」
オタコン「一方で民兵はといえば、素人に毛が生えたようなものだ。満足な訓練も受けちゃいない」

オタコン「装備にしたってそうだ。精度もそこそこの武器をそろえるのがやっとなんだろう」
スネーク「しかし、民兵の武器は、どうやらシステムの管理下には無いらしいな。俺が拾った銃もそのまま問題なく使えた」
オタコン「うん。だけどＰＭＣの銃ではそうも行かないと思う。彼らから武器を奪ってもロックがかかっていて使えないはずだから、そこは注意してくれ」

【戦闘員について】任意無線

※「民兵とＰＭＣの違い」を聞いた後、しばらくしてＳＥＮＤ。初回のみ

オタコン「スネーク、民兵は素人同然だと僕が言ったの、覚えてる?」
スネーク「ああ。しかし見るところ、天を仰いで絶望するほど酷い戦いぶりってわけでも無いぞ」
オタコン「うん、それはそうだよ。君自身が偽装に利用しているように、彼らには雇われの戦闘員（オペレーター）がついていて、かなり的確な戦闘指揮を行っているんだから」
オタコン「実際に戦闘員（オペレーター）として動いていなかったから見落としたかも知れないけど、周囲に号令を出したり合図を送っているヤツがいる筈だ」
スネーク「そいつらが戦闘員（オペレーター）だな」
オタコン「民兵側の組織的戦闘は、戦闘員（オペレーター）の存在に大きく依存している。もし彼らが倒されれば、指揮系統の乱れが生じて戦闘力の低下に繋がるだろう」

【ＰＭＣ対ＰＭＣ】任意無線

※「戦闘員について」を聞いた後、しばらくしてＳＥＮＤ。初回のみ

オタコン「少し調べてみたよ」
オタコン「その民兵達は、基本的に現地の人間だ。だけど、純粋な現地民間人が銃を手に取った、という訳でもないらしい」
オタコン「現地にも、規模は小さいが法人格としてのＰＭＣがあるようなんだ。そして君が目にしている民兵達は、そこに雇われた傭兵のようだ」
スネーク「指揮するのは傭兵（ＰＭＣ）、戦うのも傭兵（ＰＭＣ）、その敵も

また傭兵（PMC）……。典型的なＰＭＣ対ＰＭＣの戦場、戦争経済のショーケースってわけか」

オタコン　「それが僕らの生きる世界だよ、スネーク。悲しいけどね」

【月光輸送用トラック】任意無線

※折りたたんだ月光を載せた輸送トラック付近でＳＥＮＤ

オタコン　「そのトラックに積んであるのって、もしかして月光？」

オタコン　「月光って結構大きいイメージがあったけど……随分コンパクトに折りたためるんだねえ。驚いたな」

オタコン　「頑張れば玄関のドアも通り抜けられるかも……なんてね」

スネーク　「居間（リビング）の置物にでもする気か？」

オタコン　「まさか。そこまで趣味悪くないよ」

ACT2
Solid Sun

固体の太陽

【タイトル】
Mission Briefing

【実写目玉焼き2／ムービー】　ノーマッド機内

――目玉焼きの実写映像。玉子二個で卵黄は二個。一つ目がうまく割れず、一つ卵黄は潰れる。二つ目も壊れる。第二の実験の失敗を暗示する。不吉（ソリッドの失敗）。
――サニーの鼻歌がＯＦＦで聞こえる。鼻歌をよく聞くとメロディに乗せてフィボナッチ数列を歌っている。

サニー「１３４６２　６９２１７」
サニー「８３　０９３５　２４５７」
サニー「…８８７９２」
サニー「２７４　６５１４　９３０３…」

【南米潜入前１／ポリデモ】　輸送機

――雲の上を飛行するノーマッド（輸送機）。

――前ムービーシーンからサニーの鼻歌が続いている。

【南米潜入前2／サードパーソンデモ】輸送機

――海上飛行中の輸送機内、キッチンでサニーが目玉焼きを焼いている。キッチンには簡単なコンロ。コンロの上に換気扇。壁にはオルガの写真が額装されている。長い間、サニーが大事に持っていたことを感じさせる。写真はスネークがデジカメで撮ったものをL版大にプリントアウト。凛々しいサニーの母の姿（軍服姿／MGS2の時代）。

――目玉焼きを持って階上から降りてくるサニー。

サニー「ハル兄さん、焼けたよ」

オタコン「サニー、ありがとう（子供に向かった丁寧な口調）」

――スネークの意識が戻る。スネークは機内用のラフな普段着。

――オタコンがサニーから目玉焼きの乗った皿を受け取っている。

――目玉焼きの匂いでスネークが目覚める。

スネーク「うう…（ニオイは食欲をそそる）」

――サニーがスネークに気付く。

サニー「スネーク！」

――オタコンは手に持っていた目玉焼きの皿を脇に置く。目玉焼きは玉子が二つとも、壊れており、黒焦げでいかにもまずそう。サニーが劇中で焼く目玉焼きでもっとも失敗作。目玉焼きは寝ているスネークの鼻先に押しやられる。

――オタコンがスネークの顔を覗き込む。汗でぐっしょり。顔色も悪い。

オタコン「スネーク、気がついた…？」

スネーク「おかしいな、太陽が潰れて見える（また目玉焼き？　うんざり）」

――サニーは自分の目玉焼きが追いやられていることに気づいて。

サニー「ムッ…（嫌みに気づく）」

オタコン「ごめん（フォローするオタコン）。すぐ食べるから。サニー、スネークの分も焼けるかい？」

サニー「（ちょっと落ち込んでいる）うん」

スネーク「（余計なこと云うな、オタコン）ああ、サニー、俺はいらない」

――身体を起こすスネーク。聞こえないふりのサニー。オタコンはスネークを見て笑う。口に指を

立てる。（シーッ）

――階段を上がり、キッチンに戻るサニー。

――ここからTPD（Third-Person Demo）。TPD（サードパーソンデモ）では監視カメラ、データウィンドウ、Mk. Ⅱカメラなどが分割画面で同時に表示される。監視カメラとMk. Ⅱカメラの切り替え画面と、情報データ画面が表示される。データ画面のレイアウトを変更したり、拡大縮小も可能。

――この間、二階ではサニーが料理をしているのが見られる。ちょっかいを出すと反応するが料理の手は止めない。サニー、スネークの分の目玉焼きを焼く。

スネーク　「どれくらい眠ってた？」

オタコン　「丸一日は…」

スネーク　「（うなる）…誰かに助けられた」

オタコン　「うん…メリル達じゃないかな（自信ない）」

オタコン　「心配ないよ、彼女達も無事だ」

【フラッシュバック】中東の終わり。

スネーク　「（落胆）リキッドを逃した…」

——立ち上がるスネーク。身体の節々が痛む。そして、咳き込むスネーク。膝に両手をついて喘ぐ。スネーク、自分でも驚き。

オタコン「大丈夫？」
スネーク「突然、身体が動かなくなった」
スネーク「いつもとは症状が違う。関節や筋肉じゃない…」

——身体を恐る恐る動かしてみるスネーク。老化による身体の痛みとは異なる。

オタコン「PMCの連中も一斉におかしくなったみたいだった。積極阻止システム(ADS)の類かとも思ったけど、電磁場の乱れも計測できない」
オタコン「危なかったよ。PMCの中には心停止した者までいる」

——スネーク、咳を落ち着けて、ふと思い出す。

スネーク「(そうだ！) あの場に彼女がいた。ナオミがリキッドの傍にいた」
スネーク「オタコン…おまえナオミを見たか？」
オタコン「いや…でも確かにあの場に、ナオミはいた」

――スネーク、オタコンの言葉の真意がわからない。

オタコン「君が握っていた注射器に、ナオミのDNA情報が残っていた」

――机の上の注射器を示すオタコン。

スネーク「やはりナオミが。どうして」

――スネーク、注射器を持ち上げる。

オタコン「君に見せたい物があるんだ」

――スネーク、タバコを探すが、ポケットにはない。机の上にもない。

――その頃、二階ではスネークのタバコがキッチンに置かれている。サニーが抜き取って隠した。それを見ながら笑う。

――スパコンまたはキーボードを押してファイルを開くオタコン。

オタコン「(昨日)あの後、古いアドレスにナオミからビデオメールが届いたんだ」

――オタコンのパソコンは備え付けの大型モニターにコネクトされている。そのモニターが起動し、重たいデータが解凍、ロードを始める。

――この間も上ではサニーが目玉焼きを焼いている（Mk．Ⅱを使うと見られる）。スネーク用の目玉焼きが焼き上がる。皿を持ちあげる際にタバコをエプロンのポケットにしまうサニー。その際、タバコの箱から一本、皿に落ちる。サニーは気が付かない。

――カメラ強制（ポリデモ）。

――お皿を持ってきたサニー。

サニー「…焼けたよ」

――目玉焼きはちゃんと火が通っていない。今度も二つとも壊れている。形が崩れて見るからに不味そう。はじっこにタバコが一本くっついている。唖然とするスネーク。

スネーク「（お皿を受け取り）ん？」

――サニー、オタコンに視線を移す。

オタコン「ありがとうサニー、美味しいよ」

サニー「（冷めた目玉焼きをオタコンの前に突き出して）まだ…食べてないね」

オタコン「うん…」

――皿を手に取るオタコン（サニーの前で食べる振り）。スネークはモニターに注目して皿を脇に

置く。

——ふと目をやるとそれをサニーが見ている。スネークと目が合う。

スネーク「歳を取るとカロリー摂取が気になってな」

——返事はない。気まずいスネーク。

スネーク「タバコ入りか、探してたところだ」

——スネーク、目玉焼きを食べずに、タバコをつまみ上げる。

サニー「(呆れた大人達)煙草(ニコチン)の摂取は止められないのね」

——ぷい、と去っていくサニー。

オタコン「サニー!」

——オタコンは眼鏡を直しながら、

オタコン「サニーは根に持つよ」

スネーク「焼き方を教えてやれ」

オタコン　「(両手のひらを開いて) 料理ができる人間なんてここにいる?」

――スネーク、タバコをくわえる(火はつけない)。
――モニターから起動完了のBEEP音。オタコン、皿に手をつけず、机に戻す。オタコンは表情が険しくなり、モニターに目をやる。
――サニーは2階に上がり、さらに自分の目玉焼きを焼きだす。

オタコン　「データは検疫済みだ。ウィルスは入ってない。声紋解析でもナオミと一致した。画像の方もCG合成の疑いは低い」

――画面にナオミの映像ファイルが映し出される。カメラに向かって話すナオミの姿。映像ファイルにはナオミの映像。背景に某日のTV映像が見える。(ニュース画面) 撮影された期日を証明するため。TVニュース画面にズームしているカメラ、引くとナオミが見える。ハンディカメラの軽い動き。ナオミからはっきりと居場所と状況が説明される。

ナオミ(映像)　「スネーク…手短に言うわね」
ナオミ(映像)　「(周囲を気にして声をやや潜めて) 私は今、南米の施設で研究を強いられている。そう、リキッドに囚われてるの」
ナオミ(映像)　「リキッドの目的は兵士達の制御システム、サンズ・オブ・ザ・パトリオット、

SOP（ソップ）の乗っ取り」

ナオミ（映像）「それを可能にするにはナノマシンの構造解析と相互通信の機構を調べる必要があるの」

ナオミ（映像）「今、軍やPMCで採用されているのは第三世代のナノマシンなの」

ナオミ（映像）「でも、第一世代の技術を発展させたもので、基礎技術は当時と変わっていない」

スネーク「第一世代……？」

ナオミ（映像）「第一世代を創ったのは私。そう、FOXDIE（フォックスダイ）を含むナノマシン集合体（コロニー）よ。9年前のシャドー・モセス事件で、スネーク、あなたの体内にも注入したもの」

【フラッシュバック】FOXDIE

ナオミ（映像）「そのFOXDIE（フォックスダイ）の技術がSOP（ソップ）にも応用、継承されているの」

ナオミ（映像）「だから、リキッドはFOXDIE（フォックスダイ）に詳しい私に、システム（SOP）の乗っ取りを指示しているの」

——辺りを気にする仕草。警戒しているナオミ。

ナオミ（映像）「お願い、私を助けに来て」

ナオミ（映像）「リキッドはあの中東で、システム介入（SOP）の糸口を掴んだ」
ナオミ（映像）「蹶起（けっき）の準備はもうすぐ完成しようとしている」
ナオミ（映像）「もう時間がないの。急いで、スネーク…」

——ナオミの中途半端な表情で突然止まる映像。ここまではナオミの映像のみ。

——ここから3人の演技再スタート。オタコンはキーボードを叩き、

オタコン「ナオミは別ファイルで居場所のデータを送ってきている」

——よくわからないデータが表示される。

スネーク「何だこれは…」
オタコン「一種の暗号データだった。サニーが解析してくれた」

——データが解析され、マップ画像になる。

オタコン「憶えてるかい。これはシャドー・モセス事件で君が使ったソリトンレーダーのデータだったんだ。恐らく、ナオミ本人からのメッセージである事を伝えたかったんだと思う」

【フラッシュバック】シャドー・モセス

オタコン　「ソリトンレーダーをマップデータに置き換えてる」

スネーク　「…」

オタコン　「ハワイに駐在している美玲(メイリン)にも協力して貰った」

【フラッシュバック】美玲(メイリン)

——カメラ強制（ポリデモ）。

——サニー、階段の途中から、オタコンとスネークに語りかける。

サニー　「送られてきたデータは…、4Dのサウンドデータだったの」

サニー　「ソリトンレーダーの理論は知らなかったけど、音を絵に変換するだけだから簡単だった。そのナオミって人、面白い人ね」

——サニー、それだけ言うと、階上へ戻っていく。サニーにやられっぱなし。

スネーク　「…（圧倒され言葉が出ない）」

——キャンベルからの強制SEND。コール音。

オタコン　「あ、キャンベルだ」

――モニターにはビデオフォンのキャンベルの顔が映る。キーボードを叩くオタコン。キャンベルの背後をローズが通り過ぎる。

キャンベル　「スネーク、君が記憶している通り、9年前のシャドー・モセス事件以来、ナオミは当局に拘束されていた」

キャンベル　「だが何者かの手引きによって脱獄したのだ」

スネーク　「ああ、それも俺の犯罪歴に加えられているらしい」

キャンベル　「実際はリキッドの仕業だろう。彼女はそのままリキッドに拘束され、南米の施設で研究を強いられていたようだ」

キャンベル　「ナオミが示すかの地は、リキッドの本拠地となっている可能性が高い」

スネーク　「確証はあるのか？」

キャンベル　「ここではPMCの活躍によって権力を得た新政権と、旧政権の残党が組織した反政府軍の小競り合いが続いている」

キャンベル　「反政府軍側は地元の小規模なPMCを雇い、戦闘を煽っている」

キャンベル　「典型的な戦争経済の市場（マーケット）だ」

キャンベル　「新政権はまともに機能しない上に、アウターヘブン傘下のＰＭＣ、〝Ｐｉｅｕｖｒｅ ａｒｍｅｍｅｎｔ（ピュープル・アルメマン）〟の言いなりだ」

キャンベル　「リキッドの隠れ蓑（ヘイブン）としてもうってつけの場所と言えるだろう」

スネーク　「罠かもしれない」

キャンベル　「ああ…。だとしても、こちらへの収穫も大きいはずだ」

オタコン　「サニーにナオミのメール発信元を追跡して貰った」

オタコン　「アドレスは偽装されていたけど、経由したプロキシを割り出して、アクセス日時とデータ転送の痕跡をトラッキングした」

オタコン　「どうやら送信元は南米のサーバーらしい。信憑性は満更でもないと思う」

スネーク　「大佐、メリルの動きは？」

キャンベル　「リキッドの動向を追って中東を発った。そのあとの情報はまだない」

キャンベル　「すでに我々も陸軍特殊作戦コマンド（ARSOC）に目をつけられているだろう。この線の深追いは出来ん」

スネーク　「今のところ、手がかりはナオミだけか…」

キャンベル　「エルドラド国際空港の着陸許可を取り付けた。君達は国連の調査員としておく」
オタコン　「南米なら20時間程度だ。そこからは？」
キャンベル　「4WD（フォー・バイ・フォー）を一台手配しよう。ナオミの指示にあった、PMC（ピューブル・アルメマン）が拠点としている施設は森に囲まれた山岳地帯にある」
キャンベル　「PMC（ピューブル・アルメマン）警戒区域の手前まで車輌で接近してくれ。そこから先はスネーク、君の単独潜入（スニーキング）ミッションとなる」

――朝食を持ってくるローズ。

ローズ　「ロイ」
キャンベル　「ああ、ありがとう」
キャンベル　「反政府軍によるPMC（ピューブル・アルメマン）への抵抗が続いている」
キャンベル　「施設内部へは混乱に乗じて潜り込めるはずだ」
スネーク　「わかった。到着まで20時間もある。その間に資料に目を通しておく。それと、今のうちに一服させてもらう…」

――諦め顔のオタコン。カメラ切り替わって、ノーマッド（輸送機）の後ろ姿。

——F.O.

【章タイトル表示】
ACT2　Solid　Sun　固体の太陽
——F.O.

【南米潜入1／ポリデモ】　南米村

——木々が生い茂る森の上空から撮る。カメラ下降していって、地面を映すとクイ（南米のネズミ）が顔を出す。
——僅かに草むらを揺らしながら音もなく近付いて来た蛇に襲われるクイ。その横に、オクトカムに偽装したスネークが映る。身体には虫が這っている。MGS3のジ・エンドを連想させる。クイよりも、蛇よりも静かに、完全に環境に同化している。ベースラインを一致させてからフォックスウォーク→ホフクで前進を始める。
——その画に被せてOFFで、ノーマッド機内の会話の続きを流す。

スネーク　「大佐、この件に奴等（愛国者達）はどの程度関与している？」
キャンベル　「『愛国者達』のことか」

スネーク　「アーセナルギアで手に入れた情報はブラフだった。百年前に死んだ12人の創設者など存在しない」
スネーク　「だが奴等は実在している」
キャンベル　「戦場を管理するシステム（SOP）の目的がID統制なら、奴等の意志とも一致する」
スネーク　「全世界のID統制。それを利用した情報操作、経済操作。『愛国者達』が渇望する最終目的はそこだ」
キャンベル　「今や『愛国者達』は戦争経済そのものといってもいい」
スネーク　「5年前、ソリダスの恐れていた事が現実になった」

【フラッシュバック】　ソリダス

ソリダス（回想）　「『愛国者達』はデジタル情報を統制することで、己の支配と権益を守ろうとしている（MGS2）」

キャンベル　「メディア神話も国際世論も失われた今、国連でさえも逆らう事は叶わん」
スネーク　「ではリキッドの蹶起（けっき）は奴等への？」
キャンベル　「そうだ。やはりリキッドはビッグボスの遺志（SENSE）を継ぐつもりらしい」

キャンベル　「支配から解放された傭兵達のための、絶え間ない戦争の普遍世界」
キャンベル　「ビッグボスが提唱した〝アウターヘブン〟は或る意味既に実現しているとも言える」
スネーク　「PMCによる戦争ビジネスの事か」
キャンベル　「だがいまリキッドは『愛国者達』に雇われ、彼らのための代理戦争を強いられている」
スネーク　「一刻も早くこの呪縛から解かれたいはずだ」
キャンベル　「水面下で、次なる生存を掛けた冷戦が、『愛国者達』とリキッドの間で始まっているのだ」
スネーク　「どちらに転んでも、未来はない」
スネーク　「リキッドを倒し、システム（愛国者達）を破壊して初めて、自由になれる」
キャンベル　「スネーク、我々の〝平和〟は戦争経済の上に均衡を保っている」
キャンベル　「システム（愛国者達）の崩壊は情報化社会、近代文明の消失を意味する」
キャンベル　「本意ではなくとも、システム（愛国者達）を守るしかないだろう」

――見晴らしのいいところまで入って行くスネーク。眼前には小さな農村が広がる。農村は、はじ

め家並みに隠れて無人に見える。ところどころで細い黒煙が上がっている。デモに被ってOFFで、無線音声。

オタコン「スネーク、戦況を報告するね。反政府軍のゲリラ部隊が、政府軍PMCの拠点に向かって進軍している」

——ソリッド・アイを単眼鏡モードにするスネーク。ソリッド・アイ・モードに入る。単眼鏡（ソリッド・アイ単眼鏡モード）越しの画面。左スティックによるパン、ズームが出来る。

——ひとつの家の陰から、民兵ゲリラを連れたPMC兵が現れる。見渡すと、数名のPMC兵が現れる。

オタコン「その拠点がリキッドの隠れ家（ヘイブン）になっているようだ」

オタコン「ナオミのデータが示した彼女の監禁場所もその拠点の敷地内にある」

——衛星写真画像。施設のズーム、サーマル。ナオミからのソリトン・データと一致する。

スネーク「ナオミはそこに？」

オタコン「（彼女からの）情報が正しいとすればね」

——ソリッド・アイで村の様子を見ているスネーク。村に兵士が歩いている。

オタコン「それからスネーク、いいかい？」
スネーク「どうした？」
オタコン「政府側のPMC（ピューブル・アルメマン）は高地での滞在が長期化しているおかげで、ナノマシン制御に不均衡が現れているとの情報がある」
スネーク「つまり」
——兵士をソリッドアイで追う。心理情報が出て、「怒り」気味であるのがわかる。
オタコン「血中酸素濃度がナノマシンに影響しているらしく、やや好戦的になっているみたいだ。気をつけてくれ」
スネーク「わかった。こっちも高山病には注意する」
——PMC数名に銃を突きつけられ、反政府軍ゲリラ部隊の捕虜、5名ほどが、村の中央広場に集められている。
——カメラ強制パン。やや離れた場所にも5名ほど連行中の捕虜。
——背後のタコツボが突如蠢くと、捕虜への攻撃を始める。捕虜の身体に触手を突き刺す。触手に突き刺さった反乱兵の死体が宙に持ち上げられ、脇に放り投げる。と、擬態を解いて可視化するラフィング・オクトパス。顔は老スネークのフェイスカム（ここではまだ、その顔をはっきりと見せ

ない)。ラフィング・オクトパスは「笑い」に感情を制御されている。笑いながら残酷な行為を行う、ラフィング・オクトパス。

ラフィング・オクトパス「ハハ！　アハハハハ！」

——さらにその真横に強制パン。煙を上げた民家の炎の中からヴァンプが現れる。笑い声の方向にやや嫌悪を示して睨んでいる。目を疑うスネーク。思わず目を見開く。

スネーク「(まさか) ヴァンプ!!」

【字幕】ヴァンプ　塚本 晋也

【フラッシュバック】ヴァンプ

——ヴァンプは5年前のMGS2当時から更にやせ、真っ白に透き通る肌からは血管が浮かび上がっている。

——服装は全身真っ黒。顔は蒼白。血管が浮き上がっている。ナノマシンの異常で死人のようになっている。首にデッドセルの仲間達のドッグタグをぶら下げている。太陽が眩しく、コンタクトをつけているので目はヴァンパイアの目。

——ナオミのビデオメールを見たスネークは必ず南米に来るはず。そう確信していたヴァンプとラフィング・オクトパスは、スネークのために網を張っていた。ヴァンプとラフィング・オクトパス

は反政府軍のゲリラ部隊を狩り、スネークが潜入していないか検分していた。

ラフィング・オクトパス「（笑いながら）ここには、スネークはいません」

――ヴァンプはラフィング・オクトパスに手を振って指示を出す。

ラフィング・オクトパス「笑え！　笑え！　笑うがいい！（ハーハッハッハ！）」

――残りの捕虜（中央広場の捕虜には手を出さない）をけたたましく笑いながら惨殺する。太い触手を鞭のようにしならせ、捕虜達を叩き潰す。まるでスネークが殺戮しているように見える。惨殺シーンを複雑な気持ちで見つめるスネーク。

――ラフィング・オクトパスの態度が気に障るヴァンプ。

ヴァンプ「オクトパス！」

――最後の一人の兵士を絞めようとしているオクトパスに、ヴァンプは左手のソーイング・グローブからナイフを抜きとって投げる。ナイフは触手に刺さる。ラフィング・オクトパスの笑いがおさまる。

ヴァンプ「一人（目撃者）残しておけ」

――ラフィング・オクトパスは力を緩めると、生存者を触手で捕まえ、引き寄せる。捕虜にスネークの顔を見せつける。

――ここでスネークに擬態したオクトパスの顔をはっきりと見せる。

ラフィング・オクトパス「(笑いながら)この顔を忘れるな。お前たちの仲間を殺した男の顔だ」

――ラフィング・オクトパスが離すと捕虜は悲鳴をあげて逃げだす。オクトパス、ナイフの刺さった触手をムチの様にしならせる。ナイフは抜けて、ヴァンプへ飛んでゆく。顔色ひとつ変えずにナイフを受け止めて(バレエの演舞をして)、グローブにしまう。

――残り5名ほどのゲリラ部隊捕虜が中央広場に残る。

――ヴァンプはラフィング・オクトパスに指示する。

ヴァンプ「ゲリラどもは散開して〝別荘(セーフハウス)〟を狙っている。(スネークが)そのゲリラの中に紛れ込んでいるはずだ」

ヴァンプ「いいか。奴は必ず来る。気を抜くな」

――PMC兵に処刑を任せ、装甲車に乗り込みその場を去るヴァンプ。ラフィング・オクトパスも触手で装甲車の後部にへばりつく。

ラフィング・オクトパス「笑え! 笑え!(ハーハッハッハ!)」

【南米潜入2／強制無線デモ南米（オタコン）】南米村

スネーク「オタコン、今のはまさか…」
オタコン「…ヴァンプだ。間違いない。あの顔、忘れるもんか」
スネーク「PMC（ピューブル・アルメマン）の兵士を引き連れていた。リキッドの計画に関与しているのか？」
オタコン「プラントで死んだ筈だ…くそ！ ヴァンプは不死身（アンデッド）なのか⁉」
スネーク「そんな筈はない。現実はファンタジー・ゲームじゃない」
オタコン「…今度会ったら…」
スネーク「妙な事を考えるなよ、オタコン！」
オタコン「ああ…わかってる」
オタコン「スネーク、美玲（メイリン）が調達してくれた衛星写真によれば、ナオミが捕まっている施設はそこから山道を北に向かったところにある。目的地（◎）を地図（マップ）に登録しておく」
スネーク「美玲（メイリン）？ 彼女はいまどうしてるんだ？」
オタコン「彼女はいまミズーリの艦長をやっているらしい」
スネーク「ミズーリ？ 大戦中の戦艦だ」
オタコン「ハワイとの観光用の契約はとっくに切れてる。今は仮想訓練艦として使われてい

るって話だ」

スネーク「ほう」

オタコン「もっとも実践的な訓練ではなく、あくまでもアナログ艦を使ったシーマンシップの涵養（かんよう）が目的らしい」

オタコン「彼女も、モセス事件のツケで閑職に追いやられたという事だよ」

スネーク「閑職だとしても、あの若さで艦長とは異例の出世だな？」

オタコン「美玲（メイリン）は初老の提督に気に入られて大出世したって噂だよ。彼女はもともと年上好みだしね」

スネーク「なら俺もまだ現役引退というわけにはいかないな」

オタコン「じゃ、仮想訓練にでも参加するかい？」

スネーク「いや、俺にはもう、今から訓練するほど時間がない」

オタコン「そうだね。…スネーク、現地への潜入のことだけど、PMC（ピューブル・アルメマン）と反政府軍の間で起きている戦闘は君の任務とは関係ない」

オタコン「戦闘に参加したり、どちらかに加担する政治的理由はないんだ。だが、君が戦場に何らかの影響を与える事で、潜入に有利な状況を創ることは出来るだろう」

オタコン　「反政府軍はPMC（ピューブル・アルメマン）が拠点とする施設を目指している。これは、ナオミが捕われている場所とほぼ一致する」

オタコン　「反政府軍に加担すれば、彼らがPMC（ピューブル・アルメマン）を排除して、君の潜入ルートを切り拓いてくれることもあるかもしれない」

スネーク　「さっき見た、あの蛸（オクトパス）の化け物。俺のスーツと同じオクトカムか？」

オタコン　「ああ…そうだよ」

スネーク　「オクトカムはおまえのオリジナルじゃ？」

オタコン　「いや、実は…サニーがハッキングで入手した理論を元に創作したものなんだ」

スネーク　「何処のデータだ」

オタコン　「国防高等研究計画局（DARPA）だよ」

スネーク　「ふう、つまり、先方も同じような技術を使っている」

オタコン　「黙っててごめん」

スネーク　「それにオタコン、どうやら向こうは俺が来ることを知っているらしい」

オタコン　「ああ、罠の可能性もある。充分注意してくれ」

——ゲームへ。

オタコン　「そこから北の方向にある、ナオミの研究施設に向かうんだ。目的地の方角は、レーダーを参照してくれ」

【ローズ登場／強制無線デモ（キャンベル／ローズ）】南米

――キャンベルから強制ＳＥＮＤ。キャンベルはスネークにローズマリーを紹介する。背景はキャンベル家リビング、画面にはキャンベルが映っている。キャンベルはローズと夫婦関係にあるという芝居をうっている。芝居はやや大袈裟だが、新婚生活で浮かれているようにもとれる。

キャンベル　「スネーク、君に紹介したい人がいる。心理カウンセラーとして今回の計画に参加してくれるスタッフだ」

スネーク　「心理カウンセラー？」

キャンベル　「戦場では、過度のストレスからパニックに陥る兵士も多い。彼女は、ＰＭＣや反政府軍兵士の心理状況を理解する為のアドバイザーとしても役に立ってくれるだろう」

スネーク　「彼女？」

——画面そのまま、キャンベルが横にずれ、反対側から現れたローズがカメラ前に座る。

ローズ　「初めまして、かしら。スネーク」

キャンベル　「彼女はローズマリー。かつては国防省(ペンタゴン)で内勤のデータアナリストとして働いていたが、ビッグシェル事件では実戦サポートを務めた」

スネーク　「ああ。ジャックの記録担当だな?」

キャンベル　「彼女はその後、心理学を専攻し、現在は戦闘ストレス小隊、CSP(Combat Stress Platoon)の一員として心理カウンセラーを務めている」

スネーク　「いまや心理カウンセラーは花形職業だからな。武器を使わず、戦闘効率、戦闘生産性を上げる…」

ローズ　「私はあなたの専属カウンセラーとして作戦をサポートするわ。21世紀に入ってから特に、兵士のメンタルケアは軍にとって最重要課題のひとつになっているの」

ローズ　「脅威査定管理(スレット・アサスメント)の立場から、兵士の心理についてもアドバイスできると思う」

ローズ　「いつでも連絡して。私はこの自宅で待機している。ロイと一緒だけど、別回線を使用するわ。無線は147.79よ」

キャンベル　「彼女のアドバイスは君の気力ゲージにも好影響を与えてくれるだろう」

キャンベル「戦場では君自身の心理状態が生死を左右する。君のようなベテランの兵士でも、冷静さを失えば思うように行動できなくなるだろう」

スネーク「そうだ。心技体、いつの時代もそこは変わらない」

キャンベル「気力が低下したときは彼女に相談して、常に最善のコンディションで任務にあたってくれ」

スネーク「わかった。ところで大佐、そこはあんたの自宅か？」

キャンベル「まあな」

スネーク「まさかメリルが言っていたあんたの再婚相手というのは…」

キャンベル「そう、彼女、ローズマリーだ。言ってなかったかな…」

スネーク「初耳だ。ジャックは？」

キャンベル「ジャック…？」

スネーク「FOXHOUND(フォックスハウンド)で雷電と呼ばれていた男だ。確かローズと婚約を…」

キャンベル「ああ、彼は消息が途絶えてしまった」

スネーク「消息が途絶えた？　俺は一時期ジャックと行動を共にしていた。サニーを『愛国者達』の監視下から救い出してくれたのもあいつだ」

キャンベル　「失踪はその後だろう」
スネーク　「それであんたは？　ジャックが姿を消してから、ローズと関係を？」
キャンベル　「婚約者を失った彼女の世話を焼くうちに…」
スネーク　「娘ほどの年だろう」
キャンベル　「それも良かった…」
スネーク　「全く、メリルが愛想を尽かすのもわかる」
キャンベル　「メリルは何か言っていたか」
スネーク　「女たらしを親父とは認めない、だそうだ」
キャンベル　「…そうか」
スネーク　「大佐、中東での情報提供者がメリルだというのも知っていたんだな？　あんたの差し金だったのか？」
キャンベル　「うむ。陸軍のコネを通じて、メリルを推したのだ」
キャンベル　「スネーク、モセス事件に関与した者は職や地位を失うか、メリルや美玲（メイリン）のように閑職に飛ばされたのだ」
キャンベル　「メリル自身が復帰を望んでいた」

キャンベル「みな、君のように強くはない。社会に疎外されては生きてはいけんのだ」
スネーク「俺はあれ以来、世間的には犯罪者だ」
キャンベル「これは私から、血の繋がった娘への、せめてもの償いだと思っている」
キャンベル「ローズマリーに相談したいことがあったら彼女に連絡(コール)するといい」

【雷電接触1／強制無線デモ（雷電）】南米

——無線画面は雷電マーク。

スネーク「誰だ」
雷電「スネーク…」
スネーク「お前は…」
雷電「その先には政府軍のＰＭＣ(ピューブル・アルメマン)兵が待ち伏せ(アンブッシュ)している。どこから撃たれるかわからない。周囲に気をつけろ」
スネーク「お前は、ジャックか⁉」
雷電「ジャックは死んだ。スネーク…俺はお前の傍に居る」
スネーク「おい！」

【送電施設破壊／インタラクティブデモ】 南米送電施設

――反政府軍かスネークが送電施設にあるパネルを破壊すると発動。送電施設の電気が止まるところを表現する。

【ドレビン接触1／ポリデモ】 南米送電施設

――停車している、錆だらけで朽ち果てたように見える装甲車に張り付き、周囲をうかがうスネーク。安全を確保、タバコを取り出して、火をつける。と、黒い影が横切り、タバコが奪われる。

スネーク 「な⁉」

――装甲車の上からリトルグレイがスネークを見ている。スネーク、グレイに銃口（Operator）を向ける。グレイは、（はしゃぎながら）タバコを旨そうに吸っている。リンゴをスネークに放り投げるグレイ。

――装甲車がオクトカムを解除して、ドレビンの現役装甲車仕様になる。（朽ち果てたＰＭＣの装甲車に偽装していた）オクトカムに驚くスネーク。スネークの目線の先に「ＥＹＥ ＨＡＶＥ ＹＯＵ」の文字。大がかりな手品のよう。

ドレビン「よう、こっちだ」

——装甲車後部ドアからネッカチーフを白旗代わりに振るドレビン。

スネーク「お前？」

ドレビン「まあ乗れよ。外は物騒だ」

——まずリトルグレイ、タバコを吸ったまま入ろうとする。ドレビンに怒られる（指でタバコを捨てる振り）。

ドレビン「おい！」

——グレイは怒られ、タバコを放り投げる。スネーク、グレイの捨てたタバコを携帯灰皿に入れてしまう。装甲車に乗り込むスネーク。

ドレビン「また会ったな」

スネーク「（ドレビンだったか）俺をつけているのか？」

ドレビン「あんたに興味が湧いたんだ。ちょっと調べさせてもらった。情報コミュニティ、特にＣＩＡに伝わる…、いろいろな神話を」

ドレビン　「この間、中東であんたに注入したナノマシン、あれであんたの居場所を追跡している」

レイジング・レイブン「(OFF) カァァァァ…!」

——何かの気配を察知して、騒ぎ出すグレイ。鳴き声に反応して天井ハッチから外を見るドレビン。レイジング・レイブンが上空を飛び去る。レイジング・レイブンは山の向こう側に消える。スネークも天井から頭を出す。

【主観ボタン】レイブンが確認できる。ソリッド・アイでズーム。

ドレビン　「やはりBBが来たか。この辺りも荒れるな」

スネーク　「BB?」

ドレビン　「知らないのか?」

ドレビン　「ビューティ(美女)&ビースト(野獣)。みんなBB部隊と呼んでいる」

——飛行中は巨大なカラスに見えるが、空中で方向転換をするとき手足がばらけ、人間の姿に見える。錯覚かと目を細めるスネーク。

ドレビン　「彼女達はＰＭＣ帰属の強化兵士だ。厄介事があると強化兵(カエル)を従えて現地に駆けつける」

スネーク　「彼女達？」

ドレビン　「たぶん各ＰＭＣに雇われたフリーランスだろう。母体組織は別にある（アウターヘイブン）」

——スネークのことを値踏みするように見て、

ドレビン　「そうだ、あんたには言っておいた方がフェアだな」

ドレビン　「中東にあんたが現れて以来、ＢＢ部隊には抹殺命令が出ている」

ドレビン　「この要注意人物は発見次第、最優先で排除せよ」

ドレビン　「〝ソリッド・スネーク〟、いや（スネークを指差して）、〝オールド・スネーク〟と呼んだ方がいいかな」

スネーク　「オールド…（傷つく／スタミナ減少）」

ドレビン　「そうだ、いい知らせもある」

——車内に戻る。車内にはビーストの写真が貼ってある。パソコンにドレビン同士（武器洗浄人同

士）の売り上げ業績が表示されている。

——愛国者達の痕跡が装甲車の中に隠されている。ラシュモア山のレリーフもある。しかし、ドレビン個人を示すもの（写真）はいっさいない。

——ドレビン、指先でコインを器用に操りながら、

ドレビン「噂では、醜い強化服（シェル）の中身は、絶世の美女らしい」

ドレビン「連中はそれぞれ戦場で重度のトラウマを抱えてるって話だ」

ドレビン「彼女達はもともと戦士だったわけじゃない。むしろ戦争の被害者達（カジュアリティーズ）だ」

——ドレビンがコインをグレイに与える。グレイ、それを自販機に入れ、取り出し口から炭酸飲料を取り出して飲み出す。動きはまさに人間そのもの。

ドレビン「戦場でのシェルショック、ＰＴＳＤ、極限状態での精神崩壊…」

ドレビン「彼女達は戦場で適応する為に、戦闘マシンにならざるを得なかった」

ドレビン「人（光）の部分が内側（インサイド）に抑え込まれ、獣（陰）の部分が外側（アウトサイド）へ表出化したのさ」

ドレビン「スネーク、戦争は人を怪物（ビースト）に変えるんだ」

——ドレビンはスネークのことを示唆する。

スネーク　「戦争が人を変える（自分の事）…」

ドレビン　「しかし、その殻（シェル）の奥底に、まだ人間の部分、傷ついた脆い心が残っているらしい」

ドレビン　「守る殻（シェル）が無くなれば、彼女達は生卵の黄身と同じだ」

ドレビン　「聞いた話では、無垢な生身の体では数分しか生きられないらしい」

ドレビン　「そして彼女達はこう思い込まされる。『スネークを殺すことで、私の精神は浄化される』。苦痛や怒り、悲しみから解放されるとな」

ドレビン　「だから今ごろ奴ら、あんたに夢中のはずだ」

——モニターに名前に併せて各ビーストの写真が表示される。壁にはビースト被害者写真。襲われた人や車、月光がぐしゃぐしゃになっている。レールガン（ウルフ）の被害跡など。また、歴代MGSのボスキャラの写真が貼られている。その中にはサイコ・マンティスの姿も。

ドレビン　「確認されているBBは4人。今のは飛行型のレイジング・レイブンだ」

ドレビン　「他には擬態能力を持つラフィング・オクトパス」

ドレビン　「四足歩行のクライング・ウルフ」

ドレビン　「そしてマインドコントロールを得意とするスクリーミング・マンティス」

スネーク　「マンティス…？」

ドレビン　「かつて米軍にそういう男がいたようだ。人間の精神を操るロシア出身の超能力者(サイキック)だ」

【主観ボタン】スクリーミング・マンティスの写真。どれも不鮮明。

ドレビン　「彼女はその後継者らしい。残りのBB3人も、彼女によって強制的にマインドセットされている」

スネーク　「オクトパスにレイブン、ウルフにマンティス…」

【フラッシュバック】FOXHOUND、MGS1のイラスト。

ドレビン　「ああ、そうだ。あんたを追うSNAKEHOUND(スネークハウンド)部隊。おぉ、コエェ」

スネーク　「ドレビン、システムに干渉するなんて、誰にでもできるはずはない。お前…、『愛国者達』なのか?」

ドレビン　「いや、俺は『らりるれろ』…」

ドレビン　「(笑)…いいや、『愛国者達』じゃない」

スネーク　「なるほど、『愛国者達』という単語が発音出来るということはシロか?」

ドレビン　「俺の体内のナノマシンは軍用のとは違う。だから、言語規制はかかってない」

スネーク　「一体、『愛国者達』とは（何なんだ）？　人間なのか？」
ドレビン　「もはや『愛国者達』は人ではない」
ドレビン　「いや…人が長きにわたって創り出した、この世の規範（システム）だ。この世の成り立ちだ（MGS2の台詞）」

【フラッシュバック】マッド大佐のセリフを引用。

大佐（回想）　「我々に実体はない。我々は君達が頼る秩序や規範そのものなのだ」
ドレビン　「『愛国者達』とは、いわば軍事大国アメリカであり、戦争経済そのもの」
ドレビン　「だからあんたもこの俺も、『愛国者達』の文脈（コンテクスト）の一部なんだ」
ドレビン　「勿論、最初は誰かが始めた事だ。しかし今はそれら規範が、命を持っている」
スネーク　「規範が命を持った？」
ドレビン　「そうだ、人ではない、システムがこの国を、世界の戦争経済を運営している。高度な意志決定能力はいらない」
ドレビン　「膨大な情報処理をする安易なシステム、ＡＩで事足りる」

ドレビン　「自然の摂理と同じだ。世の中は思いの外、単純（シンプル）に出来ている」

――納得のいかないスネーク。

【ドレビン接触2／アーティストデモ】　南米送電施設

ドレビン　「『愛国者達』のシステムはいま、3つのAIと、それを束ねる中枢のAIによって徹底監視されている」

ドレビン　「SOP（ソップ）（サンズ・オブ・ザ・パトリオット）もその中の一部だ」

ドレビン　「こいつらは完璧な管理体制にある」

ドレビン　「だから、『愛国者達』のAI内部には、俺でさえ潜入出来やしない」

スネーク　「仮に、出来たとしたら?」

ドレビン　「うん…ヘイブンとして潜伏することは出来るかもな」

ドレビン　「侵入検知システム（IDS）（Intrusion Detection System）を欺くことが出来ればの話だが。潜伏することは出来るかもな、ヘイブンとして…」

スネーク　「ヘイブン?　避難所か?」

ドレビン「タックスヘイブンみたいなもんだ。ネット社会でのネットヘイブン、データヘイブンだ」

ドレビン「ヘイブンは社会的な規則やネットワーク上のルールの治外法権のことだ」

ドレビン「前世紀、世界中の富豪家は税金を逃れる為に課税されない他国の銀行に口座を開いた」

ドレビン「DNAや個人情報までも、体内のナノマシンで完全に管理されたこの社会」

ドレビン「これからはID管理から逃れる為に、『ヘイブン』という考え方を流用する時代がくる」

ドレビン「俺の武器洗浄（ガンロンダリング）もある種、このヘイブンの概念を使ってはいる」

――4つの愛国者達のAIの図。外からではアクセスできない。

ドレビン「とはいえ、『愛国者達』のAIには『外（アウトサイド）』からは絶対にアクセスできない」

ドレビン「それだけは絶対に不可能だ。彼らのAIは『外（アウトサイド）』からでは侵入できない」

スネーク「しかしリキッドは何かを企んでいる。何か方法が？」

【ドレビン接触3／ポリデモ】南米送電施設

ドレビン　「（嘲笑）俺はただの武器洗浄人（ガンロンダラー）だ。あんたに興味があるのは、あんたが火種だからさ」

——装甲車を降りるスネーク。ドレビンは車内。

ドレビン　「じゃあ、何かあったらまた呼んでくれ」

——立ち去ろうとするスネークに、タバコをねだるグレイ。スネーク、グレイにタバコをあげようとするが、ドレビンが首を振って制する。憤慨するグレイ。ドレビン、人差し指と中指で自分とスネークの両目を交互に指して、

ドレビン　「ＥＹＥ ＨＡＶＥ ＹＯＵ！」

——走り去る装甲車。

【雷電接触2／強制無線デモ（雷電）】南米

——無線画面は雷電マーク。

雷電　「スネーク…聞こえるか」

スネーク　「お前、ジャックだろ？」
雷電　「俺は雷電だ。ジャックはもういない…」
スネーク　「いまどこにいる？」
雷電　「あんたの傍まで来ている」
スネーク　「いままで何処で何をしていたんだ」
雷電　「ある人物の依頼で、ある物を捜索していた」
スネーク　「ある物？」
雷電　「ビッグボスの…、遺体」
スネーク　「何だと？」
雷電　「依頼主はそれを条件に、サニーの居場所を教えてくれた」
スネーク　「リキッドか？」
雷電　「いや」
スネーク　「何者なんだ？」
雷電　「小規模なレジスタンスのリーダー、仲間からは〝Matka Pluku（マットカ・プルク）〟と呼ばれていた」

スネーク　「〝Matka Pluku〟…ビッグママか」
雷電　「続きは後だ。俺の方からあんたの波紋を追って合流する」
スネーク　「それで？　ビッグボスの遺体は？」
雷電　「今は彼女の元にある」
スネーク　「彼女？」

——通信、切れる。同時にスネークからローズへSEND。

ローズ　「どうしたの？　スネーク」
スネーク　「ローズ、雷電から連絡があった。近くにいるようだ」
ローズ　「ジャックが？」
スネーク　「ああ」
ローズ　「え…元気、そうだった？」
スネーク　「ああ…声を聞いた様子では」
ローズ　「そう…よかった…。スネーク、お願いがあるの」
スネーク　「何だ？」

ローズ　「私がこの件に関わっていること、彼には黙っていて欲しいの。今はまだジャックを、そっとしておいてあげた方がいいと思うから」

スネーク　「雷電との間に何があったんだ？」

ローズ　「あの人はビッグシェル事件以来、精神状態が不安定だった。ソリダスのせいで、少年時代、リベリア内戦に関わっていた頃のことを思い出してしまったの」

ローズ　「そんな中で私も…。彼との間に出来た赤ちゃんを…。まだ生まれる前だった」

ローズ　「ジャックは殆ど家に帰らなくなった。酒浸りで、傷だらけで帰ってきたことが何度もあった」

ローズ　「上官だったロイも心配してくれたけど、ジャックはいつも避けていたわ。ロイは…、一人になった私に親切にしてくれたの」

スネーク　「（ため息）」

ローズ　「カウンセラーを勧めてくれたのも彼だった。言い訳に聞こえると思うけど、私も立ち直る必要があったの」

ローズ　「もちろん彼が心配だけど…。私もまだ、ジャックが怖い」

スネーク　「わかった。黙っておこう」

ローズ　「ありがとう、スネーク…」

【装甲ドーザー豪邸突入／インタラクティブデモ】南米草原

――ＰＭＣと反乱軍が戦闘状態にあり、スネークが草原側にいたときに発生。ロードの向こう側から装甲ドーザーがやってきて門に突っ込もうとする。出てきた後はＡＩ制御。

オタコン　「スネーク、反政府軍の装甲ドーザーだ！　邸宅への突破口を開くつもりだろう」

オタコン　「援護して邸宅への突入に便乗するんだ！」

――門を突破する装甲ドーザー。

オタコン　「その邸宅の敷地内に、ナオミの研究施設がある。至急内部に潜入して、彼女の居場所を目指してくれ」

【ナオミ登場１／ポリデモ】南米・研究施設

――豪邸の地下から続いてきたはしごを上るスネーク。目の前に診療所のような建物が見える。Ｏｐｅｒａｔｏｒを持ち、診療所の壁沿いに移動。窓の隙間から中の様子を見る。

――一見ただの辺鄙な診療所だが、中にはハイテク医療器具が多い。（スネークを見るための）CTスキャンのような筒状の機材も置かれている。診療施設を装ってひっそりとやっている簡易研究施設。

――ナオミの研究施設としては、ここはあくまで仮設のもので、本格的な研究はモセス及びヘイブンで行っている。スネークを欺く為の施設でもある。

――古い建物だが清潔感はある。庭には蒼い薔薇が咲いている（ツタが格子にからまり壁状に咲いている。室内からも見える）。

――窓の中を人影（ナオミ）がよぎる。頭を引っ込め、壁に張り付くスネーク。携帯電話のナオミの声が聞こえてくる。基本的にSE扱いで、字幕も要らないくらいのイメージ。

ナオミ「じゃあ随分変更が…」

ナオミ「ええ、そう」

ナオミ「…もう一度は必要なの」

ナオミ「それは問題ないわ」

ナオミ「ええ…ええ…」

ナオミ「手は打ってある…」

ナオミ「それは勿論…」

ナオミ　「わかった…だけど…」

——スネーク、更に前進し、扉を見つける。扉を開け、静かに建物内にエントリー。

ナオミ　「ええ、次のテストには」

——ナオミが携帯電話（衛星電話）で話をしているのが聞こえる。横に蒼い薔薇のプランターが置かれている。

——スネーク、人影を見て、

スネーク　「ナオミ？」

——電話の相手はリキッド。ナオミは協力的な芝居をうっているが、ユーザーはどちらがナオミの本音かわからない。

ナオミ　「そっちの方は？」

ナオミ　「そう…。こちらも予定通り…」

ナオミ　「（笑みを漏らし）そうね。私も」

ナオミ　「じゃあ…」

――ナオミは電話を切ると胸部の痛みに苦悶する。机の縁を掴んで倒れるのを堪える。

ナオミ「く…」

――圧縮式注射器を取り出し自分自身の首筋（頚動脈のあたり）に刺す。何かの薬液がナオミの身体に吸い込まれていく。

――やや遠いナオミの姿。淫靡な溜め息を漏らす。心なしか若返った動き。影になった横顔。表情はよく見えない。注射器を外すと、デスクに手をつき、下を向くナオミ。息を漏らす。

ナオミ「フー…（大きく息を吐く）」

スネーク「ナオミ」

ナオミ「はっ（かすかに強張って短く息を吐く）」

――少し狼狽するナオミ。だが慌てるそぶりを隠してスネークに向く。まだ表情は見えない。

――スネークはＯｐｅｒａｔｏｒを両手で握ったままやや下ろしている。

ナオミ「スネーク」

ナオミ「（あなたは）必ず来ると思っていた…」

ナオミ「あなたも、私も、運命には逆らえない」

【字幕】ナオミ・ハンター　鶴ひろみ

――ナオミはゆっくりと確かめるようにスネークに近付いてくる。

――近くに来てあらためてナオミの顔が見える。穏やかな笑顔。美しい顔立ちの奥で何を考えているか読めない。誘惑しているようにも見える。秘密を持った、色香漂う妖しい女。白衣のVネックから胸元が覗いている。

――警戒を解かず、ナオミを睨んでいるスネーク。

――スネークに近付くとスネークの胸に手を置くナオミ。

ナオミ　「シャドー・モセス以来ね。もう10年？」

【フラッシュバック】ナオミ、MGS1ゲーム画面

スネーク　「9年ぶりだ」

ナオミ　「今もエメリッヒ博士とは一緒なの？」

スネーク　「何故？」

ナオミ　「私のメールが開けるなんて、彼しかいないと思って」

ナオミ　「ソリトンレーダーに4D（フォーディー）のサウンドデータなんて、誰にでもわかるものじゃない

スネーク　…（オタコンへの期待値。実際に解いたのはサニー）、博士は元気？」
ナオミ　「ああ、オタコンも相変わらずだ」
　　　　「オタコン？　そう…」
　　　　――ナオミと話しながら、部屋のドア向こうを確認していくスネーク。
【主観ボタン】それぞれの部屋向こうの様子がわかる。
　　　　――天井の支柱に張り付いているラフィング・オクトパスの触手をちらりと見ることが出来る。
スネーク　「いま、誰と話していた？」
ナオミ　「リキッドよ。医学的にはオセロットというべきかしら」
スネーク　「（素直な回答に一瞬詰まるが）奴はここじゃないのか」
ナオミ　「今、ここにはいない」
スネーク　「…（がっかり）」
　　　　――スネークは銃をしまうが、警戒はまだ解かない。
スネーク　「見張りはいないのか？」

ナオミ　「私が逃げると思ってないのよ」

ナオミ　「私は抵抗出来ない、協力するしかないから」

——ナオミは悲しげな、真剣な表情を見せている。

——スネークは、窓の外の警戒を続けながら、

スネーク　「教えてくれ、ナオミ。中東で何が起きたんだ?」

ナオミ　「(少し考えて) あなたが見たのは、兵士達から溢れ出した感情の渦よ」

スネーク　「それもシステムが生み出したものか?」

ナオミ　「(真剣な表情で) 私を信じる…?」

スネーク　「まだわからない」

ナオミ　「質問に答えたら?」

スネーク　「その時、判断する」

ナオミ　「リキッドは…私達は当初、SOPはID管理を中心に据えた、戦場の秩序、制御を主としたものと思っていた」

ナオミ　「確かにそれも正しかった。だけどそれだけじゃない」

ナオミ　「SOPのもうひとつの機能、それは、〝精神の制御〟だった」

【ナオミ登場2／アーティストデモ】

南米・研究施設

——ガンズ・オブ・ザ・パトリオットのナノマシンの仕組みを図解で説明する。

ナオミ「兵士体内のナノマシンは神経伝達物質、分泌系ホルモン、興奮剤の脳内分泌を促したり、カプセルから投与することで、状況に応じて兵士を好戦的にさせられる」

ナオミ「敵を撃ち殺すと同時に快楽物質を流して、人工的にコンバットハイを作り出したり…」

ナオミ「或いは分泌を抑制、中和させることでパニック時の同士撃ち（フレンドリーファイア）や任務に無関係な惨殺行為も防ぐことができる」

ナオミ「全てはシステム中枢のAIによって管理されている」

ナオミ「人為的に兵士の痛み、感情、感覚…つまり心をコントロールしているのよ」

ナオミ「急増した戦争経済の需要を満たすために、即戦力となる多くの兵士が必要になった」

ナオミ「そのために、兵士の戦闘能力を手早く向上させ、その行動を管理する技術を開発した」

ナオミ「システム（SOP）は兵士の安定供給と最適化を低コストで実現させたの」

ナオミ「だけどスネーク、あなたならわかるはず」

ナオミ　「戦闘技術とは違う、自らの体験によってしか得られない〝兵士としての精神(SENSE)〟を安易に会得させるなんて不可能だわ」
スネーク　「それが君のテストと関係あるのか？」
ナオミ　「私達のテストは兵士のナノマシンをシステム(SOP)から切り離すことが目的だった」
ナオミ　「この精神コントロールの存在を知らずに」
スネーク　「それでナノマシンが暴走した…」
ナオミ　「違うの。（声が震える）私達のテストは成功だったのよ。少なくとも、あの時点で仮定していたことは正しかった」
ナオミ　「私達は予定どおり、彼らのナノマシンの機能を停止し、PMC(ブレイング・マンティス)の兵士達をシステム(SOP)から解放させた」
ナオミ　「でもシステム(SOP)を停止した途端、それまで抑制されていた彼らの痛みや怒り、哀しみ、トラウマ、ストレス、後悔、嫌悪、罪悪感…あらゆる感覚が一気に彼らの〝心〟にのしかかった」

――心の変化をイラストで表現。

ナオミ　「〝記憶〟を消し去られたわけじゃない」

ナオミ　「相手兵士の殺傷、仲間の死、関わりのない民間人への暴力、自らの手によって行われたあらゆる戦争行為。彼らの心にはそれらが鮮明に刻み込まれていた」

ナオミ　「ナノマシンの精神制御機能は、使用者の心に大きな負担をかけている」

ナオミ　「ナノマシンに対する拒絶反応が生まれ、それをまた薬で抑え付ける」

ナオミ　「本人も気づかないうちに精神状態はボロボロにされている」

ナオミ　「フランクを思い出して、スネーク」

スネーク　「フランク・イエーガー……グレイ・フォックス」

——忍者のイラスト、MGS1のゲーム画面などを背景に使う。

ナオミ　「実験のために身体をいじられて、壊された心をナノマシンで抑制された」

ナオミ　「SOP（ソップ）はそれを生身の人間にも使っている」

ナオミ　「兵士達の中の戦争という罪が、途方もないシェルショックとして彼らを襲ったの」

ナオミ　「意味やシステムは変わっても戦場は何も変わってはいない」

ナオミ　「それまでゲームでもしているような感覚で行っていた戦争が、突然現実となって

彼らに襲い掛かった」

【ナオミ登場3／ポリデモ】　南米・研究施設

――疲れたようにベッドに手をつくナオミ。

ナオミ　「本来なら、心は経験によって鍛えられる」

ナオミ　「歴戦の兵士だって、長年の経験から少しずつ克服して、それでも克服しきれずに一生抱え続けるような罪悪」

――腰掛けるナオミ。脚を頻繁に組み替える。

――スネーク、タバコをわざと落とす。

【主観ボタン】（表示はしない）ナオミのスカートの中は暗く、はっきりとは見えない。

ナオミ　「満足に〝経験〟を持たない〝精神〟が、それに耐えられるはずはなかった」

スネーク　「だが俺は？　システム（SOP）に管理された憶えはない」

――スネーク、タバコを拾いつつ立ち上がる。立ち上がるナオミ。スネークの背中に軽く触れる。

ナオミ　「だからあなたの身体が診たいの。あなたも、知る必要がある」

——スネーク、ナオミに背を向けて思案する。ナオミ、その背中に寄り添って、

ナオミ　「スネーク、さあ、脱いで」

——スニーキング・スーツを脱ぎたくない。躊躇うスネーク。スネーク、ナオミから離れようとする。ナオミ、それを追いかけて、

ナオミ　「スネーク。どうしたの？　早くして」

——時間経過。F.O./F.I.

——裸で台に立っているスネーク。ポリデモではスネークを映さない。スネークを見て、口を押さえるナオミ。あまりの老化に衝撃を受ける。

ナオミ　「スネーク」

ナオミ　「（泣き）なんて事…」

【主観ボタン】スネークの前方の鏡が見えるようになり、スネークは鏡で自分の姿を確認する。

——下半身はＩＣＵ用のズボン。

——ナオミ、嗚咽しながら直視しかねてスネークの前から立ち去ろうとする。

スネーク「早く、終わらせてくれないか」

——涙を拭くナオミ。

ナオミ「ごめんなさい」

——時間経過。F.O./F.I.

——ナオミに血液を採取されるスネーク。赤い液体。CTスキャンのような筒状の装置の中にモーターで入れられていくスネーク。体内を検査される輪切りのスネークのデジタル映像。

——ナオミ、スネークの血を密かに引き出しに隠す（GOPテスト用。後でスタッフが回収する設定）。

——スネークの部分アップとデータ映像、ナオミに身体をチェック（触診）されるスネークの映像がカットバック、オーバーラップしていく。映像の動きはゆっくりめ。ナオミとの絡み映像はなまめかしくも見える。ナオミの魔性的雰囲気を感じさせる。各動きをカットバック。

ナオミ「スネーク、私のビデオメールの内容を覚えている？　第一世代のナノマシンの話」

スネーク「モセスで君に埋め込まれた？」

ナオミ「そう」

ナオミ　「ナノマシンは体温によって充電され、あなたが死ぬか、全て排出されるまで機能停止しないの」

ナオミ　「大半は出血や排泄で失われているけど、30%程度がまだあなたの体内の細胞に癒着して残っていた」

ナオミ　「第一世代はＩＤ登録されていないから、ＳＯＰ(ソップ)下のナノマシンと同じ反応はしない」

ナオミ　「でもあなたの身体や心にも、干渉する可能性がある」

スネーク　「俺の老化もＦＯＸＤＩＥが関係しているのか？」

ナオミ　「違うわ」

ナオミ　「オリジナルの年齢とは関係なく、あなた達のテロメアは意図的に短く設定されているの」

ナオミ　「生殖機能や老化を抑制する遺伝子のひとつである、クロトー遺伝子も意図的に変異させられているわ」

ナオミ　「そしてなによりも、あなたとリキッドの染色体には、生殖(コピー)を防ぐための終結遺伝子(ターミネーター)が設定されている」

スネーク　「何故だ?」

ナオミ　「あなた達は戦争利用のために造られた生命（クローン）」

ナオミ　「だからクライアントに濫用されたり、敵軍に利用されるのを防ぐ為、寿命は短く設定され、生殖機能は奪われていた」

ナオミ　「あなたの急激な老化の原因は、病気でも研究の失敗でもFOXDIEでもない」

ナオミ　「あなたが生まれ持った性質なの。いわばあなたの〝寿命〟」

——セーブ画面へ。

【ナオミ登場4／ポリデモ】　南米・研究施設

——検査が終わり、上半身を起こしてナオミに尋ねるスネーク。

スネーク　「ナオミ、教えてくれ。この身体はいつまでもつ?」

ナオミ　「細胞、血液、内臓、脊髄、骨組織、筋繊維…。体内のあらゆる場所で老化が進行している」

ナオミ　「常人ならもう立ち上がることも出来ないはず」

ナオミ　「スネーク、今はあなたの気力が、何とか肉体を支えているのよ」
スネーク　「いつまでなんだ？」
ナオミ　「あと…半年」

——スネークのスタミナ減。
——スネーク、動揺をごまかすためか、煙草を吸おうとするが、ナオミ、スネークに近付いて咥えている煙草を取り上げる。ナオミを見上げるスネーク。

ナオミ　「駄目よ」

——寂しい顔になるスネーク。
——その正面にナオミが座る。かしこまった様子。スネークをじっと見ている。

ナオミ　「スネーク、あなたに伝えることがあるの」
スネーク　「（舌打ち）これ以上何を？」
ナオミ　「確かにあなたの身体機能は限界に来ている」
ナオミ　「だけどあと半年と言ったのはあなたの寿命のことじゃないの」
スネーク　「どういうことだ？」

ナオミ　「（既知のはずの事実を、意味深にはっきりと告げる）あなたの体内のＦＯＸＤＩＥは、完全に取り除くことは出来ない」

スネーク　「ああ（それはもう知ってる）」

ナオミ　「もはや通常のウィルスのように、体内を循環している」

――スネーク、ナオミから煙草を取り戻そうとするが、それを制して、

ナオミ　「聞いて」

ナオミ　「ＦＯＸＤＩＥは、ウィルス内の鍵（レセプター）に設定された遺伝子配列と、感染者の遺伝子が完全に適合した場合のみ、その感染者を殺害する」

ナオミ　「つまり特定の遺伝子を持つ標的（ターゲット）だけが発症するようになっているの」

スネーク　「解ってる。ＡＴの社長も…リキッドもそれで死んだ」

【フラッシュバック】ＭＧＳ１のシーン。

ナオミ　「ええ、同時にこのしくみは、ターゲット以外の生物を、凶暴なウィルスから守っていた」

ナオミ　「スネーク、来て」

――以降をしゃべりながらプリンター横のモニターに向かうナオミ。

ナオミ「あなたの体内のＦＯＸＤＩＥはこの鍵（レセプター）が壊れてきているの」

ナオミ「急激な老化による体内環境の変化が原因で、ウィルスが変異を始めている」

――モニターに着くナオミ、画面を見る。ナオミを追って、モニター横に到着するスネーク。

――電子顕微鏡の写真が二枚、横に並んで表示される。旧ＦＯＸＤＩＥウィルスと現在のＦＯＸＤＩＥウィルス。

ナオミ「左が正常な…本来の姿をしたＦＯＸＤＩＥ」

ナオミ「右が今あなたの体内から採取した、変異型のＦＯＸＤＩＥよ」

ナオミ「(右を指して) 鍵が磨耗しだしているの」

スネーク「つまり？」

ナオミ「変異型のＦＯＸＤＩＥは、感染者の遺伝子配列が鍵（レセプター）と完全一致しなくても発症する可能性がある」

ナオミ「つまり相手を選ばず、感染者を無差別に殺すウィルスになろうとしているの」

ナオミ「ＦＯＸＤＩＥはシャドー・モセス事件以来、あなたの体内のナノマシンコロニー

で繁殖し空気中に散布され続けている」

ナオミ　「だけど対象者は既に存在しないから、感染しても発症する人はいなかったはず」

ナオミ　「だけどこのまま磨耗が進めば、不特定多数の感染者に発症する殺人ウィルスになる」

スネーク　「体内から取り除いたり、殺すことは？」

——首を振るナオミ。その答えは予め言ってある。

ナオミ　「それに抗体もない」

ナオミ　「鍵(レセプター)が何パーセント壊れた時点で、どれくらいの人間の遺伝子配列と一致することになるのかはわからない」

ナオミ　「だけど空気感染によって人々は確実にＦＯＸＤＩＥに冒されていく」

ナオミ　「あなたにより近しい人から…命を落としていくことになるわ」

ナオミ　「ヒトの個体を別つ部分が磨耗しだすまで恐らく…」

スネーク　「半年…」

ナオミ　「いえ、もってあと３ヶ月」

――スネークのスタミナ減。

ナオミ「最悪の兵器になりつつある」

ナオミ「…メタルギアの核発射をいままで食い止めてきたあなた自身が、今度は」

ナオミ「皮肉なことだけど…」

スネーク「3ヶ月！（絶句）」

――さすがに言葉が出ないスネーク。

――疲れたようにナオミは椅子に戻っていきながら喋り、座る。

ナオミ「被害者の規模は正確にはわからない」

ナオミ「壊れた鍵穴を開けてしまうのが、人類の1%なのか、それとも全てか」

ナオミ「…いずれにしろ3ヶ月後には、あなたは歩く殺戮兵器になる」

ナオミ「私なら、今すぐあなたを隔離する」

スネーク「…まだ終わっていない（リキッドとの決着）」

――うなだれるスネーク。

ナオミ「そうね。あなたはまだやることが残っている（贖罪）」

ナオミ　「期限まで3ヶ月ある。全てを終わらせてから考えてもいい」
スネーク　「それまでに俺が死を選べば…」
スネーク　「変異体（ミュータント）は活動を開始しない？」
ナオミ　「ホストが死ねば、ウィルスも死滅する」

——手持ちのライターを着火、煙草を一口吸うスネーク。
——ナオミはそれを見ているが、咎めない。
——沈黙。煙草を咥えるスネーク。

ナオミ　「ねえ、あと一つだけ教えて」
ナオミ　「最近病院に行った？」
スネーク　「ああ」
ナオミ　「その時、注射か点滴を打たれた？」
スネーク　「それが？」

——ナオミ、キーボードを操作して、モニターの表示を切り替える。新型のＦＯＸＤＩＥがモニターに表示される。

ナオミ　「（モニターを指して）これを見て」
ナオミ　「これも、あなたの身体から出てきたの」
ナオミ　「私の知らない、全く新しいタイプのＦＯＸＤＩＥ」
　　　　――スネーク、モニターを見る。
ナオミ　「最近、誰かに入れられたものよ」
ナオミ　「心当たりはない？」
　　　　――思い出すスネーク。
【フラッシュバック】回想、ストライカー内のドレビン。
スネーク　「あの男…⁉（ドレビン）」
ナオミ　「その新型のＦＯＸＤＩＥが急激に増殖を始めている」
スネーク　「中身は？」
ナオミ　「まだ分からない、詳しくは調べてみないと…」
　　　　――薬品棚から薬と注射器を取り出すナオミ。スネークに近付き、薬を差し出す。自分にも打って

いた注射器。

ナオミ　「これをあげるわ」

ナオミ　「兵士達のナノマシンから分泌されるものと、同じ成分が含まれている」

ナオミ　「ナノマシンの感覚調整機能を抑制する薬よ」

ナオミ　「あなたの体内のナノマシンはシステム(SOP)に干渉すると誤作動を起こす」

ナオミ　「それが発作という形で身体に現れるの」

ナオミ　「発作が酷いときに、打つといいわ」

——タバコを携帯灰皿にしまい、慎重な手つきで手に取ろうとするスネーク。

——ナオミが差し出した手を軽く引っ込め、念を押す。

ナオミ　「劇薬よ。廃人になりたくなければ過度な使用は控えて」

ナオミ　「一時的にあなたの気力(ゲージ)は回復するかもしれないけど、繰り返し使っていればやがて回復量は落ちてくる」

——もう一度薬を差し出すナオミ。

——薬を受け取るスネーク。

ナオミ　「私は、ナノマシンに溺れ、ナノマシンに捕らわれた愚かな女」
スネーク　「運命に束縛されてはいけない。そういったのは君だ」
ナオミ　「私は、運命の束縛から逃れられない」

——スネーク、ナオミに近づき、肩を掴んで振り向かせると、

スネーク　「ナオミ、俺なら君の運命も収束（リキッドを殺せば）させられる。リキッドは何処だ」
ナオミ　「まだ教えられない。私を助け出してくれるまで」

——腕を振り払うナオミ。

スネーク　「本当に知っているのか？」
ナオミ　「リキッドは、昨夜発った」
スネーク　「どこに向かった？」

——身を引き、態度を固くするナオミ。

ナオミ　「交換条件よ。私は自分の意志ではここから出られない」
スネーク　「どういう意味だ？」

ナオミ　「監視、されて（操られて）いるの」

——あたりを警戒するスネーク。誰もいない。既にオクトパスが天井のシャンデリア（釣り下がった照明器具らしき物体）に偽装している。これより前に主観ボタンでみると擬態するオクトパスが見える。声を潜めて話すナオミ。

ナオミ　「リキッドは計画を修正した」

ナオミ　「システム(SOP)を解除しただけでは、彼の軍隊は内側から崩壊してしまう」

ナオミ　「だからシステム(SOP)をそのままに、支配することを選んだの」

ナオミ　「リキッドの目的はSOP(ソップ)システムの乗っ取り」

ナオミ　「そして、それを利用した最強の軍隊の創造と、最強の兵士による『愛国者達』への蹶起(けっき)」

ナオミ　「リキッドはそれをこう呼んでいる」

ナオミ　「『愛国者達の銃(ガンズ・オブ・ザ・パトリオット)』」

スネーク　「ガンズ・オブ・ザ・パトリオット」

——マンティスの高周波が耳鳴りのように聞こえ出す（マンティスが人を操る音）。

ナオミ　「ああっ…」

──部屋に投げ込まれるフラッシュ・グレネード。閃光を防ごうと身構えるスネーク。閃光の最中、パソコンからメモリースティックを抜き取るナオミ。閃光と共に、ＰＭＣ兵士達がエントリー。スネークに銃弾を浴びせてくる。間一髪、かわすスネーク。壁の裏側に隠れる。ナオミを捕えるＰＭＣ。

ＰＭＣ兵士　「危険です。こちらへ」

ナオミ　「…」

──ナオミ、連れて行かれる。それを追おうとするスネーク。銃撃を受け、たまらず後退するスネーク。ナオミは後に入ってきたＰＭＣ兵士と共にその場を立ち去ってしまう。

──ナオミを連れ去られた後、ヘイブン兵と交戦、部屋に逃げ込んだスネーク。その部屋で笑い声が突如響き始める。最初のうちはどこから聞こえているかわからないスネークだが、オクトパスが天井付近で擬態を解く。

──スネーク、オクトパスにオペレーターの銃口を向ける。

オクトパス　「(笑い)」

スネーク　「オクトカムか！」

オクトパス　「(高笑い) スネーク、可笑しいか？　私の獲物」

――ラフィング・オクトパスの顔が老スネークに変化。

【字幕】ラフィング・オクトパス　相元 晴名／飯塚 昭三

オクトパス「(笑いながら) さあ、笑ってみろ!」

オクトパス「ここからは逃がさない」

――オクトパスのいる天井から飛び降りてくるヘイブン兵が二人エントリー。

――スネーク、顔を上げたヘイブン兵に銃口を向ける。

オクトパス「(高笑い) 笑い死ぬがいい‼」

――ラフィング・オクトパスは天井でタコスミを周囲に撒き散らす。

――ゲームへ。

オタコン「ナオミを追うには敵の囲みを破らなくちゃいけない」

オタコン「そこにいる敵兵を倒して道を開くんだ!」

【ラフィング・オクトパス戦前／ポリデモ】南米・研究施設

――ヘイブン兵を倒すと発生（ヘイブン兵の数は、難易度によって変化）。

――ラフィング・オクトパス（ビースト）の笑い声がどこからともなく聞こえる。

オクトパス「（ＯＦＦ）スネーク！（笑）」

――見渡すスネーク。

――擬態を解き、天井から現れるオクトパス。天井から落下したタコのよう。

オクトパス「笑える！　人が苦しむのも、人が傷つくのも、人が死ぬのも、みんな笑える！
笑え！　笑ってみろ！」

――ラフィング・オクトパス（ビースト）戦へ。

【オクトパス・ビューティ化／ポリデモ】南米・研究施設

――ライフキル／スタミナキルで発生。

――オペレーターを構えながらオクトパスに近づくスネーク。

――オクトパスは陸揚げされたタコのように身をくねらせている。その足下にフェイスカム。

――さなぎ状に擬態したオクトカムスーツ。さなぎが真ん中から割れてビューティが出てくる。

さなぎが真ん中から割れてビューティが出てくる。

ビューティの着ているスーツは「ラフィング・オクトパス」の皮膚感と同じ質感。蛸のように、ごわごわしている。直線状に吸盤がついている。生まれ出た直後は皮膚がオクトカムでビースト（蛸）のは虫類系の凹凸とささくれ、ひび割れ（サナギ）。身体に繋がっているチューブも長く垂れている。

オクトパス　「（笑い）」

——立ち上がり、スネークに向かって歩き出してから、皮膚感は変わり、透明になっていく。4つの脚がちょん切れて落ちる。地面の上でのたうつタコ脚。本体はビューティに変異する。口から墨を大量に吐き出す。ボディスーツはタコの吸盤状のあざが全身にある。オクトパス（少女）のPTSDの主因となった事件の音響（悲鳴、銃声）が重なる。

オクトパス　「私は蛸(オクトパス)。脚が8本もある蛸(オクトパス)だ。触手は…私の意志ではない。（笑い）戦場の意志だ（笑い）」

オクトパス　「（高笑い→咳き込み→墨を大量に吐く）」

オクトパス　「おかしい、おかしいの、おかしいわ」

——オクトカムが切れる。ここでラフィング・ビューティの表情が初めてわかる。

オクトパス　「いいえ、おかしくなんかない」

オクトパス　「何も…、おかしくなんか…、…ない」
オクトパス　「本当は、笑えないの。笑えないの」
オクトパス　「私、笑ってなんかいない。本当は、怖かったの。怖くて、怖くて」
オクトパス　「ごめんなさい。笑って…、ごめんなさい」
オクトパス　「もう、笑わない。笑えない。笑いたくないなんか…ない（笑い泣き）」

――ラフィング・ビューティ戦へ。

【オクトパス・ビューティ自爆／ポリデモ】南米・研究施設

※3分経つとビューティは自爆、またはスネークからのダメージで

オクトパス　「（しばらく笑い）ああっ！」

――地面に倒れるオクトパス（ビューティ）。青い炎を揺らめかせながら焼失する。地面に丸くなって眠る（胎児の姿勢）。花びらを撒いて光って消える花びら。花びらはよく見ると稚魚の形。エンジェル・フィッシュ。

――ラフィング・オクトパスの抜け殻に近付くスネーク。抜け殻の様子を確認する。落ちている「フェイスカム」を拾う。フェイスカムは頭部を覆うオクトカム機能搭載のスカルキャップ。これでオク

トカム時のカムフラ率は更に向上する。
――ドレビンから強制ＣＡＬＬ。

【オクトパス・ビューティ眠る／ポリデモ】 南米・研究施設

※３分以内にビューティを眠らせた場合。

オクトパス 「（しばらく笑い）ああっ！」

――地面に倒れるラフィング・ビューティ。地面に丸くなって眠る（胎児の姿勢）。花びらを撒いて光って消える花びら。花びらはよく見ると稚魚の形。エンジェル・フィッシュ。
――ラフィング・オクトパスの抜け殻に近付くスネーク。抜け殻の様子を確認する。部屋を出て行こうとする際に、落ちている「フェイスカム」を拾う。

スネーク 「これは…」

――フェイスカムの機能を確認して感心するスネーク（これは使えそうだ！）。フェイスカムは頭部を覆うオクトカム機能搭載のスカルキャップ。これでオクトカム時のカムフラ率は更に向上する。部屋を出て行くと風に乗ってかすかに赤ちゃんの泣き声（生まれ落ちた）が聞こえる。
――ドレビンから強制ＣＡＬＬ。

【オクトパス戦後／強制無線デモ（ドレビン）】

南米・研究施設

ドレビン「ようスネーク、調子良さそうだな」

スネーク「ドレビンか。何の用だ」

ドレビン「つれないねぇ。せっかくお得意様に〝フェイスカム〟について教えてやろうと思ったのに」

スネーク「〝フェイスカム〟？」

ドレビン「さっきあんたがオクトパスの殻(シェル)から拾った擬装用スカルキャップだよ。オクトカムと組み合わせて使えば、カムフラ効果が増大するはずだ。いいモノ手に入れたな」

スネーク「だが形も大きさも俺向きじゃない」

ドレビン「調整が必要だな。あんたの相棒なら得意分野なんじゃないか？」

スネーク「俺にナノマシンを注入した本当の目的はノゾキか」

ドレビン「顧客情報管理と言ってくれよ。もちろん外部には漏らさないし…」

スネーク「ドレビン。ならそのナノマシンにウィルスを混ぜ込んだのは何のためだ」

ドレビン「ウィルス？」

スネーク「俺の体内から「あるウィルス(FOXDIE)」が見つかった。お前が注入したナノマシンじゃな

いのか」

ドレビン　「なあ…心当たりなんて他にいくらでもあるだろ?　俺には、あんたに危害を加えるメリットは何もないんだ」

ドレビン　「見てたぜスネーク、大したもんだ。まさかこの世にラフィング・オクトパスを一人でやっつけちまう奴がいるなんてな」

スネーク　「ふん」

ドレビン　「彼女はいつも笑っていた。何故だと思う」

スネーク　「(うーん)…彼女の過去に原因が?」

ドレビン　「ああ…彼女は北欧の出身だ。そこは「悪魔の村」と呼ばれた海辺の小さな集落だった」

ドレビン　「悪魔の村…何てことはない。…蛸(オクトパス)だよ。彼女の故郷(ふるさと)には、ヨーロッパには珍しく蛸(オクトパス)を食う習慣があったんだ」

ドレビン　「頭のおかしな連中が、昔からこの集落を忌み嫌っていた。彼女がまだ10代もはじめの頃、その事件は起きたんだ」

ドレビン　「このカルト集団がどこかから武器を手に入れて彼女の村を襲撃した。ささやかな

村は突如、戦場と化したんだ」

ドレビン　「村人全員が捕らえられ、一人一人惨殺されていった。しかし彼女には、死よりも残酷な運命が用意されていたんだ」

ドレビン　「連中は彼女を「悪魔の子」と呼び、その名にふさわしい行為を強要した。家族や親友を痛めつけ、殺せ、と」

ドレビン　「しかもその最中、彼女は笑い続けることを命じられた。悪魔らしく、楽しそうに」

ドレビン　「逆らえば自分が殺される。彼女は恐怖に支配され、ひたすら命令に従った。笑い叫びながら、親しい人々の体を切り刻んだ」

ドレビン　「血を浴びるうち、その赤は、やがて漆黒に変わっていった。彼女にはそれが、蛸（オクトパス）が撒き散らす墨に見えていたんだ」

ドレビン　「その体験は彼女の心に深く刻まれたんだろう。以来、彼女は笑うことを止められなくなった。…だが、それは本来の笑いじゃない」

スネーク　「…何故そんな話を？　彼女に同情でもしろと？」

ドレビン　「いやぁ、あんたはそんな甘い世界に生きてはいない。それにここは戦場だ。…だろ？」

ドレビン　「まぁ、あれはある意味正解だったわけだ」

スネーク　「なんのことだ」
ドレビン　「あんたと戦うことで、彼女の精神は浄化された」
ドレビン　「…さて、長話もこの位にしておこう。あんたを追っているビーストは他にもいる。
　気を抜くなよ」

【ナオミ追跡前1／ポリデモ】南米・密林前

——外に出るスネーク。密林のジャングルが広がっている。ナオミの姿はない。歩いている最中に一度発作が来る。

スネーク　「（発作で咳き込む）」
——見渡すスネーク、しゃがみこみ、ジャングルに続く足跡を見つける。
【フラッシュバック】ナオミの足
【主観ボタン】ナオミの足跡が鮮明に見える。
——雷電から強制SEND。

雷電　「スネーク、目標を見失ったのか」

スネーク　「ああ」

雷電　「何かが動けば、そこには必ず跡が残る」

雷電　「ナオミの痕跡（ハイヒール痕）を辿るんだ。追跡（トラッキング）だ」

スネーク　「ビッグボスとは違う。俺は専門家じゃない。お前はいつの間に？」

雷電　「サニーを助けた後、俺は世界中を彷徨っていた。アラスカに住む長老が、俺に斥候（スカウト）の技術を教えてくれたんだ」

スネーク　「彷徨っていた？　あれからローズにも会っていないのか？」

雷電　「ローズ？　彼女は実在しない。いや、俺とローズは別の世界、別の時代にいる。彼女の棲む世界に俺の居場所はない」

雷電　「俺に居場所があるとすれば、此処、戦場だ」

スネーク　「（うーん）」

雷電　「スネーク、いいか。スカウトは狩りの教えを元にしている。その基本は気付き（アウェアネス）とトラッキングだ」

スネーク　「アウェアネス？」

雷電　「アウェアネス、とは注意深い観察による痕跡の発見。トラッキングとは、その痕跡を追跡することだ」

雷電　「足跡や、周囲の音、匂い、感触、風向き…。全ての感覚（SENSE）で手がかりを感じ取るんだ」

雷電　「小動物の動きや、普通とは違う鳥の鳴き声に注意しろ。その近くで何者かが場を乱した可能性が高い」

スネーク　「まるで忍者だな」

雷電　「そうだ。究極のスカウトは忍者だ」

雷電　「敵も優れたスカウトなら、相手も同じように行動してくる」

雷電　「蛇（スネーク）は追うハンターであると同時に、追われる獲物（ハンテッド）でもある」

雷電　「相手に気付かれないようにするには、動きを小さく、ゆっくりと。周囲の空気を乱さないこと。音を出来る限り立てないことだ」

雷電　「敵も気配を消し、音を立てずに忍び寄ってくるだろう」

雷電　「もし肉眼で痕跡を見つけられない時はソリッド・アイを赤外線（NV）モードにするんだ。ナオミの足跡や待ち伏せ（アンブッシュ）している敵を見つけられるだろう」

スネーク　「ソリッド・アイを赤外線（NV）モードにするんだな」

雷電　「だが作動中はその動作音で、位置を敵に悟られる危険もある。長時間の使用は避けるんだ」
スネーク　「わかった」
雷電　「自らの心に耳を傾け、出来る限り自らの感覚（SENSE）を信じるんだ」
スネーク　「ナオミの痕跡（ハイヒール痕）は必ず見つかるはずだ」
雷電　「やってみる」

——ゲームへ。

オタコン　「スネーク、ナオミの痕跡をたどって、彼女を追うんだ」
オタコン　「敵の妨害があるかも知れない。注意してくれ」

【ヴァンプ狙撃／ポリデモ】　南米・ヘリポート

——脱出用トンネルを抜けると、ＰＭＣ非常用のヘリポートに出るスネーク。スクリーミングが聞こえる。ＰＭＣの兵士達が６人ほど立ち並び、ナオミはヴァンプとＰＭＣ護衛兵４人に連れられてヘリに載せられるところだった。

スネーク　「オタコン、間違いない。ヴァンプだ」

――スネークの横でMk．Ⅱがステルスを解除し実体化する。

オタコン　「スネーク！　ナオミが連れて行かれる！」

――M4の狙いをヴァンプに定めるスネーク。ヴァンプはヘリに乗る直前に立ち止まり、携帯電話で誰かと話している。相手はリキッド。

リキッド　「邪魔が入る前に実行しろ！」

ヴァンプ　「この間のように、どうなるかわかりませんよ」

リキッド　「構わん。犠牲は仕方がない」

ヴァンプ　「わかりました。間もなく始めます」

――中東の最後のように、耳鳴りのような高音「スクリーミング」が響いている。

――引き金を引く。狙撃され、倒れるヴァンプ。

――スネークを確認して、スネークに向かって銃撃を始めるPMC兵。

――ヴァンプは倒れたまま、携帯電話に向かって、

ヴァンプ　「いいぞ。始めろ…！」

ヴァンプ　「奴の血を使う。おそらく（震度）大きいぞ！　備えろ」

ヴァンプ　「（ヘリ内の兵に対して）お前達も（注射器を）打て」

ＰＭＣ兵　「了解」

ヴァンプ　「俺はしばらく眠る」

――ヴァンプは（ナオミから渡されたスネークの血から得た遺伝子配列と生体認証によって）、新システムの起動を指示する。ヘリに乗っていたＰＭＣ兵装のスタッフ達は、医療用のケース（カメラケースのような）から薬を取り出し、首筋に打つ。

――力尽きて倒れるヴァンプ。死んだかのように見える。傷口が治ってゆく。

――遠くから聞こえる月光の咆哮。セミの鳴き声。

――中東の最後のように、耳鳴りのような高音「スクリーミング」が響いている。

――頭を抱え、もだえる兵士達。中東よりも症状がひどい！　眼は血走り、涎をたらす。口から泡！

痙攣！　膝をついて叫び声を上げる。

――スネークも発作（ナノマシン干渉）のため足がおぼつかない。

――ナオミ、スネークに注射を打つよう、ホバリング中のヘリ内から叫ぶ。

ナオミ　「スネーク！　注射を…！」

ナオミ　「スネーク‼」

――注射をスネークに見せるナオミ。

――スネークは咳き込みながら注射を首筋に打ち込み、苦痛に耐える。

――スタミナ増。

スネーク「（咳き込み）」

スネーク「ぐああーっ‼（注射の痛み）」

――ナオミも注射を打つ（ナノマシンの干渉）！

ナオミ「んっ！　はあ…（注射の痛み）」

――先ほどまでスネークを銃撃していたＰＭＣ兵達は、頭を抱えて苦しみ続けている。

――それを見てナオミ、

ナオミ「駄目だわ。感情の制御がまだ安定していない」

――突如ヘリポートに降り立ってくる３体の月光。スネーク、Ｍ４で応戦。月光、バルカンで応射。

ナオミ「スネーク！」

――ナオミ、ヘリから飛び降りようとするが、ヘリは既に地上10ｍあたりでホバリングしている。

飛び降りるには高すぎる。躊躇するナオミ。だがそこに武器商人ドレビンが操縦する装甲車が、通り道にいる一台の月光を蹴散らしながら駆けつける。ホバリングしているヘリの下で停まるドレビンの装甲車（ドレビンの装甲車には愛国者達のスローガン「ＥＹＥ ＨＡＶＥ ＹＯＵ」と書かれている）。

――意を決して装甲車の上に飛び降りるナオミ（まだ高いが、装甲車の車高の分、なんとか飛び降りられる高さになっている）。

――装甲車はスネークに横付け。

――ここでヴァンプが復活。奇声を上げて起き上がる。と同時に、ヘリポートから離れるヘリ。ヘリの周囲にはレイジング・レイブン。

――ドレビン、上ハッチを開き、顔を出す。

ドレビン「スネーク、乗るか⁉」

スネーク「ドレビン！（大丈夫か？）」

ドレビン「（いいから）早く乗れ！」

――装甲車、月光に機関銃で攻撃。月光の脚を狙っている。月光も応戦。装甲車の装甲に月光のバルカンがあたる。

――すでにヘリから装甲車の屋根に着地していたナオミ、装甲車上からスネークを見つける。

ナオミ　「スネーク！」
スネーク　「ナオミ！」
スネーク　「飛べ!!」
　　――装甲車の上から地面に飛び降りるナオミ。スネーク急いで近づいて、
スネーク　「立てるか？」
ナオミ　「（うなずく）」
　　――スネーク、ナオミに肩を貸して装甲車に乗り込む。続いてＭｋ．Ⅱ。迎えにグレイ。
ドレビン　「（ハッチの下に）揺れるぞ！」
　　――兵士達の間を縫ってヘリポート内を走り抜けると、フェンスをやぶり脱出する装甲車。
　　――車内の様子。グレイ、ナオミに炭酸飲料を勧めている。
ナオミ　「（半ば驚きつつ）ありがとう」
ナオミ　「（炭酸飲料を飲んでゲップ）」
　　――グレイ、ナオミのゲップに大喜びして跳ね回る。

――場面変わってヘリポートでは、ＰＭＣ兵が立ち上がっているが、何か様子がおかしい（ゾンビ化）。

――F.O.

【装甲車脱出／インタラクティブデモ】　南米・ヘリポート～市街地

――ゾンビＰＭＣ（ガンパト実験によりおかしくなっている。血中酸素低下による脳損傷）。

――スネーク、ハッチを開けて装甲車の屋根に上がる。

――ゲームへ。

オタコン　「スネーク、その先の市場を越えたところに、ヘリをつける」

オタコン　「それより傍には近づけない。なんとか市場まで来てくれ！」

【雷電登場／ポリデモ】　南米・市街地外れ

――激走する装甲車、市街地を通過。周囲の家並みの間、屋根の上から無数の月光が群がってくる。トラックが停まっている。

ドレビン　「うぉっ！」

――ドレビン、急ハンドルを切って装甲車を横転させてしまう。装甲車からは、まずドレビンが上部ハッチを開けて這い出してくる。ドレビン、炭酸飲料を取り出して、ひと飲み。そしてゲップ。続いて、後部ハッチを開けて、グレイ、スネーク、ナオミが出てくる。スネーク、ナオミをひっぱって助ける。ナオミは脚に軽い怪我。

スネーク「ナオミ、ほら、しっかりしろ」

スネーク「さあ、立って」

スネーク「よし、行くぞ」

――スネーク、先に装甲車を降りていく。この間にグレイ、ウンテイの要領でナオミの胸に飛び込んでくる。ナオミ、背中をたたいてあげる。先に下りていたスネーク、ナオミに手を差し出す。

スネーク「ほら」

スネーク「気をつけろ」

――ナオミが手を差し伸べる前にグレイが手を出す、スネークはグレイの手を取り、助けおろす。

――この時、スネークは足元のチェック、周囲を警戒しており、ナオミのほうを見ていない。そのままナオミとスネーク、「連れ去られた宇宙人」の写真のポーズになり、運転席から脱出してきて炭酸飲料を飲みながら来たドレビンがそれを見て笑う。

【フラッシュバック】 連れ去られた宇宙人。

ドレビン 「(笑い)」

——グレイはドレビンの方についていく。グレイに引っ張られるような形になってつまずくナオミ。脚の怪我のせいでしっかり立てない。それを見て心配するスネーク。

スネーク 「大丈夫か？」

——その間、ドレビンは装甲車の向こうを見にいっている。すると月光の群れが出現。

ドレビン 「(OFF) ヤッバ」

——その月光の群れを屋根の上から見下ろすように立つ、コート姿の男が一人。

——何者かと目を凝らすスネーク。

スネーク 「雷電…！」

——男の頭部にはゴーグルがつけられ、眼は隠されている。

——男は雷電だった。スネーク達に逃げるように刀で示す。

ドレビン　「（スネーク達に）今のうちに逃げろ！」

――スネーク達、雷電に任せて先に進む。

スネーク　「動けるか」

ナオミ　「ええ、」

――スネーク、少し歩いてから遅れて着いてきたナオミを見る。

――ナオミ、スカートのスリットを破いて、ヒールを脱ぎすてる。

ナオミ　「行きましょう」

――ナオミ、白衣を着たまま。ヒールを脱いで投げ捨てる。

ドレビン　「（なぜか満面の笑みで）来るぞ！」

――パニック状態に興奮しているドレビン。緊迫しているスネーク達との立場の違いがはっきり見られる。

――ドレビン、炭酸飲料を飲む、グレイも炭酸飲料を欲しがり、ドレビンから奪うようにして飲む。二人一緒にゲップ。

――雷電、コートを脱ぐとハイジャンプ、先頭の月光の脚部を日本刀で切断する。サイボーグ忍者

を思わせるメタリックボディ。人間業とは思えない身軽さで次々と襲い来る月光を倒していく。周囲の月光を一掃すると、男は刀を振って鞘に収める。男のマスクが開く。雷電は自分に向けて云う。

雷電　「スネーク、今度は俺が守る」

【字幕】雷電　堀内 賢雄

【フラッシュバック】雷電

——後方からは更に多くの月光が襲い掛かる。

——月光が装甲車の近くにやってくると、ドレビン、白いハンカチを取り出して、手品をするようにオクトカムオン。月光のサーマル主観で消える装甲車の姿。装甲車はオクトカム状態。立ち去る月光。

——頭上を飛ぶヘリ。先の市場中央の広場へ下降していく。

オタコン　「(音声のみ無線) スネーク、この先の広場にヘリを降ろす。急いでくれ！」

スネーク　「ああ」

スネーク　「ナオミ、先に行け」

ナオミ　「ええ」

――雷電にその場を任せ、オタコンの居るヘリが停まる広場まで脱出するスネーク。

――ゲームへ。

オタコン「雷電が敵を食い止めている。その隙にそこを脱出するんだ！」

オタコン「スネーク、月光の相手をしてる余裕はない。奴は無視して、早くそこを離れろ！」

――目的地に近づくと、

オタコン「スネーク、君の姿が見えた！　あと少しだ！　走れスネーク。走れ！」

【ヘリ搭乗／ポリデモ】南米・市場広場

――広場に着陸しているヘリの姿。その中ではオタコンがノートパソコンでＭｋ．Ⅱを操っている。

――ヘリに上がろうとするナオミ。オタコン、ヘリの操縦で手が離せない。

オタコン「すまない。今は手が貸せない！」

――Ｍｋ．Ⅱがナオミの足元に来て、ナオミがヘリに上がるための踏み台になってくれる。

ナオミ「ありがとう！」

――ナオミ、乗り込むが、バランスを崩す。

ナオミ「あっ」

――それをきっかけにオタコン、操縦席で振り向く、ナオミと目が合う。オタコンを見つめるナオミ。ナオミを見つめるオタコン。陽のあたったオタコンの精悍な横顔。ナオミは成長したオタコンに驚く。しばらく見つめ合う（ここでやや惚れる）。

――ナオミ、何かを云おうとして止める。

――スネーク走って来る。

オタコン「Mk.（マークツー）Ⅱを頼む！」

――スネーク、Mk.Ⅱを抱き上げてナオミに渡す。

スネーク「ナオミ、こいつを頼む！」

――頷くナオミ。ヘリに乗り込むスネーク。

スネーク「よし、オタコン、出せ！」

――浮上するヘリ。月光の襲撃から間一髪で脱出する。

オタコン　「雷電はどこに？」

スネーク　「（指を指す「向こうだ」）奴はまだ戦っている」

——市場上空を旋回、雷電のピックアップに向かうヘリ。機内からの映像。カメラは寄らない。そのまま空撮で雷電のところまでいく。

——ナオミ、何かに気がついてスネークとは反対側のヘリのドアを開ける。

ナオミ　「ヴァンプよ！」

——スネークらを乗せたヘリが雷電の元へ向かったとき、雷電は四方を月光に囲まれている。さらに月光の触手でがんじがらめ、両手両足を引っ張られ動けない状態。

——月光の間を縫って黒い影が雷電に近付く。月光の群れをバレエのステップでうまくかわしてゆく。男はコートを着たヴァンプ！

——スネーク、雷電の様子を心配して、

スネーク　「雷電！」

——ヴァンプ、雷電に近づくとコートを脱ぎ捨てる。股間のナイフをまるで儀式のように引き抜き、

ヴァンプ　「久しぶりだな！」

――動けない雷電、宿敵ヴァンプを見て表情を硬くする。

――カメラ機内へ。スネーク、捕われている雷電を救うべく、月光の触手を狙い撃とうと狙撃銃を構える。

――カメラ、ヴァンプに戻る。ナイフを片手に雷電に近寄るヴァンプ。「えい」とのかけ声と共に、雷電の左胸、心臓の位置にナイフを深々と突き刺す。死なない雷電。ヴァンプ、後ろを向いてナイフをひと舐め。

――この間、スネークは狙いが定まらず銃を撃つことができない。

――ヴァンプ、今度は雷電の右胸にナイフを突き刺す（心臓の位置が通常とは逆の可能性も考慮）。

――それでも死なない雷電。痛みを感じない雷電。にやりと笑う。

――ヴァンプも意図を知る。

ヴァンプ「おまえも死ねない身体に？（なったのか？　仲間意識）」

雷電「（お前とは）違う。死を畏(おそ)れていないだけだ」

ヴァンプ「ふん（言うじゃないか！）」

――スネーク、狙撃銃（ＤＳＲ１）で月光の触手を撃ち抜くことに成功！

――自由になった片手で刀を抜く雷電、ヴァンプを斬りつける。ヴァンプ、リンボーダンスのようにして、その攻撃をかわす。返す刀で捕らえられていたもう一方の手を自由にした雷電は、驚異的な腕力、脚力で両脚を拘束していた月光を始末する。

——ヴァンプと正対し、刀を構える雷電。

——雷電、踏みつけようと襲ってくる月光を相手にしながら、ヴァンプを斬りつけようと迫る。

——バレエの動きで雷電の斬撃を躱し続けるヴァンプ。ヴァンプ反撃。スローイングナイフを雷電に放つも、雷電は刀ではじき返す。

——ここで月光が邪魔に入る。簡単に月光をしとめる雷電。

——その月光の上からジャンプして上段から刀を振り下ろす雷電。ヒラリと躱したヴァンプはさらにナイフを投げて応戦。はじきかえせなかったナイフが雷電の胸に突き刺さる。雷電、ナイフ攻撃をものともせず、刀をヴァンプに投げつける。

——ヴァンプ、首を少し横へ移動させ、紙一重で躱す（余裕）。

——雷電も当たらないのは当然とばかり、左腰のナイフを抜き猛然とヴァンプに斬り掛かる。

——ヴァンプ、回転跳躍でかわして雷電の足の甲にナイフを刺す。

——ここで雷電、マッスルオフ。既に刺さっていた3本のナイフが抜けて地面に落ちる。

ヴァンプ　「（ニヤリ）」

——雷電、さらにナイフで攻撃。甲に刺されたヴァンプのナイフをも攻撃に使うアクション。ヴァンプののど元を足で捕らえ、足踏みをするようにして、甲に刺さったナイフをヴァンプの胸元に数度突き刺す。そして軽やかに跳躍してヴァンプとの距離をとる。

——ヴァンプ、胸に突き刺されたナイフを笑いながら抜き取り、左腕のナイフポケットに収納。

――雷電、月光の触手を使って刀を再び手にし、ヴァンプに迫る。まるでブレイクダンスのような動きで攻撃する雷電。それをバレエの動きで躱すヴァンプ。

――雷電の隙をつき、ヴァンプの反撃。強烈な蹴りで雷電を蹴飛ばし、さらにジャンプして足に仕込まれた爪で足踏み攻撃。まるで雷電の上でバレエを踊っているかのよう。うめき声を上げる雷電。

雷電　「(苦痛のうめき声)」

――ヴァンプが距離をとると、雷電が空中回転アタック。ヴァンプはスローイングナイフアタックで応戦。

――雷電、今度は刀ではじき返す。繰り返される応酬。この間、雷電の刀が赤く光り出す。

――ヴァンプ、雷電の攻撃を躱すと、後ろから襲い掛かる。

――雷電、自分ごと刀でヴァンプを突き刺す。

雷電　「(うめき声など)」

ヴァンプ　「(うめき声など)」

――ヴァンプ、自ら刀を突き刺す。

雷電　「(うめき声など)」

ヴァンプ　「(うめき声など)」

――一度離れて、さらに切り合い、お互いの腹部を突き刺す。

ヴァンプ　「お前、俺を殺してくれるかもな」

――ヴァンプ、微笑みながら（ライバルに出逢った喜び）バッタリ真後ろに倒れる（ダメージが大きすぎてナノマシンの回復に時間がかかる）。

――雷電、刀についた血（自分とヴァンプ）を拭って、鞘に収める（まるで侍のよう）。

――勝利の余韻を味わう間もなく、月光が登場。ヘリも現れる。月光がTWO対戦車ミサイルの準備を始める！

――雷電は月光の頭部を踏み台にしてジャンプ、ヘリに飛び乗る。

――ヘリに飛びつく雷電。スネーク、雷電を抱えあげながら、

スネーク　「雷電！」

――雷電、スネークの助けでヘリに担ぎ上げられると白い血を吐く。

スネーク　「大丈夫か」

雷電　「ああ」

雷電　「（咳き込み）」

スネーク　「雷電！」

——心配そうにそれを見つめるナオミ。

ナオミ　「あなたも！（フランクのような改造を？）」

——さらに咳き込み、白い血を吐き続ける雷電。

——カメラ変わって市街地。むくりと起き上がるヴァンプ。傷は殆ど治っている。携帯電話を取り出すと、

ヴァンプ　「ボス、ナオミが行きました。よかったのですか？」

リキッド　「（ＯＦＦ）予定通りだ」

ヴァンプ　「テストは失敗です。ヤツのコードでも」

リキッド　「（ＯＦＦ）やはりな。純度が低い。完全体が必要だ」

ヴァンプ　「配備していたＰＭＣは脳損傷を負って、恐らく全滅です」

ヴァンプ　「残るは、オリジナル（ＢＩＧＢＯＳＳ）を使うしかありません」

リキッド　「（ＯＦＦ）わかっている。こちらも時間の問題だ」

リキッド　「（ＯＦＦ）奴らの潜伏場所の特定を急いでいる」

リキッド　「（ＯＦＦ）お前もこちらに向かえ」

——ヘリの去っていった方向を見ているヴァンプ。身体についた白い血を嘗め、雷電の事を思いだして笑う。

——カメラ、再びヘリ内。シートにぐったり腰掛けている雷電。さらに咳き込んで白い血を大量に吐く。口元は、大量出血によるショック状態で痙攣している。ナオミ、雷電をシートに仰向けに寝かせて、

ナオミ　「しっかりして！」
オタコン　「ヴァンプめ…あいつは不死身だ」
ナオミ　「彼は不死身なんかじゃない。彼をあんな身体にしてしまったのは私なの」
オタコン　「え？」
スネーク　「どういうことだ？」

——ナオミ、自分の白衣を脱いで丸めて、雷電の腹の傷の止血に使う。

ナオミ　「体内のナノマシンは急速に傷口を塞いで修復する。私がかつて研究していたナノマシン技術を基礎に、誰かが引き継いで完成させた」

ナオミ　「元はといえば私の所為。彼は私の罪のひとつ」
スネーク　「ということは、君の身体にも同じナノマシンが？」
ナオミ　「私はこの世に怪物（ビースト）を産んだ。そしてこの私も（化け物）」
——雷電の口から血が逆流する音。背中を反らせ、痙攣を始める雷電。スネークが押さえつける。
スネーク　「雷電！」
ナオミ　「押さえて！」
——雷電の上半身はナオミが、下半身を押さえるスネーク。シートの上でもがき苦しむ雷電。
雷電　「ぐはっ！」
——白い血を吐き、ぐったりと力が抜ける（発作が収まる）。
ナオミ　「失血がひどい…」
スネーク　「助かるか？」
ナオミ　「わからない。輸血が、いえ、人工血液の補給が必要よ…」
——雷電、弱々しくシートから起き上がろうとし、

雷電　「スネーク…」
スネーク　「雷電？」
雷電　「東欧だ」
――雷電、さらに吐血。
雷電　「ビッグママに…会え…」
――雷電の声は喉元に仕込まれた振動板から出ているコンピュータボイス。口は動いていない。
――意識を失う雷電。
――一行を乗せたヘリは空港へと向かう。
――F.O.

ACT2「Solid Sun　固体の太陽」無線集

■南米：谷間の村

【目的確認】リアルタイム無線
オタコン「そこから北の方向にある、ナオミの研究施設に向かうんだ」
オタコン「目的地の方角は、レーダーを参照してくれ」

【目的確認2】任意無線
※開始直後にSEND。（1）、（2）を順に鳴らす。初回のみ
（1）
オタコン「ナオミの研究施設は、そこから北の方角だよ」
オタコン「レーダー上に目的地の方角がマーク（◎）で表示されるから、参考にしながら前進してくれ」
（2）
オタコン「高山地帯特有の酸素の薄さが、体内のナノマシンに悪影響を与えてるんだろう、そこにいるPMCの兵士は好戦的な性質を示している」
オタコン「十分気をつけてくれ」

【状況説明無線】任意無線
※村の中・反政府軍兵士を救出する前にSEND
オタコン「さっきの戦闘で捕虜になった反政府軍の兵士達が、広場に集められている」
オタコン「そこにいるPMC兵たちは、暴力性向が強まっているらしいって事はもう伝えたよね」
オタコン「場合によっては、望ましくない結果（＝処刑）になる可能性もある」
オタコン「本来、先を急ぐべきではあるけど、助けることも……どうするかは君の判断に任せるよ、スネーク」
オタコン「もしも彼らを解放するのなら、そこにいるPMC兵士達を排除するんだ。いいね」

【戦場広告について】任意無線
※現地のPMC、Pieuvre（ピューブル）armement（アルメマン）（武装蛸）の宣伝用看板が見える辺りでSEND

マシンに悪影響を与えてるんだろう、そこ

スネーク「そういえば、政府側に雇われてるPMCはフランスの企業だったな」

オタコン「うん、そうだよ。Pieuvre(ピューブル) armement(アルメマン)、〝武装蛸〟。……それが?」

スネーク「見かける戦場広告さ。フランス語で書かれてる」

スネーク「Les tentacules de la pieuvre pour votre guerre!……〝あなたの戦争にタコの脚(アーム)を貸しましょう!〟って程の意味だ」

オタコン「そうか、君、六カ国語が話せたんだったね。……まさかタコも、自分の脚が戦場広告に使われるなんて、思いもよらなかっただろうね」

スネーク「使えるものは何だって使う。人間てのはそんなもんだ」

オタコン「まあね。……でもそれ、現地調達のエキスパートである君が言うとリアリティが違うよ」

スネーク「誉めるなよ」

オタコン「(苦笑)冗談さ」

装蛸)の宣伝用看板が見える辺りでSEND

【南米共通目的無線1】任意無線

※「送電施設破壊」まで、他に言うことがない時

(1)

オタコン「ナオミのいる研究施設は北にある」

オタコン「北の方角へ進んでくれ、スネーク」

(2)

オタコン「ナオミのいる研究施設を目指すんだ」

オタコン「レーダー上のマーク(◎)が示す方角へ進んでくれ、スネーク」

【反政府軍武器庫】任意無線

※旧政府軍を助けるとその中の一人が武器庫のドアを開ける。中には銃や旧政府軍の服がある

オタコン「そこは反政府軍が武器庫として使っている建物のようだね」

(1) まだ拾えるものがある。(3)に続く

スネーク「色々と使えそうなものがあるな」

(2) もう拾えるものがない(全部拾った後)。(3)に続く

(3)

スネーク「色々と使えそうなものがあったぞ」

オタコン　「必要だと思う装備を調えてから進むといい。まだ先は長いよ」

【旧政府軍服について】任意無線
※旧政府軍服を入手した後にSEND
（1）実際に着ている場合。（3）に続く
オタコン　「それ、旧政府軍の軍服？」
（2）単に所持している場合。（3）に続く
オタコン　「スネーク、旧政府軍の軍服を手に入れたようだね。反政府軍兵士達が着ているのと同じものだ」

（3）
スネーク　「ああ。サイズもぴったりだ」
オタコン　「その服を着ていれば、反政府軍兵士から敵対行動を受ける危険性は著しく減少する筈だ。必要と感じたらすぐに使うといい」
スネーク　「そうしよう」
オタコン　「もちろん、君も彼らに対して友好的に振る舞わなくちゃいけないよ。それを忘れないで」
スネーク　「判ってる、大丈夫だ」

【目的地まだ先】任意無線
※他に言うことがない場合
オタコン　「ナオミが研究を強いられている施設は、まだ先だ」
オタコン　「レーダー上に表示される目的地のマーク（◎）を参照しながら先へ進むんだ」

【先に進め】任意無線
※現在のステージから2エリア戻ってSEND（ACT2共通）
（1）
オタコン　「スネーク、どうして先へ進まないんだい？」
オタコン　「ナオミの研究施設へ行くには、方向が違うよ」

（2）
オタコン　「スネーク、どうして来た道を戻るんだい？」
オタコン　「レーダーに示されたマーク（◎）を参照してナオミの研究施設へ向かってくれ」

【解放した兵士について行け】任意無線

※村の建物を過ぎた辺りでSEND

オタコン「スネーク、君が解放した反政府軍の兵士は、現地の地理に明るいはずだ」

オタコン「後をついて行けば、効率よく前進できるんじゃないかと思う」

【旧政府軍兵士の銃について】任意無線

（1）既に武器を奪っている場合はここから。（2）、（3）と続く

オタコン「スネーク、何か反政府軍の武器を手に入れたかい？」

スネーク「ああ」

オタコン「使えてる？」

スネーク「問題なく」

オタコン「そうか……とするとやっぱり」

スネーク「なんだ、どうした」

（2）武器を奪っていない場合はここから。（4）へ続く

オタコン「スネーク、反政府軍の兵士達だけど、彼らは元々はその国の旧政府軍に所属していた正規の軍人達だ」

オタコン「現政府が政権を奪取したのち、その立場を追われ、あるいは自ら去っていったが、そのほとんどは旧政府軍がSOP（ソップ）を導入した当時、軍籍にあったらしい」

スネーク「……待てよ、ということは、連中も体内にナノマシンを持ってるのか？」

オタコン「ああ。ただし、政権の交代と共に、彼らはシステム（SOP）の管轄からはじき出されているようなんだ。だから彼らはID銃ではなく裸の銃で戦っているし、逆に政権側もシステム（SOP）を経由して反政府軍の行動をコントロールすることは出来ない」

スネーク「……ふむ」

オタコン「別の観点から言うと、反政府軍から入手した武器にはドレビンの武器洗浄（ガンロンダリング）が不要、君にも即使用できるってわけだ」

（3）

スネーク「なるほどな。では今後も遠慮無く連中の武器を使わせてもらおう」

オタコン「あんまり無茶苦茶はしちゃダメだよ。必要な分だけだ」

スネーク「ああ、判ってるさ」
（4）
スネーク「そうか。判った、覚えておこう」
オタコン「選択肢として考えてみるといい」

【オタコンの忠告を無視】任意無線
※旧政府軍の服を着た状態で民兵を攻撃した場合
オタコン「(非難)……スネーク」
オタコン「君、反政府軍の兵士に手を出したろ」
スネーク「……あ、ああ、まあ」
オタコン「言ったじゃないか、彼らには友好的にしろって……お陰でせっかく彼らの服を着てるってのに、隠蔽効果が期待できなくなっちゃったよ！」
スネーク「……ああ、まあ、そうだな……」
スネーク「しかし、何とかするから心配するな。俺一人ならPMCと反政府軍両方相手でもどうにかなる。伊達に長年スニーキングスーツを着ちゃいない」
オタコン「そういうこと言ってるんじゃないよ！　君さっき、僕の忠告に「判った」って言ったじゃないか！」
スネーク「……う、む、ああ」

【反政府軍兵の動きを利用】任意無線
※反政府軍兵の姿を目撃した後にSEND
オタコン「スネーク、そこの反政府軍兵士達は君と同様、隠密裏にPMC拠点への接近を図っているようだ」
オタコン「君独自のルートを行くのもいいけど、彼らの後ろをついていくってのも手かもしれないよ」
オタコン「あるいは、両勢力が戦闘に突入するよう仕向けておいて、その隙に迂回路を抜けてゆくのもアリだ」
オタコン「その場合にしても、PMCの拠点防備を手薄にして、その潜入突破を容易にするという意味から、反政府軍に加勢した方が君にとって有利に働くだろうとは思う」
オタコン「何にせよ、状況に応じて君が最良と思う方法を選択してくれ」

さっき、僕の忠告に「判った」って言った

【鳥が警報装置1】任意無線

※「反政府軍兵の動きを利用」を聞いた後にSEND。初回のみ

オタコン「鳥の声、聞こえるかい、スネーク？」

スネーク「ああ。さっきから声の調子が変わってる」

スネーク「あれは、仲間に異状を知らせる鳴き方だ。きっと人間が近づいているんだろう。更に近づいたら、鳴くのを止めて飛び立つはずだ」

オタコン「そうだね。自然の中では、鳥は最高の警報装置になってくれる。彼らの声や動きに注意するといい」

■南米：送電施設（爆破前）

【送電施設について1】任意無線

※送電施設のエリアでSEND。初回のみ

オタコン「PMCの警備する送電施設があるね」

オタコン「重要インフラだ、高度な防衛体制がしかれてるはずだよ」

オタコン「反政府軍側も重要な攻撃目標と見なしてるだろう」

オタコン「両勢力間で戦闘が始まれば、それは必ず激しいものになる」

オタコン「彼らについていくか、単独で迂回するか、よく考えて行動するんだ」

【送電施設について2】任意無線

※施設周辺で戦闘が始まっていて、他に言うことがない場合「南米共通目的無線1」に以下を挿入

オタコン「周辺では送電施設を巡っての戦闘が始まっている。気をつけて行動してくれ」

【送電施設の破壊】任意無線

※「送電施設について1」を聞いた後にSEND。初回のみ

オタコン「スネーク、反政府軍はこれまで送電施設を無傷で奪取することを目的に、PMCとの戦闘を繰り返していたようだ」

オタコン「ところが、最近の反政府軍側の作戦行動を見ていると、どうも方針の微妙な変化が見受けられるんだ」

オタコン「以前と比べて、各種施設の破壊をためらわない傾向が見られる」

スネーク「……。ここは元々彼らの土地だ。仮にインフラに一定の損害が出たとしても、一旦地域を支配してしまえば後はどうとでも出来る。その為にはPMCの弱体化が最優先……といったところか」
オタコン「その可能性は否定できないね」
オタコン「送電施設の破壊も視野に入れているかも知れない」
スネーク「破壊か……。機能を止める程度なら、配電盤を使い物にならなくすれば良いだけだしな」
オタコン「PMC側もその可能性を念頭に、激しい防御戦闘を展開するはずだ」
オタコン「くれぐれも注意してくれ」
スネーク「了解だ」

【スナイパー出現1】リアルタイム無線
※身近で反政府軍兵士が狙撃されるのを目撃したら
オタコン「スネーク、PMCの狙撃だ!」
オタコン「気をつけて! 遮蔽物に身を隠しながら進むんだ!」

【スナイパー出現2】任意無線
※「スナイパー出現1」を聞いた後にSEND
オタコン「PMCは狙撃兵(スナイパー)を展開させているようだ」
スネーク「ああ。最初に狙われたのが俺じゃなかったのはラッキーだった」
オタコン「それにしても一体どこから」
スネーク「俺がスナイパーなら、見通しのきく高所から一帯を俯瞰して、姿を丸見えにさらしている連中を制圧(ピンダウン)するな」
オタコン「とすれば、スナイパーはその高台のどこかに?」
スネーク「恐らくそうだろう」
オタコン「OK。スネーク、まずはスナイパーへの対処を考えた方がいいだろう。高台、それから念のためその他の場所も探って、スナイパーの位置を特定するんだ」

【送電施設爆破1】リアルタイム無線
※反政府軍が送電施設を破壊した
オタコン「スネーク、発電施設の機能が止まったようだ」
オタコン「反政府軍が破壊したんだろう」

【送電施設爆破2】任意無線
※送電施設爆破デモの後にSEND
(1)送電施設を破壊したのが反政府軍だった場合。(3)に続く
オタコン「反政府軍が送電施設の機能停止に成功したようだ」
(2)送電施設を破壊したのがスネークだった場合。(3)に続く
オタコン「スネーク、送電施設の機能停止、うまくいったみたいだね」
スネーク「あれしきは朝飯前だ」
(3)
オタコン「拠点の一つを失った政府軍(PMC)側は、劣勢に立たされることになると思う」
オタコン「潜入のチャンスだよ、スネーク」

■南米：送電施設（爆破後）

【目的説明無線】任意無線
※送電施設のイベント後、初回のみ
オタコン「送電施設での戦闘は、一段落着いたようだね」
オタコン「だけど、戦闘を制した勢力が一帯を抑えている状況に変わりはない」
オタコン「気を抜いてはダメだよ、スネーク。見つからないように、慎重に前進してくれ」
【南米共通目的無線2】任意無線
※送電施設のイベント以降、言うことが無い場合
オタコン「ナオミの研究施設まで、まだ遠いよ」
オタコン「レーダー上に目的地の方角がマーク（◎）で表示されるから、参考にしながら前進してくれ」
【巡回兵士に注意】任意無線
※送電施設を破壊せずに次のマップに進んだ場合PMCが巡回している
オタコン「そこでは戦闘は行われていないようだけど、巡回している兵士はいるようだね。見つからないように注意を払ってくれ」
【先へ進め】任意無線
※送電施設の破壊に成功した場合
オタコン「PMCは、防御拠点へ兵力を集中したよう

だね」
スネーク「そのようだな。ＰＭＣはただの一兵もいない。進攻中の反政府軍兵士だけだ」
オタコン「よし、そのまま進むんだ。先を急ごう」
【鳥が警報装置2】任意無線
※エリア西側にいる場合で、「先に進め」を聞いた後でＳＥＮＤ
オタコン「スネーク、鳥の声、聞こえてるよね」
オタコン「鳴き方が急に変わったり、飛び立ったりしたら、そこに何かがいる」
オタコン「注意するんだよ」

■南米：捕虜収容施設（湿地帯・捕虜収容施設）

【現在地確認】リアルタイム無線
※湿地帯にいる場合。初回のみ
オタコン「スネーク、君はいま湿地帯を進んでいる」
オタコン「沼地だから足元は良くないが、背の高い水草が君の姿を隠してくれるだろう。その他にも身を隠せる場所が色々ありそうだね」

【泳ぎ方】任意無線
※水に入った後でＳＥＮＤ。初回のみ
オタコン「スネーク、水に入ったらこうやって泳ぐんだ」
オタコン「まず×(ホフク)ボタンを押して水中に潜る。水中でも移動は左スティックだ。方向を変えたいときは、右スティックか左スティックを倒してくれ」
オタコン「水面に出たいときは、上を向いて前進だ」
【排水溝について】任意無線
※湿地帯で発見した排水溝の中にいる時にＳＥＮＤ
オタコン「スネーク、そこは排水溝か何かかい？」
オタコン「位置関係からすると、その北にある収容施設の生活排水を排出するためのものかも知れないね」
オタコン「まさかそんなところを巡回している敵もいないだろう、スピードは落ちるかも知れないけど、逆に安全に進めるはずだ」
オタコン「しばらくそこを進んでみてもいいかもしれないね」

にも身を隠せる場所が色々ありそうだね」

【捕虜収容施設について1】リアルタイム無線

※湿地帯から収容施設エリアに入った場合。初回のみ

オタコン「スネーク、そこはどうやらPMCが管理している収容所のようだ」

オタコン「捕らえた反政府軍関係者を収監しているんだろう」

オタコン「厳重な警備、防衛体制が敷かれてる筈だ」

スネーク「じゃあ警備要員が使用するための武器を保管した施設も併設されていると考えて、不思議はないな」

オタコン「ああ、そうだね」

【捕虜収容施設について2】任意無線

※収容所内でSEND。初回のみ

オタコン「スネーク、そこはPMCが管理している捕虜収容所のようだね」

オタコン「厳重な防衛体制が敷かれてる筈だ」

（1）捕虜をまだ目撃していない場合。（3）か（4）に続く

オタコン「どう、捕虜の姿は目撃した？」

スネーク「いや、それらしい連中は見ていない。だがいるのは確かだ」

（2）捕虜のことを既に目撃している場合。（3）か（4）に続く

スネーク「ああ、それらしい連中を見たぞ」

（3）アイテムを既に取得している場合。（5）に続く

スネーク「それから、武器の保管庫もあった」

オタコン「保管庫？」

スネーク「ああ。目についたものをいくつか手に入れた」

オタコン「……スネーク、装備の現地調達もいいけど、戦闘で周囲が混乱してる今は、目立たずに進めるチャンスだ。装備品をあまり欲張らない方がいいと思う」

（4）アイテムをまだ取得していない場合。（5）に続く

スネーク「オタコン、この防衛体制だ。当然武器の保管施設もあると思うんだが」

オタコン「……武器を探すのかい？」

オタコン「ねえスネーク、僕としては、戦闘の混乱を利用して先に進んだ方がいいと思うんだけど……」

（5）

スネーク「だがどうするかは状況次第だ」

オタコン　「もちろん判断は君に任せる……だけど十分
　　　　　　気をつけて」

【現在地説明無線】　任意無線
※「捕虜収容施設について2」を聞いた後で、捕虜収容施設内か武器庫内でSEND。初回のみ
オタコン　「そこは収容施設だ」
（1）見張りを倒して捕虜を皆逃がしている場合に挿入。
（2）か（3）に続く
オタコン　「収監されていた反政府軍の捕虜達も、もう
　　　　　　既に全員逃亡したようだね」
（2）施設に保管されていた武器を奪っている場合に挿入。（3）に続く
オタコン　「保管されていた武器や装備も、いくつか頂
　　　　　　戴したようだし、」
（3）
オタコン　「あまり長居するような場所じゃ無いだろ
　　　　　　う」
オタコン　「適当な所で切り上げて、先を急いでくれ」

【鉄塔について1】　任意無線
※収容施設脇の鉄塔に登ってSEND。初回のみ
オタコン　「そこは監視用の鉄塔か何かかな」
スネーク　「多分そうだろう。遠くまでよく見えるし、
　　　　　　収容施設の敷地内も一望できる。敵の動き
　　　　　　を知るにはもってこいだ。遠距離の敵を狙
　　　　　　撃するにも都合がいい」
オタコン　「だけど遠くまでよく見えると言うことは、
　　　　　　逆に遠くから見つけられやすいということ
　　　　　　でもあるよ」
オタコン　「必要十分な情報を得たら、早めに降りた方
　　　　　　がいいだろう」

【鉄塔について2】　任意無線
※「鉄塔について1」を聞いた後にSEND
オタコン　「スネーク、まだそんなとこにいたの？」
スネーク　「すぐ降りる。そろそろ行かなくちゃな」
オタコン　「うん。そうしてくれ」

■南米：捕虜収容施設（塩田：資材置き場）

【現在地確認】任意無線
※塩田にいる時にSEND。初回のみ
オタコン「スネーク、君はいま塩田を進んでいる」
オタコン「そこでは、温泉として湧き出す岩塩の溶け込んだ地下水を、棚田で天日干しして塩を作っている。赤茶けた地表にちりばめられた塩の白……一景観だね」
オタコン「だけど、ご覧の通り見事すぎる見通しの良さでもある」
オタコン「うっかりすればすぐに見つかってしまうよ。これまで以上に慎重に進んでくれ」

【資材置き場について1】任意無線
※捕虜救出前に資材置き場でSEND。初回のみ
オタコン「君はいま資材置き場にいる」
オタコン「かなり古びた建造物だけど、反政府軍の捕虜を収容している一角があるらしい。警備状況は必ずしも甘くないはずだよ」

【資材置き場について2】任意無線
※捕虜救出後に資材置き場でSEND。初回のみ
オタコン「資材置き場だね」
オタコン「ここに収容されていた反政府軍の捕虜達は、もう大体逃げ出したみたいだね」
オタコン「そこに特別な用事はないだろう、スネーク」
オタコン「ナオミの研究施設へと急がなくちゃ。適当なところで出発してくれ」

■南米：邸宅

【施設まであと少し】任意無線
※エリア初回。他に言うことがなかったら
オタコン「スネーク、彼女のいる施設まであと少しだ」
オタコン「ここで捕まるようなヘマをしたりしないでくれよ」

【装甲ドーザーに便乗】リアルタイム無線
※装甲ドーザー登場デモ時
オタコン「スネーク、反政府軍側の装甲ドーザーだ！」
オタコン「邸宅への突破口を開くつもりだろう」
オタコン「援護して邸宅への突入に便乗するんだ！」

オタコン　「戦闘は続いている」
オタコン　「状況の混乱を利用するにしても、迂回して進むにしても、ナオミのいる施設まであと一息だ。とにかく気をつけてくれ」

【装甲ドーザー出現】任意無線
※「装甲ドーザーに便乗」を聞いた後でSEND。初回のみ
オタコン　「装甲ドーザーだ！　あれで門を突破する気だ」
オタコン　「スネーク、彼らの作戦に便乗しよう。門が開くのを待って突入だ」

【邸宅エリア侵入成功1】リアルタイム無線
※邸宅エリア入った直後
オタコン　「その邸宅の敷地内に、ナオミの研究施設がある」
オタコン　「至急内部に潜入して、彼女の居場所を目指してくれ」

【邸宅エリア侵入成功2】任意無線
※「邸宅エリア侵入成功1」を聞いた後にSEND。初回のみ
オタコン　「スネーク、君の目の前にある邸宅の敷地内に、ナオミが捕らわれている施設がある」
オタコン　「まずは邸宅内部への進入路を見つけるんだ」
オタコン　「反政府軍はここまで攻め上ってきた」
オタコン　「PMC側としてはここが最後の砦だ、死にものぐるいで守るだろう。戦闘は激しさを増す」
スネーク　「そうなるほど俺にとっては都合がいい」
オタコン　「それは状況を有利に活用した場合だけだよ。スネーク、慢心はいつだって禁物だ。気を引き締めて行くんだ」

【邸宅敷地内にいる】任意無線
※「邸宅エリア侵入成功2」を聞いた後にSEND。他に言うことがない場合
オタコン　「スネーク、その邸宅の敷地内にナオミがいる筈だ」

オタコン「レーダーの表示（◎）を参考にして、ナオミのいる場所を目指してくれ」

【研究施設を探せ】リアルタイム無線

※豪邸敷地に入った時、研究施設を目指すための促し

オタコン「ナオミの研究施設に繋がる通路がある筈だ」

オタコン「探してくれ、スネーク」

【アッキーナ発見】リアルタイム無線

※邸宅内の額縁を落とすとポスター発見

（1）

スネーク「アッキーナ！　南明奈か！」

（2）

スネーク「アッキーナか！」

【天窓へ向かえ】任意無線

※天窓の近くでＳＥＮＤ。（1）か（2）のどちらかを鳴らす

（1）

オタコン「スネーク、ナオミの研究施設へ行くには、閉鎖されていたドアの向こう側へ行く必要がある」

オタコン「天窓を通れば、それができるはずだ。天窓に向かってくれ」

（2）

オタコン「スネーク、天窓に向かうんだ。ナオミの研究施設へ行くには、天窓を通って閉鎖されたドアの向こう側へ行かなくちゃならない」

【ナオミの元へ向かえ】任意無線

※天窓通過後にＳＥＮＤ。初回のみ

オタコン「ナオミからのビデオメールには、彼女の研究室の位置情報も含まれていた」

オタコン「ナオミの元へ向かってくれ」

【ハシゴ無い？】任意無線

※「ナオミの元へ向かえ」を聞いた後にＳＥＮＤ

（1）

オタコン「スネーク、ナオミのいる場所はそこからごく近い」

オタコン「ただ、彼女から提供された位置と君の現在

位置とは、若干の高度差がある」
（2）ハシゴが見えない場所にいる場合、（1）に続けて鳴らす
オタコン「彼女はその上にいるんだろう。ハシゴか何か無いか？」
オタコン「あればそれを上ってみてくれ」
（3）ハシゴが見える場所にいる場合、（1）に続けて鳴らす
オタコン「彼女は上だ」
オタコン「そこにハシゴがあるね。上ってみてくれ」

■南米：研究施設（ヘイブン・トルーパー戦）
【ヘイブン・トルーパー戦1】リアルタイム無線
※ヘイブン・トルーパー戦、開始直後
オタコン「ナオミを追うには敵の囲みを破らなくちゃいけない」
オタコン「そこにいる敵兵を倒して道を開くんだ！」
【ヘイブン・トルーパー戦2】任意無線
※目的説明
オタコン「ナオミがまた連れ去られた！」

オタコン「スネーク、敵兵が邪魔だ。彼らを排除して、ナオミを追うんだ！」
【研究施設を利用しろ】任意無線
※「ヘイブン・トルーパー戦2」を聞いた後でSEND
オタコン「スネーク、ナオミの研究施設は複数の部屋と廊下に分かれている」
オタコン「その構造と設置されている研究設備を、遮蔽物（カバー）としてうまく利用するんだ」
【ヘイブン兵の戦術】任意無線
※「研究施設を利用しろ」を聞いた後でSEND
オタコン「敵は君を撹乱しつつ、好機をとらえて攻撃を加えてくる戦術を採っているようだ」
オタコン「攻撃の兆候や、突入してくる敵兵の存在に注意を払ってくれ」
【オクトカムも有効】任意無線
※「ヘイブン兵の戦術」を聞いた後でSEND
オタコン「敵の目を欺くにはオクトカムも有効だよ」
オタコン「敵が君を見失った隙にオクトカムで背景と

同化して、戦闘を有利に進めるんだ」

【首絞めに注意】任意無線
※ワイヤーで首を絞められたときにSEND

オタコン「至近距離まで接近してくる敵兵は、ワイヤーを使っているようだね」

オタコン「スネーク、もしまた敵の接近を許してワイヤーで首を絞められてしまったら、さっきと同じように、左スティックを激しく回して敵を振りほどくんだ」

【首絞め危険】任意無線
※ワイヤーで首絞めされたときにSEND

ローズ「近づいてくる敵には注意してスネーク」

ローズ「首を絞められると、あなたの気力は著しく低下してしまう」

ローズ「敵が首を絞めてきたら、すぐに振り払うのよ！」

【気力に注意】任意無線
※他に言うことがない場合

（1）

ローズ「戦闘が長引けば、気力ゲージに対する悪影響も心配されるわ」

ローズ「気を付けて戦って、スネーク」

（2）

ローズ「気力ゲージの残量に注意しながら、敵の妨害を取り除くのよ」

ローズ「しっかりね、スネーク！」

（3）

ローズ「気力の状態は大丈夫？ まだ頑張れる？」

ローズ「そこを切り抜けなくては、あなたのミッションは果たせない」

ローズ「どうか頑張って、スネーク！」

■南米：研究施設（ラフィング・オクトパス戦）

【オクトパス（ビースト）を倒せ】任意無線
※オクトパス（ビースト）戦、初回のみ

オタコン「スネーク、オクトパスのスーツは君のオクトカムと同等の性能を持っているみたいだ」

オタコン「戦い方も、擬態や罠（トラップ）を武器にしてくる」

オタコン　「神経を集中して、ヤツの擬態に惑わされないように気をつけろ！」

【オクトパスについて】任意無線
※オクトパス（ビースト）戦、初回のみ
ローズ　「あのビースト、何をするにも笑っている……」
スネーク　「今の奴なら、誰が何を話しかけても、笑うことだけで応えるだろうな」
ローズ　「ガンザー症候群にみられる症状に近いわね」
ローズ　「前後の文脈から外れた的外れな受け答えをするようになる、解離性障害の一つよ。戦場で強いストレスを受けた兵士にも、しばしば見られる症状なの」
スネーク　「楽しくて笑っているわけじゃないってことか」
ローズ　「そう。もしかしたらビーストの心には、それほどまでに深い傷がつけられているのかも知れないわね……」

【レーダーを使え】任意無線
※「オクトパス（ビースト）を倒せ」を聞いた後でSEND。他に言うことがない場合
オタコン　「スネーク、敵の気配が強まるとレーダー上に反応が現れる」
オタコン　「レーダー上の表示には常に注意するんだ、いいね」

【擬態に注意1】任意無線
※「レーダーを使え」を聞いた後でSEND。他に言うことがない場合
オタコン　「敵とこちらの装備は同じ技術レベルだ。優劣はそれ以外の所で決まる」
オタコン　「周囲の変化に気を配るんだ。まさかこんなものに、と思うようなものへ擬態しているかも知れない」
オタコン　「それに、こんなものあったかな？　と思うようなものがあれば、それも要注意だよ」

【擬態に注意2】任意無線
※オクトパスが擬態している場所付近でSEND

ローズ　「擬態というのは見た目で相手を欺くものだけれど、相手の心理的な隙を突くことによって高い効果が得られる」

ローズ　「『まさかこんな所には居ないはず』、『こんなモノに化けているとは思わなかった』といった、予想外のポイントを突いてくるから気を付けて」

【オクトパスの戦闘スーツについて】任意無線

※「擬態に注意1」を聞いた後でSEND。他に言うことがない場合

スネーク　「オタコン、奴の強化服、何か思い出さないか」

オタコン　「あの脚だろ?」（実際の脚ではなく、頭から四本伸びているマニピュレータのこと）

オタコン　「多分僕らの想像は間違ってないよ。あれはソリダスが着ていた戦闘スーツの発展型だろうと思う」

スネーク　「BB部隊はソリダスと何か関係が?」

オタコン　「そんなことはないと思うけど……そこらのPMCとは格が違うのは確かだ。奴の触手は中距離の敵に対しても打撃を与えることが出来るようだ」

オタコン　「充分間合いを取っているつもりでも油断は出来ない。出来る限り近寄らないようにするんだ」

スネーク　「了解だ」

【浮遊爆弾に注意1】任意無線

※タコボール（オクトパス専用グレネード）が出現した後でSEND

オタコン　「あの球状の武器、浮遊爆弾と言うべきかな。オクトパス専用の特殊兵器のようだね、初めて見るよ」

スネーク　「ああ、俺にめがけてホーミングしてくる。やっかいだな」

オタコン　「一種のMAV（マイクロ・エア・ビークル）なんだと思う。リモコンミサイルの仲間みたいなものだね」

スネーク　「対策は?」

オタコン　「うーん、どうもあれはターゲットに付着したあと、爆発までにタイムラグがあるみたいだ。オクトパス自身が、爆発に巻き込まれないためなのかもしれないけど……」

オタコン「この時間を利用してやろう。爆発する前に体から落とすんだ。付着力はそれほど強そうじゃないから、地面に転がれば簡単に体から離れると思う」
オタコン「体に触れる前に銃撃で破壊してもいい。がんばってくれ、スネーク」

【浮遊爆弾に注意2】任意無線
※「浮遊爆弾に注意1」を聞いた後にSEND
オタコン「スネーク、オクトパスの浮遊爆弾が体に付着したら、すぐに床を転がって落とすんだ、いいね」

【Mk.Ⅱ擬態トラップ】任意無線
※オクトパスがMk.Ⅱに擬態。スネークを呼ぶ偽Mk.Ⅱの呼び声に引っかかった後にSEND
（1）1回目の呼びかけの後、トラップに引っかかるまでの間にSEND
スネーク「オタコン、何故あんな風に俺を呼んだんだ？　向こう（廊下の奥）に何かあるのか？」

オタコン「え？　何の事？　僕は何もしてないけど……」
スネーク「いや、確かにお前だった」
オタコン「呼んでないってば。……もう、僕をからかってる場合じゃないだろう？　オクトパスに集中してくれ。頼むよ」
スネーク「え、あ、おいオタコ……（通信が切れる）」
（2）最初にトラップに引っかかった後にSEND
スネーク「おい、オタコン、あんな場所に誘導して何のつもりだ」
オタコン「ちょ、ちょっと待ってよ。誘導なんかしてないよ」
スネーク「おかげで仕掛け爆弾にかかった。（スゴんで）…死ぬところだったぞ」
オタコン「あ、ちょっとスネ―……（通信が切れる）」
（3）またトラップに引っかかった後にSEND
オタコン「スネーク、おかしくないか？　僕は君を呼んでないのに、君は僕に呼ばれている。…第三者がいるんだ」
スネーク「オクトパスか？」
オタコン「……あいつが何者か、考えてみるんだ」

スネーク「……アレ（Mk.Ⅱ）は擬態か？」
オタコン「疑うべきだろうね。注意して、スネーク」

（4）またまたトラップに引っかかった後にSEND
オタコン「スネーク、気を付けるんだ！　これはオクトパスの罠（トラップ）だ！」
オタコン「引っかからないでくれよ、いいね！」

【ナオミ擬態トラップ1】リアルタイム無線
※オクトパスがナオミに擬態。偽ナオミに近づき、攻撃を受ける前
オタコン「ナオミ!?　どうして……？」

【ナオミ擬態トラップ2】リアルタイム無線
※だまされて近づき、攻撃を食らった後
オタコン「擬態だったのか！　気を付けろスネーク！」

【気力に注意1】任意無線
※気力ゲージが高く、他に言うことがない場合
（1）
ローズ「スネーク、気力が下がりすぎれば、体に生じるトラブルで戦闘自体の継続も困難になりかねないわ」
ローズ「戦闘のさなかとはいっても、気力ゲージの値には気を付けるのよ」
（2）
ローズ「それどころではないと思うかも知れないけれど、気力ゲージの残量は戦闘能力に大きく影響するわ」
ローズ「気力ゲージに気を配ることを忘れないで」

【気力に注意2】任意無線
※気力ゲージが低く、他に言うことがない場合
（1）
ローズ「スネーク、気力ゲージがかなり少なくなっているわ」
ローズ「敵の隙をみて、少しずつでもいいから気力の回復を試みて」
（2）
ローズ「気力がかなり減退してしまっているわ」
ローズ「そのままでは不利よ。戦闘はもちろんだけど、気力の回復にも努めて」

【オクトパス戦（ビューティ）】リアルタイム無線
※オクトパス戦（ビューティ）開始直後
オタコン「スネーク、奴はスーツを捨てた」
オタコン「どんな攻撃を仕掛けてくるか判らない、気をつけるんだ！」

【ビューティに注意1】任意無線
※ビューティに抱きつかれる前にSEND
オタコン「見る限り奴は丸腰みたいだ」
オタコン「ただ君に近づいてこようとしている」
オタコン「どういうつもりか判らないけれど、気を付けてスネーク」

【ビューティに注意2】任意無線
※ビューティに抱きつかれた後にSEND
（1）
オタコン「抱きつかれるとダメージを受けてしまう」
オタコン「ビューティに近づいては危険だ。離れて、スネーク！」
（2）
オタコン「スネーク、彼女を近づけないで！」
オタコン「常に間合いを保つんだ！」

【ビューティに注意3】任意無線
※ビューティに抱きつかれる前にSEND
ローズ「近づいてくるビューティに気を付けて！」
ローズ「ひょっとしたら強化兵の様に、接近して危害を加えるつもりかもしれないわ」

【ビューティに注意4】任意無線
※ビューティに抱きつかれた後にSEND
ローズ「スネーク、彼女の抱擁を受けてはいけない」
ローズ「ビューティの接近を許さないで。距離を置くよう気を付けるのよ」

■南米：山道（ナオミ追跡）

【ナオミを追え1】リアルタイム無線
※開始直後
オタコン「スネーク、ナオミの痕跡をたどって、彼女を追うんだ」
オタコン「敵の妨害があるかも知れない。注意してくれ」

【ナオミを追え2】任意無線

※開始直後にSEND。初回のみ(1)。二回目以降は(2)を鳴らす

(1)

オタコン「彼女が残していった痕跡(ハイヒール痕)は明瞭だ」

オタコン「雷電のアドバイスも参考にして、ナオミの行く先を突き止めてくれ！」

(2)

オタコン「君を足止めしようと、敵による待ち伏せ(アンブッシュ)も予想される」

オタコン「レーダーに現れる敵の気配に気をつけてくれ」

【壁を這うヘイブン兵について】任意無線

※「ナオミを追え2」を聞いた後でSEND

オタコン「スネーク、強化兵達(カエル)が壁に張り付いているのには仕掛けがあるようだ」

スネーク「スパイクや吸盤を使っているようには見えないが…」

オタコン「推測だけど、彼らのグローブやブーツには、ファンデルワールス力を利用した吸着機構が備えられているんじゃないかな」

スネーク「ファンデ……何だ、それは？」

オタコン「電気的に中性な分子間に働く相互作用のことだよ。ヤモリ(GEGKO)が壁に張り付けるのも、この力を利用しているからなんだ」

スネーク「ヤモリか…、(月光の呼称といい、またヤモリか)。しかしヤモリと人間じゃ随分重さが違うだろう」

オタコン「10年くらい前の話だけど、5ミリ四方の吸着テープで100gの物体が固定できたっていう実験結果を聞いたことがある。それからの技術進歩を考えれば、強化兵のあの振る舞いも不思議じゃないのかも」

スネーク「(考えている)……オタコン、ヴァンプがビッグ・シェルの支柱を駆けあがっていたのを覚えているか？ ……まさかあれも？」

オタコン「同じ技術じゃないかって？ うん、あり得るね」

スネーク「得体の知れない魔術なんかじゃなかった、ということか」

オタコン「はは。想像を超えた技術っていうのは、そ

んな風に見えるものなのかもしれないね」

【トラップに注意1】任意無線
※クレイモア系のトラップ発見後にSEND
オタコン「爆発物のトラップか……」
オタコン「引っかかれば、ダメージを負うだけじゃなく、爆発音で敵を警戒させてしまう」
オタコン「気をつけてくれ、スネーク」
【ソリッド・アイ作動音に注意】リアルタイム無線
※ナオミ追跡中、ソリッド・アイの音をPMCに気づかれた場合（雷電の強制無線を聞いた後）
オタコン「まさか……ソリッド・アイの作動音が気付かれたのか!?」
オタコン「隠れて、スネーク！」
【足跡消えた1】任意無線
※ナオミの足跡が見えない場所（川）でSEND
オタコン「もしナオミの足跡（ハイヒール痕）を見失ったとしても、慌てないでくれ、スネーク」
オタコン「雷電が言っていた言葉を思い出すんだ」

オタコン「森の中を行く者は、それと自覚せずに様々な痕跡を残す」
オタコン「それらを注意深く観察して見つけ出すんだ」
【スカウト&アウェアネス】任意無線
※「足跡消えた1」を聞いた後でSEND
オタコン「スネーク、雷電の言っていたスカウトについてだけど、ちょっとだけ調べてみたよ」
オタコン「彼は「スカウト」という言葉を使っていたけど、これは軍隊一般で言われている偵察や斥候とは少しニュアンスが違う」
スネーク「だろうな。奴の話しぶりからそれは感じた」
オタコン「ここでいう「スカウト」というのは元来、ネイティブ・アメリカンの戦士を指す言葉だ。でも僕としては、彼らの自然に対する姿勢に根ざした概念だとむしろ理解した」
オタコン「自然を知り、自然に学び、自然を畏れ、愛し、共存する。そうした生き方の様々な側面が結晶したもの、それがスカウトの真髄であるらしい」

オタコン「その基本となるのが「アウェアネス」、「気づき」なんだ」

オタコン「例えば狩りのため、獲物の動物を追跡したとする」

オタコン「その時、身の回りに存在するあらゆるものが、追う相手の手がかりを与えてくれる。足跡、草や枝の変異、空気の動き、「キャリー・オーバー」、すなわち本来そこにある筈のないモノ……。だけど、追跡者（トラッカー）がそれらに気づけなければ、何の意味もない」

オタコン「どんな小さな事にでも気づくことのできる感覚を、ネイティブ・アメリカンは小さな子供の頃から自然の暮らしの中で体得していく」

オタコン「彼らは五感の全てを使う。肌感覚を大切にして、冬場でもノースリーブで過ごしたりする。風ひとつとっても、色々な感じ方をするみたいだ。僕らには印象的だけど、彼らは「風が回る」というような表現を普通に使ったりするらしい」

スネーク「……想像つかんな」

オタコン「僕もだよ。……雷電は、その境地に達しているのかな」

スネーク「さあな。今度聞いてみるさ」

【足跡消えた2】任意無線

※「スカウト&アウェアネス」を聞いた後でSEND

オタコン「地面をえぐって作られた足跡は、周囲の地表との間に温度差がある」

オタコン「ソリッド・アイを暗視（NV）モードにすれば、その温度差を検知して足跡を可視化することが出来るよ」

【ナオミ追跡イベント】リアルタイム無線

※各種状況別に用意

（1）

オタコン「スネーク、複数のルートに分かれてる。よく足跡を見て」

（2）

オタコン「ここで、別のルートに分かれたみたいだ」

（3）

オタコン「（ハンカチが落ちている）スネーク、それ、

（4）
もしかしてナオミの…？」
オタコン　「（下着が岩にかかっている）えっ！　な、何でこんなモノが……。ナオミ…？（ナオミの姿を想像しながら）」
（5）
オタコン　「ん？　おかしいな……ナオミの靴の跡だけが消えてる……？」
（6）
オタコン　「奴ら、ここで別々のコースに分かれたんだね」
（7）
オタコン　「足跡が分かれてる」
（8）
オタコン　「スネーク、急に足跡が増えた。警備が厳重になってるみたいだ、ナオミが近いのかも……」

【待ち伏せ注意】任意無線
※待ち伏せに引っかかった後にSEND
（1）
オタコン　「敵は僕らの追跡を予測して、足跡の残し方を工夫している。罠にはめる気なんだ」
オタコン　「スネーク、ただ足跡を追うだけじゃダメだ」
オタコン　「ナオミがどっちに行ったのか、必ず手がかりがあるはずだ」
（2）
オタコン　「敵は足跡に細工して、僕らを混乱させようとしている」
オタコン　「足跡をよく見て、ちょっとした変化にも注意して。ルートは慎重に選ぶんだ」

【雷電強制無線】強制無線
※プレイヤーが迷っていたら
（1）河を渡った後の、深い足跡の謎解き
雷電　「スネーク、重ければ重いほど足跡は深く残る。ソリッド・アイで足跡を見比べるんだ。深い足跡ほど、他より色が濃く見える筈だ」
スネーク　「だがナオミの足跡は他の兵士に比べて浅いはずだ。兵装を何もつけていないからな」
雷電　「或いは人を抱えていれば、その重みで足跡は深くなる」
スネーク　「ナオミを背負っている兵士がいる？」

雷電　「より深く地面をえぐっている足跡は無いか」
雷電　「よく注意してみろ」
(2) 草木が折れている
雷電　「自然は多くを告げてくれる」
雷電　「追うべきは、対象者とその護送部隊。つまり複数で行動している方だ」
雷電　「草を見ろ。一人が歩くか、多人数が歩くか、それだけで様子は大きく変わる」
雷電　「草がもっとも多く踏まれている方向に進め」
(3) 足跡の深さ、ナオミががに股なのは変
雷電　「足跡の形だけを見ていてもダメだ。目標の靴の足跡を見つけても油断するな」
雷電　「よく見ろ。遺された足跡の上に、対象者の姿を思い描くんだ」
雷電　「足跡の深さは、ナオミの体重にふさわしいか？」
雷電　「歩幅、足の開き、つま先の開きは、ナオミの歩き方と一致するか？」
雷電　「注意しろ。ハンテッドにあざむかれるな」

(4) PMCはスカウトなので、ソリッド・アイの作動音を聞かれ、背後から接近できない
雷電　「スネーク、そこのPMCは、ある程度スカウトの訓練を受けているようだ」
雷電　「彼らはソリッド・アイの微弱な作動音も察知する」
スネーク　「敵の近くでソリッド・アイをつけていたらこちらの位置を知らせるようなものだ」
雷電　「そう。敵に接近するときは、ソリッド・アイの機能を止めるんだ」

【ミステリーサークル】任意無線
※ミステリーサークル・スネークアブダクション後
オタコン　「……変だな……。さっき、ホンの短い間だったけど君からの信号が途絶えたんだ……。応答装置が不安定になってるのかな……」
オタコン　「(何か見つけた。身を乗り出して)……あ。ねえ、君が今立ってるところにあるの、それってミステリーサークルじゃないか⁉」
スネーク　「誰かが踏み荒らした跡に見えるが」
オタコン　「(無視) ミステリーサークルは、地球外知

的生命体が活動していた痕跡といわれている。てことは、さっきのロストはＵＦＯに誘拐されて……？」

スネーク「何をぶつぶつ言ってるんだ」

オタコン「スネーク、身体に異常は？」

スネーク「特に感じない」

オタコン「（神妙に考えて）……。人類の科学力では推し量れないこともある」

スネーク「何だって？（何を言い出す気だ？）」

オタコン「まあ、そこはＵＦＯ目撃件数も多い南米だしね、珍しいことじゃないのかも。無事なら、とにかく引き続きナオミを追ってくれ、スネーク」（科学で解明できないことには割り切りが早いオタコン）

スネーク「（何なんだ）……そうしよう」

【ゴール間近】任意無線

※ナオミ追跡イベントのゴール付近でＳＥＮＤ

オタコン「スネーク、Ｍｋ．Ⅱ（マーク・ツー）の集音マイクがヘリのローター音らしきものを拾ってる」

オタコン「近くにヘリポートが……？」

オタコン「森はその辺りで終わってるのかも知れないね。スネーク、ヘリポートに抜ける出口はその近くにあるはずだよ。探してみて」

■南米：邸宅～高地森林部・幹線道路（ストライカー脱出）

【市場へ向かえ】リアルタイム無線

※開始直後

オタコン「スネーク、その先の市場を越えたところにヘリをつける」

オタコン「それより傍には近づけない。なんとか市場まで来てくれ！」

【機銃の操作法】リアルタイム無線

※「市場へ向かえ」を聞いた後で

オタコン「スネーク、機銃を撃つには、まず機銃の側（そば）でアクションボタンを押すんだ」

オタコン「次に右スティックで狙いを定め、攻撃ボタンで射撃する」

オタコン「よく狙えよ、スネーク！」

【敵を排除せよ】 リアルタイム無線
※少し時間が経過したら
オタコン「敵を排除するんだ、スネーク！」
オタコン「こいつらが邪魔で前に進めない！」

【ゾンビPMC攻略1】 リアルタイム無線
※ゾンビPMC出現時
オタコン「あいつら、感覚が麻痺してるみたいだ。小火器じゃ効き目が薄い」
オタコン「大口径の機銃なら撃ち倒せる筈だ。機銃を使ってくれ」

【ゾンビPMC攻略2】 リアルタイム無線
※ゾンビPMCがストライカーに上がってきたら
オタコン「こいつらには普通の銃じゃ効果は薄い」
オタコン「近接戦闘で対処するんだ！」

【ゾンビPMCについて】 任意無線
※開始直後にSEND。初回のみ
ローズ「あなた達を追撃している敵……通常とは明らかに異なる感情の状態を示している」
ローズ「怒りも恐れも悲しみも、全てのメーターを振り切ったかのような」
ローズ「一体何が起きたの……？」

【目的確認前半1】 任意無線
※イベント前半で言うことがなかったら
オタコン「スネーク、僕は市場の先にある広場で君たちの到着を待ってる！」
オタコン「脱出用のヘリもそこだ！」
オタコン「何とか無事にヘリのいる場所までたどり着いてくれ！」

【目的確認前半2】 任意無線
※イベント前半で言うことがなかったら
ローズ「スネーク、その状況を突破するのが先決ね」
ローズ「振り落とされないように気を付けて、一刻も早く安全な場所にたどり着けるように頑張って！」

【ゲート破壊促し】 リアルタイム無線
※ゲートが見えた辺りで

オタコン　「スネーク、そのゲートを撃つんだ！」

【目的確認後半1】任意無線

※イベント後半で言うことがなかったら

オタコン　「脱出用ヘリの離陸準備はほとんど終わったよ！」

オタコン　「市場の先にある広場で、君たちの到着を待ってる！」

オタコン　「スネーク、ナオミを無事に連れてきてくれ！」

【目的確認後半2】任意無線

※イベント後半で言うことがなかったら

ローズ　「スネーク、目的地にだいぶ近づいたようね」

ローズ　「もう少しよ、気力ゲージの状態にも注意しながら何とか頑張ってちょうだい」

【月光攻略】リアルタイム無線

※月光出現時

オタコン　「スネーク、機銃だ！　機銃で月光を撃つんだ！」

【月光の体当たりに注意】リアルタイム無線

※月光がストライカーに接近したら

オタコン　「月光が体当たりしてくる！」

オタコン　「接近を許しちゃダメだ！」

【敵兵を排除せよ】リアルタイム無線

※ストライカーの行く手を阻むパワードスーツとＰＭＣを排除するよう、スネークに促すオタコン（汎用）

（1）

オタコン　「パワードスーツが邪魔だ！」

（2）

オタコン　「やっつけてくれ、スネーク！」

（3）

オタコン　「パワードスーツを撃破してくれ！」

（4）

オタコン　「くそ！　ＰＭＣが邪魔だ！」

（5）

オタコン　「何とかできないか、スネーク？」

■南米：市場

【広場へ向かえ1】リアルタイム無線
※開始直後
オタコン　「雷電が敵を食い止めている」
オタコン　「その隙にそこを脱出するんだ！」

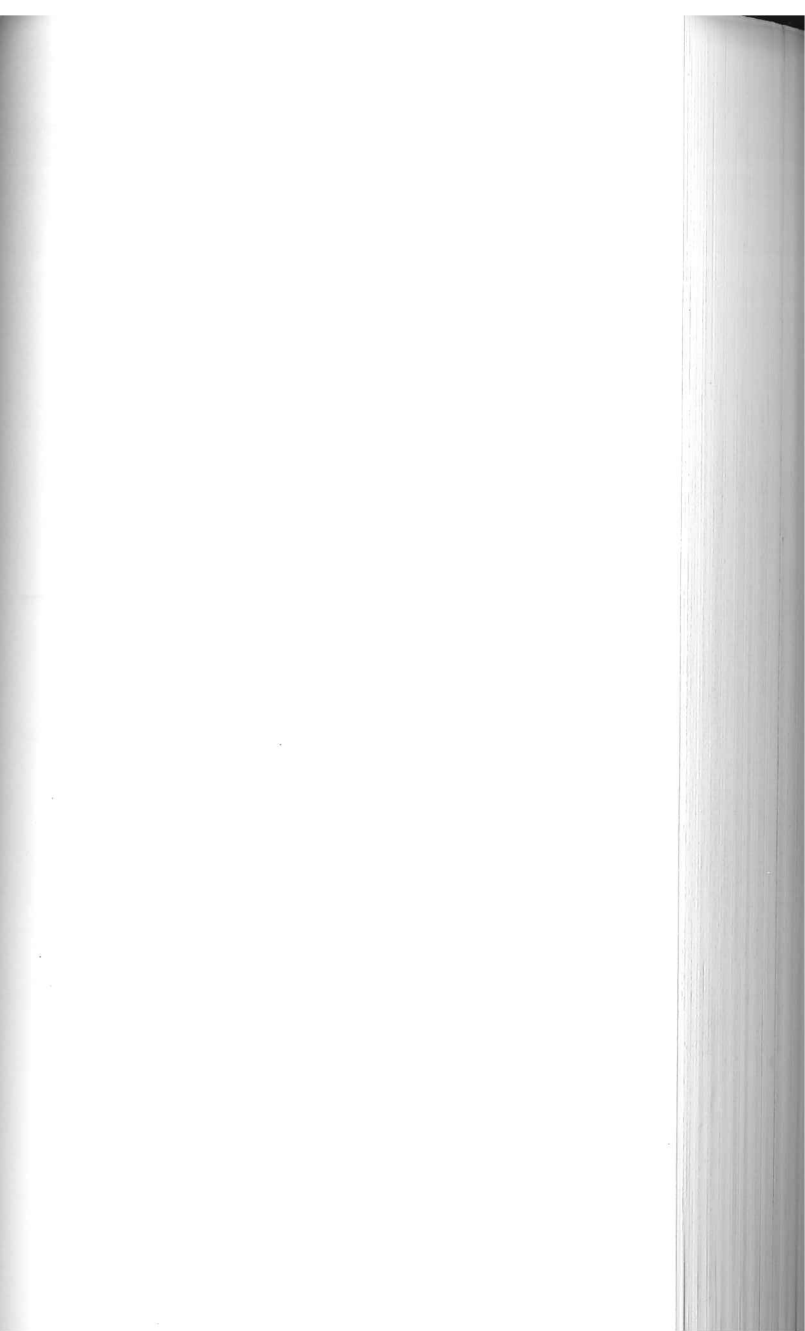
【広場へ向かえ2】任意無線
※開始直後にSEND。目的説明無線
(1)
オタコン　「スネーク、あと少しだ！」
オタコン　「雷電が敵を足止めしてる」
オタコン　「いまのうちに、市場を抜けてヘリの所まで急げ！」
(2)
オタコン　「スネーク、早く市場を抜けるんだ！」
オタコン　「ヘリが待っている場所まで走ってくれ！」

【ヘリに急げ】任意無線
※他に言うことがなかったら
(1)
ローズ　「スネーク、あと少しよ！　エメリッヒ博士がヘリで待っているわ！」
(2)
ローズ　「ヘリまでもうすぐよ！　走ってスネーク、走って！」
(3)
ローズ　「気力ゲージのことは、この際後回しよ！　今はヘリに急いで！」

【余計なことをするな】リアルタイム無線
※一般人を銃で狙うと
(1)
オタコン　「スネーク、そんなことしてる暇はないよ！」
オタコン　「さっさと銃を下ろして、ヘリまで走るんだ！」
(2)
オタコン　「スネーク！　そんなことやめて走るんだ！」
(3)
オタコン　「余計なことしてないで走るんだ、スネーク！」

【月光相手にするな1】リアルタイム無線
※月光の出現時
オタコン　「スネーク、月光の相手をしてる余裕はない」
オタコン　「奴は無視して、早くそこを離れろ！」

【月光相手にするな2】リアルタイム無線
※月光の相手ばかりしていると
（1）
オタコン　「月光は放っておくんだ、スネーク！」
（2）
オタコン　「時間がない、早くヘリまで来てくれ！」
（3）
オタコン　「スネーク！　月光は無視するんだ！」
（4）
オタコン　「急いでヘリまで走れ！」

【あと少し】リアルタイム無線
※広場が見える位置に来たら
オタコン　「スネーク、君の姿が見えた！」
オタコン　「あと少しだ！　走れスネーク、走れ！」

ACT3

Third Sun

第三の太陽

【タイトル】

Mission Briefing

【実写目玉焼き3／ムービー】　ノーマッド機内

——目玉焼きを焼くサニー（実写映像）。玉子ひとつ目には一つの卵黄。玉子二つ目には卵黄が二つ入っている。目玉が三つ。三つ目焼き。ソリダスを暗示する。旨く焼ける。

——サニーの鼻歌がＯＦＦで聴こえている。鼻歌はよく聴くと元素記号。

サニー　「ネプツニウム、プルトニウム、アメリシウム、キュリウム」

サニー　「サマリウム、ジスプロシウム、プロトアクチニウム」

サニー　「トリウム、ウラン、セシウム、テルビウム、インジウム」

サニー　「ポロニウム、ローレンシウム…」

——F.O.

【東欧潜入前1／ポリデモ】　ノーマッド機内

——鼻歌を唄いながら目玉焼きを焼いているサニー。横でナオミが見ている。ナオミが近づくと、

サニーは途端に鼻歌をやめる。

――ナオミは白衣ではなく、室内着（スカート）。髪に蒼い薔薇を挿している。

ナオミ　「蓋をしたほうがいいわ」

――フライパンに蓋をするナオミ。サニーは不思議そうに見ている。

ナオミ　「このまま1分」

ナオミ　「料理が好きなのね。偉いわ」

――サニー、ナオミの顔は見ずに、

サニー　「こ、これ？　これ、片面焼き（サニー・サイドアップ）占い」

サニー　「う、うまく焼けた時、い、良いことがある」

ナオミ　「へえ、それで両面焼き（ターン・オーバー）じゃないのね」

――サニー、料理用時計（ガーコ）のスイッチを慌てて押す。

ナオミ　「でも、料理のコツは食べてくれる人の事を考える事」

サニー　「う、うん（言葉にならない）」

――うまく会話を引き出せないナオミ。ふと壁を観る。そこに女性の写真。

ナオミ　「（壁の写真を見て）これ、お母さん？」

サニー　「う、うん」

――料理から目線をはずさずにうなずくサニー。サニーの「孤独（オルガは既に亡くなっている）」を知り、顔を曇らせるナオミ、わざと笑顔を作る。

ナオミ　「（サニーを見て）綺麗な人ね」

サニー　「う、うん」

――と、頷くだけで、表情を変えないサニー。ナオミ、話題を変える。

ナオミ　「ねぇ、さっきの鼻歌、元素記号でしょ？」

ナオミ　「トリウム、プロトアクチニウム、ウラン、ネプツニウム、プルトニウム、アメリシウム…」

――ナオミは鼻歌ではなく、普通に早口で元素記号を云う。少し驚いてナオミを見るサニー。ナオミ、記憶があいまいなのか、アメリシウムでつまずく。

ナオミ　「ア、アメリシウム…」
　　　　――ナオミ、思い出すが自信がない。サニーは教えるように、
サニー　「キュリウム」（小声で。ナオミも同時に）
ナオミ　「（思い出した）キュリウム！」
サニー　「（当然でしょ）キュリウム」
ナオミ　「そう、キュリウム！（笑）」
　　　　――ナオミ、微笑みながらサニーをみつめる。サニーもナオミと視線を合わせる。
　　　　――サニー、見られていることに気づき視線を外すが、ナオミの胸ポケットの蒼いバラに気づいて顔を上げる。サニーの視線に気づくナオミ。
ナオミ　「これ？」
ナオミ　「ちょっと、いい？」
　　　　――ナオミは胸ポケットに挿した蒼いバラをサニーにあげる。サニーの耳に挿す。
　　　　――ナオミ、調理台のステンレスの壁を鏡代わりにして、サニーの姿を映す。サニー、照れる。初めてのお花。

ナオミ「女の子はね、いつも綺麗でいなくちゃ」

——サニーの髪をそっと直してあげるナオミ。

サニー「オルガっていうの」

ナオミ「そう」

——ほんの少し、うち解ける二人。とその時、フライパンの蓋の隙間から煙が上がる。

ナオミ「あ、焦げちゃう」

ナオミ「待って…」

——フライパン返しをサニーの手の上から持って手伝うナオミ。うまく取れて皿にうつすサニー。

ナオミ「できた！」

——サニー、ナオミを見て、

サニー「あ、ありがとう…」

ナオミ「はい（ちゃんと聞こえたわよ）。よくできました！」

――微笑むナオミ。サニー、気持ちが通じて、笑う。今頃、タイマー（ガーコ）がガーガーと鳴き出す！
――皿の上に太陽が三つある。
――F.O.

【東欧潜入前2／ポリデモ】　ノーマッド機内

――海上を飛行するノーマッド（輸送機）。

【東欧潜入前3／サードパーソンデモ】　ノーマッド機内

ナオミ　「いい、リキッドは東欧にいる。目的はビッグボスの遺体」
オタコン　「なんだって！　一体、何の為に？」
ナオミ　「ビッグボスの遺体はＳＯＰ（ソップ）へ介入する為の最後の鍵なの」
――ナオミ、パソコン画面が繋がったスクリーンを見せる。
――スネーク（普段着）は上のキッチンの換気扇の前で煙草を吸っている。サニーは下でパソコン（ガウディ）を操作して、ネットサーフィンをしている。
ナオミ　「鍵となっているのはビッグボスの遺伝子コードと生体情報よ」

ナオミ　「それがなければシステム(SOP)への介入は出来ない」
オタコン　「じゃあ、これまでは？　今までは？」

――システムの説明データ、CG等。二つの実験をわかりやすく画面で説明。ナオミは、机の下で、足先でオタコンに触れるなどオタコンを誘惑。オタコンがナオミを観ていた理由はこれ。

ナオミ　「1度目の発動（中東）はリキッドのDNAチップから遺伝子コードのみが使われた」
ナオミ　「（ヴァンプが起こした）2度目の発動（南米）には…スネークの血液から採りだした、DNAコードと生体情報が使われた」

――スネーク、ナオミの話を聞いて、採血の痕を見る。スネーク、上から紫煙をふかしながら、下の二人に肩越しに聴く。スネークは煙草を吸いながら、たまに咳き込む。

スネーク　「（OFF）代用が利くなら何故オリジナルの遺伝子が必要なんだ？」
ナオミ　「リキッドの遺伝子配列も、スネーク、あなたの遺伝子配列も、オリジナルのビッグボスとは100％一致しないの」
スネーク　「（かなりビックリ）一致しない？」

――スネーク、かなり大きく咳き込んだ後、驚いて煙草を消す。階段を下りてくるスネーク。足取

りはダメージのせいか、かなりたどたどしい。

ナオミ「クローン化の際に埋め込まれたマーカー、卵細胞内ミトコンドリアのDNA混入、意図的に改竄された終結(ターミネーター)遺伝子、科学的に言うと」

――説明データ、CG等。科学番組の様な説明をする。

――スネーク、階段から降りてきて話に加わる。

ナオミ「あなたもリキッドも、限りなくビッグボスに近い、別人よ」

オタコン「別人?」

――驚くオタコン、スネークの顔色をうかがう。

スネーク「それがリキッドの言っていた言葉の意味?」

【フラッシュバック】リキッド回想。

リキッド(回想)「俺たちは親父(ビッグボス)のコピー(クローン)ではなかった!」

ナオミ「ソリダスが造られたのはそのためよ」

――ＭＧＳ２の結末。ソリダスが死んだ説明データ、ＣＧ等。

スネーク　「だが奴は死んだ」

ナオミ　「よく聴いて。ここからが本題なの」

ナオミ　「システム（ＳＯＰ）を管理しているＡＩには、攻性の強い高度な検知システム（ＩＤＳ）が使われている」

ナオミ　「ネットワーク内を循環する命令、データを特有のコードで検知しているの」

ナオミ　「これに適合しないデータは異物として処理される。白血球に殺されるウイルスのように」

ナオミ　「そしてこの認証プログラムには、私が関与したＦＯＸＤＩＥの『遺伝子特定プログラム』が使われているの」

ナオミ　「鍵（パス）となるコードが完全に一致した場合のみ、ホストの命令（コマンド）が正常に動作するように出来ている」

ナオミ　「でも…、でももし、不正侵入の疑いが出た場合、その遺伝子コードはシステム（ＳＯＰ）内のブラックリストに登録され、以後、その遺伝子コードでのアクセスははじかれてしまう」

ナオミ　「だから代用を使う場合は実験の度にアクセス用の遺伝子コードを変える必要があ

るの」

スネーク　「つまり、中東や南米のアクセスはお試しだったわけだ」

オタコン　「しかし驚いたな、スネークとビッグボスの遺伝情報が同じじゃない」

ナオミ　「正確な意味でいうと、リキッドとも遺伝情報は同じじゃないわ」

ナオミ　「モセス事件でＦＯＸＤＩＥがリキッドにだけ効いた…、あなたに発症しなかった理由はそこにある」

ナオミ　「つまり、もしリキッドがオリジナルであるビッグボスの遺伝情報（コード）を使った場合、彼はシステム（ＳＯＰ）を完全な支配下に置くことが出来てしまうの」

スネーク　「待ってくれ。ビッグボスのコードだけではダメなんだろう？　同時にビッグボスの生体情報も必要なはずだ」

オタコン　「（スネークに同意して）そうだよ、彼は既に死んでいる」

――ナオミ、スネーク、オタコンの顔を見た後、モニターに視線を移し、

ナオミ　「いえ、彼は生きている（アライブ）」

――二人、唖然とする。

スネーク「ビッグボスが生きている？」

ナオミ「肉体、いえ、ビッグボスの細胞は生きている」

スネーク「そんな馬鹿な」

ナオミ「機械に繋がれた、二度と動くことのない脳死体（バイオモート）としてね」

——ナオミ、立ち上がる。モニターに映された世界地図を見る。両足を大きく開き、モデルのようなポーズ。Mk．Ⅱチャンス。オタコン、釘付け。

——インテグラルの写真撮影会を思い出すシチュエーション。

ナオミ「リキッドはビッグボスの身体を追って既に東欧へ向かっているわ。最初から、彼は南米の実験もうまくいくとは考えていなかった」

スネーク「東欧だって？」

【フラッシュバック】

ヴァンプ（回想）「テストは失敗です。ヤツのコードでも」

リキッド（回想）「やはりな。純度が低い。完全体が必要だ」

ヴァンプ（回想）「オリジナル（ビッグボス）を使うしかありません」

――ナオミ、地図の前からスネークの前に移動して、

ナオミ「彼（遺体）を入手したら、リキッドは最終行動に出るつもりよ」

スネーク「今度こそ、SOPシステムを奪うつもりだな？」

ナオミ「そう、その前に阻止しないと。SOPシステムは完全に掌握されてしまう」

――雷電が苦痛に声を上げる。ナオミは雷電に気づき、雷電に近づく。雷電、まだ意識がしっかりしていない。

――ナオミは、ヴァンプとの戦闘で出来た雷電の傷を見ると表情を曇らせる。兄、フランク（MGS1で死んだ）を思い出すナオミ。ナオミは我が兄を思うように雷電の傷口（破損箇所）をなぞる。

サニー「ハル兄さん、あった！」

――サニーのスパコンを覗き込むオタコン。AT社（トクガワ）のマーク。モニター上にデータ列がめまぐるしく上がっていく。人体の形状をした設計図のような画面がいくつか開く。全身、背中、肘関節…。オタコン、ナオミが映っているノートパソコンを閉めると、サニーのパソコンに近づく。スネーク、煙草をもったまま後に続く。

オタコン「これだ…」

スネーク「これはどこからハッキングした？」

オタコン　「ATセキュリティ、つまり『愛国者達』」

——雷電から離れてモニターを観るナオミ。涙を浮かべるナオミ。

ナオミ　「こんなことがまだ続いているなんて…」

——ナオミの涙にうろたえるオタコン。涙を拭うナオミ。

オタコン　「戦争経済のお陰で、開発競争は激化している」

オタコン　「PMCだけじゃない。軍需産業に関わる企業もモラルを失う一方だ」

オタコン　「そして、その悪に無邪気なまでに手を貸しているのが、僕ら科学者(サイエンスホリック)だ」

——ナオミ、同じ痛みを感じているオタコンに気付く。サニー、オタコンに向かって、

サニー　「ジャックを治せる?」

オタコン　「どうだろう…」

——オタコン、自信がない。サニー、スネークを見る。スネーク、煙草を咥え首を横に振る。

ナオミ　「サニー、ちょっといい?」

――ナオミ、サニーのスパコンの前に座って、てきぱきとデータをいじる。キータッチは猛烈に速い。サニー、感心する。

ナオミ「駄目よ。ここでは治せない」

サニー「え？　どういう事？」

――ナオミ、パソコンをいじってある項目を見せる。雷電の血中データ。

ナオミ「これを見て」

ナオミ「人工血液は透析しないといけない。でも、ここにはその設備がない」

サニー「透析？」

ナオミ「傷の治療も重要だけど、それまで持たない」

――意識を失った雷電の反応はない。

サニー「と、透析って、じん、腎臓透析のようなもの？」

ナオミ「そうよ。彼の血はホワイトブラッドと言われた旧世代の軍事用人工血液なの」

ナオミ「一定時間使用したら透析して血液を濾過しないといけない。彼は今、自家中毒に陥っている」

——サニー、しばらくベッドの雷電を見つめた後、パソコン（ガウディ）に戻って何かしらの作業を進める。サニーの背後に立つナオミは、オタコンを見つめている。と、そこに雷電の声（コンピュータヴォイス）。

雷電　「東欧に向かってくれ」

——ナオミ、雷電に近づく。

ナオミ　「どういう事？」

——雷電、顔をあげてナオミに伝える。

雷電　「東欧に、俺を治療できる設備がある」
スネーク　「東欧？　リキッド達が向かった？」
雷電　「そこに、俺を助けた、マッドナー博士がいる」

——雷電、そこで意識を失う。頭をなでてあげるナオミ。

ナオミ　「マッドナー博士なら、聴いた事がある」
オタコン　「世界的なサイバネティックス（強化骨格）の専門家。アングラだけど」

――サニー、目を輝かせる。

ナオミ　「好都合ね。とにかく、東欧へ向かいましょう（東欧に行かせたい）」

――ナオミ、オタコンの身体にまとわりつく。

ナオミ　「急いだ方がいいわ」

――オタコン、ナオミから身体を離す。

オタコン　「キャンベルに連絡して空港の手配をしてもらおう」

――スネーク、階段を上がろうとする。

オタコン　「スネーク、どこへ？」

――スネーク、立ち止まり、寂しそうにタバコで2階を示す（もう一本吸っても良い？）。オタコン、首を横に振る。ナオミも呆れたポーズ。

スネーク　「もうすぐ俺は毒をまき散らすようになる（ＦＯＸＤＩＥの事）。煙草なんてかわいいもんだろ（自虐的）」

——スネーク、ナオミに告げる様に。ナオミ、首を横に振る。サニーはスネークに走りより、煙草を奪う。

サニー「ダメ！　機内（ノーマッド）は禁煙です！」

——機内禁煙の文字を示すサニー。スネーク、悲しそう。

——スネークのスタミナ減。

——F.O.

——ノーマッド外観。

——数時間後。

——暗いノーマッドの機内。夜を飛んでいる。スネークが寝るソファからパン。スネークは煙草を咥えている。サニーはガウディに伏せて寝ている。画面はついたまま。オルガの写真データを見ているうちに寝てしまった。

——オタコン、自分の机のモニターに向かい、キーボードを叩いている。モニターにはエマの写真。

——胸元のUSBメモリをいじりながら、オタコンの背中を見つめるナオミ。そして意を決したように蓋を外したメモリを握りしめ、オタコンに近づく。ナオミ、オタコン以外に起きている人間がいないことをチェック。眠っているサニーの背中に（自分が着ていた）パーカーをかける（こちらも寝ているか再確認）。モニターをオタコンの後ろからのぞき込む。ナオミの胸がオタコンの背中に当たる。

ナオミ　「誰?」
オタコン　「(あぁ)これ? 義妹(いもうと)だよ」
ナオミ　「へえ、エメリッヒ博士にも義妹(いもうと)さんがいたのね」
ナオミ　「恋人かと思った」
——ナオミ、オタコンの顔に顔を近づける。
オタコン　「(あぁ)いや、僕に彼女は…(いない)」
オタコン　「エマは優秀なプログラマーだった。アーセナルギアのAIを破壊したのも彼女が創ったワームなんだ」
オタコン　「彼女は、ヴァンプに殺された」
——ナオミは責任を感じて表情が曇る。
ナオミ　「ごめんなさい」
オタコン　「いや、君が謝る必要はないよ。僕も同じなんだ」
——ナオミ、オタコンの発言に興味を持つ。

オタコン「僕、アニメオタクだったんだ」

ナオミ「それで、オタコンって（頷く）」

オタコン「ＳＦアニメに憧れてこの世界に入ったんだ」

オタコン「でも、現実は違った」

オタコン「科学が、自分の研究が人を不幸にするなんて、そんな事になるなんて考えてもなかった」

ナオミ「え…（はっとする）」

オタコン「僕ら科学者（サイエンスホリック）は、誰も悪魔崇拝者（サタニスト）なんかじゃない」

オタコン「（ＲＥＸの模型を見て）でも、自分に悪意がなくても、誰かの悪意に利用されるんだ」

――オタコンにもＲＥＸ開発に関わった過去がある。

ナオミ「博士…あのね」

――オタコン、柄にも無いことを言ってしまい恥ずかしくなって、自分の席に戻り、

オタコン「こいつ（Ｍｋ．Ⅱ）を作るの、サニーも手伝ってくれたんだ」

ナオミ「（へぇ）これもサニーが？」

オタコン「研究機関のＬＡＮに潜り込んで、極秘資料やパテントを漁って創ったんだ。正直、僕より腕は確かだ」

ナオミ「あんなに小さい子が」

オタコン「君のメールのプロテクトを解いたのもサニーだよ」

ナオミ「（ハッとしたあと、作り笑いを浮かべ）あなただと思ってた」

オタコン「サニーは生まれてすぐに、『愛国者達』に捕らえられた。肉親には一度も逢った事はない」

――ロケット（ペンダント）型のメモリースティックを指先で握りなおすナオミ（渡すのを迷っている）。

――オタコンは気づかず、ガウディで眠るサニーを見ながら、

オタコン「彼女はずっと、ネットの『内側（インサイド）』で育ったんだ」

ナオミ「それで言葉が上手く…？（話せない？）」

オタコン「電脳（インターネット）こそが彼女の生きる場所なんだ。彼女は『内側（インサイド）』からしか外を見ることができない（ＭＧＳ１でウルフがスコープから世界を見ていたように）」

——眠るサニーの周囲の、ガウディのモニターに様々なウインドウ、WEBサイトが開いている。中にはMGOの画面もある。

オタコン 「彼女はいつも『内側（インサイド）』から、自分と自分の家族を探してるんだ」

オタコン 「自分が誰で、何処に向かおうとしているのか？」

——はっとするナオミ。ナオミの昔と同じ。

ナオミ 「自分と、自分の家族を探してる…（自分と同じだ）」

オタコン 「ケーブルで世界と繋がった機械の中に答えがあると信じて、毎日その中を飛び回ってる」

オタコン 「だからサニーにとっては内（ここ）（ノーマッド）が家（ホーム）なんだ」

——台所の片付けられたフライパンなど調理器具、機内中二階のサニーの室内が映る。サニーの持ち物が一杯。

ナオミ 「（自分にも重ねて、やや独白で）いいえ、それではダメよ」

——過去の自分、今の自分を思い、感情的になるナオミ。

オタコン　「え?・」

ナオミ　「彼女をそろそろ『外側（アウトサイド）』に出してあげなくちゃ」

オタコン　「どういう事だい?（図星なのでドキリ）」

　——オタコン、眼鏡を外して、目頭を押さえる。

ナオミ　「彼女はまだ生まれていない。まだ子宮の中にいるのよ。本当の命を授けてあげなくちゃ」

オタコン　「（それはわかる）でも、サニーは内（ここ）（ノーマッドとネット）から出ようとはしないんだ」

オタコン　「正直、僕も不安なんだ。サニーを『外（アウトサイド）』に出すのが」

　——ナオミは自分の作りかけのウイルスプログラムをサニーに託すという考えが脳裏をよぎる。握りしめた手を開いて、USBメモリを見つめ、そしてサニーに視線を移し、

ナオミ　「この子なら大丈夫な気がする」

オタコン　「上手くやっていけるかな?」

ナオミ　「いえ、そうじゃなくて。この子なら、科学を上手くコントロール出来そうな気がする」

オタコン　「ごめん…それで？」

ナオミ　「え？」

オタコン　「さっき何か言いかけた？」

ナオミ　「（やや迷う）…ええ」

——ナオミ、ロケット型のメモリースティックを再び手の中に握りなおす。

ナオミ　「サニーに、料理を教えても？」（接触の機会を増やす為）

オタコン　「（やや疑問。そんな用事？）もちろんいいけど…」

オタコン　「ここには軍用レーション以外には、玉子ぐらいしかないけど」

——ナオミ、眼鏡をかけようとしたオタコンの手をそっと止める。

ナオミ　「眼鏡を掛けない方が素敵よ」

オタコン　「…そうかな」

——眼鏡を持った手を下ろさせるナオミ。

——見つめ合う二人。いい感じになりそうになったところでオタコン逃げ出し、デスクに眼鏡を乱暴に置く（自分への怒り）。

暴に置く（自分への怒り）。

——ナオミ、USBメモリを再びペンダントの蓋に戻して、

ナオミ「博士」
オタコン「え？」
ナオミ「（ヘリを差して）あの中で寝ても？」
オタコン「え？」

——オタコン、ナオミとも苦笑。

ナオミ「私、これでも、女なの。わかるでしょ？」
オタコン「（落ち着かなくなり）あっ、ああ」
ナオミ「ごめんなさい、我が儘言って。少し、一人になりたかったの」
オタコン「（そう）そうだよね。案内するよ」

——ヘリへ歩き出す二人。
——薄目を開けていたスネークが目を閉じて、二人に寝返りを打って、背を向ける。口にはタバコを咥えている。二人の後ろ姿を見守るサニー（オタコンの恋を見守る）。
——オタコンはヘリ横の扉を開ける。
——高いステップを昇るために手を差し出すオタコン。

――ナオミ、ステップを踏み外してバランスを崩し、オタコンに抱きつく。再びステップに足を掛け、中に入るナオミ。オタコンもまた、手を差し伸べてナオミを助ける。ナオミ、オタコンの手を握ったまま、デッキに腰掛けて、

ナオミ　「おやすみ、博士」
オタコン　「うん…」

――オタコン、名残惜しくて言葉を捜す。

オタコン　「もし寝心地が悪かったら、いつでも言って。ずっとそこで作業しているから」
ナオミ　「ありがとう」
オタコン　「その…」
ナオミ　「何？（期待するナオミ）」
オタコン　「ハルって呼んでくれ…（やや名残惜しそうに）おやすみ」
ナオミ　「おやすみなさい」

――扉を閉め、ほっと息を吐くオタコン。ヘリには背中を向けている。
――と、扉が開く！　ヘリの中から手が伸びてオタコンの右肘を掴む。引っ張られて振り返るオタコン、ナオミと目が合う。ナオミの顔は映さない。

――と、扉が開く！　ヘリの中から手が伸びてオタコンの右肘を掴む。引っ張られて振り返るオタコン、ナオミと目が合う。ナオミの顔は映さない。

――されるままに乗り込むオタコン。

――ノーマッド外観。

――F.O.

――セーブ画面表示。

【章タイトル表示】

ACT3　Third Sun　第三の太陽

【東欧潜入／ポリデモ】東欧・駅

――ヨーロッパのターミナル駅を思わせるような構内。中にはPMC兵が巡回している。そこへ列車が到着。ドアから乗客が降り始める。右記映像に重ね、OFFでキャンベルの通信。

キャンベル　「スネーク、現地にはレジスタンス狩りを目的に、国家非常事態宣言が発令されている」

キャンベル　「レジスタンス狩りの実働部隊は米資本のPMC、Raven Sword（レイブン・ソード）。アウターヘブン傘下の企業だ」

スネーク　「つまりは裏でリキッドが関与しているという事だな」

キャンベル　「（うむ）そしてその対象リストにはビッグママ率いるレジスタンスグループ『失楽園の戦士』（PARADISE LOST ARMY）が最重要組織として挙げられている」

キャンベル　「スネーク、君には彼らの活動拠点とされている地域へと潜入してもらう」

――この辺りから、群衆の中のひとりの男にカメラが向けられる。東欧一般市民を装うコート姿の若い男。まだ顔は映さない。

キャンベル　「PMCの迅速な対応にビッグママ達は脱出路を断たれた格好となった。今もその地域のどこかに潜伏している筈だ。おそらくビッグボスの遺体も彼女と共にあるに違いない」

キャンベル　「君はPMCのブラックリストに加えられている。潜入にあたっては素性を偽った方がいいだろう」

キャンベル　「検問を避ける方法も用意してある」

キャンベル　「レジスタンスに接触して彼女を見つけ出してくれ」

キャンベル　「これが最後のチャンスだ」

キャンベル　「なんとしても、奴等より先にビッグボスの遺体を確保せねばならん」

――ホームから駅構内（ドーム状の入り口）へ続く扉に近づく。改札はない。正面扉は人々が多く並んでいる。その先に兵士達による検問がある。兵士は現地PMC、フル装備。実は、こちらは軍事関係者用検問。民間人と思われた人物は、私服の軍関係者だった。服装の雰囲気はスネークに合わせ、コート姿。昔のスパイ物の雰囲気を保たせる。

――検問は簡易のID認証システムを使っている。SOPシステム、ナノマシン、指紋、網膜センサーで兵士を読みとっている。ID、年齢、性別、血液型、所属部隊などがディスプレイに表示される。

検問PMC　「次！」

――列が進んでいく。

検問PMC　「次！」

――男の順番がくるが、男はセンサーには近寄らない。男は動かない。兵士はいらだつ。周りの兵士を見る男。

検問PMC　「次！」（少しいらだって）

検問PMC　「そこの男、ID認証を」

――男は動かない。ここでは顔は映さない。

――検問のＰＭＣ、両脇の兵士に手首で指示する。

検問ＰＭＣ「おい、お前！」

検問ＰＭＣ「連れてけ！」

――近寄るＰＭＣに対し、拳を上げるようなそぶりを見せるスネーク。

――両脇の兵士が驚いて銃を構える。

――と思わせて、煙草を咥える（何か問題でも？）。

――脇から出てきた兵士に腕を捕まれる男。

レイブン・ソード兵士１「こっちへ来い！」

――兵士、連れ立てようとするが、男が抵抗。

レイブン・ソード兵士１「こっちだ！」

――無理に連れて行こうとする兵士を突き飛ばす男。男に対して銃が向けられ、周囲の兵士も集まってくる。

――高まる緊張。

米女兵士　「(OFF) もういい」
米女兵士　「その男はこっちに任せろ」
レイブン・ソード兵士1　「(当惑) は…」
米女兵士　「こちらで捜索中の男だ」
レイブン・ソード兵士1　「(承諾) は…了解しました」
米女兵士　「(男に) 来い」

――レイブン・ソードの兵士、納得はいかないが通常の検問作業を続ける。

検問PMC　「次！」

――米女兵士についていくと、駅のホールに出る。天井が高い。民間人や軍人が談笑している。
――壁にもたれて煙草を咥える男。
――前方にひとりの米女兵士。米女兵士は男に近付き、その手が男の咥えた煙草に伸びる。米女兵士、ライターの火を点す。煙草に火をつけて紫煙を深く吸い込む男。美味そうに煙を吐き出す。
――スネークの顔の変化に気づく女兵士。ここでメリルだとわかる。

メリル　「随分と若返ったじゃない？」

――初めて男の顔が見える。ＭＧＳ１当時を髣髴とさせる、若々しいスネーク。スネークはフェイスカムで若スネークに擬態。

スネーク　「これは擬態だ。タコ女からのプレゼントだ」

――スイッチを切り替えて、一瞬だけいつもの老いた顔に戻る。

スネーク　「さすが、ＰＭＣに顔が利くんだな」
メリル　「私はこれでも全ＰＭＣを監査する立場にあるのよ。それなりに（この21世紀でも）コネは利くわ」
スネーク　「一人か？」

――メリル、顎で吹き抜けの向こうのテーブルを示す。アキバ（ジョニー）やエド、ジョナサン、01部隊達。

ジョニー　「よう！」

――アキバ（ジョニー）、イスの上に立ち上がってジャンプしながら、スネークに大きく手を上げる。

ジョニー　「おい、おーい！」

ジョニー　「スネーク！」

ジョニー　「ぐっ！（エドに殴られた）」

スネーク　「またあいつか？」

——スネークという言葉を聞いて、兵士がざわめく。エド、すかさずアキバ（ジョニー）にひじ鉄。アキバ（ジョニー）、謝る。メリル、ジョニーに名前を呼ぶのを止めさせるよう合図をする。

——メリル、真顔になる。兵がざわめき出す。指で隣のラウンジを指差し、「あっちで話しましょう」というようにスネークを促す。

——場面変わってラウンジ。テーブル前の椅子に座るスネーク。メリルはその前に座っている。

メリル　「聞いて、スネーク」

メリル　「中東での騒ぎを報告した上で脅威査定（スレットアサスメント）にかけた。リキッド蹶起（けっき）の危険性が、ようやく大統領に正式に認められたの」

メリル　「お陰で充分すぎる数の、陸軍海兵隊合同チームが与えられたわ。現地の米兵に紛れて、既に現地入りしている」

メリル　「もう、いつでもリキッドを確保できる」

スネーク「〝力ずくで抑え付ける〟か？　やめておけ。事態はそんなに単純じゃない」

メリル「悪いけど、あなたの命令には従えないわ。あなたの背後にいるキャンベルにも」

スネーク「中東の二の舞になるぞ」

メリル「ならないわ。いざとなったらＰＭＣの武器、兵器を完全に無力化（ロック）できる。彼等は抵抗できない。ＳＯＰシステムを握っているのはこちらよ」

スネーク「ＳＯＰシステムに頼るのは危険だ」

メリル「どっちにしろ数で押さえられる」

スネーク「メリル」

――スネーク、それは違うと、否定しようとするが、

メリル「（遮って）だからスネーク」

メリル「…後は任せて。あなたが危険を冒す必要はない」

メリル「あなたに無駄死にして欲しくないの」

メリル「スネーク、あなたがやろうとしているのは、任務ではないわ」

スネーク「そうだ。これは正義ではない。私的な殺しだ」

メリル　「わかってるのなら」

——激高するメリル。その様子を怪しんだＰＭＣ兵が近寄ってくる。
——煙草をふかすスネーク。少し興奮して咳き込む。吹き抜けの方にいる検問の兵士が怪しみ始める。
——メリル、周囲の様子を察知して声を潜める。スネークの手の上に自分の手を重ねて、

メリル　「…考え方は違うけど、あなたは私にとってまだ伝説の英雄よ」
メリル　「…若い頃のあなたの活躍を知っている」
メリル　「それ（記憶）が私の糧だった」
メリル　「つまらないことで死んで欲しくない」
スネーク　「心配はいらん。老兵は死なず…」

——といって煙草を吸うスネーク。軽く咳き込む（フェイスカムが幾度か切れる）。
——メリル、再度スネークの手の上に軽く手を置く。スネークはずっと視線を外したまま。

メリル　「私たちが後を継ぐわ。もういいのよ（疲れたでしょう）」

——スネークは聴いていない。スネーク、メリルに。

スネーク　「俺は英雄じゃない。英雄であったこともない」

スネーク　「汚れ仕事（ウェット・ワーク）を頼まれた、年老いた殺し屋（ヒットマン）でしかない」

——メリル、スネークの頑なな態度に説得を諦める。

メリル　「わかったわ。あなたよりも先に私たちが彼らを捕らえる」

——メリル、立ち上がる。わざとひどいことを言う。

メリル　「一度は好きになった男だけど、今のあなたは、タダの頑固な老人よ」

メリル　「現実をみなさい。オールド・スネーク」

——スタミナ減。

メリル　「邪魔はしないで」

——メリル、席を立つ。少し歩いたところで立ち止まり、スネークを見る（強く言い過ぎた、と少し後悔）。

メリル　「（ため息）」

――ドアを開けてメリル、01部隊の方へ歩いていく。ジョナサンとエドはセンスの共有ですぐに気がついて立ち上がるが、ジョニーだけは手元のコンピュータのディスプレイを、テレビモードにしてサッカー観戦をしている。点が入ったのか、立ち上がって大きくガッツポーズ（扉ごしに映ることになるので、セリフ無し）。そこでメリルがジョニーのイスを引いたため、座ろうとしたジョニーは尻もち～後転して立ち上がる。

――一方のスネーク、メリルに言われた事に対して、煙草を吸いながらしばらく思案。我に返って煙草を携帯灰皿に捨てて（痕跡を残さないように）立ち上がる。

――01部隊が立ち去った入り口から検問のPMC兵が近付いてくる。

――早歩きで北側の出口を目指すスネーク。

――検問のPMC兵、その後ろをぴたりとついて追って来る。北側の入り口からも数名のPMC兵が入ってきてスネークを見ている。

――早歩きでその場を去るスネーク。

――扉の外は駅の裏口（ゲーム中でもう駅には入れない）。

――目の前には裏通り。戦場広告の看板。

――通信CALL音。

――耳に手を当てるスネーク。

【尾行前／強制無線デモ（オタコン）】東欧

スネーク「オタコン、この顔（フェイスカム）も見られた」
オタコン「ああ…その顔もPMCのブラックリストに加わったかもしれない」
スネーク「メリルの動きも気になる」
オタコン「米軍の制圧部隊が入ってきたら、ややこしいことになるね…。早くビッグボスの遺体を確保しよう」
オタコン「ビッグママを探し出すんだ」
オタコン「スネーク、情報を整理してみよう」
オタコン「通りには外出禁止令が出ている。今、通りに出ているのはPMCの兵士か、レジスタンスくらいだ」
スネーク「確かに、静か過ぎて観光地には見えない」
オタコン「PMCは市街全体にレジスタンスの捜査網を拡げている。彼らは捜索中に得た情報を、SOP（ソップ）システムで仲間に無線連絡してるんだ」
オタコン「その交信を傍受すれば、レジスタンス達の位置がリアルタイムにわかる筈だ」
スネーク「交信を傍受？　どうすればいい」

スネーク　「交信を傍受？　どうすればいい」

オタコン　「無線傍受機を装備しているときレジスタンスに関する会話が聞こえてきたら、地図を確認するんだ。位置が判るはずだよ」
オタコン　「こいつはＰＭＣの通信音声・データ交信を常にモニターしている」
オタコン　「ＰＭＣの無線を傍受するには、装備品ウィンドウから無線傍受機を選ぶんだ」
オタコン　「その為の新装備を用意しておいた」
スネーク　「了解」
オタコン　「それからスネーク。雷電の治療の目処がついたんだ」
スネーク　「本当か」
オタコン　「ああ。マッドナー博士と連絡がついて、ナオミとサニーが向かっている」
スネーク　「二人で大丈夫なのか」
オタコン　「君がいる場所からは数キロ北になる。検問も敷かれていない非戦闘区域だ」
スネーク　「ああ」
オタコン　「透析機も入手できる。時間は必要だけど雷電は大丈夫そうだ」
スネーク　「（安心）そうか」
オタコン　「とにかくスネークはビッグママへの接触を急いでくれ」

スネーク　「わかった」
オタコン　「ビッグボスの遺体がリキッドの手に渡ったらお終いだ」
オタコン　「レジスタンスを尾行するんだ」

【レジスタンス登場／インタラクティブデモ】東欧・駅前

――最初に登場するレジスタンスはわかるようにする。
――ゲームへ。

オタコン　「まずはレジスタンスを探そう」
オタコン　「レーダーで彼らの気配を見つけるか、ＰＭＣの無線を傍受して、レジスタンスが居そうな場所へ行ってもいい」

――しばらく進むと、通りの向こうから、男が周りを気にしながら歩いてくるのに気付く。怪しい！

オタコン　「レジスタンスを見つけたね」
オタコン　「さっそく尾行だ。しっかり頼む」

【レジスタンス中継ポイント到着／ハーフライブデモ】東欧

——中継ポイントでレジスタンスは何かを取り出したり、見たりして次の行き先を探るモーションを発生させる。

——PMC兵に変装するレジスタンスのデモ。

【EVA登場1／ポリデモ】東欧・修道院

——修道院近くで変装をとくレジスタンス。辺りを見回しながら、修道院の裏口へと進んでいく。入り口に入る前に、背後に気配を感じたのか振り向く…が誰もいない（スネークはオクトカムで隠れている）。入り口の電子ロックを解除するレジスタンス。

——その後を音もなく近付き、閉じかけた扉から中に入るスネーク。背後からレジスタンスを拘束。首にナイフをあてて、一緒に中に入る。

レジスタンス2（尾行された男）「うっ！」

——中には見張りのレジスタンスが2名。見張りがまずスネークに気がつく。

レジスタンス1（見張り）「誰だ!?」

——同時に持っていた銃をスネークに向ける見張り。

スネーク「ビッグママに会いに来た」

——扉からレジスタンスが1名追加。

【主観ボタン】壁にかざられた生頼範義氏の歴代イラストが見れる。

——顔を見合わせる3人。

レジスタンス3（見張り）「こいつが例の（ママに云われていた伝説の男）？」

——3人はジリジリとスネークに近づく。

レジスタンス1（見張り）「どうなんだ？（捕虜に聴く）」

レジスタンス2（尾行された男）「この男、全く気配がなかった。こいつだよ」

レジスタンス4（見張り）「いや、こんな老人のはずは…？」

——そこでスネーク、すこし咳き込む（ちょっとわざと、油断を誘うためだが、あまりわざとらしくならないように咳）。

スネーク「（咳き込み）」

スネーク　「（ニヤリと笑い）」

——スネーク、捕虜を倒し、３人をあっという間にＣＱＣで倒す。
——他の見張りが追加で出てくる。増援に来た３人も同じく倒し、最後の一人を銃を使って後ろ手に縛り上げる。その男が持っていたリンゴが落ちて、コロコロと教会内部の方へ転がっていく。
——そのまま祭壇の方へ進むスネーク。さらにレジスタンスが集まってくる。
——スネークを取り囲むレジスタンス。

ビッグママ　「（ＯＦＦ）見事なＣＱＣね、スネーク…」

——ビッグママ、教会の祭壇の前で祈りを捧げている。

ビッグママ　「（ＯＦＦ）間違いないわ。彼が伝説の男よ」

——女が振り向く。

ビッグママ　「私がママ。ビッグママよ」

【字幕】ビッグママ　夏木　マリ

——スネークはレジスタンスにかけているＣＱＣを解く。

――銃をスネークから受け取ったレジスタンスはよろけながら修道院後方へ退場。他のレジスタンスもそれに倣う。

――スネーク、数歩近づきながら、

スネーク　「あんたに用がある。雷電から聴いた」

ビッグママ　「デイヴィッド…大きくなったわね」

――本名を云われてひるむスネーク。

――ビッグママ、スネークの方へゆっくり歩みを進める。

ビッグママ　「ヒトの肋骨（あばら）から生まれたのは私（イブ）ではなく、あなた」

ビッグママ　「でも、あなたを生んだのは私」

――スネークがお腹に居た頃を思い出すように、自分のお腹に手を当てているビッグママ。

ビッグママ　「私はあなたの母親」

スネーク　「え…？（思わず声が漏れる。流石に動揺が隠せないスネーク）」

――雷がなって、教会内がまたたく。マリア像が映る。続いて、天井の宗教画にパン。

ビッグママ　「（表情が引き締まる）〝恐るべき子供たち（アンファン・テリブル）〟」
ビッグママ　「クローンだって試験管で育つわけじゃない」
ビッグママ　「生まれるには女の体が必要だわ」
スネーク　「つまり、代理母（サロゲートマザー）？」
ビッグママ　「冷たい言い方ね…」
ビッグママ　「私はあなた達を産んだ」
ビッグママ　「『愛国者達』のために」
スネーク　「俺たちを…産んだ」

――ビッグママ、その場でしゃがみ、リンゴを手に取る（レジスタンスが落としたリンゴ）。

ビッグママ　「禁断の果実…」
ビッグママ　「…皮肉ね」

――ビッグママ、リンゴに祈るようにして、立ち上がる。

ビッグママ　「付いてきて、詳しく話すわ」

――ビッグママ、踵を返し、祭壇の方へ歩いていく。それに続くスネーク。

――F.O.

【EVA登場2／ポリデモ】　東欧・修道院内

――祭壇横の本棚が並んだ（哲学の間）空間で話しているスネークとビッグママ。

ビッグママ「私を追っているのはリキッド。あなた（カイン）の双子（アベル）」

ビッグママ「彼の事なら、あなたよりよく知っている。ゼロに対立している男。かつてはオセロットだった、心をリキッドに支配された男」

スネーク「ゼロ？」

ビッグママ「『愛国者達』の創始者（ゼロ）」

スネーク「創始者？　そいつはいつの話だ」

ビッグママ「ほんの40年前よ」

ビッグママ「まだアメリカとソビエト連邦が対立していた、冷戦の時代」

ビッグママ「あの混沌とした時代に、『愛国者達』は生まれた」

ビッグママ「私もそれに関わっていたの。ええ…そう、創設者のメンバーの一人よ」

スネーク　「あんたが？」

ビッグママ　「ゼロが作り出した『愛国者達』は、冷戦以降のアメリカ国家を管理、制御し続けてきた」

ビッグママ　「それは形骸化され、今はＡＩに受け継がれている」

ビッグママ　「そのＡＩこそ、戦争経済を作り出し、サンズ・オブ・ザ・パトリオットを生み出した元凶」

ビッグママ　「だけど、私にも責任が…組織を作り出した罪がある」

ビッグママ　「あなたの父親（オリジナル）、ビッグボスと知り合って間もない頃よ」

【ＥＶＡ登場３／ムービー】　東欧・修道院内

——ムービー挿入。過去のゲーム映像、イラスト。

ビッグママ　「１９６４年、ソ連領内で開発されていた新兵器（シャゴホッド）を巡って、私はＣＩＡの『スネークイーター作戦』に協力することになった」

ビッグママ　「あるエージェントをサポートするのが私の任務だった。そのエージェントというのがスネーク…後のビッグボスだった」

スネーク　「…スネーク？」

ビッグママ　「ええ、ネイキッド・スネーク（裸の蛇）。当時の彼のコードネームよ」

ビッグママ　「あの人は息子のあなたに、自分と同じコードネームをつけたのね」

ビッグママ　「この作戦の指揮官が、特殊部隊ＦＯＸのゼロという男だった」

ビッグママ　「当時の私は中国の二重スパイとして働いていた」

ビッグママ　「だから私の目的は中国のために『賢者の遺産』という莫大な秘密資金の在り処を探ることだった」

ビッグママ　「でも私は失敗して中国を追われる身となった」

ビッグママ　「蛇から奪ったリンゴのお陰で、私はエデンを追われた」

ビッグママ　「逃げ延びた先のハノイで私は彼（ビッグボス）と再会したの」

――ＳＡＧＡムービー。ハノイで過ごすスネークとＥＶＡ。時代感を出す。

ビッグママ　「その頃ゼロは、莫大な研究資金、『賢者の遺産』を元に〝伝説の英雄（ザ・ボス）の意志を継ぐ新たなる組織〟として『愛国者達』を発足した」

――ザ・ボスの墓石、愛国者（パトリオット）の文字。

――ザ・ボスの墓石、愛国者（パトリオット）の文字。

ビッグママ　「当時のメンバーはビッグボス、シギント、パラメディック、そして指揮官のゼロ」

――当時のシギント、パラメディック、ゼロ、イラスト。

ビッグママ　「そうそう、忘れてはならない人物がもう一人。ソ連に残って情報提供者として支援してきたオセロット。今のリキッドよ」

――当時のアダム、イラスト。

ビッグママ　「ハノイで彼（ビッグボス）に救われた私はアメリカに渡り、彼らの組織に加わった」

ビッグママ　「ゼロが目指していたのは、思想、意識の統一化」

ビッグママ　「彼はそれがザ・ボスの遺志（SENSE）だと信じ、『愛国者達』のメンバーもそれに従った」

スネーク　「ザ・ボス？」

――MGS3のエンディング。

ビッグママ　「大戦中の伝説の英雄。特殊部隊の母とまで言われた」

ビッグママ　「あまりにもカリスマ性が強すぎたのね。その存在を恐れたCIAに抹殺された」

ビッグママ　「もし彼女が生きていたなら、この21世紀は変わっていたかもしれない」

ビッグママ「私達はザ・ボスの遺志（SENSE）に影響され、彼女の遺志（SENSE）に寄り添うようにこの組織を結成した」

ビッグママ「だからゼロは、人々を導くためにはある種の〝特別な存在（イコン）〟が必要だと考えたの」

ビッグママ「そこでゼロはザ・ボスに継ぐ最後の弟子ビッグボスに目をつけた」

ビッグママ「ザ・ボスと生（そして死）を最も共にし、最も受け継いだ存在であるビッグボスこそがイコンに相応しいと」

【EVA登場4／ポリデモ】東欧・修道院内

――祭壇の下手寄り手前で話している二人。ＥＶＡ、祭壇正面を向き、像の方を見つめながら、

ビッグママ「ゼロは世界を救った英雄ビッグボスを偶像として祭り上げた」

ビッグママ「真実と虚構を織り交ぜながら、誇張、偽装、詐称したビッグボスの物語をばら撒いて、有力者達を束ねていった」

ビッグママ「いつの時代にも、人民をコントロールする為の象徴（シンボル）が必要なの。（少し自嘲気味に笑ってから）星条旗に代わるモノがね」

【EVA登場5／アーティストデモ】 東欧・修道院内

——スネークイーター～ＭＰＯの事件も臭わす。

ビッグママ　「でも、ゼロもまた政治や時代と共に変わっていった」

ビッグママ　「やがて支配欲に囚われ始めたゼロと、それに利用されるビッグボスの間には軋轢が生まれていった」

——ＭＰＯの事件も臭わす。

ビッグママ　「ビッグボスの心が離れていくことに気付いたゼロは、〝保険〟が必要になった」

ビッグママ　「組織の偶像であるビッグボスの存在を永遠とする為、ゼロは本人にも知らせずに、ある計画を進めだした」

ビッグママ　「それが〝恐るべき子供達計画〟」

——恐るべき子供達計画。

ビッグママ　「最強の戦士、ビッグボスのクローンの創造」

ビッグママ　「計画は当時パラメディックと呼ばれていたクラーク博士が中心になって進められた」

ビッグママ「それこそ数十回の失敗の後、受精は奇跡的に成功した」

ビッグママ「成功した人工授精には、博士の助手であった健康な日本人女性の卵子が使われた」

――ＭＧＳ１のレイブンのセリフを音声で入れる。スネークに日本人の血が混ざっているといったのはその為。

ヴァルカン・レイブン（回想）「お前、東洋人の血が流れているな…」

ビッグママ「〝ビッグボスを出産する〟」

ビッグママ「私はそのために代理母を志願して、喜んであなたたちを受胎した」

ビッグママ「私は彼を愛していたの」

――生まれる。

ビッグママ「９ヵ月後、私は二人のビッグボスを産んだ。それがあなたと、リキッド」

ビッグママ「ＤＮＡとかクローンとか、そんなことは関係ないわ」

ビッグママ「普通に子供を授かるのと同じ、あなた達は私がお腹を痛めて産んだ子供」

――ＭＳＸ時代。

ビッグママ　「だけど、この〝恐るべき子供達計画〟がゼロとビッグボスの亀裂を決定的にした」
ビッグママ　「ビッグボスは『愛国者達』を脱し、ゼロに反旗を翻すことを決意したの」
ビッグママ　「彼は米国を離れ、傭兵派遣会社(OUTER HEAVEN)を創り、世界を彷徨った」

——アウターヘブン時代。

ビッグママ　「ごめんなさい、あなたは父親に望まれた子供じゃなかった」
ビッグママ　「人の命を操るものじゃない。それはわかっていたけど私はあなたが欲しかった」
ビッグママ　「ビッグボスがいなくなってから、ゼロはまさに暴走したわ」

——アウターヘブン時代以降。

ビッグママ　「ゼロは世界の秩序と統制を望んでいた」
ビッグママ　「幾度となない戦争を経て資金を増やし、その発言力はホワイトハウスの意思決定にも影響を及ぼすまでになっていた」
ビッグママ　「デジタル技術、IT、ネット(シギント)、遺伝子技術(パラメディック)の進化と共に『愛国者達』は莫大な力を手にしていった」
ビッグママ　「そして世界中に根を張り繁栄した」

ビッグママ　「そうやって、『愛国者達』は影で国家を動かす存在となった」

ビッグママ　「いつの間にか世界の警察を倣る『愛国者達』（米国）は世界をも統制し始めていた」

【EVA登場6／ポリデモ】東欧・修道院内

――中央の通路、祭壇を背にして話している二人。

ビッグママ　「意志（SENSE）は間違っていない。だけど実行のプロセスが間違っていた」

ビッグママ　「軍を利用し、兵器開発を進め、資金獲得のため情報によって人々をコントロールしようとした」

ビッグママ　「ゼロは『外側（アウトサイド）』から、『内側（インサイド）』の意識を統制することに固執していた」

ビッグママ　「だけど…、それがザ・ボスの意志（SENSE）だったとは思えない」

ビッグママ　「ゼロもビッグボスも、ザ・ボスの意志（SENSE）を間違って解釈したのよ」

ビッグママ　「ザ・ボスへの深い畏敬の気持ちが彼らを別った」

ビッグママ　「そしてゼロとビッグボスの戦争がはじまった」

ビッグママ　「ザ・ボスへ近づこうとする二つの異なる解釈が世界を別ったのよ」

ビッグママ　「全てはゼロとビッグボスの冷戦が発端」

――ＭＧＳの油絵（ＭＧＳ１、ＭＧＳ２、ＭＧＳ３、生頼氏画）が見える。

ビッグママ「（笑い）皮肉なものよね。思想の違い、信仰の違い、人種の違い…」
ビッグママ「彼らが起こした闘いも、これまで人が犯した過ちと変わらない」
ビッグママ「最初はほんの小さな行き違いだった。それが大きな亀裂を産んでしまう」

――F.O.

【ＥＶＡ登場７／アーティストデモ】東欧・修道院内

――ムービー挿入。過去のゲーム画像、イラスト。

ビッグママ「そこにはもう、ザ・ボスの尊い意志（SENSE）など存在しなかった」
ビッグママ「憎しみあい、互いを滅ぼそうとする戦いだけがあった」
ビッグママ「ビッグボスはある計画を胸に米国に戻り、再びＦＯＸＨＯＵＮＤの司令官に就任した」

――ＭＳＸ時代。

ビッグママ 「ビッグボスはアウターヘブン、ザンジバーランドでゼロに対するクーデターを企てた」

ビッグママ 「でもあなた…自らのクローンであるソリッド・スネークにどちらも阻止されてしまった」

スネーク 「（絶句。何か云いたいが、声にならない）」

――MSX～MSX2時代。

ビッグママ 「ゼロは瀕死状態のビッグボス、そしてグレイ・フォックス…フランク・イエーガーを回収…」

ビッグママ 「フランク・イエーガーは全身に改造手術を施され、サイボーグ忍者として生まれ変わった」

――MSX時代～PS1。

ビッグママ 「脳死体となったビッグボスは、死んでもなおゼロに囚われる存在となっていた」

ビッグママ 「ビッグボスは誰よりもゼロにとって、かけがえのない聖像（イコン）だったのよ」

ビッグママ 「いいえ、本当は、ゼロにとってビッグボスはかけがえのない友人だったはず」

ビッグママ　「そんなビッグボスの裏切りから、彼は生という不確かなものを信じることが出来なくなっていた」

ビッグママ　「彼は国家も組織も誰も、一人として信じなかった」

ビッグママ　「ゼロは組織を次の世代に託す事を放棄した」

——ＡＩや衛星。

ビッグママ　「そこで彼は集積した情報から意思決定を下すシステム、ＡＩネットワークを立ち上げたの」

ビッグママ　「『Ｇ．Ｗ』、『Ｔ．Ｊ』、『Ａ．Ｌ』、『Ｔ．Ｒ』という4つのＡＩを電脳のラシュモア山に構築した。そして、それを束ねる中枢となるＡＩ『Ｊ．Ｄ』(ジョン・ドゥ)を創造した」

スネーク　「『Ｇ．Ｗ』？　5年前に破壊したあれ(アーセナルギア)の事か」

ビッグママ　「そうよ。『Ｇ．Ｗ』が投棄されてからは、『Ｊ．Ｄ』(ジョン・ドゥ)と3つのＡＩが世界経済、政治、法律、規範、文化…あらゆる情報を管理している。戦争経済もそう」

ビッグママ　「システムによる世界管理の陰で、ビッグボスは死ぬことも生きることも許されず、脳死体という牢獄の中に、未来永劫幽閉されている」

――イコンのシーン。

ビッグママ「ゼロは友人をつなぎ止める為、世界を統治する為、彼を生も死もない聖像(イコン)として祭り上げたの」
スネーク「まるで宗教だ」
ビッグママ「勿論、私とオセロットはゼロに囚われたビッグボスの解放を計画した」

――MGS1の回想シーン。

ビッグママ「ナノマシン研究の権威だったナオミ・ハンターを組織に引き入れ、フランク・イエーガーを使ってクラーク博士を殺させた」
ビッグママ「オセロットは、DARPAの局長になっていたシギント…ドナルド・アンダーソンを、事故と偽って拷問中に殺害した」
スネーク「シャドー・モセス事件…」
ビッグママ「パラメディックとシギントは死んだ。これで遺されたのはゼロ一人」
ビッグママ「でも引き換えに、私はオセロットを失うことになってしまった」

――MGS2の回想シーン。

ビッグママ　「オセロットは国防省でもロシアでも、ましてゼロでもない。ビッグボスのために戦っていた。彼はビッグボスを尊崇していた」

――F.O.

【EVA登場8／ポリデモ】　東欧・修道院内

――教会内を祭壇側から歩いていき、正面の扉から出てくるビッグママとスネーク。

――広場になっており、バンが3台停車している。バンのまわりには数人のレジスタンスがいて整備をしている。

ビッグママ　「リキッドの右手を移植したのがきっかけで、リキッドの思念、精神に身体（からだ）を支配されてしまったの」

ビッグママ　「肉体はオセロットでも、精神はリキッドそのもの」

ビッグママ　「私は最後の一人になった」

ビッグママ　「だけど協力者が現れた」

スネーク　「雷電か？」

ビッグママ「私は彼と会って、ついにビッグボスの居場所を突き止めた。彼が入手した『G．W』のデータに記されていたの」

ビッグママ「彼と私はビッグボスを取り戻した」

ビッグママ「だけどビッグボスはゼロによって眠らされたまま」

スネーク「ゼロはどうしてビッグボスを生かしておくんだ？」

ビッグママ「人は伝説が好きなの。死のない生、ゼロは救世主（メシア）を創りたかった」

スネーク「リキッドの狙いはビッグボスの身体（からだ）だ」

スネーク「ここにあるのか？」

ビッグママ「会わせてあげる」

――広場に停められたバンの後部を開くと、生命維持装置につながれた袋が入っている。

ビッグママ「これがＰＹＸ（ピクス）、聖櫃よ」

――遺体は様々な装置につながれ、車と一体化している。透明な袋の中にビッグボスの遺体がある（ただしつぶれているのは左眼。本当はソリダスの遺体）。スネークが触ろうとすると、突然動き出す。ビックリ！

――同型の囮のバンが２台停車。

ビッグママ　「彼の意識はナノマシンによって生きながら幽閉されている。だから、正確には脳死状態ではないの」
ビッグママ　「自分のエゴのために人の精神を操るゼロの罪を、リキッドが受け継ぐことは許されない」

——バンの後部扉を閉めるレジスタンス。再び教会の中に戻っていく二人。入り口のあたりに見張りのレジスタンス。
——そこに強制無線ＳＥＮＤ、ＣＡＬＬ音。教会の通路の真中で立ち止まる二人。
——オタコンの無線の間に音もなく扉を開けて入ってくる仔月光。主観にすると見える。

【主観カメラ】のそのそと入ってくる仔月光。

——仔月光は3体が縦に繋がり、コートを羽織ってまるで人間のように振舞っている。
——ここまでもゲーム中にコートを着た仔月光を遠くから見せる。スネークが交信中に仔月光が入ってくる。まるでホラー映画のように。
——気づかない二人。ママが振り向くと、仔月光はそのときだけ引っ込む。

スネーク　「オタコン」

オタコン「スネーク、ナオミが…」
スネーク「どうした？」
オタコン「いないんだ。ここから<ruby>ノーマッド</ruby>いなくなっている」
スネーク「いつからだ？」
オタコン「1時間も経ってない。サニーと一緒にマッドナー博士のところから戻ってきた直後、姿をくらました」
スネーク「何故目を離した!?」
オタコン「眼鏡を…外してたんだ」（ナオミに似合うと言われたから。踊らされたことへの悔しさ）

――サニー監視カメラでもその様子は見ることができる。ナオミはふとカメラの外に出ると、そのまま映らなくなる。

スネーク「ナオミ自身が言っていた。自分がいなければ実験は成功しないと」
オタコン「…ナオミがリキッドのところに行ったたって言うのか？」
スネーク「雷電は？」
オタコン「そっちはうまく行っている。透析機とＩＣＵを無事、ノーマッド機内に運び入れた。今、雷電の透析と治療を開始したところだ」

スネーク　「治りそうか?」
オタコン　「ああ心配ない。サニーがナオミから引き継いだ」
オタコン　「ただし、透析に48時間はかかるそうだ。それまでは動けない」
　——扉の陰で中の様子をうかがう仔月光。会話が終わると、不格好な歩き方で教会内に入ってくる。
　——ようやく気付くレジスタンス。
レジスタンス1　「おい!」
　——レジスタンス、人に扮装した仔月光の帽子を取り上げると、
レジスタンス1　「(仔月光に気づいた驚愕)うわっ!」
　——そこに頭はなく、仔月光の腕が突き出ていた。それに驚いたレジスタンスが機銃を撃つ。
　——スネーク、コートが脱げた3匹の仔月光を見て、
スネーク　「なんだこれは?」
ビッグママ　「離れて!」
　——ビッグママ、すかさず銃を抜き、仔月光に向けて連射! 姿勢を崩す仔月光。

——ビッグママ、仔月光に堂々と近付いていきながら銃を抜く。熟練の、動じない、無駄のない動き。
——床を這う仔月光1匹、壁を這い上がる仔月光2匹に対して、1発ずつ銃弾を打ち込む。壁から撃ち落とされた仔月光1匹がバタバタと動いている（通信連絡の合図を送っている）様を見て、ビッグママ、歩み寄って数発の銃弾を仔月光に叩き込む。放電する仔月光。
——ビッグママ、仔月光を踏みつけて、さらにとどめの一撃。

【フラッシュバック】MGS3画像／EVAの射撃シーン

レジスタンス1「フンコロガシ、あいつらの無人偵察機（UAV）だ」
ビッグママ「見つかったわ。移動しましょう（軽く云う）」
レジスタンス1「はい」

——ここでオタコンからSEND。ビッグママは車の方に向かう。

オタコン「（OFF）スネーク、PMC（レイブンソード）が集まってきている」
オタコン「（OFF）まずい！　ヤモリ（GECKO）も向かっている！　突入まで5分もない」

——スネークもビッグママの後に続いて広場に走る。

ビッグママ「準備はどう？」

レジスタンス2「何とか…」
ビッグママ「運河からのルートで本物を逃がす。準備を急いで」
レジスタンス2「はい」

——スネーク、ユーザーはビッグママの台詞の真意がわからない。
——数台の囮のバンを引き連れてビッグママがPMCを誘導している間、本物は別のルートをたどって川沿いに脱出を計るという計画。従ってスネークが見ている範囲のバンは全て陽動のための囮で本物の遺体は乗っていない。

ビッグママ「スネーク、こっちよ」

——準備を始めるレジスタンスたち。ビッグママ、歩きながらスネークに、

ビッグママ「囮のバンを用意して追っ手を分散させる」

——車庫の奥に移動するビッグママ。後に続くスネーク（ここからは遺体を積んだバンが死角。スネークが見た遺体は別の車両に移動している）。愛車バイクにかかったカバーをはずすビッグママ。

【主観ボタン】磨き上げられたバイク

――バンやバイクに乗り込むレジスタンスたちを見ながら、

ビッグママ「あの子達はみんな孤児だったの（私が引き取った）」

ビッグママ「彼らはみんな兵器工場で働いて、大きくなるとPMCに入りたがる」

――ハイスピード。レジスタンス達、門を開けたり、準備に忙しい。

ビッグママ「両親を殺したPMCに復讐するため。その稼ぎで弟や妹も養える」

ビッグママ「PMCの中にはそんな少年兵達が沢山いる」

ビッグママ「電脳（インターネット）に入れば戦争訓練は誰でもできる。若者に人気のFPS（ファースト・パーソン・シューティング）なら、PMCが無料で配信してるから。勿論、仮想訓練だけど」

ビッグママ「彼らは手軽に戦争ゲームにのめり込んで行く。気が付くと、PMCで本物の銃を握っている」

ビッグママ「そして自分達の人生とは何も関係ない代理戦争を演じている」

ビッグママ「戦い続ける事がクールだと思い込んでいる。闘うことが生きる事だと思い込んでいる」

ビッグママ「闘う意味など、不要なのさ。彼らの心にはゲームでしかない」

――ハイスピード。レジスタンス達、準備が整う。
――ビッグママ、バイクの座席にあった小銃（Ｖｚ．８３）をスネークに渡しながら、

ビッグママ　「全ての根源はゼロよ」
ビッグママ　「リキッドを倒すだけではダメなの。『愛国者達』のシステム（AI）を止めなければ、この連鎖は終わらない」
　　――ビッグママ、エンジンスタート。
　　――エンジンが勢い良く回りだす。
ビッグママ　「乗って」
　　――ビッグママの後ろに跨るスネーク。
ビッグママ　「つかまって」
　　――ビッグママはアイドリングの音に聞き惚れている。空を仰ぎ、昔を懐かしむような表情で、
ビッグママ　「そこら中で戦争してるおかげで、石油もバイオ燃料（フュール）もダイヤモンドみたいに貴重でね」

ビッグママ「しばらく乗ってないの」

スネーク「(運転は) 大丈夫か」

ビッグママ「(ふっと笑って) 私がバイクを降りるのは死ぬときか…」

——ビッグママ、スネークに振り返り、

ビッグママ「恋をしたとき…」

スネーク「ビッグママ」

——ビッグママ、正面を見据えて、

ビッグママ「EVA(エヴァ)って呼んで」

——重い扉がレジスタンスの手によって開けられ、レジスタンスのバンやバイクが次々と発進する。

ビッグママ「行くよ！」

——クラッチをいきなりつなぐビッグママ。バイクはウイリーをしながらロケットスタート。あっという間に先行していたレジスタンスのバイクに追いつく。

——F.O.

【バイク脱出1／サイドカーデモ】東欧・市街

――ゲームへ。

オタコン「ビッグボスの遺体を敵の手に落とすわけには絶対にいかない」
オタコン「運河の脱出ポイントまで、遺体を無事に送り届けるんだ！」

――市街の路地に月光。レジスタンスのバンにキック。バンは横転してしまう。

EVA「月光よ！」

【レイブン登場／ポリデモ】東欧・市街外れ

――多数の犠牲を出しながらも、運河の近くまでやってきたバンとスネーク、ビッグママが乗るバイク。しかし、彼らの後方上空から、突如レイジング・レイブン（ビースト）が現れる。

レイジング・レイブン「（怒りの雄叫び）スネーク！　そこにいたか！　怒れ！　もっと怒れ！」

――レイジング・レイブンのグレネード攻撃を受けてレジスタンスのバンは爆発に巻き込まれる。ハンドルを切り、直前でかわすがバイクとは別の道に分かれてしまう。レイジング・レイブンはスネーク達に接近。

——カーチェイスしながらのレイジング・レイブン戦へ。

——F.O.

【バイク脱出2／サイドカーデモ】 東欧・市街

——上空からレイジング・レイブンの咆哮。振り返って空を仰ぎ見るＥＶＡ。

ＥＶＡ　「新手が来たわ！」

——ゲームへ。

オタコン　「スネーク。囮の車輌隊が全滅したようだ」
オタコン　「敵は君たちに対する攻撃に全力を傾けてくるだろう」
オタコン　「なんとかしのぎきるんだ。いいね！」

——ゲーム状況によってビッグママのセリフが変化する。

ＥＶＡ　「やるじゃない」
レイジング・レイブン「怒れ！」
ＥＶＡ　「どこを狙っているの、下手くそ‼」

EVA　「ちくしょう！」
EVA　「正面！」
レイブン兵　「やれ！」
EVA　「Ｈｏｏ！」
EVA　「上手い！」
EVA　「さすが私の息子ね！」
EVA　「左、お願い！」
レイブン兵　「落ち着け、落ち着け…」

――ゲーム中盤。

オタコン　「うまいぞ！」
レイジング・レイブン「スネェエエエク！」
EVA　「後ろ、お願い！」
オタコン　「その調子だ！」

――レイジング・レイブンの咆哮。

ＥＶＡ「来るわ！」

ＥＶＡ「突っ込んでくるわ」

――ハイスピード。レイジング・レイブンのグレネードによって吹き飛んでくるジープ。ＥＶＡ、バイクを横倒しにスライドさせてジープをかわす。この間もスネークの射撃は可能。

ＥＶＡ「スネーク、無事⁉」

――正面に多数のレイブン兵が待ち受ける。そして上空にはレイジング・レイブン。

ＥＶＡ「来たわね」

ＥＶＡ「カエルども…」

――なんとか攻撃をかわし続けてきたＥＶＡだったが、レイブン兵によって撃たれてしまう。

――バランスを崩すＥＶＡ。

スネーク「大丈夫か⁉」

ＥＶＡ「…だ、大丈夫よ…」

ＥＶＡ「来た…」

レイブン兵　「まだか?」
レイブン兵　「ちくしょう!」
レイブン兵　「くらえ!」
ＥＶＡ　「スネーク、後ろ!　後ろ!」
ＥＶＡ　「まだまだ行けるわ!」
レイブン兵　「やれ!」
ＥＶＡ　「…振り切ったの…?」

――とうとう逃げ切ったＥＶＡ。しかし、上空ではレイジング・レイブンが二人の様子を見ていた。
二人を追いかけるレイジング・レイブン。
――F.O.

【レイブン戦前／ポリデモ】東欧・市街外れ

——疾走するバイク。

EVA「来た、あれよ！」

——狭い路から抜け出すバイク。別のルートからバンが現れバイクと合流。その直後、バンはレイジング・レイブンのスライダーから攻撃を受け、横転。

レジスタンス2「うぁー‼」

EVA「ああっ！」

——横転してくるバンにつぶされそうになり、思わずハンドルを切るEVA。バイクが横倒しになって、スネークは転げ落ちる。

——バンは側面をついて地面を滑り、塔の壁面を破壊して一階に突っ込む。

——バイクも塔の壁面に突っ込み、EVAも続く。EVA、脇腹に建材の骨組みが刺さっている。

スネーク「大丈夫か⁉」

EVA「うう…（痛みにうなっている）」

スネーク「…ビッグママ！」

スネーク　「おい！　しっかりしろ！」

——意識が朦朧として記憶が混乱しているEVA。かつてネイキッド・スネーク（ビッグボス）と共に逃げたことを思い出している。

スネーク　「EVA…　君が必要だ」

EVA　「（薄目を開けてスネークを見る）あなたなの…？」

EVA　「スネーク…」

——不敵に笑うビッグママ（意識がはっきりする）。スネークを追いやって、

EVA　「世話の焼ける男…」

——EVAの腹部には鉄骨が刺さっている。腹部に刺さった鉄骨を引き抜くEVA。

【フラッシュバック】MGS3のシーン

スネーク　「ビッグママ！」

——スネーク、EVAを助け起こす。しかし激痛に耐えきれず倒れ込むEVA。スネーク、倒れ込むEVAを受け止める。

ＥＶＡ　「車は…？」
スネーク　「あっちだ」
――スネーク、ＥＶＡを抱えて歩き出す。
――空をレイブンの翼（スライダー）が舞いだす。
――バンが突っ込んだ塔に逃げ込む二人。ＥＶＡは脇腹を押さえたまま。出血が激しい。
――塔・内部・一階。
――塔に突っ込んだバンが煙を上げている。
ＥＶＡ　「あの子達は？」
――運転席、助手席にはぐったりと動かないレジスタンス。
ＥＶＡ　「（落胆）ああ」
――ＥＶＡ、痛みとレジスタンスの仲間を失ったショックでその場にくずおれる。
ＥＶＡ　「ごめんね…」
――スネーク、バンの近くに落ちていたＦＡＬを拾い上げる。

——ＥＶＡ、扉の横にずり落ちる。壁にもたれて動かない。

ＥＶＡ　「あいつ（ビースト）はこのバンを調べに来るはず」

スネーク　「片付けてくる。あんたはここで見張っていてくれ」

ＥＶＡ　「あの子達と連絡を取っておく」

スネーク　「頼む」

——スネーク、ＦＡＬをＥＶＡに渡す。

ＥＶＡ　「スネーク、…帰ってきてね」

スネーク　「ああ」

ＥＶＡ　「きっとよ…！」

【フラッシュバック】ＭＧＳ３のシーン

——ＭＧＳ３でスネークがザ・ボスを倒しにいくときのＥＶＡの台詞と同じだが、いまは重傷なので息も絶え絶え。

——スネーク、ＥＶＡに背を向け、Ｍ４を構えながら、塔の階段へと進む。

——塔に反響するレイジング・レイブンの鳴き声。

――スネーク、(狭い場所で有効な) ハンドガン (Operator) を構えながら、螺旋階段を上がっていく。

――F.O.

【レイブン戦前／ポリデモ】 東欧・塔の中程の階

――オペレーターを構えながら、螺旋階段を慎重に上がるスネーク。鉄製の扉を前にして、再びM4を構え直す。マガジン内の残弾数もチェック。

――扉を開けると、高い吹き抜けのフロアに出た。クリアリング中、突如発作に襲われるスネーク。注射器を取り出し首筋に打ち込む。

スネーク 「(息を殺しながら) う…あ、あ…」

――床に座り込み、壁にもたれかかるスネーク。外壁のほうからの羽音に気付き、休む間もなく確認しにいくと…、外壁を爆破して、レイジング・レイブンが舞い込んでくる。

レイジング・レイブン 「(憤怒しながら) 怒れ！ スネーク！ 感情を露わにしろ！」

【字幕】 レイジング・レイブン　菊地 由美／飯塚 昭三

レイジング・レイブン 「もっと怒っていいんだ！ 怒りは怒りを産む！」

レイジング・レイブン「もっと怒っていいんだ！　怒りは怒りを産む！」

レイジング・レイブン「さあ、怒って見せろ！」
――レイブン、両手を広げ、背中から建物外に倒れ込みながらジェット噴射！
――フロアに充満する熱風を、ローリングで物陰に隠れてかわすスネーク。熱風で塔内の照明に使われていたろうそくが赤く燃え上がる。
――レイブン、落ちかけながら再度ジェット噴射、垂直に上昇していく。

レイジング・レイブン「（憤怒しながら）怒れ！　怒れっ‼」
レイジング・レイブン「さあ、行くぞ！」
――レイブン、半身回転しつつ水平方向へ飛んでいく。
――ゲームへ。

【レイブン・ビューティ化／ポリデモ】東欧・市街

――イメージは天使の誕生。塔の天井部から舞い降りてくるレイジング・レイブン。
――スネークが歩み寄る。
――レイジング・レイブンは床上数メートルの空中に静止。
レイジング・レイブン「許せない…、許せない！　許せないわ、こんちくしょう！」

レイジング・レイブン「ああ、怒りが私の中に溜まっていく、怒りが私を浸食する！」

——大きな羽で身体を覆う。身体から黒い羽が舞い散る。

——羽は黒から白へ変わっていく。

レイジング・レイブン「いいえ、違う。許せないのは自分自身」

レイジング・レイブン「ほんとは怒りたくない。怒りはいらない、怒りじゃない」

——床に落ちるスライダー。舞う羽の向こうに「ビューティ自身」がみえる。

レイジング・レイブン（ビューティ）「（叫び）怖いのよ‼」

——すとんっ！　と床に降り立つ「ビューティ」天使。しかし、すぐに床にくずおれる。

——空中を白い羽が舞っている。

——身体に繋がっているチューブも長く垂れている。

——スネークが近づくと、ふいに顔を上げ、何かにおびえるレイブン。

——画面はセピア色に変わり、カラスの鳴き声が塔内に響き渡る。カラスの実体は無く、ただ影だけが不気味に飛び交う。

レイジング・レイブン（ビューティ）「（悲鳴）助けて！　鴉（レイブン）が私の肉を、身体を、心を啄むのよ！」

レイジング・レイブン（ビューティ）「やめて！　もう怒りはいらない！（叫び）」

――レイブンの叫びと共に通常の画面の色に戻る。

――レイブン艶かしく立ち上がりながら、

レイジング・レイブン（ビューティ）「私を檻から出して」

――レイブンのオクトカムが燃えたぎる溶岩のような色から通常のオクトカムの色に変わって、

レイジング・レイブン（ビューティ）「羽もいらない。もう怒りはいらない」

レイジング・レイブン（ビューティ）「さあ…、怒りを放出しなさい」

――レイブン、舞うように回転しながらスネークに近づいてくる。

――ゲーム中、レイブン（少女）のＰＴＳＤの主因となった事件の音響（悲鳴、銃声、怒号、鴉のような鳴き声（Nevermore ＝ポーの詩篇））が重なる。

――ゲームへ。

オタコン「スネーク、こいつもスーツから出てきた！　気をつけろ」

オタコン「そいつも君に抱きついてくるぞ！」

【レイブン・ビューティ自爆／ポリデモ】　東欧・市街

※3分経つとビューティは自爆、またはスネークからのダメージで

レイジング・レイブン（ビューティ）「ああ…」

——地面に倒れるレイジング・レイブン（ビューティ）。

——自爆する。爆風が止み、スネークは立ち上がる。

——注射を首筋に打つスネーク。息が荒い。

——レイジング・レイブンのスライダーに近付くスネーク。スライダーの様子を確認する。

——羽根に包まれ落ちている「グレネードランチャー」を拾う。

——ドレビンから強制ＳＥＮＤ。

【レイブン・ビューティ眠る／ポリデモ】　東欧・市街

※3分以内にビューティを眠らせた場合

レイジング・レイブン（ビューティ）「ああ…」

——叫び声とともに、地面に倒れるレイジング・レイブン（ビューティ）。彼女の周りには白い羽

――叫び声とともに、地面に倒れるレイジング・レイブン（ビューティ）。彼女の周りには白い羽が舞う。ビューティ、胎児のように膝を抱える。
――スネーク、ふとスライダー近くのグレネードランチャーに気付き、拾い上げる。
――ドレビンから強制SEND。

【レイブン戦後／強制無線デモ（ドレビン）】東欧・市街

ドレビン「すごいなスネーク。レイブンに勝ったのか」
スネーク「（またお前か）ドレビン」
ドレビン「ほう、戦利品まで手に入れてるな。グレネードランチャー…使い勝手のいい武器だ」
スネーク「だがこれもIDなしでは撃てないんじゃないのか」
ドレビン「今回は俺がタダで洗浄(ロンダリング)してやるよ」
ドレビン「そのかわり用が済んだら俺に譲ってくれ。何十年分もの怒りが込められたグレネードランチャーだ。いいコレクションになる」
スネーク「彼女は何歳(いくつ)なんだ」
ドレビン「二十歳(ハタチ)そこそこだろう。だが彼女の身体には数十年間の兵士の怒りが閉じ込められていたんだよ」

スネーク「兵士の……？」

ドレビン「そう。アチェの兵士達の怒りだ。ここでは何十年も紛争が続いていた」

ドレビン「彼女は素性の知れない兵士達に身体を拘束され、家畜のような扱いを受けていた。そこにはそんな子供達が山ほどいたんだ」

スネーク「〝匿名の暴力〟……」

ドレビン「そうだ。国軍か独立勢力かもわからない兵士達の怒りを、来る日も来る日もぶつけられた。浴び続けた戦場の怒りは、身動きの取れない彼女達の体内に蓄積していった」

ドレビン「彼女達はお互いを励ましあい、いつか助かることを望みながら残飯を喰って命を繋いだ。『残飯食いの鴉(レイブン)』と蔑まれて、更なる怒りのはけ口にされながらな」

ドレビン「兵士達が去っていく朝、彼女達は生きたまま鴉(レイブン)のエサとして捨てられた。まるで鳥葬だ」

ドレビン「何日もかけて一人ずつ、仲間の身体は鴉(レイブン)に啄(ついば)まれていった。鴉(レイブン)の群れはとうとう、彼女にも襲い掛かった」

ドレビン「だが偶然にも、彼女の拘束は鴉(レイブン)の嘴(くちばし)によって解かれたんだ。彼女の身体は突如、

解放された」

ドレビン「その瞬間、体中に充満していた怒りが、彼女の心を壊した」

ドレビン「彼女はまとわりつく鴉達の体を磨り潰すと、兵士達のあとを追った。そして兵士達に追いつくと、彼女は狡猾にも夜を待ったんだ」

ドレビン「鴉が鳴くと人が死ぬ……その光景は、そんな伝承そのままだった。彼女は鴉のような声を上げながら、そこにいる全ての人間を殺してまわった。兵士達、奴隷として捕われていた民間人、もう見境がつかなくなっていた」

ドレビン「仲間が受けた仕打ちと、自分が浴びた苦痛。彼女の怒りは、兵士達が長い戦争に植え込まれた怒りへとリンクした」

スネーク「それが彼女の強さでもあり…そして弱点でもあった」

ドレビン「さすがだよスネーク。あんたはそんなレイブンも浄化しちまったんだ」

ドレビン「あんたは戦争の火種…いや、戦争そのものだと言えるかもしれないな」

スネーク「ドレビン」

ドレビン「いや…そう言うにはまだ早いか。スネーク、ＢＢ部隊はまだ半分残っている。油断するなよ」

【レイブン・ビューティ戦後／ポリデモ】東欧・市街

——階段を下りてくるスネーク。壁に寄りかかったＥＶＡを確認する。応急処置で止血した脇腹を押さえたまま、動かない。

——バンの周囲にはＥＶＡが撃ち落とした２、３機のスライダーが落ちている。

——ＥＶＡに近付くスネーク。

ＥＶＡ「スネーク。あなたに謝ることがある」

ＥＶＡ「私たちと一緒に出た３台の車は囮」

——バンに向かうスネーク。

ＥＶＡ「本物は河川を使って下流に向かっている」

——バンの後部ドアを開けるスネーク。

ＥＶＡ「彼らと連絡がついたの」

——中は空。ビッグボスの遺体はない。

ＥＶＡ「聖櫃（ＰＹＸ）は無事よ。合流地点はこの下の河川沿い」

EVA「陸路も空路もダメだけど（うめき）」
EVA「…クルーザーが待っている。川を使って逃げる計画」
EVA「早くここから出ましょう」
スネーク「そいつは名案だ」
——スネーク、EVAの腕をとって、立ち上がるのを助ける。
EVA「う…」
——苦しそうに立ち上がるEVA。
——扉を開けて、塔の前に出る二人。潰れたバイクが転がっている。
——EVAはマンホールの前で立ち止まっている。スネークがバイクの残骸を見ていると、
EVA「こっちよ、来て」
EVA「（バイクを見て）もう風はいらない。これで自分を偽る事もない」
EVA「私がバイクを降りるのは、恋をしたときか…（死ぬとき）」
——と、そこで話をやめる。この時、既にEVAは死を覚悟している。
——EVA、気持ちを振り払うようにバイクから顔をそむけ、マンホールの上に手を置く。

ＥＶＡ　「スネーク、お願い」

——スネーク、マンホールを開く。

ＥＶＡ　「地下水道は河岸まで続いている。地上よりは、追手も少ないはず」

——ハシゴを降りるＥＶＡ。スネークもそれに続く。背後の瓦礫からのそのそと一体の仔月光が顔を出す。カメラアイが点滅している。仔月光の主観。

——スネークがマンホールに入っていく。

——F.O.

——セーブ画面。

【ＧＯＰ発動１／ポリデモ】　東欧・浮島前

——地下道を進むスネークとＥＶＡ。怪我をしたＥＶＡの足取りは重い。スネークは前方の安全を確かめつつ慎重に歩みを進めている。地下水道の先に外の明かりが見える。表の川につながっている。

——表の川では何かが燃える炎が揺らめいている（ＥＶＡの脱出用クルーザー）。

——出口の手前に一台の哨戒艇が止まっており、不気味に黒くシルエットを浮かべている（リキッドの脱出用）。

——前方にＭ４を構え、警戒して近づくスネーク。

――シルエットの中で赤い煙草の光が浮かび上がる。

――足を止めるスネーク。

――リキッドが木箱に腰掛けて、葉巻（一口め）を吸っている。ビッグボスへの思いで葉巻を吸っている。

EVA「リキッド……！」

――紫煙を吐き出すリキッド。

リキッド「（葉巻の味が）悪くない」

EVA「聖櫃（PYX）は何処？」

リキッド「もう必要ない」

EVA「何処なの？」

――リキッド、尋ねられると視線を川の方に向ける。

――その視線の先を見るEVA。EVA、前方にある何かを見て、悲鳴を上げる。前方に炎上するクルーザー。「もうダメ」と戦意を失い、座り込むEVA。

EVA「（落胆）ああ…」

スネーク　「あんたの船か……？」

――すると数名のヘイブン兵たちが現れ、スネークたちを取り囲み、銃口を向ける。

――川縁の哨戒艇、コート姿の男が映される。男、立ち上がるとスネーク達の方に振り向く。男はヴァンプ、そしてその背後からナオミが現れる。

スネーク　「ナオミ……」

――ナオミ、スネーク達から顔を背ける。

リキッド　「お前達の動きは全てナオミが教えてくれた。お陰でこいつ（ビッグボスの遺体）も手に入った」

リキッド　「あれほど望んでいたビッグボスをついに…、…な」

リキッド　「銃を下ろせ、スネーク」

リキッド　「もう手遅れだ」

――リキッドを睨み付けながら、Ｍ４を下ろすスネーク。

――リキッド、スネークの方に歩み寄りながら、

リキッド　「惜しかったな」

リキッド　「やはり俺の勝ちだな。兄弟」

――煙を吐きながら、微笑むリキッド。

リキッド　「親父が好きだった葉巻だ」
リキッド　「どうだ？　最後に吸うか？」

――リキッド、葉巻をスネークに突き出す。スネーク、拒絶する。

スネーク　「ビッグボス気取りか？」

――リキッド、紫煙をスネークに吹きかける。スネーク、咳き込む。

リキッド　「ふむ、さすがは兄弟、お前は正しい」
リキッド　「俺も今日でこいつとはおさらばだ（ビッグボスの振りをするのは）」

――葉巻をスネークに投げつけるリキッド。葉巻がソリッド・アイに当たる。
――その瞬間を突いて、スネーク、リキッドに銃を向ける。と、リキッド、長モノのＣＱＣで素早い動きでスネークから銃を奪い取る。

スネーク　「なっ？」

——スネークが右肩に刺さったナイフを抜こうとしていると、リキッドはM4とオペレータをスネークに向けて、

リキッド　「おいおい、CQCなら、俺の方が（経験が）上だ！」

スネーク　「仮にシステム（SOP）を手に入れたとしても、所詮、『愛国者達』のAIの一部」

スネーク　「軍部を掌握したに過ぎない」

——リキッド、嘲笑。スネークに向けていた銃を床に放りなげる。スネークに近づくと、右肩のナイフを掴んでスネークを無理矢理立ち上がらせて、

リキッド　「それが何だ、兄弟」

リキッド　「もはや全てを手に入れるのは時間の問題だ」

——リキッド、ナイフをさらに押し込んで、電気ショックを与える。苦痛にたまらずうめき声を上げるスネーク。

リキッド　「奴らが失ったと信じている『G．W』」

——リキッド、スネークに顔を近づける。学生の喧嘩の様。

リキッド　「あれはいま、我が軍にある」

——リキッド、スネークを突き放す。

スネーク　「何だと？　あれは破壊したはずだ」

【GOP発動2／ムービー】東欧・浮島前

——ムービー挿入。過去のゲーム映像、イラスト。

リキッド　「お前たちのワームは『G．W』を細かく切断したに過ぎない。修復は可能だ」

リキッド　「そして『J．D（ジョン・ドゥ）』のネットワークの『内側（インサイド）』に潜伏させた」

リキッド　「この男の身体が役に立った」

リキッド　「『G．W』を回収するのに、この身体（オセロット）があらゆるセキュリティをパスしてくれた」

リキッド　「『愛国者達』のシステムも所詮はただの機械だ」

リキッド　「幽霊（スプーク）となってネットワーク上に存在する『G．W』を、『J．D（ジョン・ドゥ）』は外敵として認識できるはずはない」

リキッド　「俺は『J．D（ジョン・ドゥ）』を核攻撃によって破壊し、『愛国者達』のネットワークを手に入れる」

リキッド　「そして全ての統制から開放されたヘイブンを築き上げるのだ」
リキッド　「名も無き男(ジョン・ドゥ)を駆逐して、俺は初めて自分の名前を付ける」

【GOP発動3／ポリデモ】東欧・浮島前

スネーク　「リキッド、『愛国者達』に成り代わる気か!?」
リキッド　「スネーク、俺達は『愛国者達』に創られた」
リキッド　「人間ではない。人間に縁取られた、〝陰〟なのだ」

――リキッド、スネークの腹部を殴る。スネーク、反撃のパンチを繰り出す。受け止めるリキッド。

リキッド　「俺たちは存在してはいけない異形(いけい)」

――リキッド、さらにスネークの腹部にパンチ。顔面にも裏拳パンチ。跪くスネークを再びナイフを握って立ち上がらせて、

リキッド　「俺たちは次の世代の繁栄を阻害するシステム」

――スネーク、リキッドの腹部にパンチを繰り出すが、力が入らない。平気で受け止めるリキッド。

――リキッド、ナイフの電撃攻撃！

リキッド「造られた理由がある限り、俺達の存在理由は『愛国者達』しかない」

リキッド「俺はもう運命に逆らわない」

リキッド「ゼロを殺し、ビッグボスを殺し、自分が愛国者になる」

――スネーク、そこで渾身の反撃パンチを繰り出すが、リキッドに軽くかわされる。

――リキッド、右肩のナイフをさらに押し込んでからスネークの背後に回り、

リキッド「全てはゼロとビッグボスから始まった」

リキッド「生きるのなら、運命を全うする」

リキッド「全てを無（ゼロ）に帰し、そこから生まれ変わる…」

――リキッド、スネークの耳元にキスをすると、ナイフの電気ショック！

――スネーク倒れる。それを見下ろすリキッド。

――背後からリキッドを呼ぶ声が聞こえる。

EVA「アダム…」

――リキッドの足下に、EVAが放り投げたリンゴが転がってくる。

——リンゴを手に取るリキッド。一瞬見つめたのち、握りつぶす。

——リキッド、哨戒艇の方へ歩きながら、

リキッド「俺たちが生き続ける限り、光の時代はない」

リキッド「次の世代にバトンを渡すつもりなら、自ら死を選ぶしかない」

——ふと外の河川の方へ目をやるリキッド。米軍の包囲の気配を感じ取る。

ヴァンプ「ボス……！」

リキッド「スネーク、役者が揃ったようだ」

リキッド「見届けるがいい、我々の勝利を‼」

——ガッツポーズで決めて、哨戒艇に乗り込むリキッド。

——エンジン音が高まる。ヘイブン兵たちも後に続く。

リキッド「出せ‼」

——ゆっくりと進みだす哨戒艇。ナオミは哀しげな表情でスネークを見ている。

——水道内に取り残されるスネーク。

——F.O.

【GOP発動4／ポリデモ】　東欧・浮島前

――哨戒艇が外に出たところで、暗闇の中に一斉にライトが照らされる。ライトを照らしているのはメリル達が乗る哨戒艇だった。ジョニーは船酔い。メリルの哨戒艇は船着場に停泊。

メリル（メガホン）「リキッド！　そこまでよ！」

――周囲を見渡すリキッド。二本の桟橋と対岸で囲まれた河川に、10隻ほどの米軍哨戒艇が現れる。

メリル（メガホン）「直ちに銃を降ろして下がりなさい！」

――米軍哨戒艇はたちまちリキッド哨戒艇を取り囲む。

――川の中央で旋回するリキッド艇。

――さらに数機のヘリが接近、ヘリからライフルを構えているスナイパー。

――桟橋の上には米軍の車輌が到着。車輌から続々と米兵が降り、リキッド達に向けて銃を構えている。

――圧倒的な数の米兵がリキッドたちを取り囲み、リキッド一味を照らし出す。

メリル（メガホン）「全員銃を捨てて！　両手を見えるように挙げなさい！」

――サーチライトで照らされ怒って牙を向くヴァンプ。隣のナオミも眩しがる。

――リキッドはスポットライトを満足げに浴びている。

スネーク「メリル!!」

――メリルの哨戒艇に駆けつけたスネーク。EVAに肩を貸して、歩くのを助けている。
――スネークの声はメリルに聞こえない。船に乗り込む、スネークとEVA。
――メリルの哨戒艇は船着場を離れ、リキッドの哨戒艇に接近を始める。
――にらみ合う、メリルとリキッド。
――ライトに照らされたリキッドの右手のアップ。リキッドは右手を上げようとしている。
――それを見たメリルは、

メリル「構え!」

――メリルの号令で一斉に銃をリキッド達に向ける01部隊と米兵達。メリル自らも銃を構える。
――カメラ、再びリキッドの右手をアップ。リキッドはそのまま右手を上げ続ける。右腕が上がり切ったところで、左手を前方に突き出す。

スネーク「やめろ! リキッド!」

メリル「撃てぇ!!」

――リキッド、上げていた右手を、人差し指と中指をそろえて立てた「撃て」のサインにして前方に振り下ろす。右手はリキッドのオリジナルでもある。現在は義手。このサインを受けてガンズ・オブ・ザ・パトリオットが実行される。

――銃声は一切聞こえない。辺りを静寂が包む。ひとつ、ひとつ消えていくサーチライトの灯り。静寂のなか聞こえるのはヘリコプターのローター音のみ。

――カメラ、引き金を引くメリルにパン。しかし、弾は発射されない！

メリル「え…」

――反射的にセイフティがオンになっていないか確認するメリル。やはり引けない。別の銃も試すが、結果は同じ。他の米兵も同様に引き金が引けない。

――たちまちエンジンが止まり、減速するメリル艇。艇が操縦できない。

リキッド「システム(SOP)はとうに頂いた！」

リキッド「銃も兵器も、もはや貴様らのものではない！」

リキッド「見よ」

リキッド「これがガンズ・オブ・ザ・パトリオットだ」

――リキッド、降ろしていた右手を再びサインの形にして上げる。そして、上空を旋回するヘリに

右手を向けて、

リキッド「バン！」

リキッド「バン！」

——すると、上空のヘリ内では、突如アラート音が鳴り出す。コントロールを失って慌てるパイロット。ヘリは落下し、各所で激突、炎上。うち1機は、川面に落ちて、米軍の哨戒艇近くで爆発！

——リキッド、その様子を見て大笑い。さらに、右手を01部隊の乗る哨戒艇に向け、

リキッド「死ね！」

——のかけ声で、機銃の掃射音。哨戒艇に着弾。

——あたかも、リキッドの指先から弾丸が発射されているように見える。実はヘイブン兵の発砲。

——遮蔽物に身を隠す、01部隊の面々とスネーク&ＥＶＡ。

——リキッド、右手を降ろし、今度は左手で同じ形を作って、自分の頭に当て、

リキッド「バン！」

——突如、苦しみ出す米兵達。中東や南米のように、体内のナノマシンが操作され、感情をコントロールできない。リキッド、再び大笑い。

――01部隊の艇では、ジョニーひとりだけが平気で皆を助けようと動き回る。

ジョニー　「ジョナサン、エド！」

ジョニー　「隊長、隊長！」

――ジョニー、メリルの元へ駆け寄って、助ける。

メリル　「アキバ…、あなた、大丈夫なの」

ジョニー　「ええ、大丈夫です」

メリル　「何故…」

――カメラ変わって、リキッド。哨戒艇の手すりの上に立ち、両手を銃の形にして、ババババと撃つまね。ヘイブン兵が周囲の米兵に向けて掃射。

メリル　「危ない！」

――メリル、ジョニーを助けるために突き放す。物陰に身を潜める二人。米兵達は撃たれるがまま。

――ナオミは悲しげな表情。顔を背ける。大笑いを続けるリキッド。

――それを睨み付けるスネーク。

リキッド　「見たか、ゼロ！　我々の勝利！」
リキッド　「これぞガンズ・オブ・ザ・パトリオットだ‼」
——リキッド、右拳を突き上げて、勝利のポーズ。ちらっと横目でスネーク達を見る。
——さらに撃たれ続ける米兵達。
——01部隊は全員なんとか生存しているが、息も絶え絶えな様子。
——そこへリキッド追い打ちをかけるように、
リキッド　「邪魔だ‼」
——リキッド艇から砲撃。メリル艇側面に命中！　キャビンは炎上する。
——反動で大きく傾くメリル艇。川に落ちるエド。ジョナサン手を差し伸べるが…、
ジョナサン　「エド！」
——ジョナサン、自らもバランスを崩して川に落ちてしまう。
——メリルも落ちそうになったところへ、アキバが駆けつけてメリルを抱きかかえるが、ふたり揃って川に落ちる。ハイスピード。
——動くものが無くなり、辺りは静寂に包まれている。
——リキッド、メリルの船に近づく。船にしがみついて倒れているスネークを見下ろすリキッド。

リキッド　「返してやれ。もう必要ない」

――ヴァンプ、足下にあるビッグボスの遺体（棺桶ごと）をメリル艇の炎の中に投げ込む。

――炎の中に落ちた遺体が燃え上がる。

――遺体と共に炎上するＥＶＡ。スネーク、ＥＶＡを助けようと炎の中に飛び込む。

――ＥＶＡは言いながら遺体に近づき、遺体の上に立ち上がる。

ＥＶＡ　「あぁ！」

リキッド　「お別れだ、スネーク！」

――リキッド、ソーを抜いて遺体（棺桶）に発砲！

――スネーク、ＥＶＡを抱きかかえて助けたものの、一瞬の炎に包まれ顔の左側に火傷を負う。

――キャビン爆発！　黒こげの遺体。

――リキッドの船がゆるやかに発進する。

――カメラ、スネークとＥＶＡへ。ふたりの体から煙がくすぶり続けている。ＥＶＡの脚は燃え続けていて真っ赤。

――スネーク、力を振り絞って、

スネーク　「オタコオオォォン！」

——Mk．Ⅱが実体化、メリル艇から離れる直前のリキッド艇へ飛び移りステルスをオン！　リキッドたちには気づかれない。

——一瞬だが悲しげな表情を浮かべるリキッド。

——F.O.

【GOP発動5／ポリデモ】東欧・浮島前

——時間経過。

——炎も収まり、残り火がかすかに燃えている。

——生き延びた数人の米兵が、GOPのダメージから回復できておらず、ヨロヨロと動いている。

——カメラ変わって、川岸のエドとジョナサン。

エド　「ジョナサン…」

ジョナサン　「エド」

エド　「俺達はいいパートナーだったよな…」

ジョナサン　「ああ…、最高の友達だ」

——カメラ変わって、アキバ（ジョニー）。

ジョニー　「メリル…。メリル、メリル！」

——呼んでも意識が戻らないメリル。

ジョニー　「メリル」

——アキバ（ジョニー）、意を決して人工呼吸の準備。スカルキャップを脱ぎ捨てる。気道の確保。人工呼吸。心臓マッサージ。人工呼吸。心臓マッサージを続ける。

ジョニー　「メリル…。しっかりしろ…！」

——懸命に心臓マッサージを続けるアキバ（ジョニー）。

ジョニー　「メリル！　しっかりしろ…！」

ジョニー　「メリル…」

——意識が戻ったメリル、水を吐き出す。

ジョニー　「メリル…、メリル！」

――意識がはっきりしてきたメリル、アキバ（ジョニー）の顔を見つめる。
――アキバ（ジョニー）、ばつが悪そう。

ジョニー「いやこれは、その…」

――メリル、アキバ（ジョニー）の顔を引き寄せて、自分から力強いキスをする。

メリル「アキバ…ありがとう」

――咳き込むメリルを抱きかかえるアキバ（ジョニー）。

ジョニー「メリル、大丈夫か」

ジョニー「良かったら…、ジョニーと呼んでくれないか」

――見つめ合うふたり。いい感じ。メリル、視界に向こうにいるスネークとEVAが入る。それに気付いてアキバ（ジョニー）もスネーク達を見る。
――カメラ、スネークとEVAに。地面を這って岸辺にあがったところで危篤状態のEVAを抱きかかえるスネーク。顔の左半分を火傷している。

EVA「（虚ろにスネークを見つめ）あなた達も怪物（ビースト）の一種。そしてあなたは怪物（ビースト）が光を得た際に、焼き付いてできた陰」

EVA　「光を消さなければ、陰は消えない」
EVA　「光がある限り、陰を消しても、意味はない」
EVA　「全てを正常に戻すには…、光を消すこと」
EVA　「そして、その時…、…あなたは消える」

——EVA、スネークの顔を触れようと手を上げるが、途中で力尽きる。
——呆然としているスネーク。
——車輌の音が近付いてくる。
——スネークのアップ。その後ろにグレイが現れる。
——スネーク、顔を上げながら、

スネーク　「お前…」

——停止した装甲車から現れるドレビン。

ドレビン　「顧客第一だ」

——ドレビン、スネークの右肩に突き刺さったままだったナイフを引き抜く。
——悲鳴を上げるスネーク。

ドレビン　「仲間のところまで送ってやるよ」

――グレイ、嬉しそうに小躍り。

――全景 F.O.

ACT3「Third Sun　第三の太陽」無線集

■東欧：ミッドタウン・南セクター・中央セクター・北西セクター

【レジスタンスを探せ】リアルタイム無線
※レジスタンス尾行ゲーム開始直後
オタコン「まずはレジスタンスを探そう」
オタコン「レーダーで彼らの気配を見つけるか」
オタコン「PMCの無線を傍受して、レジスタンスが居そうな場所へ行ってもいい」

【見つからずに尾行しろ】任意無線
※「レジスタンスを探せ」を聞いた後でSEND。初回のみ
オタコン「スネーク、レジスタンスは君の事を何も知らない」
オタコン「外出禁止令の出ている街中で、見も知らぬ君に尾行されていることに気付けば、君のことを政府側の人間と思って攻撃してきたり、逃走したりするだろう」
オタコン「絶対彼らには悟られないように気をつけてくれ」

【潜入フェイズでないとダメ】任意無線
※「見つからずに尾行しろ」を聞いた後でSEND。初回のみ
オタコン「レジスタンスがもっとも恐れるのは、政府側のPMCに彼らのアジトを突き止められてしまうことだ」
オタコン「とすれば、PMCの警戒レベルが通常以上に高まっている時には、レジスタンスは決してアジトへ近づくことはしないだろう。下手をすれば場所を特定されてしまう危険が生じるからね」
オタコン「このことを肝に銘じておいてくれ」

【レジスタンスの見つけ方】任意無線
※「潜入フェイズでないとダメ」を聞いた後でSEND。レジスタンス発見まで
オタコン「レジスタンスを見つけるには、レーダー上で人の気配をたどるか、現地PMC、レイ

ブン・ソードの交信を傍受して、レジスタンスがいると思われるポイントを特定するかのどちらかだ」

【レジスタンス発見】リアルタイム無線
※レジスタンスを発見した時。初回のみ
（1）
オタコン「戒厳令下に外出……？　怪しいねスネーク、後をつけよう」
（2）
オタコン「レジスタンスを見つけたようだね」
オタコン「よし、気付かれないように後をつけるんだ」
（3）
オタコン「レジスタンスを見つけたね」
オタコン「さっそく尾行だ。しっかり頼む」

【無線傍受成功】リアルタイム無線
※レジスタンス発見後、無線傍受機を装備していると
（1）
オタコン「スネーク、レジスタンスの位置がマップに転送されたよ」

オタコン「確認してくれ」
（2）
オタコン「PMCのデータ通信を解析した」
オタコン「マップ上にレジスタンスの位置（エリア）をマーキングしたよ」

【PMCに注意】任意無線
※レジスタンス発見後初回のみ
オタコン「スネーク、その辺りにPMCが巡回警備を行っている」
オタコン「言うまでも無いけど、彼らにも十分警戒してくれよ」
オタコン「彼らに見つかったら、レジスタンスの尾行どころじゃなくなってしまうからね」

【レジスタンスを助けろ】任意無線
※「PMCに注意」を聞いた後でSEND。初回のみ
オタコン「もしレジスタンスが逮捕されるところを目撃しても、諦めないでくれ」
オタコン「逮捕された者は尋問のため、PMCの詰所へと連行されてゆくだろう」

オタコン　「連行中の護送部隊を一掃することで、レジスタンスの逃走を手助けできるよ」

【現地背景の説明】任意無線

※「レジスタンスを助けろ」を聞いた後でＳＥＮＤ。初回のみ

スネーク　「オタコン、これだけの数のＰＭＣが、なぜここに？」

オタコン　「半年前のことだ。以前から計画されていたアメリカ企業による石油パイプラインの建設が始まり、工事の警備と銘打ったＰＭＣ部隊の現地進駐が、親米派現政権によって承認された」

オタコン　「それを契機に政府と反米派反対勢力との対立が深刻化していったんだけど、そんな中、アメリカ大使館の近くで反対勢力によるものとされる暴動事件が発生した」

オタコン　「暴動はＰＭＣによって鎮圧され、この事件をきっかけにアメリカ政府から説得された現政府は、大がかりなレジスタンス狩りを開始したんだ」

オタコン　「そして現在、全交通網は封鎖され、一斉検問がしかれ……」

オタコン　「……と、ここまでは表向きの話」

スネーク　「？」

オタコン　「反対勢力の暴動、あれは、陰謀だったんじゃないかと僕はにらんでる」

オタコン　「レジスタンス狩りの実働部隊はリキッドの息がかかったＰＭＣで、狩り出そうとしているのはビッグママのレジスタンスグループ。そしてその手元に、ビッグボスの遺体がある……」

オタコン　「リキッドは裏で糸を引いて暴動事件を起こし、ビッグママに濡れ衣をかぶせることで、ビッグボスの遺体へ大手を振って近づける環境を作り出したんだ。彼らに政治的動機はないよ」

スネーク　「確かに、リキッドならやりかねん」

オタコン　「だろう？　何としても、奴らより早くビッグママに接触しなくちゃ」

スネーク　「ああ、同感だ」

【他のレジスタンスを探せ】任意無線
※「現地背景の説明」を聞いた後でSEND。初回のみ
オタコン「目の前で逮捕されたレジスタンスを奪還出来なかったり、尾行中に見失ったとしても、まだチャンスはある」
オタコン「この街はビッグママの根城だ。レジスタンスがたった一人や二人しかいないなんて事、あり得ない筈だ」
オタコン「もしものときは、別のレジスタンスを探すんだ。きっと他にも何人かいるはずだよ」

【PMCの排除】任意無線
※「他のレジスタンスを探せ」を聞いた後でSEND。
初回のみ
オタコン「PMCは仲間以外の人間を発見すれば、尋問のために問答無用で連行しようとするだろう」
オタコン「もしレジスタンスがPMCに見つかったり、あるいは見つかりそうになったら、彼らが連行される前にPMCの排除を試みるんだ」
オタコン「ただしその場合でも、彼らが、攻撃を受けたとは思わないようにするんだ。眠らせてしまうとかね」
オタコン「レジスタンスの危機には機敏に対応して欲しい。頼むよ」

【PMCの誘導】任意無線
※「PMCの排除」を聞いた後でSEND。初回のみ
オタコン「PMCがレジスタンスの存在を感づきそうになった時は、君自身が囮になってPMCを引きつけ、レジスタンスに離脱する隙を与える必要もあるだろう」
オタコン「壁を叩いたり空のマガジンを投げたり……」
オタコン「機に応じた適切な行動を心がけてくれ」

【尾行のポイント1】任意無線
※レジスタンス尾行中にSEND
(1)
オタコン「レジスタンスを見失ったりしないよう、出来るだけ注意するんだ」
オタコン「別のレジスタンスを探すとなると、時間を

浪費してしまうからね」

（2）

オタコン　「レジスタンスに感づかれないように尾行してくれ。無論、ＰＭＣにも同様だ」

【尾行のポイント2】任意無線

※レジスタンスに尾行を気付かれたり、潜入フェイズ以外でＳＥＮＤ

オタコン　「スネーク、ダメだよ」

オタコン　「レジスタンスは、安全が確保された状態でない限り、アジトへは向かわない筈だ」

オタコン　「まずはＰＭＣの警戒状態が解かれるのを待った方がいい」

【ＰＭＣが邪魔】リアルタイム無線

※レジスタンスの前にＰＭＣがいる状況で

オタコン　「あのレジスタンス、ＰＭＣが邪魔で進めないみたいだ。どうにかしてやれないか？　スネーク」

【レジスタンスにちょっかい】任意無線

※レジスタンスに麻酔銃などを撃つと発生

（1）初回

オタコン　「スネーク、遊んでる場合じゃないだろう」

オタコン　「いたずらは止すんだ。それより尾行だよ、いいね」

（2）いたずらを続けたら

オタコン　「スネーク、何してるんだい？」

オタコン　「ちゃんと尾行してよ。気づかれたらどうする？」

（3）更にいたずらを続けたら

オタコン　「あのさあ、スネーク」

オタコン　「真面目にやってくれよ」

（4）それでもまだいたずらしたら

オタコン　「スネーク……」

オタコン　「何しても勝手だけど、目的のことだけは忘れないでくれよ……」

【レジスタンス殺害1】リアルタイム無線

※レジスタンスを殺害した場合

オタコン　「ああ、レジスタンスが（死んだ）……！」

【レジスタンス殺害2】任意無線
※レジスタンスを殺害した後にSEND
（1）
オタコン「スネーク、何をするんだ！　ビッグママのアジトまで案内してもらわなきゃいけないのに……！」
オタコン「いいか、レジスタンスに危害を加えちゃダメだ！」
（2）また殺した場合
オタコン「レジスタンスを殺すんじゃない！　ビッグママにたどり着く手がかりを失くしてしまうぞ！」
（3）更に殺した場合
オタコン「いい加減にしろ！　ミッションが失敗してもいいのか⁉」
（4）それでも殺した場合
オタコン「（激怒で言葉も出ない）スネ……！　く……‼」
【レジスタンス見失った】リアルタイム無線
※レジスタンスを見失った時に鳴らす。新しいレジスタンスを発見するまで
オタコン「レジスタンスをもう一度見つけなくちゃね」
オタコン「レーダーでレジスタンスの気配を探そう」
オタコン「あるいはPMC（レイブン・ソード）の無線を傍受するんだ。レジスタンスが居そうな場所の情報を得られるだろう」

■東欧：ミッドタウン・北東セクター

【サーチライトに注意】リアルタイム無線
※カナードやPMCのサーチライトの輪が近くに迫ったとき。初回のみ
オタコン「サーチライトだ！」
オタコン「周囲の物陰に隠れて、明かりを避けるんだ」
【レジスタンス連行1】リアルタイム無線
※レジスタンスがPMCに連行されそうな時
（1）
オタコン「スネーク、レジスタンスがPMCに連れて行かれてしまう」
（2）
オタコン「スネーク、どうにかしてあのレジスタンス

を解放するんだ」

【レジスタンス連行2】任意無線

※「レジスタンス連行1」を聞いた後にSEND

オタコン　「逮捕されたレジスタンスが連行されてしまう」

オタコン　「護送しているPMCを排除して、レジスタンスの逃走を助けてやるんだ！」

【PMCの口笛】リアルタイム無線

※レジスタンスがPMCに変装した後で

オタコン　「スネーク、あのPMC……何か怪しいよ……」

オタコン　「口笛…聞こえないか？」

【車輌の巡回に注意】リアルタイム無線

※市街地でPMC車輌の巡回があることの示唆

オタコン　「車輌の巡回も行われてるみたいだね」

オタコン　「気をつけてくれよ、スネーク」

【無線傍受機を使え】リアルタイム無線

※スネークが無線傍受機を全然使おうとしない

オタコン　「スネーク、無線傍受機を使うんだ」

オタコン　「PMCの無線でレジスタンスの情報が得られるはずだ」

オタコン　「無線傍受機を装備するんだ」

■東欧：教会中庭〜水路東岸（ビッグママ接触後）

【遺体を守れ1】リアルタイム無線

※バイク脱出イベント開始直後

オタコン　「ビッグボスの遺体を、敵の手に落とすわけには絶対にいかない」

オタコン　「運河の脱出ポイントまで、遺体を無事に送り届けるんだ！」

【遺体を守れ2】任意無線

※「遺体を守れ1」を聞いた後でSEND

（1）

オタコン　「リキッドは、なりふり構わずビッグボスの遺体を奪おうとしてくるだろう」

オタコン　「レジスタンスの戦士達と協力して、ビッグボスの遺体を乗せたバンをなんとしても守

り抜くんだ！」

（2）

オタコン　「バンの安否は君の戦いにかかっている！」

オタコン　「待ち伏せしてくる敵もいるだろう」

オタコン　「その時はバンに先行して敵を一掃するんだ。バンの血路を開いてくれ！」

（3）

オタコン　「敵の狙いはビッグボスの遺体だ」

オタコン　「損傷をさけるために、バンにはあまり激しく攻撃してこないと思う」

オタコン　「だが君たち護衛部隊に対しては、猛烈に攻撃（アタック）してくるだろう」

オタコン　「頑張ってくれ、スネーク。何とか凌ぎきるんだ！」

【遺体を守れ3】任意無線

※バイク脱出イベント開始直後。初回のみ

ローズ　「スネーク、ビッグママから色々な事実を知らされて、困惑している部分もあると思う」

ローズ　「でもどうか落ち着いて、ビッグボスの遺体を安全な場所まで運ぶのよ」

ローズ　「バンを守って！」

【気力に注意1】任意無線

※バイク脱出イベント前半で、気力ゲージが高く、他に言うことがない場合

ローズ　「走行中のバイクから攻撃するには、より強い集中力が必要だと思うわ。照準中の手ぶれがあっては、命中させることも困難なはず」

ローズ　「そうならないために、気力ゲージの減りには気を付けて、スネーク」

【気力に注意2】任意無線

※バイク脱出イベント前半で、気力ゲージが低く、他に言うことがない場合

ローズ　「スネーク、気力が大きく減少している！」

ローズ　「そのままではバンの護衛も難しい筈よ、気力を回復して」

【敵兵排除成功】リアルタイム無線

※ヘイブン兵を倒した時の汎用

（1）

オタコン　「よし、いいぞ、スネーク！」
(2)
オタコン　「うまいぞ！」
(3)
オタコン　「その調子だ！」

【囮車輌全滅】リアルタイム無線
※バンとはぐれるデモの直後
オタコン　「スネーク、囮の車輌隊が全滅したようだ」
オタコン　「敵は君たちに対する攻撃に全力を傾けてくるだろう」
オタコン　「なんとか凌ぎきるんだ、いいね！」

【スライダー出現】任意無線
※「囮車輌全滅」を聞いた後でSEND。初回のみ
オタコン　「くそ、バンとはぐれたか」
スネーク　「ああ。それに空からは鴉（カラス）のバケモノだ。観光客がメシを残すんだろう、ずいぶんデカい」
オタコン　「彼ら（バン）を信じて、前に進むしかない」

【敵を倒して進め】任意無線
※他に言うことがなかったら
(1)
オタコン　「敵の追撃を払って進むんだ！」
(2)
オタコン　「スネーク、油断するな」
オタコン　「敵を倒せ、道を開くんだ！」
(3)
オタコン　「頑張れスネーク！」
オタコン　「目的地まであと一息だ！」

【ビッグママのバイク危険】任意無線
※バイク脱出イベント後半で、サイドカーデモの後でSEND
ローズ　「私はバイクに乗るわけじゃないけど、ビッグママのテクニックが凄いというのは判るわ。それに危険をものともしない……だけど、一歩間違えば死へ一直線の無謀運転だわ」
スネーク　「実にスリリングだ」
ローズ　「彼女「ライダーズハイ」になっているのかも知れないわね」

スネーク「なんだ、それは?」
ローズ「走っている最中に脳内でβエンドルフィンが分泌されて、陶酔感、すなわち心理的快感が得られるランナーズハイという現象があるのは知ってる?」
スネーク「ああ、聞いたことはある」
ローズ「これに類似した感覚を体験したと報告するバイク乗りが、現実にいるのよ」
ローズ「生理学的に確認された現象じゃないけれど、この状態では危険を危険と感じず、果敢な行動が取られがちになる可能性もある。彼女の大胆な運転はそのせいかもしれないわ」
スネーク「コンバットハイと似たようなものか……同乗者としてはあまり有り難くないな」
ローズ「コンバットハイの場合は、エンドルフィンではなくアドレナリンの過剰分泌が原因だけどね。でも、見る限り彼女の腕は確かよ。彼女を信じて頑張って、スネーク」

【気力に注意3】任意無線
※バイク脱出イベント後半で、気力ゲージが高く、他に言うことがない場合
ローズ「目的地はまだ先よ。気を緩めないでね」
ローズ「気力ゲージの状態に気を配るのも忘れないで」

【気力に注意4】任意無線
※バイク脱出イベント後半で、気力ゲージが低く、他に言うことがない場合
ローズ「スネーク、気力ゲージの値が低くなっているわ」
ローズ「飛び回る敵との戦いでは、射撃により高い精度が求められるはず」
ローズ「気力を回復して、照準時の手ぶれを抑えるようにした方がいいわ」

■東欧:エコーズ・ビーコン(レイジング・レイブン戦)

【ライトに注意】任意無線
※レイブン(ビースト)戦、初回のみ

オタコン「スネーク、スライダーにはサーチライトが装備されてる」

オタコン「光（ビーム）に照らされたら即見つかるよ、注意してくれ！」

【単体スライダーについて】任意無線

※「ライトに注意」を聞いた後でSEND。他に言うことがない場合

オタコン「スライダーの中には、奴の側を離れて単独行動しているものもいる」

オタコン「遠隔索敵端末として飛び回っているんだろう」

オタコン「単独で飛行するスライダーを見つけたら、迷わず撃墜するんだ」

オタコン「その分ビーストの状況確認力（シチュエーションアウェアネス）を削って、状況を君の優位に傾けることが出来るはずだよ」

【レイブンについて】任意無線

※レイブン戦（ビューティ）開始直後にSEND。初回のみ

ローズ「今度のビーストは、怒りをあらわにしているようね」

ローズ「怒りは人の自制心を失わせてしまう。だから最も危険な感情なの」

ローズ「スネーク、彼女はそれだけに、非常に危険な存在だわ。注意して！」

【壁の破壊に注意】任意無線

※壁の破壊状況が進んできたら

オタコン「奴の攻撃で周囲にある構造物の破壊が進んでいる」

オタコン「破壊が進むほど、君の隠れる場所が減ってしまう」

オタコン「あまり悠長にしている余裕はないよ、スネーク。急ぐんだ」

【レイブンを怒らせろ1】任意無線

※レイブンのオーバーヒート後にSEND

オタコン「スネーク、レイブンのバーニア、奴が怒りを増すほどに連続噴射できる時間が短くなってるみたいだ」

オタコン「ソリッド・アイから中継されてくる奴の感情データと、バーニアの使用時間との間に相関関係が見受けられる」
スネーク「どういう理屈だ？」
オタコン「あのバーニアは一定時間噴射すると、その後冷却のためにしばらく使えなくなるようだ」
スネーク「銃身の焼き付きを防ぐために、機関銃を短連射（バースト）射撃するようなものか」
オタコン「そうだね。で、あくまで推測なんだけど、レイブンは怒るほどに、前後の見境が無くなる性質を持っているんじゃないかな」
オタコン「本当ならバーニアが過熱状態に陥るのを避けるために、連続噴射はなるべく控えるべきだけど、そのことが頭の中からどこかへ飛んでいってしまうんだ」
スネーク「なるほど。そしてバーニアは際限なく加熱され……」
オタコン「……その結果、より頻繁な、そしてより長い冷却時間が避けられなくなる」
スネーク「怒れば怒るほど、飛べなくなるってわけだ」

オタコン「うん。通常の攻撃はもちろんだけど、挑発して奴の怒りをたきつけてみるんだ。そうなれば君にも勝機が生まれるだろう」
END

【レイブンを怒らせろ2】任意無線
※オタコンの「レイブンを怒らせろ1」を聞いた後でSEND
ローズ「スネーク、エメリッヒ博士の推測は正しいと思う」
ローズ「あのビーストは怒ると自制心を失う精神構造（タイプ）のようだわ」
ローズ「彼女の怒りをたきつけることで、戦いを有利に進められるはずよ」
ローズ「ビーストの感情を逆手にとって！」

【クラスター爆弾について1】リアルタイム無線
※クラスター爆弾攻撃示唆
オタコン「何か来るぞ！　その場を離れるんだ！」

【クラスター爆弾について2】任意無線
※クラスター爆弾を受けた後でSEND

オタコン　「ヤツのクラスター爆弾をくらったらただじゃ済まない」
オタコン　「警告音が鳴ったら、フロアを移動するか、塔の外へでて攻撃をかわすんだ！」
ローズ　「どんな強敵と対峙している時でも、気力ゲージの残量には気を配り続けて！」
【気力に注意1】任意無線
※気力ゲージが高く、他に言うことがない場合
ローズ　「スネーク、あなたの戦闘能力は気力の状態に影響を受けることを忘れないで」
【気力に注意2】任意無線
※気力ゲージが低く、他に言うことがない場合
（1）状況によって（2）か（3）に進む
ローズ　「スネーク、気力ゲージを見て。かなり減少しているわ」
（2）壁の破壊状況がそれほどでなければ
ローズ　「比較的安全な場所を探して、気力の回復を試みて」
（3）壁の破壊状況が進んでいたら
ローズ　「安全に隠れられる場所はあまり残っていないようだけれど、使える手段を全て使って気力の回復に努めるのよ」
【レイブン戦（ビューティ）】リアルタイム無線
※レイブン戦（ビューティ）開始直後
オタコン　「スネーク、こいつもスーツから出てきた！」
オタコン　「気をつけろ、そいつも君に抱きついてくるぞ！」
【ビューティに注意1】
※抱きつかれる前にSEND
オタコン　「彼女(ビューティ)から逃げろ、スネーク！」
オタコン　「近づかれないようにするんだ！」
【ビューティに注意2】
※抱きつかれた後にSEND
オタコン　「やはりオクトパスと同じだったね……」
オタコン　「奴から距離を置くんだ。抱きつかれちゃいけない！」

【ビューティに注意3】

※抱きつかれる前にＳＥＮＤ

ローズ　「スネーク、スーツを脱いでも彼女は怒りに囚われたままよ」

ローズ　「怒りは怒りの連鎖を呼ぶ。怒りに触れてはいけない。彼女を近寄らせないで！」

【ビューティに注意4】

※抱きつかれた後にＳＥＮＤ

ローズ　「彼女もオクトパスと同じだわ、あなたを抱きしめて痛手を負わせようとする」

ローズ　「ビューティに近づかれないで、スネーク！」

ACT4
Twin Sun

双子の太陽

【タイトル】
Mission Briefing

【実写目玉焼き4／ムービー】　ノーマッド機内

――ノーマッド内の厨房のフライパンのＵＰ。
――目玉焼きを焼いているサニー。玉子二個で卵黄は二個。一度に二個の玉子を割るサニー。双子の蛇（ツインスネークス）を暗示する。旨く焼けそう。二つがひっついて一つに凝固する。
――ナオミの教えに従って、上蓋をかぶせる。
――サニーの鼻歌が聞こえる。鼻歌はよく聴くと能勢電の駅名。

サニー　「かわにしのせぐち、きぬのべばし、たきやま」
サニー　「うぐいすのもり、つつみがたき、ただ、ひらの」
サニー　「いちのとりい、うねの、やました、ささべ」
サニー　「こうふだい、ときわだい、みょうけんぐち…」

――F.O.

【モセス潜入前1／ポリデモ】　ノーマッド機内

——ノーマッド内キッチン。目玉焼きを焼いているサニー。フライパンに蓋をした後、キッチンタイマーをセット。ナオミからもらった蒼い薔薇を手に取るサニー。楽しそうに眺めている。

——F.O.

【モセス潜入前2／ポリデモ】　モニター画面（リキッド哨戒艇内）

——Mk．Ⅱがリキッドの哨戒艇に乗り込んだ直後の映像が送信されてきている。

——哨戒艇の甲板、暗い。低い視点。ナオミの脚、リキッドの脚、ヴァンプの脚が見える。会話は鮮明に聞こえる。

リキッド　「『J．D（ジョン・ドゥ）』に向けてステルス核弾頭を撃ち込む」

ナオミ　「『G．W』では核を制御できないんじゃなかった?」

リキッド　「その通りだ。我々は全ての銃火器、兵器を抑えたが、大量破壊兵器は全て『J．D（ジョン・ドゥ）』が管理している」

リキッド　「だからこそREX（レックス）なのだ」

リキッド　「奴らに管理されていない核兵器があそこ（モセス）にある」

リキッド　「ヴァンプ、REXの準備は？」
ヴァンプ　「後は最終チェックのみです。『G．W』経由で『J．D』の場所を特定しました」
ヴァンプ　「前世紀に放置された衛星軌道上の宇宙塵に偽装していました」
ナオミ　「うまく隠したものね」
リキッド　「衛星軌道上にあるとは」
ヴァンプ　「ステルス核弾頭であれば、『愛国者達』からの迎撃の心配はまずありません。奴らが気づく頃には全て終わっています」
リキッド　「AIの中枢である『J．D』を破壊すれば、これで『G．W』のプライオリティが1になる」
リキッド　「そうなれば『J．D』統御下にあった全システムを、我々が制御できるようになる」
リキッド　「さあ、ヘイブンをいつでも出せるようにしておけ」
ヴァンプ　「わかりました」
ヴァンプ　「ん？　なんだ、これは！（Mk．Ⅱ見つかる）」

——映像はそこまで…ブロックノイズが多くなり、やがて途切れる。

【モセス潜入前3／サードパーソンデモ】 ノーマッド機内

——ここ以降、スパコン「ガウディ」の脇に、ナオミのつけていたロケット型USBメモリがぶら下っている。ロケットは開き、中にはフランク・イエーガーの写真。Mk．Ⅲを操作すると見ることができる。気づく人は、ナオミが持っていてオタコンに渡そうと思っていたものだとわかる。

——モニターを見ていたスネークとオタコン。

——顔半分にバンソウコウと包帯（火傷の治療）。スネークはずっと息苦しい呼吸（咳）を続けている。

——Mk．Ⅲを整備しているオタコン。地面に置くと起動するMk．Ⅲ。以降、Mk．Ⅲの操作による画像が見られる。

オタコン　「Mk．Ⅱ（マーク・ツー）からの映像はここで途切れている」

スネーク　「ヘイブンという名の避難所…、確かドレビンもそんなことを言っていた（咳）」

オタコン　「もともと『愛国者達』のシステムは『J．D（ジョン・ドウ）』を頂点とした4つのセルAIによって管理されていた」

オタコン　「そのひとつが『G．W』。リキッドは破棄されたと思われていた『G．W』（ゴースト）を使って、ネットワークに紛れ込んでいたんだ」

——モニターに、『G．W』のAIのシステムをわかりやすく図解。

スネーク　「『G．W』には聞き覚えがある」

オタコン　「ああ、『G．W』はアーセナルにあった『愛国者達』のセルAIのひとつだ」

オタコン　「エマのワームで再起不能になったはずだった」

オタコン　「だけどリキッドは『G．W』を回収して復旧させたんだ…」

——アーセナルの当時の写真やデータ、ニュース映像。

オタコン　「『G．W』は『愛国者達』のシステムに入り込みながら、『J．D（ジョン・ドゥ）』からは『G．W』が認識できていない状態にあるに違いない」

オタコン　「盲点だよ。『G．W』は繋がったまま、放置されていたんだ。リキッドは『G．W』を利用して、外からではなく、中からAIに干渉していたんだ」

オタコン　「ビッグボスの遺伝子コードを隠れ蓑に、『内側（インサイド）』から接触（コンタクト）を…、それならAIの侵入検知システム（IDS）も欺ける」

スネーク　「『愛国者達』のAI監視から逃れた、ネットワーク上の避難所…、ヘイブンか…（咳）」

オタコン　「そうか、5年前に『G．W』を載せたアーセナルを暴走させたのは、そういう腹づもりがあったんだ」

スネーク　「そのヘイブンは何処にある？　奴らの基地（避難所）は？」

――スネーク、激しく咳き込む。２階から降りてきたサニーも心配する。

オタコン　「心配要らないよ。Mk.Ⅱ（マーク・ツー）の電波が途切れた位置を中心に、リキッドの航路を美玲（メイリン）に予測してもらっている」

オタコン　「発見は時間の問題だ」

――スネークは咳き込み、疲れきっている。

スネーク　「リキッドはこう言っていたな…、『REXの準備が出来ている』と」

オタコン　「REX？　あのシャドー・モセスの？」

――表情が固くなるオタコン。

――CALL音。

オタコン　「キャンベルだ」

――キャンベルが映るモニターUP。背後にスネークの咳が重なる。キャンベルを捉えるカメラ、引いており、背後のローズも画角に収まっている。ローズはキャンベルの襟元を直したりしている。

キャンベル　「いまや米国軍部のシステムは全てリキッドに握られてしまった」

キャンベル　「各地のシステム（SOP）を停止した結果、地球上から銃声が一斉に消えた」

キャンベル　「人類史上初めての静寂だ」

オタコン　「米政府（ホワイトハウス）は、世間（メディア）はどんな様子なんだい？」

キャンベル　「大統領はまだこの件の発表を控えている」

キャンベル　「だが各メディアは気付き始めている」

スネーク　「（咳）また情報統制をするつもりだろう」

キャンベル　「いや、世界中で戦争経済が完全にストップしている。この規模のクライシスを誤魔化すことは難しい」

キャンベル　「既に戦争経済関係の株価は暴落を始めている」

スネーク　「今頃、ホワイトハウスは大変な騒ぎだろうな」

キャンベル　「いずれにしろ国民が静かに眠れるのは、今夜限りだ」

キャンベル　「もうすぐ、リキッドの蹶起（けっき）が始まる」

キャンベル　「まず奴が手をつけるのは、『愛国者達』が築いた米国管理システムの破壊だ」

オタコン　「システム（SOP）はもう奪われた」

――解説図とデータ。

キャンベル　「いや、最高権限はまだ『J・D(ジョン・ドゥ)』、『愛国者達』が握っている」
キャンベル　「だからこそ、リキッドは軌道上にある『J・D(ジョン・ドゥ)』に向けて核攻撃を行うつもりだ」
スネーク　「だが、リキッドは銃火器を制御するSOP(ソップ)を掌握したに過ぎない」
スネーク　「さらに高位の最高権限を持たない限り、リキッドに米軍の核や弾道ミサイルをコントロールすることは出来ないはずだ」
キャンベル　「確かに米軍の核は一昨年から、〝信頼できる〟第三世代の代替核兵器に移行した」
オタコン　「Reliable Replacement Warhead(R R W) だね」
キャンベル　「RRWは、最高権限を持つ『J・D(ジョン・ドゥ)』にしかコントロール出来ない。しかも非常時には遠隔からの破棄も可能だ」
オタコン　「代替核の配備で従来の核兵器は撤廃されている…」
スネーク　「リキッドに核は使えない。奴は一体どうするつもりだ?」

【フラッシュバック】メタルギアREX

オタコン　「そうか…、REXを使う気だ」

スネーク　「何だって？」

——REXのデータ、レールガン、レドームなどのユニット・データ。

オタコン　「REXはSOP（ソップ）導入以前に廃棄された兵器だ」
キャンベル　「なるほど、レールガンか…」
キャンベル　「確かにREXのレールガンはシステムの束縛を受けずに、ステルス核弾頭を大気圏外に打ち上げることが可能だ」
キャンベル　「奴に残された、唯一の裸の核弾頭発射装置といえる」
キャンベル　「リキッドはこれを使って『J・D（ジョン・ドゥ）』を亡き者にし、『愛国者達』の支配に終止符を打つつもりだ」
オタコン　「REXは、今どこに？」
キャンベル　「思い当たるだろう？　忘れ去られた基地。合衆国であり、『愛国者達』の管理の外」
キャンベル　「リキッドの始まりの場所であり、モニュメント」

——FOX諸島の地図とデータ、飛行ルート。

キャンベル　「アラスカ沖、フォックス諸島…」

スネーク　「シャドー・モセス島……！」
キャンベル　「リキッドが『J.D』を破壊し、リキッドの『G.W』が全システムを制御することになれば…」
キャンベル　「全てはリキッドにひれ伏す事になる」
キャンベル　「そうなれば、誰にも奴を止めることは出来ない」
キャンベル　「『愛国者達』でさえ、手が出せん」
キャンベル　「もはや、世界を救えるのは君達しかいないのだ」
キャンベル　「スネーク、頼む。リキッドを倒し、蹶起を止めるんだ」

――キャンベルの通信が切れる。

――F.O.

【モセス潜入前4／ポリデモ】　ノーマッド機内

――スネークの咳の音からF.I.

――また咳き込むスネーク。スネーク、注射器を首筋に打つ。それを見て、耐え切れずに口を開くオタコン。

オタコン　「やめようスネーク。もう限界だ」
スネーク　「今すぐ死ぬわけじゃない」
オタコン　「違う、相手が悪すぎる。『愛国者達』が生み出した制御管理システム(SOP)をリキッドが手に入れた」
オタコン　「武器兵器が全く使えない上、米軍が機能してないんだ。それに匹敵する数のPMC(傭兵)と無人兵器がいる」
——さらに咳き込むスネーク。オタコン説得するように近寄る。それを見ているサニー。
オタコン　「状況は最悪だ。スネーク、認めよう。僕らの負けだ」
スネーク　「オタコン……!」
オタコン　「倒せるような相手じゃなかったんだ」
スネーク　「オタコン、勝ち負けじゃない。俺が、俺達が始めたことなんだ（咳）」
スネーク　「俺たちには止める義務がある」
——よたよたと雷電の方に歩いていくスネーク。視線の先には透析器に繋がれた雷電。
——雷電は意識は覚醒しているが身体が動かない。うなだれた状態のまま、口も動かない。口には

酸素呼吸用マスク。

——その前にサニーがとおせんぼをするように立ちふさがる。

スネーク　「サニー」

サニー　「ダメ。まだジャックは無理。まだ動けない」

——雷電、片手だけを動かす。

雷電　「サニー、行かせてくれ」

サニー　「ダメ、まだ透析が終わってない」

オタコン　「スネーク」

——オタコン、スネークに向かって首を振る（否定）。

オタコン　「彼はまだ無理だ」

雷電　「スネーク…」

——雷電、酸素マスクを外しながら、

雷電　「俺なら、大丈夫だ」

――サニー、再びとおせんぼ。スネークさらに近づいて、サニーの両肩に手を置き、目でサニーに語りかける。

――納得するサニー。雷電の前から立ち去る。

雷電　「俺は今、自分の意志で生きている」

――雷電、起き上がろうとするが、背中に繋がれたチューブ（透析用）のために起き上がることができない。

スネーク　「…雷電」

雷電　「誰かの意志（SENSE）に操られた、代理人生ではなく」

スネーク　「俺は影だ。誰も照らせやしない。俺に付いてきても日の光を拝む事は一生ないぞ」

――雷電、背中のチューブを無理矢理外して起き上がる。心配そうに見つめるサニー。

――非常に苦しそうな雷電。ベッドサイドに腰掛ける姿勢になりながら、

雷電　「あんたも俺も、この代理戦争の駒（ポーン）だが」

雷電　「これが終われば、自由（フリーダム）になれる」

スネーク　「雷電…」

雷電　「俺は、あんたを解放する。それが、俺が自由になる唯一の方法」
スネーク　「雷電、5年前、俺が言った意味はそうじゃない」
雷電　「俺は、何も失う物はない」
スネーク　「馬鹿な。お前には守るべき人（ローズ）がいるはずだ」
雷電　「スネーク、俺は雨（RAINED）だ。俺も日の光とは無縁だ」
スネーク　「違う、お前は雷だ。光を放つ事はできる」
雷電　「雷…？」
スネーク　「雷電、俺を見ろ」

——雷電、スネークの方向に体を向ける（だけでも辛そう）。
——バンソウコウをはずすスネーク。左半分の火傷が顕わになる。あまりの火傷のひどさに、オタコン、サニーがひるむ。

スネーク　「俺が見えるか？」

——雷電の目の前には老いて傷ついた男の顔がある。目線だけが動く。

スネーク　「俺にはもう未来はない。俺はもうじき…大量破壊兵器に変貌する」

スネーク　「雷電、お前には家族（ローズ）がいるはずだ」

――雷電、突如立ち上がり、スネークの首筋に両手をかけながら、

雷電　「そんな奴はいない！」

雷電　「俺には、誰もいない‼」

――スネークの足下にくずおれる雷電。スネークの脚にすがるように寄りかかりながら、

雷電　「俺は、いつも、一人だった」

雷電　「一人だったんだ…」

スネーク　「…雷電」

――サニー、雷電の元に駆け寄り、しっかり抱き寄せる。

雷電　「（スネーク）…俺を、一人にしないでくれ」

スネーク　「いいか、これは俺の闘いだ。俺の宿命だ」

――ＣＡＬＬ音。オタコンがリモコン操作すると壁の大型モニターに美玲（メイリン）が映る。

美玲（メイリン）「エメリッヒ博士？」
オタコン「美玲（メイリン）…」

【字幕】美玲（メイリン）　桑島 法子

——旧式のミズーリ（システム導入以前のものなのでシステムに左右されない）を用い、ハワイで仮想訓練をしていたメイ・リン。

美玲（メイリン）「結果が出たわ。確定よ。リキッドたちはシャドー・モセス島にいる」
美玲（メイリン）「メタルギアMk．Ⅱ（マーク・ツー）の通信電波は途中でロストしてたけど、方角的にはモセスに向かっていた」
美玲（メイリン）「その直後、民間の写真衛星が捉えたシャドー・モセス島よ」

——シャドー・モセス島の海面下に、巨大な影が写っている。
——沈んでいるモセスの輪郭線（流氷に擬態）に沿ってヘイブンが隠れている。

美玲（メイリン）「温暖化で海岸線が上がっている。知ってた？　フォックス諸島は沈没寸前なの。周囲の島の住人も立ち退き済み」
スネーク「そんな場所にリキッドが立ち寄ったって事は、やはり」

オタコン　「REXを使う気なんだね?」
美玲（メイリン）　「そう考えるしかないわ」
オタコン　「REXより後のメタルギアには全てシステムのIDが埋め込まれている」
美玲（メイリン）　「だけどREXはあの時のままなの?」
オタコン　「シャドー・モセス島の核廃棄施設は、当時のまま放置されている」
美玲（メイリン）　「もう9年も前だ」
オタコン　「アームズテック社社長と、DARPA（ダーパ）局長の死。国防省長官の逮捕」
美玲（メイリン）　「シャドー・モセス事件収束の時点で、関係責任者は誰ひとり残っていなかったわ」
美玲（メイリン）　「全てはなかった事になっている。データも残らず改竄されて消去された」
美玲（メイリン）　「私たちが閑職に追いやられたのもその為。REXも核弾頭も当時のまま放置されているはず」
オタコン　「棄てられた島。避難所（ヘイブン）か」
美玲（メイリン）　「いえ、むしろ忘れ去られた島。そして沈みかけている」
オタコン　「二度と行くことはないと思っていた」

——スネークは気分が悪い。咳をしている。

美玲（メイリン）　「到着は遅れるかもしれないけど、私もミズーリで援護するわ」
美玲（メイリン）　「米軍内でいま動ける艦（フネ）は、システム導入前に現役引退したミズーリくらいしかないから。ハワイからも近いし」
美玲（メイリン）　「オタコン、メガネ止めたの？」
オタコン　「（照れ）…コンタクトだよ（ナオミを思い出す）」
美玲（メイリン）　「それじゃ、シャドー・モセスで会いましょう」
　――美玲（メイリン）、最後に中国の諺を云う。
美玲（メイリン）　「（中国の諺、MGS1から）天に順（したが）う者は存（そん）し、天に逆らうものは亡ぶ」
　――美玲（メイリン）の通信が切れる。
オタコン　「…僕も、過去を償わなきゃ」
　――オタコン、モニターから振り向いてスネークを見ると、疲れて寝入っている。
オタコン　「REXは…僕の研究で生まれた怪物（ビースト）だ」
オタコン　「（小声で）行こう。シャドー・モセス島へ」

――顔を上げるオタコン。さっきまでの弱気な表情はない。決意を固めた、精悍な顔つき。メガネはつけてない。コンタクト。

――北へ向かって飛ぶノーマッド。空は嵐を予感させるように暗い。

――F.O.

――セーブ画面。

【MGS1】

――MGS1のゲーム画面。操作は当時のまま。ヘリポートから戦車格納庫（ダクト）に入るまで。

【MGS1後／ポリデモ】 ヘリ機内

――夢落ち。

――MGS1シャドー・モセス事件の時の夢を見ていたスネーク、はっと目を覚ます。

オタコン 「スネーク、大丈夫かい？」

スネーク 「（ああ）懐かしい夢（ゲーム）を見ていた」

オタコン 「着いたよ。シャドー・モセスだ」

――スネークは父のビッグボスと同じで悪夢を見るクセがある。

――吹雪の中を進むヘリ。

――F.O.

――セーブ画面。

【章タイトル表示】

ACT4　Twin Sun　双子の太陽

【モセス潜入／ポリデモ】　モセス・ヘリポート

――吹雪の中を進むヘリ。地表には雪をかぶった針葉樹が見える。目的地近くにくるとヘリはホバリング。

――スネーク、Mk.Ⅲを抱えたまま雪原に飛び降りる。

スネーク　「ウグッ！」

――雪原着地の衝撃に堪えられず、膝を折る。少し、腰を痛める。スネーク、足下にMk.Ⅲを落とす。腰をさするスネーク。我ながら、情けない。

オタコン「大丈夫かい？　スネーク？・」

——すぐには答えられないスネーク。

スネーク「ああ、ちょっと、足を滑らせただけだ」

——スタミナ減。

——真顔のスネーク。老化の進行は思ったより、早い。

スネーク「急ごう、時間がない（自分に言い聞かせるように）」

——スネーク、膝に手を置きながらやっとの思いで立ち上がる。

——新型Ｍｋ．Ⅲがスネークの横に回る。

——雪は、地面がほとんど見えないぐらい降り積もっている。しかし、足をとられるほど深く積もってはいない。

——新型Ｍｋ．Ⅲのアップ。半ば雪面に埋まっている。

オタコン「Ｍｋ．Ⅲ（マーク・スリー）。予備はこれが最後だ。壊さないようにしてくれ」

スネーク「ああ、勿論だ」

——スネーク、雪に埋まった新型Ｍｋ．Ⅲを拾い上げる。

オタコン　「それからスネーク、人影は見えないが無人機が巡回している。気をつけてくれ」

——スネークを送り届けた、民間のヘリが、地表の雪を巻き上げながら飛び去っていく。

【ゲームヒント無線】

オタコン　「そこから西に進むとヘリポートだ」
オタコン　「まずは西へ進んでくれ。ヘリポートに向かうんだ」

——ゲームへ。

【監視カメラ1／インタラクティブデモ】ヘリポート・北側階段前

——MGS1で監視カメラを初めて見たときに発動していたデモを再現。
——監視カメラに気づくスネーク。

スネーク　「監視カメラ？」

——だが監視カメラは凍り付いていて、付け根からボロッと落ちる。監視カメラが死んでいるのを教える。

【監視カメラ2／インタラクティブデモ】　ヘリポート・倉庫内

――MGS1で監視カメラを初めて見たときに発動していたデモを再現。
――監視カメラに気付くスネーク。

スネーク　「監視カメラ?・」

――だが監視カメラは凍り付いていて、付け根からボロッと落ちる。監視カメラが死んでいるのを教える。

【奥の扉へ進め／強制無線デモ（オタコン）】　核弾頭保存棟1階

――銃火器が使えず、ガスが充満していた核弾頭保存棟1階に到着すると、オタコンから強制CALL。

オタコン　「どうやらここには、敵の姿は無いようだね」
オタコン　「よし、一番奥にある扉を通って行くことにしよう」
スネーク　「オタコン、前の作戦の時には、色々いきさつがあって、ここの地下1階にある所長室から先へ進んだんだが……」
オタコン　「ああ、そういえばそうだったね。でも今回は、わざわざ遠回りすることも無いだ

スネーク　ろ？　奥の扉を通れば、真っ直ぐ進めるんだから」
　　　　　「ふむ、まあそうだな」
オタコン　「じゃあ、奥の扉に向かってくれ」

　　　　　――ゲームへ。

【ロック扉前／強制無線デモ（オタコン）】　核弾頭保存棟1階

　　　　　――オタコンの指示通り、奥の扉の前に着いたものの、扉が開かない。そこへオタコンから強制CALL。

オタコン　「ん？　スネーク、その扉はロックが掛かっている」
スネーク　「どうやって開ければいい？」
オタコン　「セキュリティ自体が落ちて（シャットダウン）いる。起動させないと解除も無理だ」
オタコン　「どこかからログインする必要があるな」
オタコン　「…そうだスネーク。僕の居た研究室がその近くにある。電力が来ていればそこから解除できるはずだ」
オタコン　「それからセキュリティの履歴を確認すれば、ＲＥＸや人の出入りについても知る

事が出来るだろう」

スネーク　「なるほど」

オタコン　「…スネーク、場所は憶えてる？」

スネーク　「まだボケてない」

オタコン　「念のため、地図（マップ）にマーク（◎）を入れておくよ。（からかうように）オールド・スネーク」

オタコン　「スネーク、パスワードは…、48273だ」

オタコン　「憶えたかい？」

スネーク　「言っただろ？　まだボケてない」

――ゲームへ。

【ロック解除1／ポリデモ】研究室

――オタコンの研究室に踏み入るスネーク。やや薄暗い室内。床には当時の書類などが散乱している。

オタコン　「スネーク待って、セキュリティをチェックしたい」

――オタコンの机へと進むMk.Ⅲ。

――スネーク、Mk．Ⅲを机の上に乗せてあげる。
――発作で咳き込むスネーク。

スネーク　「（咳き込む）」
オタコン　「スネーク、大丈夫？　スネーク！　スネーク！」
――スネーク、注射を首に打つ。

オタコン　「大丈夫かい」
オタコン　「スネーク…、さっき僕が言ったパスワード、覚えてる？」
オタコン　「僕、ド忘れしちゃったんだ。代わりに入力してくれないか？」
オタコン　「5桁の数字なんだけど…」
――Mk．Ⅲのモニターにテンキーが表示される。
――「アクセスコード入力」。それを見て、指を差し出すスネーク…。

【パスワード成功／ポリデモ】研究室

※正解コードを入力すると

——Mk．Ⅲのモニターに表示。「ACCESS PERMITTED（アクセスOK）」。

オタコン　「さすがスネーク、記憶力は衰えてないね！」

——やや得意げ、安堵の表情を浮かべるスネーク。

【パスワード失敗／ポリデモ】研究室

※コードの入力が不正解だと

——Mk．Ⅲのモニターに表示。「ACCESS DENIED（アクセス拒否）」。

オタコン　「スネーク…やっぱり記憶が…」

——落ち込むスネーク。

——オタコンは前のデモでパスワードを「ド忘れした」と言っているが、実はオタコンの見ているディスプレイの横に付箋紙に書いて貼ってある。オタコンはこのデモに至ってようやくそのことに気が付く。

オタコン　「ごめん、自分で思い出すよ」

オタコン　「ええと…あっ！（メモに気が付く）メモしてた」

――オタコン、キーボードを猛烈な勢いで数桁分入力、パスワードクリア。
――Mk．Ⅲのモニターにコードが自動入力される。「ACCESS PERMITTED（アクセスOK）」。

オタコン　「気にしないでくれよ、スネーク」
――スタミナ減。
スネーク　「何をだ」
スネーク　「この番号なら憶えていた。今思い出した（強がり）」
オタコン　「（苦笑い）」
――F.O.

【ロック解除2／ポリデモ】研究室

――周囲で、部屋中のモニターやラック内のコンピューターのランプが起動し、その光で室内はぼんやりと明るくなる。
――パソコンには起動画面が表示されている。

オタコン　「バージョンが古すぎる。ちょっと手間取るな…」

――顔を上げると室内を見渡し、忍者との戦闘を思い出しているスネーク。

――壁面、アヌビスのポスターが剥がれた下にポリスノーツのポスターが見える。壁やパーテーションにサイボーグ忍者の刃の斬り跡。オタコンが隠れていたロッカーは開いたまま。

オタコン　「僕がスネークと知りあったのはその部屋だったね」

スネーク　「ああ」

【フラッシュバック】オタコンおもらし

オタコン　「嫌なこと思い出してないだろうね」

スネーク　「(笑い)」

――Mk．Ⅲの画面に映るオタコン。会話の間にスネークはMk．Ⅲに近付く。

オタコン　「僕はフランク・イエーガーに襲われていたんだ」

スネーク　「ああ…。そうだったな」

オタコン　「あの時、君が来なかったらと思うと、ゾッとするよ。君は命の恩人だ」

スネーク　「（聴いていない）ナオミはフランクが人体改造されたことを恨んでいた」
スネーク　「だがそもそも、奴を再起不能にしたのはこの俺だ」
スネーク　「ナオミは俺のことも恨んでいたはずだ」（ヴァンプ戦へのフリ）
オタコン　「やっぱり、もっと彼女を疑うべきだった」（誘惑の事も）
オタコン　「僕もREXの研究を悔やんでいる」
オタコン　「だからナオミの気持ちも信じられたんだ」
オタコン　「だけど彼女は、自分の罪滅ぼしのために僕等を利用した」
スネーク　「それで？　…何をされた」
オタコン　「忘れたのか？　君の血を実験に…」
【フラッシュバック】ＭＧＳ１の画像＆ＭＧＳ４の画像
スネーク　「それだけなら南米で用は済んだはずだ。なのに何故その後、俺達と合流したんだ？」
オタコン　「それは…」
スネーク　「一度助け出させておいて、またリキッドの元へ戻っていった。何故そんなこと

オタコン　「…わからない。でもスネーク、彼女はまだリキッド達と一緒にいるみたいだ」

を？」

スネーク　「？（どういうことだ？）」

オタコン　「いまここのセキュリティへのアクセス履歴を見たんだけど、やっぱり頻繁に人の出入りがあって…」

オタコン　「数時間前にもアクセス記録が残ってる」

オタコン　「見てくれ。この先の監視カメラが捉えた、数時間前の映像だ…」

——監視カメラの映像がモニターに映される。粒子が粗く、不鮮明なモノクロ映像、薄暗い廊下に二人の人影。（ナオミとヴァンプ）歩いていく。ナオミは薄いドレス姿。ヴァンプはコート姿。ヴァンプ、ナオミ共に吐き息が白くない（ナノマシン）。黒装束の二人。

スネーク　「…ナオミ」

オタコン　「それからヴァンプだ」

スネーク　「美女と野獣（ビューティ&ビースト）」

オタコン　「二人はここに来ている。セキュリティの記録と照らし合わせると、二人が向かっているのは…」

オタコン　「REXが格納されていた地下基地だ」

オタコン　「セキュリティの起動とロックの解除が終わった。これで1階の扉も解除できるようになった」

スネーク　「（ほう）カードキーをいちいち翳（かざ）していた時代が懐かしい」

【フラッシュバック】ＭＧＳ１の画像

オタコン　「（ああ）あれから9年（は経っているんだ）。過去の技術（テクノロジー）も、現在の技術（テクニック）で再解釈すればいいんだ」

オタコン　「年を重ねるのも悪いことばかりじゃない」

オタコン　「行こうか、スネーク」

——Ｍｋ．Ⅲ、ステルスオン。

——電子音。

オタコン　「ロックの解除は終わった。これで1階の扉を開けるよ！」

——ゲームへ。

【天井から降りてくる月光／ハーフライブデモ】　核弾頭保存棟B２

——オタコンの研究室から電撃床エリアに入ったら発動。
——天井を破壊して月光が降りてくる。

オタコン「月光だ！」

【ロック扉解除＆月光登場／インタラクティブデモ】　核弾頭保存棟１F

——スネークがエレベータを降りると、オタコンから無線。

オタコン「OK、スネーク。階段を下りて、北の扉へ。僕がMk．Ⅲで扉を開く」

——扉付近にスネークが近づくと、Mk．Ⅲがステルスを解いて登場。扉を開けにかかる。
——そこで突然、エレベータが動きだす。エレベータから月光（アクティブ防御システム搭載）が登場。
——ゲームへ。

オタコン「まずい、スネーク。月光だ！　扉を開くまでの間、Mk．Ⅲは完全に無防備だ」
オタコン「月光の注意をそらして、Mk．Ⅲが発見されないようにしてくれ」

——ゲームへ。

——月光の注意を3分間そらしつづけるか、月光の破壊に成功すると、クリア。

オタコン　「よし！　開いたよ、スネーク！」

【ウルフ（ビースト）戦前／ポリデモ】通信塔前

——通信塔前広場に出たスネーク。

——クライング・ウルフ（ビースト）の部分アップ。

——何かの気配を感じて、M4を構えながら慎重に進むスネーク。

——クライング・ウルフ（ビースト）の下半身が見える。

——カラスが飛び立つ。それをハッと見上げるスネーク。

——ウルフのボディが開き、ビューティの上半身が現れる。

【字幕】クライング・ウルフ　平田 絵里子／飯塚 昭三

——レールガンのUP。銃身を持つビューティ。ハアハアと呼吸音。銃口越し、サイトを覗くビューティ。

——レールガンのサイトがそのスネークを捉える。

クライング・ウルフ「スネーク…」
クライング・ウルフ「(嗚咽) 見つけた…」

——スネーク、発作で膝をつく。

クライング・ウルフ「(震える小声で) 泣けっ！」
クライング・ウルフ「泣いていいんだ！」

——吹雪が激しくなり、スネークの姿が一瞬見えにくくなる。サーマルに切り替えると、サイト内にスネークの輪郭が浮かぶ (サーマルで索敵のヒント)。
——あたりを見渡すスネーク。気配はするがウルフの姿を見つけられない。
——レールガンの加速が始まる。起動音。

クライング・ウルフ「さあ、声を上げて泣いてみろ！」

——その一点がキラッと光る。風がうなる！
——同時にローリングで横に飛ぶスネーク。身体がうまく動かない。肩から地面に落下する。MGS1の横飛びとは対照的。

スネーク「くっ…！」

——仰向けで腰に手を当てるスネーク。格好悪い。
——と、そこへ肩に衝撃！　かすめる。バキッと樹が割れる音。後ろの木がめりめりと倒れだす。
——年寄りのように、横転がりでそれをかわすスネーク。
——その正面に、上半身を出したウルフの姿。
——風に漂って聞こえてくるウルフのすすり泣く囁き声。

クライング・ウルフ「さあ…、涙だ。涙だ！　思いっきり泣け！　泣きわめけ！」

——ウルフのボディに格納されるビューティ。
——スネーク、倒れた木が邪魔になって、Ｍ４が取れない。
——そこへ、次々と現れるヘイブン兵部隊。
——スネーク、オペレーターで応戦しながら、Ｍ４を確保。

クライング・ウルフ「哀しい、哀しい、哀しいぞ！　哀しくて死にそうだ！」
クライング・ウルフ「（遠吠え）アオーーーーン！」

——身構えるスネーク。
——ゲームへ。

【ウルフ・ビューティ化／ポリデモ】　通信塔前

──ウルフのライフ、スタミナのどちらかにダメージを与えると発生。
──子馬の出産のイメージ。ボディから「ビューティ自身」が地面に生まれ落ちる。破水する。スーツの表面は毛と生肉のパターン。
──身体に繋がっているチューブも長く垂れている。
──あまり美しいものが生まれ落ちたようには見せない。
──生まれたての子馬のようになかなか立ち上がれない。ウルフはフラフラと四つんばいから、立ち上がって、直立歩行へ（4足から2足へ。赤ん坊から大人へ）。足場を探りながら、内股で立ち上がっていくウルフ。
──この辺りでスーツのオクトカム解除。
──上半身はだらんと垂れている。プルプルと膝が震えている。髪、顔、指先から液体がしたたっている。

クライング・ウルフ（ビューティ）「泣き声が聞こえる。赤ちゃんの、鳴き声が聞こえる」
クライング・ウルフ（ビューティ）「やめて！　泣きやんでちょうだい！　お願い！　さあ、泣きやんで！」
クライング・ウルフ（ビューティ）「狼（ウルフ）…、向こうに行って、こっちにこないで！」
クライング・ウルフ（ビューティ）「ごめんなさい。怖かったの。私を許して。ごめんなさい。ええ、泣いててもいい、泣いいててもいい…！」

クライング・ウルフ(ビューティ)「もう、私の涙はいらない。私は泣き疲れた。だから、ずっと泣いててもいい。ずうっと、聴いていてあげる…」

——ゲームへ。

【ウルフ・ビューティ燃え尽きる/ポリデモ】 通信塔前

※3分経つとビューティは燃え尽きる、またはスネークからのダメージで。

クライング・ウルフ(ビューティ)「ああ…」

——地面に倒れるクライング・ウルフ(ビューティ)、燃え上がり消滅する。

——ビューティの方を確認するスネークと、扉のロック解除をするMk.Ⅲをカットバックで見せる。先の建物の扉に近づくMk.Ⅲ。

——スネーク、クライング・ウルフの抜け殻に近付く。抜け殻の様子を確認する。

——Mk.Ⅲ、扉のロック機構にアームを接続する。

——落ちている「レールガン」を拾うスネーク。ドレビンから強制SEND。

【ウルフ・ビューティ眠る／ポリデモ】通信塔前

※3分以内にビューティを眠らせた場合。

クライング・ウルフ（ビューティ）「ああ…」

――地面に倒れるクライング・ウルフ（ビューティ）。眠る赤ん坊のように身体を丸める。

――ビューティの方を確認するスネークと、扉のロック解除をするMk．Ⅲをカットバックで見せる。先の建物の扉に近づくMk．Ⅲ。扉のロック機構にアームを接続する。

――ビューティに慎重に近づき、落ちている「レールガン」を拾うスネーク。ドレビンから強制SEND。

【ウルフ戦後／強制無線デモ（ドレビン）】

ドレビン「スネーク。さっき拾ったレールガン、洗浄（ロンダリング）しておいたぜ。今回もロハだ。あんたの好きに使ってくれ」

スネーク「……礼は言っておこう」

ドレビン「スネーク、今のクライング・ウルフもやはり戦争の犠牲者だ」

ドレビン　「〝民族浄化〟の名のもとに悲惨な民族紛争がアフリカで続いている。彼女はその戦場となった国の生まれだ」

ドレビン　「敵対する武装組織に村を襲われ、親兄弟を殺されて、幼い身で難民になった後のことだ」

ドレビン　「彼女はただ一人生き残った乳飲み子の弟を抱いて、戦火を逃れていた。ある日、彼女は敵部隊を見つけ、弟を抱えて廃墟に身を潜めた」

ドレビン　「その時、弟が泣き出したんだ。敵がその声を聞きつければ、二人とも殺される。彼女は必死で弟の口を押さえた。やがて敵の足音が消え、彼女は我に返った」

ドレビン　「弟の呼吸は止まっていたんだ」

ドレビン　「狼(ウルフ)は、死んだ自分の赤子を食らうらしいな」

ドレビン　「弟の亡骸を抱きながら戦渦をさまよう彼女の傍らには、狼(ウルフ)の幻影が付きまとうようになった」

ドレビン　「狼(ウルフ)は毎晩、まるであの日の弟のような遠吠えで泣いた」

ドレビン　「やがて、弟の骸も朽ち果てた頃、彼女は政府設営の避難所にたどり着いた」

ドレビン　「そこには自分のような避難民達と、そして、弟のような子供達がひしめいていた」

ドレビン　「見知らぬ赤ん坊の泣き声が容赦なく彼女の心に突き刺さった」

ドレビン　「傍らの狼（ウルフ）が、彼女の悲痛な叫びに応えた。避難所にいる赤ん坊を、その一人ずつを…黙らせていったんだ」

ドレビン　「彼女は狼（ウルフ）を必死で止めようとした。だが彼女には、狼（ウルフ）を止めることが出来なかった」

ドレビン　「数日後、避難所が敵に襲撃される前夜には、子供達は一人もいなくなっていた。生き残った大人達も傷だらけだ」

ドレビン　「勿論、そこには狼（ウルフ）なんて一匹もいなかった」

ドレビン　「赤ん坊達を殺めたのは、彼女だった」

ドレビン　「だが彼女にはどうしても認めることが出来なかった」

ドレビン　「狼（ウルフ）の咆哮を自分の口から吐き出しながら、次々と赤ん坊を殺してゆく己の姿を」

ドレビン　「クライング・ウルフとして、戦場を駆けるビーストになってからもずっと、な」

ドレビン　「…スネーク、ウルフはあんたと戦うことで初めて、自分のしてしまったことを、自分で受け入れられるようになったんだ」

ドレビン　「彼女もまた、あんたに浄化されたんだよ」

ドレビン　「戦場に聞こえる泣き声がこれで止むのなら、それを止めたのはあんただ。全く見事だった」

ドレビン　「ビーストはあと一人、マンティスだけだ。だがスネーク、彼女は全てのビーストを操っていた、戦場のビーストそのものだ」

ドレビン　「気を抜くなよ」

スネーク　「わかってる」

ドレビン　「じゃあな」

――F.O.

【ウルフ・ビューティ眠る2／ポリデモ】通信塔前

――ピピピッと電子音がして、Mk.Ⅲ、扉のロックを外す。

――Mk.Ⅲはウルフドッグの方を見る。

オタコン　「おかえり、ウルフ…」

【フラッシュバック】ＭＧＳ１画像：スナイパーウルフ

――ビューティのところへボロボロの大きなウルフドッグがやってくる。この老犬は、MGS1に登場した当時まだ子供だったウルフドッグ。
――胎児のように丸くなって眠っているビューティを見つけると、ハートマークを出してアオーンとひと鳴き。鼻先でビューティの身体を掬うと背中にビューティを乗せ、連れ去る。
――立ち上がり、扉に向かって歩き出すスネーク。
――F.O.
――ゲームへ。

【ウルフ・ビューティ燃え尽きる2／ポリデモ】通信塔前

――ガチッと音をたててMk.Ⅲ、扉のロックを外す。
――立ち上がり、扉に向かって歩き出すスネーク。
――Mk.Ⅲはウルフドッグの方を見る。

オタコン　「おかえり、ウルフ…」

――ビューティが燃え尽きたところへボロボロの大きなウルフドッグがやってくる。この老犬は、MGS1に登場した当時まだ子供だったウルフドッグ。ビューティのいた場所の匂いを嗅ぐと、アオーンとひと鳴き。

【DISC入れ替え／強制無線デモ（オタコン）】

——溶鉱炉へと続く階段で発生。MGS1ネタ。

オタコン「待ってスネーク、そこでDISCを入れ替えてもらわなくちゃ。面倒だとは思うけどDISC1をDISC2に交換するんだ。「弐」って書いてあるDISCがあるだろう?」

スネーク「そんなものは見当たらないが……」

オタコン「え? あ、PLAYSTATION® 3か……。「Blu-ray DISC」、しかも二層。入れ替えは不要だった」

スネーク「頼むぞオタコン、しっかりしてくれ」

オタコン「いやあスネーク、いい時代になったよねえ、ホント。僕たちはどこまで行くんだろうね。ははは、楽しみだ」

スネーク「(ため息)……」

【REX登場1／ポリデモ】　REX格納庫

——格納庫に入るスネーク。

——Mk．Ⅲがステルスを解除する。

【フラッシュバック】メタルギア発見

——地下基地でメタルギアを見つけたことを思い出すスネーク。

——MGS1のメタルギアを見たときのデモ。しかし、今回はなにもない…。

オタコン　「スネーク、上に乗ってくれ。リフトを上げる」

スネーク　「ああ」

——まず、Mk．Ⅲを台座に上げ、それから台座に上るスネーク。Mk．Ⅲがアームを伸ばし、台座のプラグに差し込む。音を立てて上昇する台座。

——F.O./F.I.

——見上げるスネーク。戦いに向けてハンドガンをチェック。

——地下搬出路の床の高さで音を立てて静止する台座。

オタコン　「REXだ…」

――思わず立ち止まり、見上げるスネーク。
――そこにはREXがあった。崩れおちたREX。REXは瓦礫に埋もれてはいない。多少の瓦礫がある。MGS1でスネークが倒したときのまま。
――ゆっくりとREXに向かって歩き出すスネーク。

オタコン「見て、レールガンが外されている」
オタコン「リキッドが必要としているのはREX本体じゃない。核弾頭を撃ち出すためのレールガンだ」
スネーク「くそ！　既に運び出されたあとか？」
オタコン「調べてみる」

――Mk．Ⅲ、REXの脚部に潜り込む。コクピットに上がる前の準備。まずは脚部の裏側に端子を差し込んで走査する。

ヴァンプ「その通り。残念だが、ここにはもうレールガンはない」

――見上げると頭上の通路（キャットウォーク）にヴァンプとナオミが立っている。空調の入っていない地下搬出路は常人なら、寒いはず。ヴァンプはコートを脱いでいる。二人とも、息は白くない。スネークの息は白い。

スネーク　「ナオミ……！」

ヴァンプ　「ここが貴様らの死に場所だ」

ヴァンプ　「クイーン（ナオミ）もそれを望んでいる」

ヴァンプ　「自爆型月光部隊がこちらに向かっている」

スネーク　「もうすぐここは跡形もなくなる」

「填められた…オタコンっ！」

――Ｍｋ．Ⅲ、端子を抜いて。

オタコン　「スネーク、動かせるかもしれない。時間をくれ！」

スネーク　「わかった、急いでくれ！」

――Ｍｋ．Ⅲ、磁石車輪でＲＥＸの脚の表面をコクピットに向かって上がって行く。ナオミ、ヴァンプの腕に手を置き、なまめかしく見つめながら、

ナオミ　「任せたわよ」

スネーク　「ナオミ！」

——ナオミは通路の奥に消える。ヴァンプ、キャットウォークから飛び降り、バレエの決めポーズ、そして舌なめずり。

ヴァンプ　「さあ、それまで愉しませてくれ！」

——ゲームへ。

ヴァンプ　「さあ、オレを殺してみせろ！」
オタコン　「僕はREXを視る！　スネークは奴を、ヴァンプを倒してくれ！」
オタコン　「そして頼む。ナオミを取り戻してくれ！」

【月光戦前／ポリデモ】地下搬出路

——ゲーム中、CQCでヴァンプを捕らえ、注射を打つと発生。

ヴァンプ　「貴様何を…？」

——注射を打たれた首筋を押さえ、ひざまずくヴァンプ。スネーク、ヴァンプに近づく。

スネーク　「これでおまえもただの死者（デッド）だ」

ヴァンプ　「面白い、ただの死者を殺せるか？」
　　　　　――そこに壁を破って自爆型月光部隊が入ってくる。
スネーク　「月光⁉」
　　　　　――囲まれた！　身構えるスネーク。月光はスネークをとらえ、歩き出す。
オタコン　「（ＯＦＦ）スネーク！　まずい！　自爆型だ！」
　　　　　――さらに月光は、踏みつぶそうとスネークに迫る！　爆破まで残り３秒！
　　　　　――一閃！　３機の月光の頭部がその場に崩れ落ちる。遅れて、脚部が倒れる。
　　　　　――大刀を構えた男が、空中から舞い降りて着地。雷電参上！
雷電　「スネーク、待たせたな」
スネーク　「大丈夫なのか？」
雷電　「サニーのお許しが出た」
　　　　　――ＲＥＸの頭上に跳躍するヴァンプ。
　　　　　――そして天井、壁を壊して侵入してくる月光。

ヴァンプ　「どうだ死ねない男？　おまえも死にたいだろう？」

雷電　「悪いが、俺はまだ死ねない」

ヴァンプ　「なら俺を殺してくれ！」

——3本のスローイングナイフを腕から抜き取るヴァンプ。そしてナイフを舌なめずり。

雷電　「スネーク、あいつ（ヴァンプ）は俺がやる（エマのため、やらなければならない）」

雷電　「月光の自爆を防いでくれ」

——雷電、REXの頭部にジャンプ。

——スネークは、レールガンを構え、REXの足下にいる。ここから頭上は見えない。

スネーク　「オタコン、俺たちが時間を稼いでいる間に…（頼む）」

——REXのコックピットに乗り込んでいるMk.Ⅲ。端子で走査している。

オタコン　「なんとか（動かして）やってみる！」

——REX上で、にらみ合う二人。雷電対ヴァンプの殺陣。スローイングナイフを投げるヴァンプ。
それを刀ではじき返す雷電。

――ヴァンプ、それに対して、

ヴァンプ「待て。貴様もスカウトだろ？　ナイフだ。ナイフで勝負しよう！」

――ヴァンプ、股間のナイフを抜いて構える。雷電、足首から、鎧通しを抜く。逆手で持ち、スカウトの構え。ＲＥＸの背中で、ナイフ対ナイフのアクション。

――スネーク、レールガンを構えて、月光を迎え撃つ！

――ゲームへ。

【雷電対ヴァンプ／ポリデモ】地下搬出路

――ＲＥＸの背中で、雷電対ヴァンプの殺陣。

――ＲＥＸコクピットではＭｋ．Ⅲがｒ ＥＸの起動を行っている（コクピットを閉じた状態で表示はしない）。

――3分くらいのヴァンプと雷電の闘いを描く。最初のフレーズはヴァンプがスローイングナイフを投げる。それらを雷電は腕や身体でわざと受ける。受け止めたナイフを抜いて、ヴァンプに投げ返す。バレエの回転で避けるヴァンプ。第一フレーズは投げ対投げ。投げが終わると、ヴァンプは股間の大振りナイフを抜く。ヴァンプのナイフ対雷電のナイフ。ここはスカウトの闘い。地味な間接技など。両者、斬り合いになる。間を開けて、にらみ合いの後、勝負。二人、相打ち。雷電、表情をかえない。ヴァンプも笑おうとするが、不死身ではなくなっている。身体を離す二人。

――この間、画面上下2分割され、下画面ではスネークがＲＥＸの下で自爆タイプの月光を排除する（ゲーム）。

――ゲームへ。

オタコン　「敵は自爆タイプの月光だ」

オタコン　「自爆されたらこっちもお陀仏だ。何とか食い止めてくれ！」

オタコン　「狙撃ポイントのデータを送る。月光の頭脳を打ち抜くんだ！」

※月光の破壊が成功すると発生

――雷電、大刀を上段から振り下ろす。

――ヴァンプ、大ダメージを受けて、ヨタヨタと後退。倒れるようにして、ＲＥＸの頭部から落ちる。

――F.O.

【ＲＥＸ脱出前／ポリデモ】　地下搬出路

――倒れて起き上がれないヴァンプを見つめるスネーク。

――同時にオタコンの声がする。

オタコン　「スネーク、逃げてっ！」

——新たに侵入してきた月光に向かってＲＥＸのミサイルが飛ぶ。
——しゃがんでミサイルを回避するスネーク。
——破壊された建材が月光たちの入り口を塞ぐ。

スネーク　「ＲＥＸ…！」
オタコン　「こいつ、まだ使える」

——ＲＥＸのコクピットを地面近くまで下げるＭｋ．Ⅲ（オタコン）。
——ヴァンプの呻き声に気付いてそっちを見る一同。
——雷電もヴァンプに近づいてくる。ここで、ヴァンプの息が白くなっている（ナノマシンが働いていない）。

ナオミ　「ヴァンプは不死身（アンデッド）なんかじゃない」

——ヴァンプに近付いていくナオミ。

ナオミ　「体内に埋め込まれたナノマシンが治癒力を高めていただけ」
ナオミ　「度重なる戦いで、それももう限界にきている」

——何度も生き返っているうちにさすがにボロボロになっているヴァンプ。ヴァンプは初めて死に恐怖して、すがるようにナオミに向かって懇願する。

ヴァンプ「博士、楽にしてくれ（逝かしてくれ）」

——ナオミの足元から手を伸ばすヴァンプ。

——その様子を哀れみの目で見ているナオミだが、ヴァンプの手は取らない。

雷電「ナオミ、サニーからの伝言があった」

ナオミ「何て？」

雷電「〝じょうずに焼けた〟。それだけだ」

ナオミ「そう…」

——目を閉じて、涙を流すナオミ。それはサニーがウィルスを完成させた連絡だった。全てに決着がついたナオミ。

ナオミ「…よかった。完成したのね、サニー」

ヴァンプ「あ…ああ…」

――ナオミの足元でうめくヴァンプ。

ナオミ　「ダメ、私にはあなたを罰する（助ける）ことが出来ない」

――ナオミは注射器を持った手をMk．Ⅲに向けて差し出す。

ナオミ　「エメリッヒ博士。これを彼に」

――戸惑うオタコン。

ナオミ　「仇を討つのではなく、終わらせてあげて」

――Mk．Ⅲのアームが注射器を受け取る。
――躊躇していると、ヴァンプがMk．Ⅲから注射器を奪い取る。そして自分の首筋に注射。苦しみだすヴァンプ。

ヴァンプ　「う？　おおおお…」

――ナオミ、ヴァンプを背後から支えながら、

ナオミ　「元の自分に戻れるの。楽になれるわ」

ヴァンプ　「俺は、死ねるのか」

――絶叫と共にヴァンプは動きを止める。その表情は安らかな眠りについたかのようにも見える。

――ナオミはとめどなく涙を流す。

ナオミ　「ごめんなさい…」

――Mk．Ⅲのモニターにオタコンの表情。

オタコン　「…何も変わらない」

オタコン　「どうして？（気持ちが晴れない）」

ナオミ　「過去を、消すことは出来ない」

ナオミ　「過去を、許す事は出来ない」

ナオミ　「だから」

――ヴァンプの落とした、注射器を拾い上げるナオミ。

ナオミ　「終わらせることしか出来ないの」

ナオミ　「スネーク、リキッド達はこの下にいる。『愛国者達』のシステムを奪って彼等か

らの眼を逃れ、箱舟を奪った」

スネーク「箱舟？」

ナオミ「いかなる土地からも、国家からも、法律からも、電脳網からも独立した戦艦」

ナオミ「『愛国者達』の束縛から真に解放される、彼らが唯一、自由を感じることが出来る場所」

ナオミ「〝アウター・ヘイブン〟」

スネーク「アウター・ヘイブン…」

ナオミ「リキッドはそこから核を発射する」

ナオミ「スネーク」

ナオミ「あなたの命は、目的を果たす為に延命されている」

ナオミ「全てが終わった時、あなたは、死を受け入れるしかない」

ナオミ「私達の命は、罪を償う為だけに与えられている」

ナオミ「罪は当人が償うべき。これだけは次の世代へ委ねるわけにはいかない」

ナオミ「罪を、未来に残してはいけない」

ナオミ「それが本当のあなたの運命、その運命には逆らえない」

――振動、爆音。

――ナオミはヴァンプに打ち込んだ注射を自らの首にあてる（カートリッジなのでまだ残っている）。残りを全部注入する。ふらつくナオミ。

オタコン「ナオミ…!?」

スネーク「どうした？」

ナオミ「スネーク、私もヴァンプと同じ」

ナオミ「ナノマシンに辛うじて生かされている身体」

スネーク「ナオミ…」

ナオミ「癌なの。もう生きてはいないはずだった」

ナオミ「ナノマシンで進行を抑制していたけど、それももう限界」

ナオミ「ナノマシンを止めれば、私の凍り付いた時間は再び流れ出す」

オタコン「なんだって？」

ナオミ「さようなら、ハル」

――さらに注射しようとするナオミを見て、

オタコン「やめるんだ…」

――Ｍｋ．Ⅲの触手で止めようとするが、振り切られる。
――注射を終えると、発作が起きて、膝をつくナオミ。
――Ｍｋ．Ⅲのモニターからナオミを見つめるオタコン。それを見つめ返すナオミ。
――ナオミ、寒さに震え出す。息が白い。寒さを貪る様に自分の身体を抱きしめる。スネーク達を見回して、

ナオミ　「サニーに、よろしくね」（サニーに託したウィルスのことも込めて）

オタコン　「ナオミ、やめてくれ！」

――Ｍｋ．Ⅲの画面に映る、涙を流しているオタコン。それに気づくナオミ。

ナオミ　「泣いているの？　私の為に？」

――ふと、笑顔を作る（優しい表情）と首筋に薬品を打ち込むナオミ。注入している時間が異常に長い。

ナオミ　「あ…あ…あ…」

オタコン　「ナオミ！　何故なんだ（何故裏切った）！」

――注射器を落とすナオミ。ナオミはナノマシンにより自らの身体を維持していた。ナノマシンの

活動を止めることはナオミの死を意味する。Ｍｋ．Ⅲを抱き寄せ、モニターを直視する。

ナオミ　「綺麗な…、瞳…」

オタコン　「ええ?」

——倒れ込むナオミ。モニターに映るオタコンを見つめる。

ナオミ　「許してね」

オタコン　「ナオミ！　ナオミ！　ナオミ…！」

——吹き飛ぶ瓦礫。自爆によって進入路を塞いでいた瓦礫を破壊して入ってこようとしている月光群。ナオミ、Ｍｋ．Ⅲを突き飛ばす。

ナオミ　「さあ、行って！」

——Ｍｋ．Ⅲ、バランスを崩して、ナオミから離れてしまう（離れたくない）。

スネーク　「オタコン…」

雷電　「スネーク、急げ！」

オタコン　「…どうして、いつもこうなるんだ」

【フラッシュバック】ＭＧＳ１のスナイパーウルフ、ＭＧＳ２のエマ

スネーク　「オタコン！（しっかりしろ）」
オタコン　「今度こそ…、今度こそ、好きになれると…」
スネーク　「オタコン！」
　　　　　――進入路を塞いでいた瓦礫が吹き飛び、姿を現す月光群。
オタコン　「ナオミ、なぜだ…どうして…」
　　　　　――雷電、Ｍｋ．Ⅲを抱える。
雷電　「（今までないくらいの怒鳴り声）来るぞ！」
オタコン　「いやだぁ…」
　　　　　――以下、ハイスピード。雷電、ＲＥＸのコクピットへ駆け出す。腕の中で暴れるＭｋ．Ⅲ。Ｍｋ．
　　　　　Ⅲのカメラは倒れたままのナオミを捉えている。
　　　　　――次々とスネーク達のいるフロアに飛び降りてくる月光。
　　　　　――コクピットに乗り込むスネーク。雷電、Ｍｋ．Ⅲをスネークに渡す。

オタコン　「スネーク、わかったよ。失うばかりじゃない」

——オタコンは哀しみを振り払い、凛々しい表情。不条理な怒りを顕わにしている。

オタコン　「スネーク、僕にはまだやることがある」
スネーク　「ああ。お前が必要だ」
オタコン　「もう泣いてはない。涙は既に枯れている（ＭＧＳ１のスネークのセリフ）」

——正面を見据え、決心したように眼鏡をかけるオタコン。いつものオタコンに戻る。

オタコン　「ここから脱出しよう」
スネーク　「どうすればいい？」
オタコン　「余裕がない。動かしながら説明する。僕の声をよく聞いてくれ！」
スネーク　「ああ」

——スネークがコクピットのレバーを引くと、ＲＥＸが動き出す！
——コクピットからリモートでシャッターを開けるオタコン。

ナオミ　「必ず、私達の意志（SENSE）を、伝えて…」

――スネーク達を見送るナオミ。手を差し伸べながら力尽きる。
――一、二歩と足を前に出すＲＥＸ。
――スネーク達の姿が瓦礫の中に消えていく。
――F.O.

オタコン「スネーク、脱出だ！」
オタコン「その搬出路を真っ直ぐ進め！」
オタコン「…月光を蹴散らして、真っ直ぐ進め‼」

――ゲームへ。

オタコン「スネーク、ＲＥＸの操縦マニュアルはＢＲＩＥＦＩＮＧに用意した。事前に参照しておいてくれ！」

【ＲＡＹ戦前／ポリデモ】 雪原

――搬出路から抜け出すＲＥＸ。
――海岸沿いの氷原、塔、倉庫などの建築物が平地に立ち並んでいる。
――基地内部で大爆発！　大きな地響き！

――急停止するＲＥＸ。足が滑り、地面の氷を削りながらドリフト、スパイクを下ろして減速、停止する。

――振り返るスネーク達。自爆月光が基地を爆破した。

オタコン　「月光が自爆したんだ！」

――搬出路から煙が出る。出口は埋まる。

スネーク　「雷電！」

――スネーク、雷電を心配するが、まだ様子はわからない。

――間髪いれずに海面から低い唸り声。

オタコン　「何の音だ…？」

――ぶくぶくと音がした直後、一機のＲＡＹが大量の海水をまとって飛び出してくる。まるでペンギンが上陸するように、海水から射出され、腹から着地、滑りながら立ち上がる。ＲＥＸの方を見据えるＲＡＹ。大きく空に咆哮する！　一機の有人ＲＡＹ（尻緒は短い）が、ＲＥＸの前に立ちふさがる。

オタコン　「ＲＡＹ…！」

——立ちふさがったＲＡＹの中からリキッド・オセロットの声が響く。

リキッド「スネーク！　まだだっ！　まだ終わっていないっ！」

スネーク「リキッド！」

リキッド「俺とお前の運命の始まりの地、モセスの土となれ、スネーク」

——身体を震わせ、鳴き声を上げるＲＡＹ！

——F.O.

——ゲームへ。

リキッド「スネエエエク！」

オタコン「スネーク、決着をつけよう」

オタコン「ＲＡＹは対メタルギア兵器だけど、ここに僕が付いている。君は絶対に負けない！」

オタコン「ＲＡＹを、リキッドを倒すんだ！」

【ヘイブン登場／ポリデモ】 雪原

——呻き声を上げて倒れるＲＡＹ。ＲＡＹは両ヒレを失い、地面に倒れる。

——一方、ＲＥＸもかなりのダメージ。前方にかしいで、お辞儀をした状態で動きを止める（機能停止）。コクピットから投げ出されそうになるのをこらえるスネーク。投げ出されるＭｋ．Ⅲ。スネークは激しい息をはき、苦しそう（老化と疲労）。スネークも胸を強く打っている。口から吐血。額からも流血。肩も外れている。

スネーク　「…う、うう」

オタコン　「リキッドは？」

——ＲＡＹのコクピットからリキッドが這い出てくる。上半身がのぞく。前方に手を伸ばすリキッド。そのままコクピットから倒れるように落ちる。リキッド、うつ伏せに倒れたまま、苦しそうに、

リキッド　「スネーク…」

スネーク　「フォックス…」

——朦朧となったスネークがつぶやくと、リキッドが応ずるように、

リキッド　「（フォックス）ダイ…」

——FOXDIEによって崩れるように倒れるリキッド。

リキッド「じゃない！」

——顔を上げ、スネークを睨み付けるリキッド。
——動揺するスネーク。
——リキッド、何事もなかったように歩きながら、

リキッド「残念ながら、今回はそうはいかない」

——スネーク、コクピットから飛び降りようとするが、コケて落ちてしまう。
——あざ笑うリキッド、海岸線へと走り出す。
——スネーク、M4を負傷していない左手で構えて、

スネーク「リキッド……！」

——リキッドを追って走り出すスネーク。ただし、疲労のため前傾、足を引きずるように。片腕、ぶらり。M4も撃てない。
——リキッド、走りながら振り返り、撃てるものなら撃ってみろとばかり、両手をひろげてスネークをからかう。
——すると、地鳴りのような音がまわりから鳴り響く。再びうなりだす海面。さっきより大きい轟

音。リキッド前方の沿岸に、巨大な流氷の塊（ヘイブンのオクトカム）が浮上してくる。艦橋構造らしき部分には、4人のスネーク（ラシュモア山）が見える。

――立ち止まり、それを呆然と見上げるスネーク。

――ヘイブンはオクトカムを解除。その全貌が顕わになる。ミサイルポッドを備えた甲板。タンカーのような側面にしがみついてる（フジツボ）複数のRAY。ドーム天井の太陽電池パネル。それぞれの部分が、流氷のような表面から黒光りする船体へと変わっていく（オクトカム解除）。

――アウターヘイブン。体長500m、潜行可能な巨大戦艦。まるで巨大クジラ。

――ハッチが開くと中には都市の如く艦橋が建ち並ぶ。

――リキッド、ウインチに片足をかけて乗り、甲板に引き上げられながら、

リキッド　「これが俺達が勝ち取った自由（リバティ）！　アウター・ヘイブンだ！」

――スネーク、M4を連射、全弾を撃ち尽くすが、リキッドには当たらない。体力の消耗も激しい。

リキッド　「見ろ、この因縁のレールガンで『J.D（ジョン・ドゥ）』を破壊する」

リキッド　「それで全てが終わり、全てが始まる！」

――REXから取り外したレールガン「裸の核兵器」が見える。

リキッド　「だが兄弟！」

リキッド　「貴様はこの記念すべき島で墓標となるのだ！」

――力尽き、倒れるスネーク。もはや疲労は限界を超え、身体を動かすこともできない。

リキッド　「ヘイブンで潰してやる！」

――ヘイブンのエンジン始動、方向転換を始める。

――一方、雷電。瓦礫で埋まった脱出口。右腕が瓦礫の下敷きになり、出られない。

――雷電、左前方に落ちていた刀に気付く。手を伸ばして刀を取ろうとするが、届かない。雷電、肩関節を外してリーチを伸ばす。刀を左手で引き寄せると、

雷電　「サニー、許せ…（治してくれた身体を自傷することを）」

――自ら右腕を切り落とす雷電。右肩から白い血が噴き出す。それにかまわず、這って前進する雷電。

――カメラ変わって、スネークとヘイブン。方向転換を終えたヘイブンが、スネークへ向かって進み出す。リキッド、きびしい表情でスネークを見つめる。意識を失いかけているスネーク、一歩も動けない。

――迫るヘイブン、スネーク危うし！

――ところが、衝撃音だけが聞こえ、スネークは無事だった。スネーク、朦朧としながら目を開ける。

――すると、雷電がヘイブンを背負う形で食い止めていた。ＲＥＸに潰されたフランクのよう。

――雷電は右腕を失っている。外装がへこむほどの力でヘイブンを食い止めていたが、絶えきれずスリップしだす雷電。すると、刀を自らの足に突き刺して、スリップを食い止める。

雷電　「スネーク、早く！」

――スネーク、ようやく意識を取り戻す。

スネーク　「雷電！」

――スネーク、片肘で這いながら逃げる。ハイスピード。雷電とスネークは眼前で見つめ合う。

雷電　「（言葉は出ない。うめき声）」

スネーク　「やめろーーー！」

雷電　「ローーーズ！」

――雷電、絶えきれずヘイブンの下敷きになってしまう。

――潰される音。

――F.O.

――ローズに会ったときのセリフがオーバーラップする。以下回想。

ローズ　「ジャック、私たちの出逢い、憶えている？」

雷電　「フェデラルホールの前……君は観光客の一団に囲まれていた…」

ローズ　「質問をされてたの。キングコングの登ったビルはどれか？　って」

ローズ　「私はおそらくクライスラービルだと言った」

ローズ　「そこへあなたが現れて割り込んできた」

ローズ　「『違う、エンパイアステートビルだ』」

雷電　「クライスラービルが壊れたのはゴジラだ、と言った」

ローズ　「私達はおばさん達そっちのけで討論を始めた」

雷電　「気が付くと、観光客は居なくなっていた」

雷電　「1週間後、偶然君を基地（FOXHOUND）の廊下で見つけた」

ローズ　「ええ、偶然だった（本当は偶然でない）」

雷電　「俺達はその夜、エンパイアステートビルの屋上へ行った」

ローズ　「綺麗だった」

雷電　「どちらが正しいなんて、もうどうでも良くなってた」

ローズ　「あれが私たちの最初のデート（思い出すように）」

雷電　「その晩、君の部屋でキングコングのビデオを何度も観た」

雷電　「朝まで…」

——ソリッドアイの光が消えて、機能停止したように動かなくなる。

——F.O.

——双眼鏡で前方を見ている女性（美玲）。

美玲（メイリン）　「撃て（てえ）！」

——ヘイブン甲板のリキッド、背後に砲撃音を聞いて振り返ると、沖合に戦艦（ミズーリ）が浮かんでいる。

——戦艦の砲撃がヘイブンの装甲に着弾。しかし、ヘイブンはびくともしない。

——船首で波を切り裂きながら、かなりのスピードで進む戦艦（ミズーリ）。

——艦橋で指示を出す女性（美玲（メイリン））。

美玲（メイリン）　「撃て（てえ）！」

——戦艦の主砲が唸りを上げる。

リキッド　「（ちっ）化石め！」

——ヘイブンの天井が閉鎖すると、潜航開始。

——その様子を倒れ込みながら見つめるスネーク。

スネーク「雷電…」

——スネーク、這いつくばりながら雷電の居たほうを探す。

スネーク「雷電…」

——しかし、残されていたのは、雷電の刀（スパークしている）のみ。

——スネークにも発作の症状が現れる。注射を取り出して、打とうとするが、そのまま注射器さえも落としてしまう。そのまま前方に倒れ込むスネーク（仰向け）。意識を失いかけ、ぼんやりとした視界にヘリコプターが映る。

——F.O.

ACT4「Twin Sun 双子の太陽」無線集

■シャドー・モセス：雪原

【ヘリポートへ進め1】リアルタイム無線

※開始直後

オタコン「そこから西に進むとヘリポートだ」

オタコン「まずは西へ進んでくれ。ヘリポートに向かうんだ」

【月光に注意】任意無線

※ヘリポート到着まで、他に言うことがない場合

オタコン「スネーク、視界は極端に悪い。完全にホワイトアウトすることもあるだろう」

オタコン「月光と鉢合わせする危険もある」

オタコン「十分注意してくれ」

【ヘリポートは西】任意無線

※「月光に注意」と併せて、他に言うことがない場合

オタコン「ヘリポートは西だ。西へ向かってくれ」

【シャドー・モセスは過酷】任意無線

※初回のみ

(1) 状況に応じて(2)か(3)に続く

ローズ「スネーク、シャドー・モセス島の環境が過酷なことはあなたもよく知っていると思う」

(2) 屋外にいる時

ローズ「吹雪にさらされ続ければ、気力はひどく減退してしまうわ」

ローズ「タイムリーで適切な気力回復が、これまで以上にミッションの成否を左右するでしょう。そのことは忘れないで」

(3) 屋内にいる時

ローズ「今は屋内にいるからそうでもないけれど、一歩外へ出ればそこは吹雪よ。気力ゲージの減少は著しいでしょう」

ローズ「タイムリーで適切な気力回復が、これまで以上にミッションの成否を左右するでしょう。このことは忘れないで」

■シャドー・モセス：ヘリポート

【戦車格納庫について】任意無線

※ヘリポートのエリア侵入後にSEND。初回のみ

オタコン「戦車格納庫が見えるね。どう？　色々と思い出すことも多いんじゃない？」

オタコン「ねえスネーク、前はどうやって格納庫に入ったんだい？　当時、今と同じように吹雪が激しかったせいで、格納庫正面の扉は閉鎖されていたように記憶してるけど」

スネーク「内部に通ずるダクトがあるんだ、上と下2カ所にな。そのどちらかから侵入（イントルード）することになっていた」

オタコン「じゃあ今回は、扉も合わせて3カ所だね」

【地下搬出路を目指せ】任意無線

※「戦車格納庫について」を聞いた後でSEND。初回のみ

オタコン「ビッグボスの遺体はリキッドの手に落ちた。この上REXまで奪われるわけにはいかない」

オタコン「彼らより先に、REXの眠る地下搬出路までたどり着くんだ」

オタコン「レーダーに目的地の方角を表示しておく。必要なときには参照してくれ」

オタコン「今のシャドーモセスは無人の廃墟。生身の兵隊は配置されていない代わり、無人機の存在が確認できる。タイプから言って、リキッドの部隊が配備したものだろう」

オタコン「奴らの相手にもだいぶ慣れてきただろうと思うけど、油断せずに進んでくれよ」

【月光の弱点】任意無線

※「地下搬出路を目指せ」を聞いた後でSEND。初回のみ

オタコン「月光は、都市部のように狭くて入り組んだ地形でも、高い運動性を確保することが設計の眼目だったようだ」

スネーク「（お陰で酷い目にあっている）ああ、そのようだな」

オタコン「高い応答性と出力重量比を実現するために、ヤツの両脚は有蹄類由来のクローンES細胞を遺伝子操作して作られた人口筋肉

オタコン　を、主機(メインドライブ)として利用しているらしい」
オタコン「要するに、月光は超アスリート級の脚であの敏捷(すばや)さを獲得しているってことだ」
オタコン「だけど、実はこれは弱点でもある」
オタコン「いくら高い出力を誇るとはいえ、月光は屋内の掃討にも限定的に投入される兵器だ。無制限に本体重量を大きくすることは出来ない。床を踏み抜く危険があるからね」
オタコン「重量超過を避けるため、月光の装甲防御はセントラルコンピュータを搭載した頭部コンポーネントに偏っているんだ」
オタコン「脚部が全くの無防備というわけじゃないけど、頭部に比べればその多寡は知れてる。つまり……」
スネーク「脚部への集中攻撃で、一時的な足止め位なら期待できるということか」
オタコン「ご名答。このことはよく覚えておいてくれ、役に立つはずだ」
【戦車格納庫へ進め】任意無線
※「月光の弱点」を聞いた後でＳＥＮＤ。格納庫内まで

オタコン「そのまま北に進んで戦車格納庫に入ってくれ」
オタコン「潜入ルートは君次第だ（ＭＧＳ１の大佐台詞）」
【敵兵いない】任意無線
※ヘリポート付近でＳＥＮＤ
オタコン「どうやらヘリポートには警備兵力が配置されていないみたいだね」
オタコン「でもこの先も同じとは限らない。油断はするなよ」
【扉開いてる】リアルタイム無線
※戦車格納庫正面の扉の前で
オタコン「格納庫正面の扉が、わずかだけど開いている」
オタコン「あそこからも入れるね」

■シャドー・モセス：戦車格納庫

【ダクトの中で】任意無線
※上下ダクト共通。ダクトの中でＳＥＮＤ。初回のみ
（１）状況によって（２）か（３）に続く

オタコン　「ダクトから侵入したんだね」
オタコン　「出口の位置はちゃんと覚えてるかい？」
スネーク　「ああ、大丈夫だ。そんなに複雑な構造じゃなかった記憶がある」
（2）ねずみに出会うまで。（4）に続く
スネーク　「それに当時は道案内（アラスカハタネズミのこと）もいたしな、迷うことはなかった」
（3）ねずみに出会った後。（4）に続く
スネーク　「それに今回も、また道案内が付いてくれた。迷うことはないだろう」
（4）
オタコン　「道案内？」
スネーク　「小さくて毛に包まれた、な」
オタコン　「小さい？　毛？」
スネーク　「（笑う）気にするな」
【ダクトを抜けろ】任意無線
※「ダクトの中で」を聞いた後でSEND。他に言うことがない場合
オタコン　「スネーク、早くそのダクトを抜けて、戦車格納庫内まで進むんだ」

【格納庫の先へ進め】任意無線
※格納庫内でSEND
（1）
オタコン　「北の渓谷へ出るには、格納庫奥の扉だよ」
オタコン　「先に進んでくれ、スネーク」
（2）
オタコン　「スネーク、色々懐かしいものがあるかも知れないけど、今はREXにたどり着くのが先決だ。そこから北に進んでくれ」
【仔月光について】任意無線
※「格納庫の先へ進め」を聞いた後でSEND。初回のみ
スネーク　「オタコン、また妙なモノが出てきたぞ」
オタコン　「ああ、あの三本脚……というか三本腕の小型機械（マシン）だね。……実はついこの間久しぶりにナスターシャと連絡を取ったんだけど、その時に軍事アナリスト界隈でのうわさ話を聞いたんだ」
スネーク　「ナスターシャ・ロマネンコか。……で？」
オタコン　「月光が市街地での対テロ作戦に投入される

ケースが増えるにつれて、色々と問題点も明らかになってきている。その一つが、サイズと重量だ」

オタコン「他の装甲兵器に比べれば比較的小型軽量の部類に入る月光だけど、屋内の戦闘や捜索に使うには、やっぱりちょっと大きすぎる」

オタコン「そこで製造元のAT社では、月光を母機として作戦活動を行う小型のUGV(陸上無人機)を開発したらしいんだ」

オタコン「そして間もなくその実地試験が行われる、とも」

スネーク「それがあれか」

オタコン「恐らくね。これ以上の情報は一切無し。そもそも存在自体、まだ秘密にされているようだ」

スネーク「月光が母機、か。だったらさしずめ、仔月光といったところだな」

オタコン「たいした武装が施されているとは思えないけど、月光の補助機として屋内戦闘に従事する為の設計がなされてる筈だ。一定の攻撃手段は備えていると想定すべきだろう」

スネーク「ふん。所詮は機械だろう」

オタコン「だろうけど、油断は禁物だ。気をつけてね、スネーク」

【現地調達?】任意無線

※戦車格納庫2階の小部屋でSEND。初回のみ

(1) 状況に応じて(2)か(3)に進む

オタコン「スネーク、そんなところで何してるんだい?」

スネーク「いや……当時、俺はここで何種類かの武器装備を現地調達してな。そのことを思い出した」

(2) 既にアイテムをゲットしてる場合

スネーク「もしやと思ってきてみたんだが、うまいこと目算が当たった」

オタコン「何か手に入れたんだね」

スネーク「ああ」

(3) まだアイテムをゲットしていない場合

オタコン「もしかしたら、また何か手にはいるかも知れない?」

スネーク「あるいはな」

オタコン　「OK。ただ、僕らは先を急がなくちゃいけないってことは、忘れないでくれ」
スネーク　「ああ、ほどほどで切り上げることにしよう」

【地下搬出路へ向かえ】任意無線
※「現地調達?」を聞いた後でSEND。他に言うことがない場合
オタコン　「スネーク、現地調達の基本に戻るのは結構だけど、今はREXにたどり着くのが先決だ」
オタコン　「適当なところで切り上げて、地下搬出路へ向かってくれ」

■シャドー・モセス：渓谷

【月光死んでる?】任意無線
※動かない月光を目撃した後でSEND
オタコン　「あの月光、動力が完全に死んでしまってるように見えるね」
オタコン　「何かメカニカルトラブルでもあって、動けなくなってしまっているのかも……」
オタコン　「まあいい、相手にしていても仕方がない。スネーク、構わず先に進んでくれ」

【月光動いた1】リアルタイム無線
※月光が起動したら
オタコン　「うわっ！」
オタコン　「生きてた‼」
オタコン　「危ない！　逃げろ、スネーク！」

【月光動いた2】任意無線
※「月光動いた1」を聞いた後でSEND。初回のみ
オタコン　「驚いたな。あの月光、冬眠（ハイパネーション）モードにでも入っていたのか……。突然動き出すんだもの、生きた心地がしなかったよ」
スネーク　「同感だ。全く、ああいうのは心臓に悪い」
オタコン　「それにしても、月光にはああいう動作モードもあるんだな、知らなかったよ」
スネーク　「作った奴の、性根の悪さがよく判る」
オタコン　「（苦笑）以後、月光にはより一層注意するようにしてくれ。何度もひっかからないようにね」
スネーク　「了解だ」

【注意して進め】任意無線
※「月光動いた2」を聞いた後でSEND
オタコン　「相変わらず天候は回復しないね。ホワイトアウトもひどい」
オタコン　「視界は著しく閉ざされてる、敵の巡回兵力には特に注意するんだ」
オタコン　「オクトカムの機能を活用して進んでくれ」

【先へ急げ】任意無線
※渓谷エリアで他に言うことがない場合
オタコン　「その先は核弾頭保存棟だ」
オタコン　「地下搬出路までは、まだ道半ばですらない」
オタコン　「先を急いでくれ、スネーク」

【M1戦車戦について】任意無線
※渓谷エリア、もしくは渓谷以降のエリアで発生
（1）渓谷で聞く場合。（3）に続く
オタコン　「ねえスネーク、確か君、ここでレイブンの戦車を撃破したんだよね。どうやって倒したの？」
（2）渓谷以外で聞く場合。（3）に続く

オタコン　「ねえスネーク、ちょっと興味あるんだ。渓谷で君、レイブンの戦車を撃破したんだったよね。一体どうやって倒したの？」
（3）
スネーク　「どう？　どうって……まあ、グレネードを使ってだが」
オタコン　「それだけ？　対戦車ミサイルなんかは使わなかったの？」
スネーク　「そんなものは無かった」
オタコン　「君の戦い方ってさ、対戦車戦闘のやり方としては相当古典的な方法にあたる……っていうか現代の主力戦車相手に通じる戦い方じゃないと思うんだよね」
スネーク　「そう言われても、実際そうしたんだから仕方ないだろう」
オタコン　「以前、現役の陸軍将校に聞いてみたことがあるんだ、「歩兵が戦車に一対一で立ち向かうには、どういう方法があるのか」って」
スネーク　「答えは？」
オタコン　「「戦わない」だってさ。歩兵が一対一で戦車に勝てる方法は、絶対ないって断言してた」

スネーク「（ふうん）そうか」

オタコン「（静かな感嘆）スネーク、僕は常々君のことを非常識なところがあるなと思ってるんだけど、今みたいな話を聞くとその思いを強くするよ。ホント、非常識だよね、一人で戦車を倒してしまえるんだから。……非常識だ、実に非常識だ」

スネーク「……オタコン。それは、誉めてるのか？」

オタコン「もちろん（力説）！　君は世界最強の非常識人間だよ！　最高さ！」

スネーク「……（複雑）」

■シャドー・モセス：核弾頭保存棟1階

【核弾頭について】任意無線

※核弾頭保存棟内部でSEND。初回のみ

オタコン「スネーク、そこにある核ミサイル、一応弾頭は回収されてるみたいだ。Mk．Ⅲ（マーク・スリー）のGM（ガイガーミュラー）管が検知している電離放射線量は、実弾頭が存在する場合に比べて有意に少ない」

オタコン「となれば当然、重火器を使った場合でも、放射性物質の漏洩による被曝の懸念は無いよ」

スネーク「了解だ」

【扉は奥に】任意無線

※核弾頭保存棟1階でSEND

オタコン「そのまま北の一番奥まで進んでくれ」

オタコン「扉があるはずだ。その扉の先へ行くんだ、いいね」

【扉は1階】任意無線

※核弾頭保存棟2階でSEND

（1）

オタコン「スネーク、下だよ。下の階層に降りるんだ」

オタコン「そうでないと先に進めない。いいね」

（2）

オタコン「違うよスネーク、下の階層だ」

オタコン「一旦下に降りて、それから一番奥まで進むんだ」

【エレベータ動かない】リアルタイム無線

※核弾頭保存棟2階のエレベータを動かそうとしたら

スネーク「オタコン、エレベータが動かない」

オタコン「ホントだ、何だろ。(Mk.Ⅲを操作して何か調べている)……パネルの灯も落ちてるね、全く通電されてないみたいだ。でもスネーク、そいつに乗る必要はないだろう? 早く北の奥にある扉へ向かってくれ」

【エレベータ試して】リアルタイム無線
※北の扉での強制無線(P425参照)後、しばらく経ってから鳴らす
オタコン「スネーク、このフロアの補助動力装置、調べてみたら動作した。出力は低いけど、エレベータを動かすには十分の筈だ」
オタコン「エレベータが動くかどうか、試してくれ」

【下層の研究室に向かえ】任意無線
※「エレベータ試して」を聞いた後、1階もしくはエレベータ内でSEND
オタコン「北の扉はロックされていて開かなかった」
オタコン「ロックを解くには、僕の研究室からLAN経由でアクセスしてやる必要がある」
オタコン「研究室はその建物の地下2階にある」
オタコン「エレベータを使って下層階に向かってくれ」

【エレベータ乗り方】
※「エレベータ試して」を聞いた後、2階にいる時にSEND
オタコン「エレベータは、いま君のいるキャットウォークから乗れる」
オタコン「エレベータに乗るには、操作パネルの前に立って△ボタンを押すんだ」

■シャドー・モセス:核弾頭保存棟地下2階

【電撃床エリア1】リアルタイム無線
※エレベータで地下2階に降りた直後
オタコン「まずは中央の廊下を下ってくれ」
オタコン「電流は通ってないから心配要らないよ」

【電撃床エリア2】任意無線
「電撃床エリア1」を聞いた後でSEND
オタコン「僕の研究室までもう少しだよ」
オタコン「中央の廊下の南端から東に回り込んで、僕

の研究室に向かってくれ」

【配電盤生きてる】 強制無線

※研究室西側のエリアで

オタコン 「ここもほとんど、僕が知ってる昔のまんまだ」

オタコン 「ただし、その奥まったところを除いての話。(モニタを覗き込んで) こんな狭いところで随分派手なことやらかしたんだねえ、君」

スネーク 「ああ、あの配電盤か。床に流れてた電流を止めるために、リモコンミサイルをぶち込んだからな」

スネーク 「しかし、リモコンミサイルってのは偵察器材に搭載スペースを取られて、充填されている炸薬量は意外と少ない」

オタコン 「威力自体はさほど大きくないってこと?」

スネーク 「そうだ。配電盤も、一応形は残ってるだろ」

オタコン 「(またモニタを覗き込む) ……ホントだ。これだったらスイッチ回路の先にある電路自体は、まだ生きてるかも知れないね」

スネーク 「床に電流が流れるかも知れないってことか? ……歩いていたら突然電撃をくらうなんてこと、ないだろうな」

オタコン 「(笑う) それは無いよ。意図的に通電させないことにはね」

【西の研究室について】 任意無線

※研究室西側のエリアでSEND。初回のみ

オタコン 「懐かしいな。ここは全部僕の仲間達が働いてた個室(ブース)なんだ。みんな、一騎当千の優秀なエンジニアばかりだったよ」

オタコン 「それに仲も良かった。家族みたいにね」

オタコン 「色んないたずらもした。誰かの誕生日には、そいつの個室を朝の内に風船で埋め尽くしたり、結婚した奴がいたときは、新婚旅行から帰ってくるそいつのワークステーションの中身を綺麗に抜き取って、代わりにゼリービーンズを一杯に詰め込んでおいたり(笑う)」

スネーク 「楽しそうだな」

オタコン 「ああ、楽しかった! だけど……、そういう仲間達と作っていたのは、REXだったんだよね」

オタコン「馬鹿な学生みたいに面白おかしく日々研究室で過ごして、その結果は、なんてこと無い、大量破壊兵器だ」
オタコン「笑って話したりできる事じゃないのにね……」
スネーク「考えすぎるな。お前の悪い癖だ」
スネーク「(力づけるように) さあ、ちゃんと俺をナビゲートしてくれ。俺のサポートがお前の役割だろう?」
オタコン「(やや気を取り直す) うん。大丈夫だ、任せてくれ。僕は君のパートナーだからね」
スネーク「頼りにするぞ、相棒」
オタコン「いいとも、スネーク」

【殺戮廊下】任意無線
※オタコン研究室へ続く廊下でSEND。初回のみ
オタコン「……思い出すよ、この廊下」
オタコン「あの時、君がサイボーグ忍者を撃退した後、廊下に出てみたら目の前はいきなり血の海だった」
オタコン「甘ったるい血の臭いが充満して……酸鼻を極めるっていうのはああいうことを言うんだろうね。初めは自分が何を見てるのか、理解できなかったよ……」
オタコン「……」

【廊下を北へ】任意無線
※研究室に続く廊下で他に言うことがなかったら
オタコン「その廊下をそのまま北に進めば僕の研究室だ」

【ロック解除終了1】リアルタイム無線
※オタコン研究室デモ後
オタコン「ロックの解除は終わった。これで1階の扉を開けるよ!」

【ロック解除終了2】任意無線
※月光出現以前で他に言うことがなかったら
オタコン「ロックの解除は済ませた。いつでも1階の扉を開けられるよ」

【月光出現】リアルタイム無線
※核弾頭保存棟地下2階で月光が出現した直後

オタコン「月光だ！」

【月光どうにかしろ】リアルタイム無線

※「月光出現」を聞いた後、月光に近づくと

オタコン「スネーク、月光がエレベータへ向かう廊下を塞いでいる」

オタコン「あいつらをなんとかしないことには、1階へ行けない」

【月光攻略法1】任意無線

※月光を撃破できる武器を持っていない場合

オタコン「月光を破壊できる武器は何か無いのかい?」

スネーク「あいにく小火器程度しか持ち合わせがない」

オタコン「小銭の話してるみたいに言わないでくれ!」

スネーク「怒るな、本当のことなんだから」

オタコン「もう、呑気だな、君は……」

オタコン「武器が無いんじゃ、何か別の方法であいつを倒すしか先へ進む方法はない」

オタコン「何か方法があるはずだよ、スネーク。考えろ、考えるんだ!」

【月光攻略法2】任意無線

※月光を撃破できる武器を持っている場合

オタコン「何か月光に対して有効な武器は?」

スネーク「ああ、あるぞ」

オタコン「よし、じゃあ、そいつを使って奴を倒すんだ!」

【月光攻略法3】任意無線

※月光を倒せる武器を持っていない場合で、「配電盤生きてる」を聞いていたら。初回のみ

オタコン「スネーク、僕がさっき、電路自体は生きてるかも知れないって言ったのを覚えてる?」

スネーク「ああ。……待てよ、もしそうなら」

【月光攻略法4】任意無線

※月光を倒せる武器を持っていない場合で、「配電盤生きてる」を聞いていなかったら。初回のみ

オタコン「スネーク、シャドーモセス事件のとき、初

めて僕の研究室に来る前に、ここの通路で電撃を食らったよね？」

スネーク「ああ、派手に吹っ飛ばされた。……考えてみれば、なぜ研究施設の床に高圧電流が流されていたんだ？　危ないじゃないか」

オタコン「もちろん初めからあった訳じゃないよ。あれはリキッドがここを占拠した後、機材を持ち込んで設置したんだ」

スネーク「（合点）……お前を軟禁して、ＲＥＸの研究を完成させるためか？」

オタコン「その通り。ねえ、あの時君は配電盤を破壊して電流を止めたんだよね」

スネーク「リモコンミサイルを使った」

オタコン「ところがね、さっきＬＡＮを覗いたとき、その配電盤の電路自体には、まだ電力が供給されていたことが判ったんだ」

スネーク「なんだと？　……だとすれば」

オタコン「うん、Ｍｋ．Ⅲを使って床に電流を流せるかも知れない」

オタコン「月光も電子装備については相応のサージプロテクタを備えてると思うけど、長時間の大電流には生体パーツの方がダウンする可能性がある」

オタコン「Ｍｋ．Ⅲを出して、配電盤まで行ってくれるかい？　試してみる価値はある」

【月光攻略法５】任意無線

※「月光攻略法３」か「月光攻略法４」を聞いた後でＳＥＮＤ

オタコン「床に電流を流せるかどうか試してみよう。Ｍｋ．Ⅲで配電盤の近くまで行ってみてくれ」

【電流を流す方法１】リアルタイム無線

※Ｍｋ．Ⅲが配電盤に接近したら

オタコン「床に電流を流すには、配電盤の前でアクションボタンを押すんだ」

【電流を流す方法２】任意無線

※「電流を流す方法１」を聞いた後でＳＥＮＤ

オタコン「床に電流を流すためには、Ｍｋ．Ⅲを配電盤の前に付けてくれ」

オタコン「それから、アクションボタンを押す」

ロテクタを備えてると思うけど、長時間の

オタコン「それから、アクションボタンを押す」

【落ち着いて1】任意無線

※月光出現後にSEND。初回のみ

ローズ「スネーク、敵の待ち伏せを突破しなくてはならないのね?」

ローズ「あなたなら大丈夫だと思う。でもどうか落ち着いて行動して。無茶は禁物よ、いいわね」

【早く安全に1】任意無線

※「落ち着いて1」を聞いた後でSEND。気力ゲージが高い場合

(1)共通無線の「挨拶」→「気力の状態」を流用。(2)か(3)に続く

(2)

ローズ「だけどそのままでは危険ね。精神面にかかるストレスも大きいはずよ」

ローズ「なるべく早く状況を打開して、安全を確保する必要があるわ」

(3)

ローズ「でもスネーク、あなたは今危険な状況にあるわ」

ローズ「油断せず、いち早く安全を確保して」

【早く安全に2】任意無線

※「落ち着いて1」を聞いた後でSEND。気力ゲージが低い場合

(1)共通無線の「挨拶」→「気力の状態」を流用。(2)か(3)に続く

(2)月光に追われている場合

ローズ「その上敵に追われている。これではとても気力ゲージの回復に専念できないわね」

ローズ「今は、安全の確保を優先した方がいいと思うわ、スネーク」

(2)月光に追われていない場合

ローズ「でも、見たところ敵はあなたのことを認識していないようね」

ローズ「この機を逃さないで。気力ゲージを回復するチャンスよ」

【1階に向かえ】任意無線

※月光を倒した後にSEND

(1)

オタコン「スネーク、障害の排除には成功した」

オタコン「1階に向かおう。エレベータで1階まで上

がるんだ」

（2）

オタコン「スネーク、1階まで急ごう。扉のロックは解除できてる」

オタコン「エレベータを使って1階に上がってくれ」

■シャドー・モセス：核弾頭保存棟1階

【北の扉へ向かえ1】リアルタイム無線

※エレベータで1階に到着後

オタコン「OK、スネーク。階段を下りて、北の扉へ」

オタコン「僕がMk.Ⅲ（マーク・スリー）で扉を開く」

【北の扉へ向かえ2】任意無線

※「北の扉へ向かえ1」を聞いた後でSEND

（1）上階層にいる時

オタコン「スネーク、目的の扉は下の階層にある」

オタコン「階段を下りて、北の奥にある扉へ向かってくれ」

（2）下階層にいる時

オタコン「スネーク、そのまま北へ進んで一番奥の扉まで頼む」

オタコン「僕がMk.Ⅲ（マーク・スリー）の操作をオーバーライドして、実際に扉を開くよ」

【Mk.Ⅲ（マーク・スリー）を守れ1】リアルタイム無線

※月光出現直後

オタコン「まずい、スネーク、月光だ！」

オタコン「扉を開くまでの間、Mk.Ⅲ（マーク・スリー）は完全に無防備だ」

オタコン「月光の注意をそらして、Mk.Ⅲ（マーク・スリー）が発見されないようにしてくれ！」

【Mk.Ⅲ（マーク・スリー）を守れ2】任意無線

※「Mk.Ⅲ（マーク・スリー）を守れ1」を聞いた後でSEND

（1）

オタコン「僕が扉を開くまでの間、Mk.Ⅲ（マーク・スリー）は扉の側を離れられないし、ステルス迷彩も解除していなくちゃならない。これじゃ見つかるのも時間の問題だ」

スネーク「ステルスを解除？　そもそも月光には効かないんじゃなかったか？」

オタコン「確かに、月光のセンサー装備一式（スイート）に対して

ステルスは効果を期待できない。だけどそれも程度問題で、完全な可視状態でいるときに比べれば被発見の蓋然性を少しでも下げることが出来る筈なんだよ」

スネーク　「（よく解らないが）……透明でいた方がいくらかでも有利だっていうんなら、どうしてわざわざステルスを解くんだ?」

オタコン　「なんでって……扉を開く操作を、Mk.Ⅲ（マーク・スリー）のマニピュレータを使ってやってるからだよ」

スネーク　「?　どういうことだ?」

オタコン　「ステルス迷彩を起動したら、Mk.Ⅲ（マーク・スリー）は機体全体が光学的に透明化する。マニピュレータも例外じゃない」

スネーク　「……だから?」

オタコン　「（ため息）もし自分の手が透明になったら、君はどうやって食事や銃の手入れをするんだい?」

スネーク　「……（やっと判る）おお、そういうことか!」

オタコン　「そういうこと。いいかい、スネーク、言うまでもないけどMk.Ⅲ（マーク・スリー）と月光じゃ勝負にならない。僕が扉を開くまで、月光をMk.Ⅲ（マーク・スリー）へ近づけさせないでくれ」

スネーク　「よし、判った。任せておけ」

（2）

オタコン　「Mk.Ⅲ（マーク・スリー）が扉を開く時間を稼いでくれ」

オタコン　「月光の注意を引きつけて、Mk.Ⅲ（マーク・スリー）から遠ざけるんだ!」

【アクティブ防御システム】任意無線

※「Mk.Ⅲ（マーク・スリー）を守れ2」を聞いた後でSEND。初回のみ

オタコン　「月光を見て。頭部にミリ波レーダーのアンテナ、脚部上部の側面に迎撃用散弾の発射機があるだろう?」

オタコン　「あれがアクティブ防御システムだ。アンテナさえ潰せばシステムを無効化できる筈だ。アンテナをよく狙って破壊するんだ」

【落ち着いて2】任意無線

※核弾頭保存棟での月光デモ後にSEND。初回のみ

ローズ　「また敵の待ち伏せ?　スネーク」

スネーク　「そうじゃないが、あまりうまくない状況だ。Mk.Ⅲ（マーク・スリー）が扉を開くまで敵の注意をよそに

そらす必要がある」

ローズ「スネーク、いい？　過度の恐怖心はミスを誘うわ」

ローズ「なるべく冷静さを保って、思考をクリアにすることが大切よ」

ローズ「落ち着いていてね、あなたなら必ず状況を突破できるわ」

【Mk.Ⅲ（マーク・スリー）にいたずら】リアルタイム無線

※月光ではなく、Mk.Ⅲ（マーク・スリー）をいたぶった場合

（1）

オタコン「何するんだ、スネーク！」

（2）

オタコン「うわ！　やめてくれ‼」

（3）

オタコン「やめろよ、スネーク！」

【月光に見つかった】リアルタイム無線

※Mk.Ⅲ（マーク・スリー）が月光に見つかった時に鳴らす

（1）

オタコン「月光に見つかった！　スネーク、奴を何とかしてくれ！」

（2）

オタコン「見つかった！」

（3）

オタコン「月光の注意を引き離してくれ！」

【月光なんとかして】リアルタイム無線

※Mk.Ⅲ（マーク・スリー）が月光に見つかり、攻撃を受けている

（1）

オタコン「月光をなんとかしてくれ！　Mk.Ⅲ（マーク・スリー）が破壊される！」

（2）

オタコン「スネーク頼む、月光を遠ざけてくれ！」

【スネークどこ行く？】ゲームオーバー

※エレベータに乗って下に行こうとするとMk.Ⅲ（マーク・スリー）が見つかりゲームオーバー

オタコン「どこへ行くつもりなんだ！」

オタコン「月光を遠ざけてくれ、Mk.Ⅲ（マーク・スリー）が発見されてしまう！」

オタコン「スネーク、スネーーク‼」

【扉のロックが解除】リアルタイム無線
※扉のロック解除直後に
オタコン「よし！　開いたよ、スネーク！」

【Mk.Ⅲ（マーク・スリー）やられた】ゲームオーバー
※ゲームオーバー音声
（1）月光の攻撃でMk.Ⅲ（マーク・スリー）が破壊された
オタコン「くそ、Mk.Ⅲ（マーク・スリー）が（やられた）！」
オタコン「スネーク、作戦失敗だ……！」
（2）スネークの攻撃で破壊された
オタコン「ああ！　くそ、くそう！」
オタコン「何やってるんだスネーク、スネーク！」

【先を急げ】任意無線
※他に言うことがない場合
オタコン「スネーク、今は先を急がなくちゃ。レーダー上のマーク（◎）を参照して、前へ進んでくれ」

■シャドー・モセス：雪原・通信棟

【ハインド戦について】任意無線
※通信棟エリア、もしくは溶鉱炉エリアで発生。初回のみ
（1）通信棟付近で聞く場合。（3）に続く
オタコン「通信棟だ……。君がリキッドのハインドと戦った場所だね」
（2）通信棟以外の場所で聞く場合。（3）に続く
オタコン「スネーク、思い出したよ。通信棟で君は、リキッドのハインドと対決したんだった。あの時も今と同じようにひどい吹雪だったよね」
（3）
スネーク「楽な戦いじゃなかった」
オタコン「だけど君は見事に奴のガンシップを撃墜した……」
オタコン「それまでは、たとえ携行地対空ミサイル（MANPADS）を装備していても、歩兵が攻撃ヘリに正面切って対抗するなんて自殺行為だって聞いていたんだ。そんなこと出来るのは映画の中のヒーローだけだってね。ところがそれを、君はいとも簡単に……」

スネーク「言ったろう、簡単だった訳じゃない」
オタコン「そうかい？　でもあの時君、「ヘリを一機落としただけだ」、なんてさ。クールに決めてたじゃない」
スネーク「……昔話はいい。先を急ぐことにしよう。REX格納庫まで、まだ先は長い」
オタコン「ああ、そうだね、スネーク」

【REX格納庫へ急げ】任意無線
※他に言うことがない場合
オタコン「ナオミ達が向かったREX格納庫へ急ごう。北上してくれ」
オタコン「通信棟内部には入らない。迂回して行くんだ」

■シャドー・モセス：雪原・通信棟（クライング・ウルフ戦）

【ウルフについて】任意無線
※ウルフ戦（ビースト）開始直後にSEND。初回のみ
（1）状況に応じて（2）か（3）に続く
ローズ「ビーストが泣いている……」
ローズ「スネーク、泣くという行為は心理学的には、感情の自由な表現・発散の一つと考えられているわ」
（2）共通無線（P674参照）で「カタルシスとは」を聞いていたら挿入。（3）に続く
スネーク「カタルシス、だな？」
ローズ「その通りよ」
（3）
ローズ「あのビーストは、絶えず泣いている。……そうしなくては立ちゆかないほどの大きな悲しみによるストレスが彼女の心身を苛み続けているに違いないわ……」

【匂いに注意】任意無線
※ウルフ戦開始直後にSEND。初回のみ
スネーク「オタコン！　これだけ視界の悪い中で、奴は俺の位置をかなり的確につかんでいるフシがある……一体どうなってるんだ！」
オタコン「赤外線で……？　いや、オクトカムがあるんだ、そんなはずは無いな。……スネーク、敵の攻撃に何か法則性はない？　何でもいいんだ、それがヒントになるかも……」

スネーク　「そういえば、敵弾は風下の方から飛んできているような気がする」
オタコン　「ということは……」
スネーク　「くそ！　奴は、俺の匂いを頼りに狙いをつけてるのか」
オタコン　「でも、こんな強風の中、匂いだけでなんて」
スネーク　「セントバーナードはアルプスの吹雪の中、遭難者を助け出す。奴がイヌ並の嗅覚センサーを装備しているとすれば、考えられない話じゃない」
オタコン　「でも、どうしたらいいんだろう？　オクトカムには消臭効果なんてないよ」
スネーク　「奴との位置関係を予測して、常に風下に回り込むよう移動するしかないだろう」
オタコン　「出来る？　スネーク」
スネーク　「出来る出来ないの問題じゃない。やるだけだ」
オタコン　「……判った。頑張ってくれ、スネーク！」

【連携攻撃に気をつけろ】任意無線
※「匂いに注意」を聞いた後でSEND
（1）
オタコン　「奴は四足歩行タイプのビーストのようだ」
オタコン　「強化服装備の護衛部隊を引き連れている」
オタコン　「奴らの連携攻撃に気をつけてくれ、スネーク！」
（2）
オタコン　「スネーク、敵は連携して攻撃を仕掛けてくる」
オタコン　「どちらか一方にだけ気を取られては、裏をかかれるよ。気をつけるんだ！」

【レールガン？】任意無線
※「連携攻撃に気をつけろ」を聞いた後でSEND。初回のみ
スネーク　「くそ、オタコン！　立木も一撃でなぎ倒しているぞ！」
スネーク　「奴が持っているあれは一体何だ!?」
オタコン　「ビーストが携行できるサイズであの威力、それに発砲前のチャージ音……スネーク、フォーチュンの武器、覚えてる？」
スネーク　「（あっ！）レールガンか！」
スネーク　「レールガン奪取を阻止しに来て、レールガンと戦うことになるとは……」

オタコン「宿命……みたいなことは言いたくないけど、何かを感じずにはいられないよ。……でも今は感傷に浸ってる場合じゃない。奴を倒すのが先決だ」
スネーク「ああ。お前の言うとおりだ、オタコン」

【レールガン発射】リアルタイム無線
※レールガンの発射が近づいたら
(1)
オタコン「スネーク、強化兵の動きがおかしい」
オタコン「(チャージ音UP)何か来るぞ!」
(2)
オタコン「また来るぞ、スネーク!」

【敵の連携について】任意無線
※「レールガン発射」を聞いた後にSEND。初回のみ
オタコン「レールガンのチャージが始まると、レールガンの射線上にいる強化兵達は一斉に姿勢を低くするね……」
スネーク「同士討ち(フレンドリーファイア)を避けるためか、こちらの攻撃を吸い寄せてウルフを守るためか……」

オタコン「練度は高そうだね」
スネーク「あるいはSOP(ソップ)のお陰か」
オタコン「いずれにしろ侮れないよ、スネーク」

【スナイパーライフルを使え】リアルタイム無線
※ウルフ戦開始後一定時間ごとにヒントを鳴らす
(1)
オタコン「スネーク、スナイパーライフルを使って!」
(2)
オタコン「スナイパーライフルで主観攻撃するんだ!」
(3)
オタコン「ウルフはレールガンを撃つために、スーツの外へ姿をさらす。そこを狙うんだ!」

【レールガン射撃時を狙え】任意無線
※ウルフ戦開始後、あまりダメージを与えられていない場合のヒントその1
オタコン「スネーク、BB部隊は防御力の高いスーツシステムを装備している。ウルフも例外じゃない」

オタコン「スーツ外殻へ向かって無闇に銃弾を浴びせても、効果は薄いだろう」
スネーク「何か手は?」
オタコン「奴のレールガンがフォーチュンと同じものだとすれば、撃つときには両手で保持しなくちゃいけない筈だ」
スネーク「……やつは攻撃の際、スーツの外へ姿をさらすってことか」
オタコン「そうだ。そこを狙えば、奴に大きなダメージを与えられると思う」
オタコン「レールガン発射準備のタイミングを狙って反撃するんだ。レールガンを撃たれるまでのわずかな時間しかチャンスはない。神経を集中させるんだ!」

【ウルフ転ばせろ1】任意無線
※ウルフ戦開始後、あまりダメージを与えられていない場合のヒントその2
(1)共通。この後(2)か(3)を鳴らす
オタコン「スネーク、ウルフの外殻はとても頑丈だ。君の手持ちの武器で装甲を破るのは難しいだろう」
スネーク「どうすればいい」
オタコン「スーツは容易に傷つかないけど、中にいるのは生身の人間だ。激しい衝撃が加われば、中の人間にとっては大きなダメージになると思う」
(2)衝撃力の強い武器で本体にショックを与える方法の場合
オタコン「爆発したり、相手を吹き飛ばせるくらいの武器で攻撃して、奴を激しく転倒させるんだ」
(3)突進中の攻撃のみが転倒させる方法の場合
オタコン「ビーストを転倒させてやろう」
スネーク「どうやって?」
オタコン「そうだな…ここは雪が深くて足場が悪い。そんな所を全力疾走すれば、かなり安定感を失う筈だ。そこを攻撃すれば、奴は比較的簡単に転倒してくれるんじゃないか?」
オタコン「ウルフが突っ込んで来るタイミングを狙って、攻撃するんだ!」

【ウルフ転ばせろ2】任意無線
※「ウフル転ばせろ1」の（3）を聞いた後でSEND
オタコン「ウルフを転倒させるには、奴が安定感を失った時に攻撃するのも有効だ」
オタコン「ここは雪が深い。足下の悪いこんな場所で、しかも全力疾走している最中は、かなりバランスが悪くなってる筈だ。恐らく通常の武器でも転倒させられると思う」
オタコン「ウルフが突進してきたら、ギリギリまでねばって攻撃を加えてみるんだ」
【扉開かない】リアルタイム無線
※次のエリアである溶鉱炉の扉の前で鳴らす
オタコン「ダメだスネーク！　そこはロックがかかってる！」
オタコン「別の場所への脱出は不可能だ。敵を倒すしかない！」
【増援出現】リアルタイム無線
※ヘイブン兵増援のデモの後で
オタコン「スネーク、敵の新手だ！　モタモタしてると増援を呼ばれてしまう、素早く攻撃して決着を付けるんだ！」
スネーク「了解だ！」

【気力に注意1】
※気力ゲージが高く、他に言うことがない場合
ローズ「スネーク、外は相変わらずひどく吹雪いているわ」
ローズ「その寒さはあなたの体に強いストレスをもたらす。そして気力の減退を招くでしょう」
ローズ「吹雪から身を隠せるような場所があれば、気力の低下を押さえることも出来るはずよ」
ローズ「そんな場所を見つけたら積極的に利用して」
【気力に注意2】
※気力ゲージが低く、他に言うことがない場合
ローズ「スネーク、気力の状態が思わしくないわ」
ローズ「出来るかぎり安全な場所を探して、気力の回復を試みて」

■シャドー・モセス：雪原・通信棟（ビューティ戦）

【ビューティに注意1】

※ビューティに抱きつかれる前にSEND

オタコン　「スネーク、こいつも今までの奴らと同じだ」

オタコン　「奴を近寄らせないようにするんだ！」

【ビューティに注意2】

※ビューティに抱きつかれた後にSEND

（1）

オタコン　「ウルフに近寄られたら、また抱きつかれてダメージを受ける！」

オタコン　「ウルフを近づけるな！」

（2）

オタコン　「スネーク、気を付けるんだ」

オタコン　「彼女(ビューティ)を近寄らせてはいけないよ！」

【ビューティに注意3】

※ビューティに抱きつかれる前にSEND

ローズ　「ビューティ達は皆あなたに抱かれようとしているみたい……」

ローズ　「彼女もきっと同じだわ。スネーク、あのビューティにも近づいてはいけない。気を付けて！」

【ビューティに注意4】

※ビューティに抱きつかれた後にSEND

ローズ　「彼女の腕に捕らわれては危険よ、距離を置いて！」

【BB部隊はPTSD】任意無線

※ウルフ戦勝利後にSEND。初回のみ

ローズ　「スネーク」

スネーク　「君か、ローズ」

ローズ　「無事で良かった。大きな怪我、していないわね」

スネーク　「ああ」

ローズ　「BB部隊の話、私も聞いていたわ。どれもひどい話……」

スネーク　「戦場ではしばしば起こる話だが、確かに聞いていて楽しいものじゃないな」

ローズ　「彼女たちは、皆強い心的外傷(トラウマ)を抱えている。

子供の泣き声の幻聴が聞こえたり、怒りの感情がフラッシュバックするのは、私たちカウンセラーにとって典型的な臨床例よ」

スネーク「PTSDだな」

ローズ「明白ね。そんな状態の彼女たちを無理やり戦場に送り出すなんて……」

スネーク「それだけリキッドは、戦闘能力の高さを買っていたんだろう」

ローズ「だからって。CSPでは、いえ良心を持った人間なら絶対にそんな扱いはしない」

スネーク「良心？　奴には期待するだけ無駄だ」

ローズ「良心の問題だけじゃないわ。正しい対処を怠れば、症状は悪化する。やがて戦闘どころではなくなってしまうのよ。そんな事態は、戦闘指揮官として不都合な筈よ」

スネーク「……俺からすれば、むしろ好都合だが」

ローズ「（非難）スネーク」

スネーク「非情に思えるだろう。だが戦場で生き延びるには、非情に徹することが必要な時もある」

ローズ「……それは、そうだろうけど……」

スネーク「言いたいことは判る。君の感覚は間違っていない」

ローズ「……そうね、あなたの言う通りかも。あの、余計なことを言ってごめんなさい」

スネーク「大丈夫だ」

ローズ「スネーク、BB部隊はあと一人よ。油断しないで、最後まで頑張ってね」

スネーク「ああ、気を付けよう」

【ウルフドッグについて】任意無線

※ウルフ戦（ビューティ）後にSEND。初回のみ

オタコン「聞こえる？　スネーク」

スネーク「ああ、あれはウルフドッグの遠吠えだ」

オタコン「彼女の家族（ウルフ）……」

オタコン「こんな環境の中で、食事をくれる人もいなくなって大変だろうに……」

スネーク「……オタコン。ウルフドッグは普通の犬とは違う。彼らの性質は、むしろオオカミに近い。人に飼われるより野生の方が幸福なんだ。ましてその愛する「家族」の墓標を守るためならな」

オタコン「スネーク……」

スネーク「何頭ものウルフドッグと生活していた俺が言うんだ。間違いない」
オタコン「……うん、君がそういうなら」

【目的確認】任意無線
※「ウルフドッグについて」を聞いた後でSEND
(1)
オタコン「スネーク、まだ道は半ばだ。急いで出発しよう」
(2)
オタコン「雪原の北端中央にある倉庫から溶鉱炉へ進むんだ」
オタコン「北へ向かってくれ」

■シャドー・モセス：溶鉱炉

【溶鉱炉へ向かえ】任意無線
※溶鉱炉へ続く倉庫でSEND
(1)
オタコン「溶鉱炉はそのすぐ下だ。そのまま下りてくれ」
(2)
オタコン「スネーク、奥に溶鉱炉へ向かう階段があるよ。そこから溶鉱炉へ下りてくれ」

【エレベータの扉へ向かえ】任意無線
※溶鉱炉エリア侵入後
オタコン「この先に、REX格納庫へ下りてゆくための斜行エレベータがある」
オタコン「右奥の大きな扉がそうだ」
オタコン「あの扉を抜けて先を急いでくれ」

【斜行エレベータ前】強制無線
※斜行エレベータの扉前で
スネーク「オタコン。この扉はどうやったら開くんだ?」
オタコン「開かないのかい? おかしいな……さっき研究室で、セキュリティレベルをフリーに設定しておいたんだけど……」
スネーク「……ここからREX格納庫に下りることが出来た筈だ」
オタコン「そうだ、確かこの溶鉱施設、すぐ下に鋳造（ちゅうぞう）・圧延（あつえん）施設が併設されてて、そこからも、REX格納庫前の排水路に抜ける通路

があった筈なんだ」
スネーク「そこにはどうすれば行ける？」
オタコン「ここ（溶鉱炉）の北西の角に、専用エレベータがあるはずだよ」
スネーク「北西の角だな。判った」

【圧延施設に向かえ】任意無線
※「斜行エレベータ前」を聞いた後でSEND
（1）
オタコン「スネーク。この下にある鋳造・圧延施設まで下りるんだ」
（2）
オタコン「北西の角にあるエレベータを使ってくれ」
オタコン「圧延施設に下りるには、北西の角にあるエレベータを使うんだ」

【カラスを殺すと1】リアルタイム無線
※カラスを殺していると
（1）
オタコン「カラスを殺してどうするんだ」
オタコン「無益な殺生なんてやめてくれ！」

（2）更に殺していると
オタコン「スネーク、非道い奴だな！」
オタコン「さっさと止めて、先へ進むんだ」

■シャドー・モセス：圧延施設・南

【圧延施設の構造】任意無線
※エリア侵入直後にSEND。初回のみ
オタコン「圧延施設は南北に長く延びた構造になっている」
オタコン「南半分が圧延ローラー施設、北半分は出来た鋼板を冷却する為の施設だ。その先に排水路との接続部がある」
オタコン「スネーク、排水路を目指すんだ！」

【ヴァンプに負けるな】任意無線
※「圧延施設の構造」を聞いた後でSEND。初回のみ
オタコン「スネーク、気をつけて。そこには月光や仔月光がうようよいる」
スネーク「溶鉱炉の扉を封じたのはヴァンプだな」
オタコン「どうして（そう思うの）？」
スネーク「本来誰も通らないような場所に月光をばら

まいている。扉を開けなくすれば、俺が来ると踏んだんだろう。こんなところにキルゾーンを設定したのさ、あの変態野郎は」

オタコン　「そうか……。スネーク、あんな奴に負けないでくれ！　何とか無事に、そこを通り抜けるんだ」

【排水路へ向かえ】任意無線

※「ヴァンプに負けるな」を聞いた後、他に言うことがない場合

オタコン　「その圧延施設内を北に進んでくれ」

オタコン　「北の端に、REX格納庫へ通じる排水路へ出る扉がある」

■シャドー・モセス：圧延施設・北

【鋳造施設の構造】任意無線

※エリア侵入直後にSEND。初回のみ

オタコン　「鋳造施設は上下何層かの重層構造になっている筈だ」

オタコン　「確か一番下の層まで下りてゆくと、そこから圧延施設に接続している」

オタコン　「まずは下の階層へ下りるんだ、スネーク」

【圧延施設を目指せ】任意無線

※「鋳造施設の構造」を聞いた後でSEND

(1) 鋳造施設上層にいる時

オタコン　「スネーク、そこは一番下の階層まで下りるんだ」

オタコン　「その先に圧延施設がある」

オタコン　「REX格納庫に通じる排水路は、その更に先だ」

(2) 鋳造施設最下層にいる時

オタコン　「圧延施設はその北だ」

オタコン　「圧延施設を抜ければ、REX格納庫に通じる排水路は目の前だよ」

オタコン　「北へ進んでくれ」

■シャドー・モセス：地下基地

【水路を進め】任意無線

※エリア侵入直後から、地下倉庫北に出るまで

オタコン　「その水路を道なりにまっすぐ進むんだ」

オタコン　「REX格納庫前に出る」

オタコン「そこまで行ければ、あと一歩でREX格納庫だ」

【格納庫もうすぐ1】リアルタイム無線
※地下倉庫北侵入直後
オタコン「ようやくここまで来たね」
オタコン「REX格納庫まではあと一息だ」
オタコン「まずはそこを道なりに進んでくれ」

【格納庫もうすぐ2】任意無線
※「格納庫もうすぐ1」を聞いた後でSEND
(1)
オタコン「その先がREX格納庫だよ、スネーク。って……もちろん判ってるよね」
オタコン「いよいよだ。気をつけて進んでくれ」
(2)
オタコン「REX格納庫はすぐ先だ」
オタコン「北へ向かって進んでくれ、スネーク」

【REXはこの上】リアルタイム無線
※次エリア(地下搬出路)に上がるリフト付近に来たら
オタコン「REXはこの階層の上だ」
オタコン「リフトで上まであがろう、スネーク」

【リフトについて】任意無線
※「REXはこの上」を聞いた後でSEND
オタコン「スネーク。そこの、REXを搬出路まで揚げるリフトは、研究室からの遠隔操作で僕が下ろしておいた」
オタコン「これで搬出路まで一気に上がれるよ(得意)」

■シャドー・モセス：地下搬出路(ヴァンプ戦)

【ヴァンプ戦開始】リアルタイム無線
※開始直後
オタコン「僕はREXを診る!」
オタコン「スネークは奴を、ヴァンプを倒してくれ!」
オタコン「そして頼む、ナオミを取り戻してくれ!」

【ヴァンプを倒せ】任意無線
※「ヴァンプ戦開始」を聞いた後でSEND。他に言う

ことがない場合

（1）

オタコン　「スネーク、ヴァンプを倒せ！」

（2）初回のみ（1）に続けて鳴らす

オタコン　「エマのかたきを……かたきをどうか！」

（3）二回目以降（1）に続けて

オタコン　「どんな手段を使ってもいい。ヴァンプの息の根を止めてくれ」

オタコン　「ナオミを奴の手から奪い返すんだ！」

【ローズの応援】任意無線

※ヴァンプ戦開始後にＳＥＮＤ

（1）

ローズ　「スネーク、私にはそのヴァンプのことはよく解らない。だから役に立つアドバイスもできない……」

ローズ　「でも応援しているわ」

ローズ　「どうか負けないで、スネーク！」

（2）

ローズ　「ナオミさんを助けてあげられるのは、あなただけよ、スネーク」

ローズ　「その為には、気力ゲージの状態にも気を配って。万全の態勢を整えて、必ずヴァンプを倒すのよ！」

【気力に注意】任意無線

※気力ゲージが低く、他に言うことがない場合

ローズ　「スネーク、気力ゲージが減少してしまっているわ」

ローズ　「そのままでは実力も発揮できないはずよ」

ローズ　「敵の隙をうかがって、気力の回復を試みて」

【オタコンの応援】リアルタイム無線

※ヴァンプがダウンした時に鳴らす

オタコン　「よし！　いいぞ、スネーク！」

【超回復1】リアルタイム無線

※ダウンさせたヴァンプのＬＩＦＥの回復が繰り返すと発生

オタコン　「ダメだ、また奴のＬＩＦＥが回復してゆく！」

オタコン　「どうしたらいいんだ、どうしたら……!?」

【超回復2】任意無線

※「超回復1」を聞いた後でSEND

（1）

スネーク「やはり奴は不死身か⁉ 明らかに致命傷を与えても、見る間に回復している！」

オタコン「……そうだ。そうだ、スネーク！ ナオミは言っていた、南米で奴と雷電が戦った後に。ヴァンプは体内のナノマシンの働きで、受けた傷を急速に修復するんだって」

スネーク「……クソ！ それじゃあ、通常の攻撃手段は通用しないのか？」

オタコン「僕にも判らない……。とにかく今は出来る限りのやり方でヴァンプを攻めるしかない」

（2）

オタコン「ヴァンプのナノマシンは、奴が体に受けた傷をすぐに塞いでしまう」

オタコン「通常攻撃が効いていない訳じゃない。だけどそれが決定打に至る前に、ナノマシンの肉体修復に阻まれてしまう……」

オタコン「何か特別な、効果のある攻撃方法がある筈だ」

オタコン「スネーク、考えろ、考えるんだ。必ず何かがあるはずだ！」

【攻略ヒント1】任意無線

※何度か超回復を繰り返した後にSEND

オタコン「ヴァンプめ……やはり奴を普通の攻撃で倒すのは無理だ」

スネーク「バカでっかい爆弾で、ピンク色の霧にしてやれれば別なんだろうがな」

オタコン「スネーク、こうなれば、奴のナノマシンを何とかするしかない。ナノマシンの活動を妨げる事が出来れば、それが奴に対する切り札になり得る」

スネーク「しかしどうやって」

オタコン「……考えるんだ、スネーク。何か方法はあるはずだ」

【攻略ヒント2】任意無線

※「攻略ヒント1」を聞いても、「超回復」を繰り返していると

（1）

オタコン「そうだ、スネーク！ ナオミからもらった

注射器だ。あれにはナノマシンの活動を抑制する薬が入ってる！」

スネーク「……注射器？」

オタコン「ヴァンプ体内のナノマシンにも効果があるはずだ。あの異常なＬＩＦＥ回復を止められるはずだよ」

オタコン「ナオミの注射器を使って、ヴァンプに薬を打ち込むんだ！」

（２）

オタコン「スネーク、ナオミが君に渡した注射器を使え！」

オタコン「ヴァンプにナノマシン抑制薬を注入するんだ！」

【攻略ヒント３】リアルタイム無線

※なかなか注射器を使わない場合

（１）

オタコン「ナオミがくれた注射器だよ、スネーク！」

（２）

オタコン「注射器を使うんだ、スネーク！」

【攻略ヒント４】リアルタイム無線

※ヴァンプに注射器を使う方法示唆

オタコン「ヴァンプを倒すにはそれしかない！」

オタコン「スネーク、注射器を装備してＣＱＣだ！」

【攻略ヒント５】リアルタイム無線

※ＣＱＣタイミング

オタコン「今だ！　ヴァンプを捕まえろ！」

■シャドー・モセス：地下搬出路（自爆型月光戦）

【月光自爆型】リアルタイム無線

※開始直後

オタコン「敵は自爆タイプの月光だ」

オタコン「自爆されたらこっちもお陀仏だ。何とか食い止めてくれ！」

オタコン「狙撃ポイントのデータを送る。月光の頭脳を撃ち抜くんだ！」

【レールガン使え】任意無線

※月光をレールガンで撃つ前にＳＥＮＤ。初回のみ

オタコン　「スネーク！　REXのチェックを終えるまで、時間を稼いでくれ！」
オタコン　「あの月光は自爆タイプだ。自爆行動が終わる前に、威力の大きな武器で機体を完全に破壊するんだ」
オタコン　「スネーク、ウルフが使ってたレールガンは？」
スネーク　「ああ、使えるぞ」
オタコン　「よし、レールガンの威力なら申し分ない。月光を撃て、スネーク！」

【手ぶれ禁物】任意無線
※自爆月光戦開始直後にSEND。初回のみ
※狙撃イベントなので手ぶれは禁物
ローズ　「よく聞いてスネーク。今のあなたには、些細な照準ミスも命取りになるわ」
ローズ　「気力が減れば照準時の手ぶれが大きくなる」
ローズ　「気力ゲージの状態を常に念頭に置くのよ」

【気力に注意】任意無線
※気力ゲージが低く、他に言うことがない場合
ローズ　「スネーク、気力ゲージが減少しているわ」
ローズ　「手ぶれのせいで狙いにくくなっていない？」
ローズ　「そのままではいずれ、ミスショットを引き起こしてしまう」
ローズ　「チャンスをみて気力ゲージを回復させるのよ、いいわね」

【月光を撃破しろ】任意無線
※月光撃破後にSEND
(1)
オタコン　「REXのチェックが済むまで、月光の接近を食い止めてくれ」
オタコン　「月光は自爆タイプだ。自爆行動を終える前に撃破する必要がある！」
オタコン　「腕の見せ所だよ、スネーク！」
(2)
オタコン　「月光を止めるんだ。奴らを自爆させるな！」
オタコン　「もし自爆行動を始めた月光がいたら、そいつを真っ先に狙え！　頼んだよ、スネーク！」

【自爆月光に注意】リアルタイム無線
※自爆カウントダウンを始めた月光出現時に

オタコン「スネーク！　あのしゃがんでランプが点滅し始めた月光！」
オタコン「点滅が終われば自爆するぞ！　その前に破壊するんだ！」

【月光増援】リアルタイム無線
※二階から月光の増援が現れた時に
（1）
オタコン「くそ、新手だ！」
オタコン「頑張ってくれスネーク、なんとか持ちこたえるんだ！」
（2）
オタコン「上だ、上からまだ来る！」

■シャドー・モセス：脱出路（REX脱出イベント）

【脱出せよ】リアルタイム無線
※開始直後
オタコン「スネーク、脱出だ！」
オタコン「その搬出路を真っ直ぐ進め！」
オタコン「……月光を蹴散らして、真っ直ぐ進め‼」

【港湾エリアに進め】任意無線
※「脱出せよ」を聞いた後でSEND
オタコン「搬出路を抜けた先にある港湾エリアまで突っ走れ！」
オタコン「行け、進むんだ、スネーク！」

【REXの操作方法1】リアルタイム無線
※開始後一定時間後に鳴らす
オタコン「スネーク、REXの操縦マニュアルはBRIEFINGに用意した。事前に参照しておいてくれ！」

【REXの操作方法2】任意無線
※「REXの操作方法1」を聞いた後でSEND
オタコン「REXの操縦方法は、Mk.Ⅲ（マーク・スリー）メニューのBRIEFINGで参照できる。必要があればいつでも確認してくれ」

【ローズの応援】任意無線
※REX脱出ゲーム、開始直後にSEND。初回のみ
ローズ「彼女のことは残念だったわ……」

ローズ　「でもスネーク、悲しんでばかりもいられない」
ローズ　「一刻も早くその場を脱出するのよ。頑張って！」

【出口に急いで】任意無線
※他に言うことがない場合
（1）
ローズ　「スネーク、あまり時間に余裕がないのでしょう？」
ローズ　「慌ててはいけないわ。でも急いで！」
（2）
ローズ　「残り時間に気を付けて、スネーク」
ローズ　「出口を目指して急ぐのよ！」

【機関砲使えない】リアルタイム無線
※機関砲オーバーヒート時
オタコン　「機関砲がオーバーヒートしてる！」
オタコン　「砲身が冷却されるのを待つんだ！」

【ミサイル使えない】リアルタイム無線
※ミサイル弾切れ
オタコン　「ミサイルランチャーが空だ！」
オタコン　「再装填を待ってくれ！」

【レーザー使えない】リアルタイム無線
※レーザーエネルギー不足
オタコン　「エネルギーの残量が足らない！」
オタコン　「エネルギーの回復を待つんだ、スネーク！」

【残り時間わずか】リアルタイム無線
※制限時間が近づくと鳴らす
（1）残り時間が1分を切った辺り
オタコン　「爆発までもう1分を切った！」
オタコン　「スネーク、急げ！　急ぐんだ！」
（2）残り時間が30秒を切った辺り
オタコン　「あと30秒で爆発だ！」
オタコン　「全速でＲＥＸを飛ばすんだ、スネーク！」

■シャドー・モセス：港湾部（ＲＡＹ戦）

【ＲＡＹを倒せ】リアルタイム無線
※開始直後
オタコン　「スネーク、決着をつけよう」

オタコン「ＲＡＹは対メタルギア兵器だけど、ここに僕が付いてる。君は絶対に負けない！」
オタコン「ＲＡＹを、リキッドを倒すんだ！」

【ＲＥＸパワーアップ】任意無線
※「ＲＡＹを倒せ」を聞いた後でＳＥＮＤ。初回のみ
オタコン「メタルギアの操縦に関しては、正直言って奴にアドバンテージがあると思う。リキッドがＲＡＹを奪ってから、相当時間が経っているからね」
オタコン「でも心配要らない。ＲＥＸの開発当事者であるこの僕が、君の戦闘をサポートするよ」
オタコン「ＲＥＸに使われてるメインＣＰＵとＤＳＰのエミュレータをガウディにロードした。こいつとそっちのプロセッサを並列に使って、機体各部の制御を分散処理する。スループットは大幅にあがるから、ＲＥＸの動きはＲＡＹにも劣らないものになる筈だ」
スネーク「……な、なんだか判らんがすごいな」
オタコン「大丈夫だ、スネーク。君は必ず勝つよ！」
スネーク「ああ、頼もしいぞ、オタコン」

【オタコンの応援】任意無線
※「ＲＥＸパワーアップ」を聞いた後、他に言うことがない場合
オタコン「スネーク、頑張れ！」
オタコン「リキッドに負けるな！」

【ローズの応援】任意無線
※ＲＡＹ戦開始後にＳＥＮＤ
(1)
ローズ「リキッドが現れたのね」
ローズ「スネーク、ここが正念場よ。追い続けてきた相手を目の前にして、なお冷静でいろという方が無理かもしれない。けれど、相手の動きをしっかり見極めることが大切よ」
ローズ「いいわねスネーク、自分を見失わないで！」
(2)
ローズ「スネーク、頑張って！」
ローズ「必ず勝つのよ！」

【攻撃かわせ】リアルタイム無線
※ＲＡＹ戦開始後一定時間で鳴らす。攻略ヒント

オタコン　「ＲＡＹは攻撃をかわされた直後に、大きな隙が出来るみたいだ」
オタコン　「ヤツの攻撃をうまくかわせ！　その後が反撃のチャンスだ！」
【機銃で撃ち落とせ】リアルタイム無線
※ＲＡＹのミサイルに被弾している場合。攻略ヒント
オタコン　「スネーク、接近するミサイルは機銃で撃墜できる！」
オタコン　「残らずたたき落としてやるんだ！」
【水圧カッターかわせ】リアルタイム無線
※ＲＡＹの水圧カッターをくらっている場合。攻略ヒント
オタコン　「水圧カッターは横移動でかわせ！」
オタコン　「水流放射の瞬間を見切って、タイミング良く回避するんだ」
【ＲＡＹの弱点】リアルタイム無線
※ＲＡＹが水圧カッター攻撃をしかける直前に。攻略ヒント

オタコン　「ＲＡＹの頭部カバーが開いた。水圧カッターを使う気だ！」
オタコン　「機体内部を攻撃するチャンスだよ！」
【ＲＡＹに接近せよ】任意無線
※攻略ヒントを一通り聞いた後でＳＥＮＤ。初回のみ
オタコン　「スネーク、なるべくＲＡＹに近づいてくれないか？」
スネーク　「近づく？　なぜ」
オタコン　「ＲＥＸを開発していた当時に作った機体制御プログラムが役に立つんじゃないかと思ったんだ」
スネーク　「何だそれは」
オタコン　「ＲＥＸには、海外戦域での単独運用も視野に入れた、強力な自衛用兵器が搭載してある。ミサイルやレーザーをね」
オタコン　「だけど何人かのエンジニアは、白兵距離の乱打戦に持ち込まれたときのことも心配した。そして、ＲＥＸの強靱な機体それ自体も武器として使えないかと考えた」
オタコン　「つまり、格闘戦ができないか、とね」

ント

オタコン「つまり、格闘戦ができないか、とね」

オタコン「プログラムは完成し、スパコン上のシミュレーション結果も上々だったけど、結局はプレゼンテーションする前にお蔵入りになった。軍当局に指定された仕様じゃなかったからね。……けど」

スネーク「けど？」

オタコン「実は、プログラムは内緒で実装しておいたんだ」

スネーク「本当か？」

オタコン「さっきガウディのシミュレータで動作をチェックした。どうやら正常に動きそうだ」

スネーク「どうすれば使える」

オタコン「実験初期段階のプログラムだからまだ柔軟性に乏しくて、特定のケースでしか効果が得られない。だから有効な発動条件が揃ったときに合図するよ。そのとき△（アクション）ボタンを押してくれれば、ＲＡＹにかなりのダメージが期待できると思うよ」

オタコン「まずはＲＡＹへの接近からだ」

スネーク「よし判った！　やってみよう！」

オタコン「うん、頼むよ、スネーク！」

【戦闘状況汎用】リアルタイム無線

※状況に応じて鳴らす

(1)
オタコン「来た！」

(2)
オタコン「反撃だ！」

(3)
オタコン「ミサイルだ！」

(4)
オタコン「ミサイルが来る！」

(5)
オタコン「危なかった……」

(6)
オタコン「いいぞ、その調子だスネーク！」

(7)
オタコン「後ろだ、スネーク！」

ACT5
Old Sun

老雄の太陽

【タイトル】
Mission Briefing

【ヘイブン突入前1／ポリデモ】　ミズーリ艦内

――モセスから数時間後。
――ミズーリはヘイブンを追って、南下している。
――ミズーリ艦内。20人程度収容可能な艦内の会議室。中央に小さいテーブル、まわりにパイプ椅子。
――冒頭は、カシャリと音がして切り替わるスライド映像のみ。表示される空撮写真、海底にヘイブンの船影。

美玲(メイリン)「ヘイブンは毎時33ノットで太平洋を南へ向かい潜航中」

――スライド切り替わり、海洋上を航行するミズーリと、ヘイブンの船影。いくつか碁盤目状に写真を貼り合わせている。壁への投影がずれている。

美玲(メイリン)「本艦はヘイブンに毎時ごと、凡(およ)そ2海里ずつ引き離されている」

――スライドはテーブル上に座り込んだＭｋ．Ⅲが照らしている。オタコン、Ｍｋ．Ⅲの姿勢をいじって、投影映像を見やすくしながら、

オタコン「もっと急げないのかい？」

美玲（メイリン）「残念ながら今の彼女（ミズーリ）にはこれが限界なの」

――カメラ引きながら、ここで会議室全体の様子を映す。椅子をスクリーンに向けて聞いている面々。部屋は暗く、スライドの明かりが前列の面々に照り返している。

――前の方の席にオタコン（メガネあり）、メリル、ジョニー（素顔）、スネークは後方に座り、透明の酸素呼吸器を口に添えている。

――美玲（メイリン）はスクリーンの横に立って説明を進めている。

美玲（メイリン）「（確かめるような口調で）リキッドの標的は宇宙塵（デブリ）に偽装した米軍事衛星『J.D（ジョン・ドゥ）』」

――スクリーンに衛星軌道上の図が出る。美玲（メイリン）は指示棒で指す。

美玲（メイリン）「ヘイブンはレールガンを『J.D（ジョン・ドゥ）』に向けるために必ず浮上する」

ジョニー「『J.D（ジョン・ドゥ）』の軌道がわかれば、ヘイブンの浮上ポイントも予測できる…」

――腕のキーボードで熱心にメモを取りながら。スタンドアローンのパソコンで計算している。

――スクリーン上を衛星の軌道ルート、ヘイブンの浮上位置などを指示。

美玲（メイリン）「（うなずいて）楕円同期軌道を描いている『J.D（ジョン・ドゥ）』が最接近するのは…」

――ジョニーの計算が終わる。

ジョニー「出た！　15時間と6分12秒！」

美玲（メイリン）「そう、15時間後の、ベーリング海峡から494海里離れた洋上の上空」

美玲（メイリン）「ヘイブンはそれを狙ってその海域で船位保持するはず」

メリル「そこまで近付かないと撃てないの？」

オタコン「REXのレールガンが撃ち出す核弾頭の加害範囲は、せいぜい半径300メートル」

――オタコンが立ち上がり、スクリーンを指して説明。

オタコン「相手は秒速10キロで移動中の衛星だ。可能な限り近づかないと精度が得られないだろう」

美玲（メイリン）「リキッドは『J・D（ジョン・ドゥ）』が最接近するまでは核を発射しない」

美玲（メイリン）「ミズーリはその間に遅れを取り戻す」

メリル「間に合うの？」

――スネークは体調が優れず、酸素マスクで吸入している。

美玲（メイリン）「ヘイブン停止後、追いつくのに1時間。本艦はその後ヘイブンが発射準備するまでの間に攻撃を仕掛ける必要がある」

美玲（メイリン）「本艦には最低限の設備しか積まれてない。…電子兵装は一切ないの」

美玲（メイリン）「レーダーもあらゆるハイテク兵器も使えない。敵の捕捉は、目視で行う」

【ヘイブン突入前2／ポリデモ】　ミズーリ艦内

——スライド切り替わり、モセスで出現したヘイブン全体が映される。望遠で捉えた写真。

美玲（メイリン）「ヘイブンは『J.D（ジョン・ドゥ）』破壊に、艦橋部のレールガンを使う模様」

——スライド切り替わり、更に望遠、艦橋部分。レールガンが中央に映される。

美玲（メイリン）「核弾頭射出のためにカバーを開いた瞬間が、こちらにとって唯一の突入のチャンスになる」

——メリル、テーブル上に載せた両足を降ろす。

メリル「突入？　外側（アウトサイド）から攻撃出来ないの？」

オタコン　「それは無理だ」

——オタコン、立ち上がって注目を集める。

オタコン　「リキッドがシステムを握ったまま、物理的に『G.W』を破壊してしまったら、サンズ・オブ・ザ・パトリオット（SOP）の優先権限はリキッドに残ったままになってしまう」

——オタコンに会釈で援護の礼を言う美玲（メイリン）。

美玲（メイリン）　「そう、だからこそヘイブン自体を攻撃する前に、まずヘイブンに搭載された『G.W』を内側（インサイド）から壊す必要がある」

——ここまで黙って聞いていたスネーク、酸素呼吸器をズラして悪態をつく。

スネーク　「まるで『デススター』だな」

——誰も笑わない。美玲（メイリン）は再び、皆を引き絞めるように見回す。

美玲（メイリン）　「いい？　ヘイブンはレールガン発射のため必ず浮上してくる」

——美玲（メイリン）は皆を正視しながら皆の周りを歩き出す。

美玲（メイリン）「本艦はそれを確認して急速接近、突入部隊を送り込む」

——美玲（メイリン）、呼吸の荒いスネークの前を通る。スネークの肩に手を置いて、一度立ち止まる。再び歩き出しながら、

美玲（メイリン）「我々の目的は核弾頭発射の阻止と『G．W』の電子的破壊」

美玲（メイリン）「敵は電子的索敵手段に頼りきっている。海上に出るまで本艦を捕捉出来ない」

——絶望的な雰囲気。誰も口を挟まない。

——そんな中、美玲（メイリン）のお尻を触ろうとするジョニー。メリル、それを制して、

メリル「バカ……！」

——美玲（メイリン）は正面に戻り、正対する。スライドにヘイブンの構造、マップ、侵入経路（ナオミからのデータ）が映される。

美玲（メイリン）「ヘイブンの装甲カバーが開くタイミングにあわせて、突入部隊をカタパルトから射出」

美玲（メイリン）「突入部隊は『G．W』の物理サーバールームへと侵入し、ワームクラスターを流

し込む」

ジョニー 「その間に『J.D(ジョン・ドゥ)』をシャットダウンされる可能性は?」

美玲(メイリン) 「リキッドは『愛国者達』のネットワークに既に潜り込んでる」

美玲(メイリン) 「その状態を維持してないと『J.D(ジョン・ドゥ)』を破壊しても意味がない」

美玲(メイリン) 「彼らに『G.W』はシャットダウンできない」

メリル 「リキッドは突入部隊を全力で阻止してくるはずよ」

――いなされたジョニーを庇うようにメリル。

美玲(メイリン) 「ええ、『G.W』へと繋がる通路には、マイクロ波の一種である、指向性エネルギー兵器が設置されている」

ジョニー 「マイクロ波だって?」

美玲(メイリン) 「そう、生身の人間は瞬く間に蒸発を始めてしまう」

――メリルとジョニー、顔を見合わせる。スネーク、呼吸器を外す。

スネーク 「(ふん)その電子レンジの中にね。まさに決死隊」

スネーク 「俺にうってつけじゃないか(投げやり)」

メリル 「スネーク、茶化してる場合じゃないわ」

——スネークの事情を知っているメリル、オタコンの表情が曇る。

——スライドにヘイブンの構造、マップ、廊下の映像（ナオミからのデータ）が映される。

美玲(メイリン) 「通路の外は相当数の兵力、通路内は無人兵器が待ち受けているはず」

スネーク 「この情報源は何処だ？　本当に『G．W』を破壊する術(すべ)はあるのか？」

——間があって、オタコンと美玲(メイリン)は目を合わせる（ナオミのことをどっちが言い出すか）。

美玲(メイリン) 「それについては彼女が道しるべを残してくれていた」

——オタコン、立ち上がる。メガネを外して話し出す。

オタコン 「…ナオミが準備を進めていたんだ」

スネーク 「ナオミが？」

オタコン 「…ヘイブンの内部情報も彼女が遺したものだ」

オタコン 「ナオミが僕らの輸送機(ノーマッド)に乗り込んできた理由は…、僕だったんだ」

——オタコン、目頭を指でもむ。スネークに身体を向ける。

オタコン　「だけど彼女は、結局サニーに目をつけた」

スネーク　「サニーだって？」

オタコン　「自分の計画をサニーに託した」

美玲（メイリン）　「本作戦は彼女の情報に基づくものなの」

スネーク　「ナオミはどっちの味方なんだ？」

――オタコン、過去を思い出すように振り返りながら、

オタコン　「彼女がどういうつもりだったのかは、もうわからない。…でも、リキッド達を止める意志があったのは間違いない」

――ナオミの最後の言葉。

ナオミ（回想）　「頼んだわよ、必ず私達の意志（センス）を伝えて…」

――オタコン、声がかすれる。ナオミの最後の言葉の意味がわかる。オタコン、涙を隠すようにメガネを戻す。ナオミの真意に気づかず、死なせてしまった。その事実に一同、落ち込む。

――スライド終了。

――場を和ませようとメリルが皆に質問する。

メリル「気休めでもいい、何かいい話はないの？」

——皆、下を向いている。わずかの間の後、美玲（メイリン）が口を開く。

美玲（メイリン）「はい、注目。中国にはこんな言葉がある…」

美玲（メイリン）「『鳥の将（まさ）に死なんとするや、其の鳴くや哀し。人の将（まさ）に死なんとするや、其の言うや喜（よ）し』」（中国の格言、ＭＧＳ１より）

——笑えない。誰もが下を向いてしまう。

美玲（メイリン）「さあ、他に質問は？」

——重い雰囲気。スネークが手を挙げる。美玲（メイリン）がスネークを指示する。

美玲（メイリン）「はい、スネーク」

——呼吸器を外し、スネーク。

スネーク「誰か煙草をくれないか？」

——全員、首を横に振る。

――悲しそうなスネーク（スタミナ減）。

――F.O.

【ヘイブン突入前3／ポリデモ】　ミズーリ艦内

――十数分後の同室。室内灯がついて明るい。テーブル、椅子が散らかっている。

――部屋にはスネークとオタコン、Mk.Ⅲ。

――残り1本となった煙草のアップから始まる。

――椅子に座ったスネーク、煙草を取り出して、

スネーク　「そのプログラムはサニーが創ったのか？」

オタコン　「彼女の功績は3分の1だ」

スネーク　「？（3分の1？）」

オタコン　「ナオミは、完成間近の『G.W』破壊プログラムをサニーに託した」

――ライターを探すスネーク。

――オタコンがスネークに歩み寄る。

オタコン　「サニーはそれを完成させる為に、僕の（ガウディの）ライブラリを漁って、使えそ

うなソースを探し出したんだ」

オタコン　「見つけたのは…」

——ライターを探して身体をまさぐるスネークの前にライターが現れる。

オタコン　「エマのワームクラスターだ」

スネーク　「…」

——一瞬目線をオタコンに向け、煙草の先をライターに近づけるスネーク。

——オタコン、カチッとライターで煙草に火をつける。

——煙を吐き出すと同時に、むせて咳をするスネーク。バツが悪そうに歩き出すオタコン。

オタコン　「サニーはエマのコードを元に、ナオミの情報（プログラム）を組み込んだ」

——オタコン、メガネを引き上げる。レンズにナオミが映り込んでいる。

オタコン　「完成したクラスターを隅々まで見る時間はなかったけど、見ているうちにエマを思い出したよ」

オタコン　「（プログラム）構造に彼女の面影が残っている」

オタコン　「でもサニーが創り出したワームクラスターはエマ以上だ」

【フラッシュバック】エマ（MGS2の画像）

——オタコン、メガネを引き上げる。レンズにエマが映り込んでいる。

オタコン　「エマのやつとは違って、AIの知能（罪）を破壊、アポトーシス（罰）を起こさせるプログラムだ」

オタコン　「これを『G.W』に落とせば、確かに効果がある」

——煙を吸い、咳き込むスネーク。身体の節々が痛い。熱もある。

オタコン　「スネーク、煙草止めたら」

スネーク　「健康に気を遣う必要はない（寿命6ヶ月だから）」

——オタコンは辛そうな顔になる。

——立ち上がるスネーク、軽い発作を抑えるために首筋に注射を打つ。注射器が首筋に刺さったまま（スネークは発作がおさまらず自分で取れない）。

——注射器を引き抜くオタコン。

【主観ボタン】以降主観ボタンを押すと、スネークの視界がぼやけるのがわかる。

——注射を打った直後はやや回復するが、すぐ視界がぼやける。薬の効き目は失われている。

オタコン「打ちすぎだよ…」

オタコン「スネーク、どうしてもヘイブンに行くのかい?」

オタコン「誰かに任せればいいじゃないか」

オタコン「君が行く必要はない」

スネーク「俺には（死ぬ前に）、煙草を吸う以外に、やるべきことが残っている」

——スネークの火傷した横顔。煙草を吸うがすぐに咳き込むスネーク。

——オタコン、スネークに近づき、煙草を取り上げると灰皿に押し付けて消してしまう。

スネーク「オタコン、おまえこそ離艦したらどうだ?」

——Mk. Ⅲを抱えたオタコン、スネークの方を向きながら、

オタコン「止めてくれ。僕には煙草を吸わないかわりに、まだやるべき事が残っている」

——覚悟を決めているオタコン。

——F.O.

【章タイトル表示】

ACT5　Ｏｌｄ Ｓｕｎ　老雄の太陽

【ヘイブン突入前4／ポリデモ】　モニター画面（ミズーリ艦橋）

——海上を進むミズーリ。

——数時間後の艦橋。

——ヘイブン浮上開始予定時刻。

——険しい表情で襟元を調えながら足早に入ってくる美玲（メイリン）。

クルー1　「艦長、敵艦、深度300まで浮上しています。なおも上昇中」

美玲（メイリン）　「機関の調子は？」

クルー2　「問題ありません」

美玲（メイリン）　「間もなく全力航走に移る。（前を見つめたまま）突入部隊（スネーク達）の準備を急いで」

クルー3　「アイアイ、艦長」

——出口際のクルー3、退室。

――美玲（メイリン）の主観ボタン：前方の海（暗闇）と目前のクルーが見える。

美玲（メイリン）「浮上まで何分？」

クルー1「およそ20分」

美玲（メイリン）「ヘイブン浮上タイミングに変更なし。装甲全開にあわせて本艦を突入させる」

クルー2「アイ」

――立ち去ろうとするクルー2、立ち止まって。

クルー2「艦長？」

美玲（メイリン）「何？」

クルー2「僕、初めての実戦なんです」

美玲（メイリン）「ええ、それが？」

クルー2「この艦に配属された時、落ち込んだんですけど、実はほっとしたんです」

クルー2「艦長、僕、怖いんです」

――申し訳なさそうにするクルー。美玲（メイリン）、クルーに近づき、

美玲（メイリン）「大丈夫よ、私も怖いわ。私も初めてなの」

美玲（メイリン）「でも考えるのはやめた。ここで逃げる（闘わない）方が怖いから」

美玲（メイリン）「誰も死なせない。私の艦は無事ハワイに帰還する。いい？　約束する」

クルー2「はい！　ありがとうございます！」

——美玲（メイリン）に敬礼後、走り去るクルー2。

——小さく息を吐きながらうつむき、帽子のつばに手を当てる美玲（メイリン）。

——ミズーリ甲板。甲板の後部に向かって歩く人影が見える。やや時化ており、雨交じりの水しぶきが横から飛んでくる。大雨ではなくパラパラ。

——以下、ハイスピードで。クルー3の案内について暗闇の甲板を歩くスネークとオタコン、メリル、ジョニー。米軍兵士の一団も続く。メリルはチェストリグの止め具を合わせ、装着感を整えている。スネークのほぼ真横にオタコン。胸にMk．Ⅲを抱えている。

——スネークとオタコン、二人歩きながら、

スネーク「雷電は？」

オタコン「一命は取り留めたが、到底参戦は無理だ。休ませてやろう」

スネーク「そうか…」

オタコン「（見回して）システム（SOP）の保護を失くしたお陰で、みんな平常心を欠いている」

オタコン「SOP（ソップ）の後遺症が強すぎて離脱した兵士も多いみたいだ」

スネーク　「頼りになるのはメリルと…」

――メリルとジョニーの後ろ姿。ジョニー、メリルのお尻をタッチ。その手をつかまれ、お説教を食らっているジョニー（どこか嬉しそう）。悲壮感を感じさせない二人。

――オタコン、その様子を見ながら、

オタコン　「彼は未知数だね」

ドレビン　「奴には裸のＭ８２を渡しておいた」

――声のする方に目をやると、砲身の先に腰をかけているドレビンが見える。側に炭酸飲料。

――その前で立ち止まるスネーク。

ドレビン　「やあ、奇遇だな」

スネーク　「ここで何をしてる？」

ドレビン　「ここの兵士のＩＤを洗浄（ロンダリング）して、それから裸の銃を提供させてもらった。あんたらの乗るカタパルトもな」

――甲板に設置されたカタパルトのアップ。

ドレビン　「システム（ＳＯＰ）を手に入れてからというもの、ＰＭＣ（リキッド軍）からの追加発注は来なくなったし

ね（必要がなくなった）」

――炭酸飲料を一口あおる。気が抜けていてまずい。ドレビン、砲身の上で立ち上がり、ぶらぶらと歩きながら、

ドレビン　「世界中の武器兵器がロックされている今、それでも戦おうってのはあんたらくらいだからな」

ドレビン　「各地の戦場は俺の銃で装備を揃えなおすと、〝採算が合わない〟そうだ」

ドレビン　「だからわざわざ出張までしてやったたって訳だ」

スネーク　「ドレビン、おまえ状況を理解しているのか？」

ドレビン　「ああ、勿論さ」

――ドレビン、炭酸飲料を手に取り、甲板に飛び降りる。着地姿勢はＭＧＳ２のオープニングのスネークを彷彿とさせる。いつの間にかリトル・グレイも横で真似をしている。着地後ゲップ。

ドレビン　「所詮世の中は、この炭酸のようなものだ」

ドレビン　「気が抜ければ用はなくなる。商品価値はゼロになる」

ドレビン　「俺は必要とされる側に付く。わかるな」

――炭酸飲料をスネークに手渡す。首を振って断るスネーク。ドレビン、横を見ずにグレイへ炭酸飲料を渡す。

ドレビン「要るものがあったら言ってくれ。しばらくはここで出店(Drebin's Shop)を構える」

――煙草をくわえるスネーク。ドレビン、手品師のように手から炎。
――ドレビン、風で消えないように手を添える。別れの挨拶。
――スネーク、煙草を近づけ火を点ける。

ドレビン「それが、最期の一服かもな」

――スネーク、ふんと皮肉っぽく笑う。美味そうに煙を吐き出して、

スネーク「これが最後の一本だ」

――とそこへ、グレイが近づき、スネークに炭酸飲料の缶を突き出す。
――「?」なスネーク。ドレビンも「?」。
――グレイ、スネークに缶をさらに突き出す。目線は煙草を見つめている。
――スネーク、グレイの気持ちを察して、炭酸飲料を受け取り、煙草をしぶしぶグレイに渡す。
――グレイ、煙草を吸い、ご満悦。

ドレビン　「最期の一服はお預けのようだな。じゃあな」

――ドレビン、いつものサイン。人差し指と中指で自分の両目を指したあとスネークの両目に向ける。スローガンは言わない。

――グレイはじっとスネークを見つめている。さらに老いたスネークに見える。

――通りがかりの兵士に気の抜けた炭酸飲料を渡すスネーク。

スネーク　「おい、やるよ」

米兵　「…はい」

――カメラ、カタパルトのアップから、メリルとジョニーに。

――米兵達も準備に忙しい。

――そこへ近づく、スネークとオタコン。キャンベルから無線通信が入る。

――カタパルト付近で準備を進めるメリル達を映しながら、

キャンベル　「スネーク、聞こえるか」

キャンベル　「リキッドの戦艦、アウター・ヘイブンは『愛国者達』のアーセナルギア級を奪い改造されたものだ」

キャンベル　「内部にはＩＲＶＩＮＧ（月光）を初めとする無人兵器群を搭載」

キャンベル　「ナオミが残した情報では、各ＰＭＣから選りすぐりの兵士を集め、強化させた大隊を配備しているようだ」

――オタコン、Mk．Ⅲをスネークに手渡す（この後、艦橋に戻る）。

――艦橋で正面を見据えている美玲（メイリン）。甲板から戻ったオタコンが美玲（メイリン）の横につく。

キャンベル　「『Ｊ．Ｄ（ジョン・ドゥ）』を破壊し、『愛国者達』のシステムを完全に支配した暁には、リキッドはヘイブンを旗艦として、傘下のＰＭＣを世界中に展開するつもりだ」

キャンベル　「そして武力による制圧を開始するだろう」

――前方の海がごぼごぼと低く唸り声を上げる。

クルー1　「ヘイブン出現しました」

美玲（メイリン）　「主砲射撃用意！」

――ミズーリの主砲、浮上を続けるヘイブンの動きに合わせて旋回。海水を滝のようにしたたらせながらヘイブンがその全容を表す。

――甲板の米兵達、その巨大さにおののく。

キャンベル　「よく聞くんだ」

キャンベル　「リキッドの世界制圧を止める、これが最後の機会となる」
キャンベル　「(声がやや和らぐ) メリル、聞こえるか」

――カタパルトで突入の準備をするメリルにアップ。

キャンベル　「メリル、命の限り、務めを果たすんだ」
キャンベル　「いいか、私は最後まで見守っている」
キャンベル　「おまえに何があろうと」
キャンベル　「おまえ(娘)は、私の誇りだ」

――メリルの頬に一筋涙が流れる。涙を拭うメリルの目前に迫ったヘイブン。
――警告音を響かせながら、上がっていくヘイブンの装甲カバー。地平線の淡い光がヘイブン艦橋部のシルエットを逆光で照らす。早朝の都会のようにも見える。

クルー1　「レールガン露出」
美玲(メイリン)　「あれが、裸の核兵器…!」
オタコン　「終わらせよう、スネーク」
オタコン　「これが僕らの最後の戦いになる」

――カタパルト前のスネーク。Mk.Ⅲのモニターにはオタコンが映っている。

オタコン「リキッドの罪に、僕達にも責任があるのなら…」

オタコン「全ての罰を僕らが受けるべきだ」

スネーク「ああ」

――スネーク、うなずくとソリッド・アイのスイッチを入れる。

――ヘイブンのミサイルポッドが一斉に口を開ける。

クルー1「敵、迎撃態勢！」

美玲（メイリン）「速度、落とすな！」

――さらにヘイブンに近づくミズーリ。

キャンベル「君達の失敗は世界の、人類の終焉を示す」

キャンベル「必ずレールガンによる核弾頭の発射を阻止し、そして『G.W』を破壊せよ」

――美玲（メイリン）、オタコン、スネーク達突入部隊の表情アップ！

――レールガンの砲口の角度が、『J.D（ジョン・ドゥ）』の軌道に調整されていく。

――そして、ヘイブンのミサイルポッドからミサイルが一斉射出。

――美玲（メイリン）、それを見て、

美玲（メイリン）「撃て（てぇ）！」

――ミズーリの主砲、副砲、機銃が一斉に火を噴く。ミサイルとすれ違い、誘爆を起こし、ミサイルは軌道がそれる。

――ミズーリの主砲、レールガン周囲に着弾！

クルー1「目標に命中、損傷軽度！」

クルー2「迎撃、来ます！」

――弾道のそれたミサイル、ミズーリの周囲で着水、爆発。

――ミズーリ、速度を落とさない。振動する甲板、カタパルトの目前に聳えるヘイブンの船体。

美玲（メイリン）「総員衝撃に備え！　つかまれ！」

――ほぼ同時にミズーリの艦首がヘイブン腹部に衝突！

――艦橋、再度振動！　艦橋の床に倒れるクルー達。

――ミズーリ、ヘイブン両艦の船腹が水しぶきを上げながらこすれ合う。

――カタパルトにしがみついて衝撃に耐える突入部隊。

美玲（メイリン）　「出せええ‼」

——美玲（メイリン）のかけ声でカタパルトから射出される、スネーク、メリル、ジョニー。
——Mk．Ⅲを抱えながらヘイブン内に飛び込むスネーク。
——しかし、ジョニーは、ヘイブン側面の装甲部分にぶつかって、海へ落下してしまう。

ジョニー　「（悲鳴）メリル‼」

——一方、メリルはヘイブン内部の壁面に身体を激しく打ち付ける。
——ミズーリは、前進を続けながら、次第にヘイブンとの距離をとっていく。
——F.O.

【ヘイブン潜入／ポリデモ】　ヘイブン艦首

——ゴロゴロ転がりながら都市部に着地するスネーク。落下途中、Mk．Ⅲを手放してしまう。
——痛む身体を起こし、M4を構えながら、周囲を一望するスネーク。ヘイブンの都市部が広がっている。まるで街。不気味に静か、敵の気配はない。
——メリルからのCALL。耳に手をあてるスネーク。

メリル　「スネーク」

スネーク「メリル、何処だ?」
メリル「ごめん、右足を打った」
スネーク「歩けるか?」
メリル「なんとか…（歩こうとして痛み）くそっ（悲鳴）!」
スネーク「大丈夫なのか?」
メリル「SOP（ソップ）抜き（ナノマシンの痛み止めが効かない）だとやっぱり痛いわ」
スネーク「（ふん）生きてる証拠だ。でアキバは?」
メリル（通信）「海に落ちたわ」
——通信機ごしにキィィという高音（マンティス）が聞こえる。
メリル（通信）「スネーク、すぐ追いつく。先に行って!」
——銃声が聞こえる（銃声は通信機越しと反響した生音が同時に響く）。
メリル「ああッ!（攻撃を受ける苦痛）」
スネーク「メリル!」

――通信切れる。同時にスネークの傍らで金属がぶつかるガン！　という音。

――はっと顔を上げ、Ｍ４を構えるスネーク。

――Ｍｋ．Ⅲがステルスオフ！　スキーヤーのようにカッコよくブレーキ。

スネーク　「（Ｍ４を下ろし、呆れと安心）オタコン……！」

オタコン（音声のみ）「待たせたね」

――その周囲に跳弾！

――慌てて隠れながらステルス化するＭｋ．Ⅲ。建物の陰に隠れるスネーク。

――前方からヘイブン兵出現。数人、建物屋上から飛び降りてくる。さらに、十人近くが足早に駆けつける。

――美玲からＣＡＬＬ。スネークの位置はまだ特定できてはいない。

美玲　「スネーク、聞こえる？」

美玲　「『Ｇ．Ｗ』は船尾の方向よ」

美玲　「急いで！」

――ゲームへ。

【ヘイブン部隊戦前／ポリデモ】

ヘイブン・建物内部（司令室）

——ヘイブン、建物内部。

——通路からは天井の高い、倉庫のようにも見える。また、視界の前方には作戦地図を表示するためと思われる立体地球儀が見える。

——M４を構え、警戒しながら前進するスネーク。

——スネークの頭上をヘイブン兵達が飛び去って行く姿が一瞬見える。

——イィィィィ…と耳鳴りのような高音が鳴り響く（スクリーミング・マンティスの操り声）。

——部屋の中央に横たわるメリル。

スネーク「メリル……！」

——スネーク、周囲を警戒しながらメリルに近づく。

——メリルは意識を失っているかのように目を閉じている。右手にはデザートイーグル。

——中二階や物陰から10体ほどのヘイブン兵が突如スネークに襲い掛かる。

——身構えるスネーク。

——ゲームへ。

オタコン「スネーク、メリルが危ない！」

オタコン「敵を排除して彼女を助けるんだ！」

【スクリーミング・マンティス（ビースト）戦前／ポリデモ】ヘイブン・建物内部（司令室）

——スネーク、ヘイブン兵達を倒す（眠らせる）と、メリルの安否を確認。

スネーク　「メリル…？」

メリル　「スネーク…」

——メリル、立ち上がるものの動きがおかしい。スネークに向かって歩く姿も操り人形の様（何度か糸が見える）。

——ィィィィ…と耳鳴りのような高音が鳴り響いている。

メリル　「スネーク…」

メリル　「逃げて！」

——射撃音。スネークに向かって、上方から光る玉が飛んでくる。

——横ローリングでかわすスネーク。

——玉が地面にぶつかって消える（ローリングでかわす攻略ヒント）。

——どこからともなく笑い声が聞こえる。

マンティス　「懐かしい。やはり、お前の波長（SENSE）だ」

スネーク　「まさか…」

——スネーク、立ち上がるとメリルがピタリと銃口をスネークに向けている。そして、左手にもデザートイーグルが握られ、その銃口は自分のこめかみに向けられる。

メリル　「スネーク…」

——デザートイーグルはメリルのこめかみでぴたりと止まる。

メリル　「スネーク…」
スネーク　「メリル、よせ！」

——そして銃声。
——操り糸が切れたように、その場にくずおれるメリル。
——しかし、銃弾はメリルが発射したものではなかった。
——スネークとメリルが銃声の方を向くと、M82を担いだジョニーが立っていた。

メリル　「ジョニー！」
ジョニー　「メリル！」

――メリルに駆け寄るジョニー。

――無事を確かめ合う二人の背後に、倒した（眠らせた）はずのヘイブン兵がうごめく（スクリーミング・マンティスが操っているヘイブン兵）。

スネーク「待て、アキバ！」

――操られたヘイブン兵が攻撃開始！

ジョニー「あっ！」

メリル「う…！」

――ジョニー、メリルを庇うが、それでも肩、太腿、腕、数箇所被弾し、その場に崩れる二人。

――防弾ベストは着ているので、致命傷ではないが、気を失ってしまう。

――M４で応戦するスネーク。スネークが、操られているヘイブン兵を撃ち倒すと、上方からスクリーミング・マンティスが降下してくる。

マンティス「（サイコ・マンティス風に）久しぶりだな、スネーク」

【字幕】スクリーミング・マンティス　夕貴まお／飯塚昭三

スネーク「お前は、サイコ・マンティス…？」

【主観ボタン】マンティスのアップ

　　　　　――スクリーミング・マンティス(ビースト)の背後に、一瞬巨大なサイコ・マンティスの影が現れる。

マンティス　「(ビースト風に)いや、そいつはもう一人の私」

【フラッシュバック】サイコ・マンティス(MGS1の画像、イラスト)

マンティス　「叫びが聞こえるか」
マンティス　「戦場の叫びだ!」
マンティス　「さあ、悲鳴を上げろ!　吠えろっ!」
マンティス　「心の底から叫べ!」

　　　　　――マンティス、両脇の人形から、光の弾(操り糸)を飛ばす!　操り糸は、ヘイブン兵とメリルに命中。
　　　　　――気を失ったメリル、それに連動して立ち上がる。
　　　　　――ジョニーには効き目がなく、起き上がらない。

マンティス　「(サイコ・マンティス風に)ん…?　こいつは…!」

――マンティス、再度操り糸を発射。しかし、効き目はない。
――ジョニー、メリルに手を伸ばして助けようとする。

ジョニー　「メリル…」

――マンティス、三度ジョニーに操り糸を発射するが効き目が無い。

マンティス　「(サイコ・マンティス風に)…そういうことか」

――マンティスは体内ナノマシンの作用によって兵士たちを操っている。そのためナノマシンを持たないジョニーには作用しない。
――マンティス、倒れているヘイブン兵に操り糸を次々と発射。次々起き上がるヘイブン兵たち。
――メリルとともに、一斉に銃口をスネークに向ける。
――ゲームへ。

オタコン　「例え君に害を及ぼそうとしていても、それはメリル自身の意志じゃない」
オタコン　「彼女を傷つけないように気をつけて、気絶させるんだ。いいね!」

【スクリーミング・マンティス（ビューティ）化／ポリデモ】ヘイブン・建物内部（司令室）

※撃ち落としたマンティス人形を拾って武器として使用。スクリーミング・マンティスを倒すと発生。

──マンティス、空中から落下、壊れた人形のように、浮いたまま仰向けに倒れる。その周囲の地面に多数のカランビットが落下して刺さり、マンティスを囲む。しばらくすると操り糸がマンティスを中心として、竜巻のように高速で回転し始める。カランビットも、操り糸の竜巻に巻き込まれる。

──マンティス、空中で立ち上がる。上腕の6本の腕（この腕がマンティス・ソロー人形を操る）とカランビットが、竜巻による遠心力で吹き飛ぶ。

──外殻を脱ぎ捨てるマンティス。膝を折り曲げた姿勢で地面に仰向けになっている。

──立ち上がり、スネークの方に歩き出す。

──スネークは訳がわからず様子を伺っている。

マンティス　「私の頭に悲鳴が聞こえる…！　悲鳴が！」

マンティス　「もうやめて！　聴きたくない！　もう聴きたくない！」

マンティス　「怖い、怖いわ。怖いのよ、頭が痛い！」

マンティス　「もう許して、勘弁して！」

マンティス　「ここから出して‼」

マンティス　「息が…」

マンティス　「息がつまる…！」

マンティス　「さあ、早く私の身体から出て行って」

マンティス　「私を許して…」

マンティス　「解放して！」

――ゲームへ。

【スクリーミング・マンティス（ビューティ）自爆／ポリデモ】 ヘイブン・建物内部（司令室）

※3分経つとビューティは自爆、またはスネークからのダメージで。

マンティス　「ああ…」

――地面に倒れるスクリーミング・マンティス（ビューティ）。炎に包まれる。

――スネークは立ち上がる。

【スクリーミング・マンティス（ビューティ）眠る／ポリデモ】ヘイブン・建物内部（司令室）

※3分以内にビューティを眠らせた場合。

マンティス　「ああ…」

——地面に倒れるスクリーミング・マンティス（ビューティ）。

——F.O.

【スクリーミング・マンティス（ビューティ）戦後／ポリデモ】ヘイブン・建物内部（司令室）

——なんらかの力が働いて、スクリーミング・マンティス（ビースト）の抜け殻が再生され、立ち上がっている。

——スネークは、その気配に気付き、振り向きざま、オペレーターを構える。

——声は曽我部和恭さん（MGS1の音声を使用）。新規のセリフは飯塚昭三さん。

サイコ・マンティス「さすがだ、スネーク」

【字幕】サイコ・マンティス　ｆｒｏｍ ＭＧＳ１ １９９８

スネーク　「サイコ・マンティスなのか？」

サイコ・マンティス「信じていないようだな。ならば……！」
サイコ・マンティス「世界最高の読心（リーディング）能力と念力（サイコキネシス）、今からお前に見せてやる」
サイコ・マンティス「貴様の性格を当ててやろう。いや…、貴様の過去と言うべきかな」
サイコ・マンティス「これにはタネはない。正真正銘の力だ…」
サイコ・マンティス「ムムム…」

——スネーク、身構える。しかし何も起こらない。

サイコ・マンティス「…何？」
サイコ・マンティス「記録（メモリー）、データはどこだ…」

【フラッシュバック】ＰＳ１

サイコ・マンティス「メモリーカードがない…」
サイコ・マンティス「クソッ、腕を上げたな。いや、PLAYSTATION® 3と言うべきか…」
サイコ・マンティス「ならばこれはどうだ⁉」
サイコ・マンティス「俺の念力（サイコキネシス）を見せてやる」
サイコ・マンティス「床の上にコントローラーを置いてみろ」

サイコ・マンティス「いいか、出来るだけ平らな床だぞ。いいな」
サイコ・マンティス「いくぞ、今からそのコントローラーを俺が念力（サイコキネシス）で動かしてみせる！」
サイコ・マンティス「ふぇあぁっ！」

※コントローラーがSIXAXISの場合

サイコ・マンティス「…」
サイコ・マンティス「…な!?」
サイコ・マンティス「し、振動もないのか!!」
ナオミ　「それじゃ、もうマッサージしてあげられないわね」
※専用コントローラの場合、仕様に併せた別シナリオへ
サイコ・マンティス「（感動）振動が帰ってきた！」
【フラッシュバック】PS1　振動コントローラー
サイコ・マンティス「よかった…考え直してくれたのか」
サイコ・マンティス「むぅおぉぉ！」

――もだえ苦しみだすビーストのボディ（サイコ・マンティス）。ガタガタと振動をはじめ、両手をバッと開くと…。

天の声「久夛良木さーーーん！」

――ビーストのボディからサイコ・マンティスの霊（2D）が抜け出し、空中を回って消える。ビーストの抜け殻はバラバラになりながら床に落ちる。中は空。

【主観ボタン】ソローー（2D）が見える。

ソロー（回想）「戦士の魂は…常に君と共にある（死ぬ前のセリフ）」

【マンティス戦後／強制無線デモ（ドレビン）】

ドレビン「最後のビーストにも勝ったんだな、スネーク」

ドレビン「あんたが拾ったその人形、ナノマシンを体内に持つ人間なら、どんな奴でも操ることができる……悪魔のツールだな、俺にいわせれば」

ドレビン「マンティスは南米の出身だ。内戦の絶えない小国に生まれ、育った」

ドレビン「彼女がまだ幼い頃のことだ。住んでいた村が敵軍に襲われ、焼き払われた」
ドレビン「敵の掃討部隊に追われ、家族ともはぐれた。そうして命からがら逃げ込んだのは、とある建物の地下室だった」
ドレビン「そこには数多くの死体がうち捨てられていた。ほとんどの死体にはひどい拷問の痕があった」
ドレビン「驚きおののく彼女の頭上からは複数の重い靴音が聞こえ、やがて全身の毛が逆立つような悲鳴が響き始めた」
ドレビン「そこは、敵が仮設した拷問所だったんだ」
ドレビン「分厚い扉の鍵はいつの間にか閉められていた。暗く、湿って埃っぽく、屍臭は常に鼻をつく。周囲を満たす拷問の悲鳴に眠ることも出来ない」
ドレビン「閉じ込められた彼女は部屋の片隅で膝を抱き、震え続けることしか出来なかった」
ドレビン「一週間が過ぎ、十日が過ぎた。床に溜まる泥水で渇きだけは癒せたが、食糧はない。異常な環境と飢餓感は彼女の精神に深刻な打撃を与えた」
ドレビン「メスの蟷螂(マンティス)がオスを食らうのは知っているか」
スネーク「……何の話だ」

ドレビン　「昼夜を問わない悲鳴は、耳を塞いでも防げない。そんな彼女を救ってくれたのは黒い蟷螂（マンティス）だった」

ドレビン　「蟷螂（マンティス）は彼女に、悲鳴が聞こえないようにする術を教えてくれたんだ。心の耳に栓をする方法をな」

ドレビン　「奴はな、スネーク、耐え難くなった飢えをしのぐために、死体に手を伸ばしたんだ。それも男ばかりだった。だが彼女には、自分がやったという意識はない」

ドレビン　「彼女の目には、メスの蟷螂（マンティス）がオスを貪り食う様が、幻のように映っていただけだ」

ドレビン　「もちろんそんな場所に蟷螂（マンティス）なんかいるわけがない、幻覚だ。彼女の中のもう一つの人格が、そんなストーリーを作り上げたに過ぎない」

ドレビン　「不安定な精神は、付け込まれる急所にもなった。催眠術と薬物で崩された彼女の心に、サイコ・マンティスの意識が埋め込まれた」

ドレビン　「ＢＢ部隊を操っていたのは、彼女自身の意思じゃない。半ば同化したサイコ・マンティスの思念に煽られていただけだ」

ドレビン　「スクリーミング・マンティスもまた、操り人形だったってわけだ」

ドレビン　「……ともあれ、彼女はその地下室で数週間を生き延び、地上に戻った。だが頭の

中では、その後も悲鳴が途切れることが無かった」

ドレビン「今度は現実の悲鳴じゃない。こころの耳栓は役に立たなくなった。黒い蟷螂（マンティス）も消えた。もう避難所は無い。だから奴は叫んでいたんだ、頭の中の悲鳴をかき消そうとして」

ドレビン「だがそれも終わった。スネーク、あんたはマンティスを、暗い悪夢から解放してやったんだよ」

スネーク「ビーストの最期…」

ドレビン「そう、話はこれで全部終わりだ、邪魔して悪かったな。『G．W』が待ってる。今度はあんたが終わらせる番だ」

【メリル別れ前／ポリデモ】

ヘイブン・建物内部（司令室）

――ドレビンの無線終了後、オペレーターのチェックを済ませ、『G．W』へ向かおうとするスネーク。途中、出口の扉近くに倒れているメリルに気付く。ジョニーは周囲にいない。

――メリルに駆け寄るスネーク。

スネーク「メリル！」

――近づき、メリルを抱き起こす。

メリル「スネーク、ジョニーは？」

――周囲を見渡すスネーク。ジョニーは死角にいて見あたらない。
――勢いよく扉が開き、ヘイブン兵達がエントリーしてくる。
――スネーク、立ち上がるメリルに肩を貸して、ジョニーを探し始める。

メリル「来た！」

――メリル、ヘイブン兵に発砲。

メリル「スネーク、先に行って」
メリル「ここは私が」
メリル「一刻も早く『G．W』を破壊して。私の命があるうちに」
スネーク「メリル」

――メリル、マガジンチェンジ。

メリル「スネーク、この先はマイクロ波が放射されている」

スネーク　「ああ、無事では済まない」

——スネークの肩に手を置き見つめるメリル。

スネーク　「悪かった…、お前まで」

メリル　「今度こそ、私が守ってみせる！」

——ヘイブン兵達の銃撃音。

メリル　「あの世で逢いましょう」

メリル　「早く！　行って！」

——スネーク、先へ続く扉の前で立ち止まる。

——迫り来るヘイブン兵。応戦するメリル。

メリル　「行け！」

——立ち去るスネーク。

——メリル、スネークを見届けると、扉沿いの壁に隠れて、残りのマガジンを床に置く。

——ヘイブン兵達との戦いが始まる。

――F.O.
――ゲームへ。

【メリル援護／ポリデモ】

ヘイブン・建物内部（司令室）

――壁に身を隠しながら、応戦しているメリル。床に置いた3本目のマグチェンジを行って、

メリル　「これでラスト…」

――増え続けるヘイブン兵。メリルに容赦ない銃撃を続ける。メリル、壁に身を隠して、

メリル　「スネーク、まだ？　そろそろやばい」

――残弾を確認すると残り一発。

メリル　「くそ！　私は誰も守れないの⁉」

――近づいてくるヘイブン兵数名。
――天を仰ぐように上を向き目を閉じるメリル。

メリル　「もう…」

――身を隠していた壁から飛び出て回転しながらヘイブン兵に射撃。
――しかし、続々と近づいてくるヘイブン兵達。ヘイブン兵の銃弾がメリルの身をかすめる。
――そこに銃声！　次々吹き飛ばされるヘイブン兵。
――メリルが視線を上げると、M82を担いだジョニーが立っていた。

ジョニー「メリル！」

――メリルに堂々と近づくジョニー。振り返るとM82を構えて、近づくヘイブン兵がいないか確認。

メリル「ジョニー…」
メリル「無事だったのね」

――ジョニー、メリルにデザートイーグルのマガジンを渡す。

ジョニー「これを」
メリル「（喜ぶが）遅刻のお詫びのつもり？」
ジョニー「メリル、もう一人にはさせない」

――再びヘイブン兵達が近づいてくるのが見える。
――メリルはマグチェンジの合図。

メリル　「カバー！」

ジョニー　「クリア！」

——ジョニー、飛び掛かるヘイブン兵を撃ち抜く。

——メリル、手早くマガジンチェンジ。

メリル　「レディ‼」

——今度はジョニーの番。Ｍ８２から機銃にチェンジ。その間はメリルがカバー役。

——息の合った二人。交互にヘイブン兵達を撃ち倒して行く。

メリル　「(マグチェンジをアナログでやった) 私達、ナノマシンがなくてもいけるわね！」

メリル　「ねえ、あなたは何故操られなかったの？」

——メリル、発砲！　ジョニー、マグチェンジ。

ジョニー　「マンティスはたぶん、相手のナノマシンを利用して行動を操っていたんだ。体内にナノマシンがなければ操ることは出来ない」

——ジョニー、発砲！　メリル、マグチェンジ。

メリル　「じゃああなただって…（私たちの体内にはシステムのナノマシンが入っている）」

ジョニー　「俺の身体、ナノマシンが入ってないんだ」

メリル　「え…？」

【フラッシュバック】MGS4の画像

——お互い、壁に隠れて会話。会話中、敵の射撃、そして跳弾！

ジョニー　「服務規程の定期注射をずっと避けてた」

メリル　「まさか、こうなることがわかっていたの？」

ジョニー　「いや、注射が苦手(ベローンフォビア)なんだ」

——ジョニー、発砲！

メリル　「それでチームワークを乱していたの⁉」

ジョニー　「みんなのデータはウェアラブル・コンピュータで掴んでたけど、どうしても遅れが生じてしまって」

——腕に付いている大きな画面をメリルに見せる。ジョニーはこれでリアルタイムに戦況を得ていた。

――銃を構え、ヘイブン兵を撃ち抜くジョニー。

メリル 「それで東欧でもあなただけ無事だった？」

ジョニー 「ああ」

メリル 「（笑って）呆れた！」

――ヘイブン兵を打ち続ける二人。メリル表情が深刻になる。

メリル 「ジョニー、弾が足りない！」

ジョニー 「大丈夫。ドレビンから貰った！」

――自分の背中側からマガジンを両手一杯に取り出すジョニー。

――マガジンを装着する二人。

メリル 「ジョニー、事情も知らず、私随分とひどいこと言ったわ」

ジョニー 「いいんだ」

メリル 「いつもお腹の具合が悪いのもナノマシン制御がなかったから？」

【フラッシュバック】ＭＧＳ４の画像。ドラム缶

ジョニー　「フ…（照れ笑い）」

メリル　「だけど注射嫌いのあなたがなぜ私の部隊に？」

ジョニー　「君のそばにいたかった。君を守りたかった！」

メリル　「ジョニー…？（意味がわからない）」

――ジョニー、メリルに詰め寄る。メリルの顔を見つめて、

ジョニー　「メリル、ずっと好きだった」

ジョニー　「モセスの独房で、初めて君を見た時から」

【フラッシュバック】MGS1独房

――さらにメリルに詰め寄るジョニー。

ジョニー　「メリル、結婚しよう」

メリル　「こんなときによく言うわね」

――メリル、ヘイブン兵に発砲。

ジョニー　「どう言えばいい？」

メリル　「いいえ、そういうのは嫌なの」
ジョニー　「結婚しない主義なの？（やや落ち込む）」
　——ジョニー、メリルに夢中で近寄るヘイブン兵に気付かないのかと思いきや、メリルを見つめたまま射撃。
ジョニー　「じゃ、婚姻届けは出さない」
メリル　「ダメ」
　——隠れていた壁を離れて、ヘイブン兵を射止めて行く二人。
ジョニー　「なら一緒に暮らそう？　どうだい？」
メリル　「ダメ」
　——メリル、撃ち尽くして空になったマガジンを抜き落とすと、ジョニーに新しいマガジンを差し入れてもらいながら、ヘイブン兵を撃ち続ける。
ジョニー　「メリル？　俺じゃ、ダメかい？」
メリル　「いいえ、私流にしたいの」

——背中合わせになって、周囲のヘイブン兵を撃ち倒していく。
——メリル、再び壁に隠れ、ジョニーの胸ぐらを引き寄せ、見つめて、

メリル　「ジョニー、私と結婚して」
ジョニー　「ええ？」
——ジョニー、意味がわからない。
——メリル、困惑するジョニーに顔を近付けて、

メリル　「もう一度言うわよ」
メリル　「私と結婚しなさい」
——ジョニー、直立不動！　メリルを見て、

ジョニー　「こちらこそ、お願いします！」
——そこへヘイブン兵がフラッシュグレネードを投げ込む。
——壁から離れて応戦するメリルとジョニー。背中を合わせ、死角を作らないようにして、次々とヘイブン兵を撃ち倒す。
——しかし、メリルの左脚にヘイブン兵の弾が命中！

――ジョニー、メリルを引き倒して自分を盾にして彼女をかばう。

――メリル、上半身を起こしてジョニーに馬乗りになりながら、

メリル「ねえ、浮気は許さないわよ（大佐の事を言っている）」

ジョニー「もちろんさ」

――メリルとジョニー、飛び掛かるヘイブン兵を一人撃ち落とす。

――ジョニー、メリルをひっくり返し、今度は自分が上になる。

メリル「それと、結婚式はちゃんと挙げてよ?」

――二人の左右、前方から襲い掛かるヘイブン兵を、息の合った攻撃で撃ち倒す。

――じっと見つめるメリル。

メリル「…子供の頃からの夢なの」

――真剣なまなざしで見つめ返すジョニー。

ジョニー「はい」

メリル「その為にもジョニー、必ず（私を生きて）連れて帰って」

――さっきまで死を覚悟していたメリルは、心の底から生きようと誓う。
――お互いの首に手を回し、口付けをかわす二人。

【雷電援護／ポリデモ】ヘイブン・GWエリア前

――スネーク、先が広く部屋のようになっている細い通路に出る。正面に目的のサーバールームへの入り口が見える。

【主観ボタン】目は霞み、視界も狭くなっている。

――目の辺りを手でおさえるスネーク。そして、発作。立っていられなくなり、両膝、両手を床につける。
――Mk.Ⅲ、ステルスオフして、

オタコン　「スネーク！」

――通路の先からヘイブン兵が一人現れる。

オタコン　「スネーク！」

――スネーク、しかし何もできない（スネークのライフ&スタミナ減）。

――ヘイブン兵、スネークが戦闘不能状態であることをハンドサインで仲間に知らせる。

――一人のヘイブン兵が、腰からマチェットを抜いて構えると、背後から多数のヘイブン兵が現れる。

――それを見たスネーク、四つん這いのまま、慌てて注射。しかし、さらに発作。仰向けに倒れてしまう。絶体絶命のピンチ！

スネーク「オタコン…注射、…注射が効かない！」

オタコン「スネーク、立て！　立つんだ！」

――Mk．Ⅲがモニターでスネークの身体を叩く！　モニターには心配なオタコンの表情。

オタコン「スネーク！」

――ヘイブン兵が近づく。スネークは、まだ立ち上がれない。

――そこへ、スネークが入ってきた扉から男が一人登場！　羽織ったロングコートを翻して、スネーク達とヘイブン兵達の間に着地したのは雷電だった！　両腕を失ったまま。口に刀を咥えている（故に声はマシンボイス）。着地の衝撃でところどころ放電（雷）している。

――ヘイブン兵、動きを止める。

スネーク「雷電！」

雷電「俺は雷。雨の化身！」

――と、放電して雷のように瞬く。
――雷電、本物の雷を落とす。ヘイブン兵、驚いて後ずさりする。
――兵士、立ち往生。雷で天井のスプリンクラーが起動する。天井から雨！
――雷電前進。ヘイブン兵との距離を詰めて行く。
――スネーク、ようやくここで壁に手を付きながら立ち上がる。雷電を追い駆けるスネーク。だが、十分に回復しない。
――広い部屋の入り口部分まできた雷電。左右両脇に細い通路も見える。
――そこでさらに電撃！　雷に打たれて青白く燃えるヘイブン兵達。
――スネーク、ようやく雷電の後ろにたどり着く。
――雷電、くわえていた刀をスネークの目前の壁に突き刺して、

雷電　「スネーク、この先は俺が行く」

雷電　「サーバールームへは俺が行く」

――スネーク、雷電の前に出て、

スネーク　「この先はマイクロ波が流れている。（死ぬのは）俺だけで十分だ」

雷電　「俺の身体は機械だ。俺なら（大丈夫）…」

——スネーク、振り向いて雷電を見て、

スネーク「お前の身体は機械でも心は人間だ。お前にはまだすべき事がある（ローズの事）」

雷電「彼女の事はもういいんだ」

——そう言って、一人『G.W』に向かおうとする雷電。

——肩をつかんで引き止めるスネーク。

スネーク「雷電！　俺の目を見ろ」

——雷電、スネークの老いた身体を見る。

スネーク「若さを大事にするんだ（生きろ）。お前なら、まだやり直せる」

スネーク「ここからは俺の役割だ。俺が、俺達が世界を狂わせた。おまえの人生さえも」

スネーク「俺にはそれを止める義務がある」

——スネーク、壁に刺さった刀を抜き、雷電の前に差し出す。

雷電「…わかった。俺はここで奴らを食い止める」

——オタコン、二人の足下のMk.Ⅲから雷電に対して、

オタコン　「いいかい、ウイルスを注入するまで、持ちこたえてくれ！」

——雷電、刀を咥える。
——雷電を囲むヘイブン兵。
——スネーク、前方の扉へ向かう。それをカバーするように動く雷電。
——次々とやってくるヘイブン兵。
——足腰の弱い老人のように歩くスネーク、ようやく扉に到着。

スネーク　「オタコン、内側からロックしろ」
オタコン　「ああ！」

——雷電、心の中でスネークに対して、

雷電　「スネーク、ありがとう」

——立ち去るスネーク。
——雷電の後ろで扉が閉まる。多数のヘイブン兵が雷電ににじり寄る。
——雷電、咥えていた刀を上空に放り投げ、足でキャッチ。
——一方、『G．W』のサーバールームへと急ぐスネーク。しかし、身体はボロボロ。階段から転

げ落ちてしまう。気力を振り絞って立ち上がるスネーク。

――Ｍｋ．Ⅲ、マイクロ波が放射されている通路の扉を開ける。

【援護／ポリデモ】　ヘイブン・ＧＷエリア前、ミズーリ艦橋、キャンベルの部屋

――画面上下２分割で、上画面がポリデモ。下画面ではスネークを『Ｇ．Ｗ』まで進める（ゲーム）。

――ゲームへ。

オタコン「スネーク、マイクロ波が放射されている！」

オタコン「そこにいるだけでダメージを受けてしまう！」

オタコン「早くそのエリアを抜けるんだ！」

――マイクロ波放射通路。スネークの身体が溶けて行く。スーツから煙。関節が爆発して、血しぶき！　何度も、倒れる。起きあがる！　最後は這い蹲って歩く。ソリッドアイが爆発！　取れる。

――ミズーリ甲板。侵入してきたヘイブン兵と戦う米兵。ヘイブンから射出されるＲＡＹが３機。ＲＡＹ、ミズーリに迫る。クルーに指示を出している美玲（メイリン）。その横でオタコンはキーボードを打っている（Ｍｋ．Ⅲの操作）。ミズーリの主砲がゼロ距離射撃でＲＡＹを吹っ飛ばす。

――作戦司令室。二丁拳銃でヘイブン兵と戦うメリルとジョニー。お互い肩に銃弾を受けてしまう。跪く二人。

――ヘイブン甲板。レールガンの砲口が上空を向く。発射間近！

――『G．W』エリア前。雷電は、マチェットを構えたヘイブン兵達と戦う。

――キャンベル自室。自宅でモニターを見守るキャンベルとローズ。

――ノーマッド。目玉焼きを見ながら祈っているサニー。オルガの写真の隣に、ナオミとの写真（機内で撮った）もある。サニーの横の一輪挿しの蒼い薔薇。枯れてきている。

【GW到着／ポリデモ】ヘイブン・GW

――マイクロ波が放射された通路を、這い進んできたスネーク。『G．W』の扉の前にたどり着く。立ち上がるが、オクトカムは、黒こげでボロボロ、かつ煙が出ている。

――扉の前にMk．Ⅲがやってきて、ロックを解除。扉には〝HAVEN〟の文字。

――重々しい響きを伴って開く扉。

――中に入るスネークとMk．Ⅲ。

――スネーク、嘔吐しながら、うつ伏せに倒れ込む。

【主観ボタン】ほとんど目が見えない。

――スネーク、意識を失いかけるが、仰向けになって首筋に注射を打つ。

――スネークを心配そうに見ていたMk．Ⅲ（オタコン）の視界に『G．W』が入る。

オタコン　「これが『G．W』…」

――スネークも、仰向けの体勢のまま、『G．W』の方を見ようとする。

――サーバールーム。墓石のようなサーバーが立ち並んでいる。ゲーム導入部の墓地と全く一緒の地形。遠くまで敷き詰められたサーバ。足元には白い花が咲き乱れている。かすかに外の着弾の振動が伝わってくる。

オタコン　「まるで墓地じゃないか…」

スネーク　「できるか？　オタコン」

オタコン　「任せて」

――左右に立ち並ぶサーバ群の中央通路を進むMk．Ⅲ。スネークもスピードは遅いがMk．Ⅲの後をついていく。

――Mk．Ⅲ、部屋の中央に『G．W』と刻印されたひときわ大きなサーバにたどり着く。

――下部のパネルを開き、その中へアームを突っ込む。ミズーリ艦内で、ノートパソコンのキーを叩くオタコン。『G．W』にウイルスを注入しようとしている。

――すると、大きな墓石の上部に、大型のディスプレイが表示され、小型の墓石の方にも赤いライトが点灯し始める。

――スネーク、通路半ばで倒れ込むと、侵入してきた仔月光に気が付く。

――襲い掛かる仔月光。M4で撃ち落とすスネーク。扉から大量の仔月光が侵入してくる。

――カメラ変わってヘイブン兵達に囲まれている雷電。多勢に無勢でかなり劣勢。腹部をナイフで突き刺される。ヘイブン兵に追いつめられて絶体絶命のピンチ！

――再びカメラ変わって、メリルとジョニー。こちらも絶体絶命、二人とも残弾数ゼロ！

――さらにカメラ変わって、ミズーリの艦橋。窓には仔月光の姿。艦長の美玲(メイリン)は、拳銃を握りしめて、祈りを捧げている。

――カメラ戻って『G.W』室内へ。Mk.Ⅲを守りながら、M4で撃ち落としていくスネーク。肩、腹、足。仔月光からの攻撃を身体中に浴びる。力尽き、膝をつきながら戦うスネーク。仔月光がスネークに襲いかかる。身体に付いた仔月光の電撃を受ける。振り払おうとするスネーク。仔月光がスネークを覆い尽くして行く。

スネーク　「オタコーーーーンっ！」

――スネーク、最後の断末魔！

――カメラ変わって、オタコン。

オタコン　「やった！」

――ヘイブン兵に詰め寄られた雷電。逃げ場が無い。突然、跪き、苦しみ出すヘイブン兵。

――一方、メリルとジョニーに襲い掛かっていたヘイブン兵も同様の症状。それを見てジョニー、

ジョニー　「止まった…」
メリル　「やったわ！」
　――固く抱き合う二人。
　――ミズーリ甲板では、銃が撃てなくなったヘイブン兵達が、じわじわと米兵に取り囲まれる。
　――ミズーリ艦橋付近では、窓に張り付いた仔月光数体がズルッと落ちて行く。月光がバランスを崩して（機能停止）海に落ちる。美玲の表情に明るい光がさす。
美玲　「スネーク…」（やったわ！）
　――サーバールームに戻ると、スネークが、まとわりついていた仔月光を振り払ってひと息。
　――そこにオタコンの声。
オタコン　「待てよ…」
スネーク　「？」
オタコン　「ワームの侵食が止まらない」
　――カメラ艦橋のオタコンに。

オタコン　「範囲が広すぎる」

オタコン　「クローンの除去…？　違う…！」

オタコン　「まさか…ナオミ！」

スネーク　「オタコン…どうした…？」

オタコン　「『J.D（ジョン・ドゥ）』が、消えていく」

——突然、モニターがシャットダウン。

——その後、室内のモニターというモニターにナオミが映る。

ナオミ　「スネーク、ハル」

ナオミ　「きっと、あなたたちね？　聴いている？」

ナオミ　「あなた達が注入したウイルスは『G.W』を媒介して、AIネットワーク全体を死滅させた」

ナオミ　「『G.W』を含む4つのAI、そしてそれらを統合するAI『J.D（ジョン・ドゥ）』」

ナオミ　「全てが消えたとき、この映像が流れるようにセットした」

ナオミ　「サンズ・オブ・ザ・パトリオットだけじゃない」

ナオミ　「『愛国者達』はナノマシンを利用して、全ての国民にこのシステムを導入するつ

もりだった」

ナオミ　「私にはそれを止める責任があった」

ナオミ　「サニーの力を借りたわ」

ナオミ　「彼女は自分の力が『Ｇ．Ｗ』を静止させ、あなた達の役に立つと信じて協力して
くれた」

ナオミ　「対ＡＩのＦＯＸＤＩＥ（フォックスダイ）」

ナオミ　「ウイルスの名前は〝ＦＯＸＡＬＩＶＥ（フォックスアライブ）〟」

ナオミ　「そう。私がかつて創り出してしまったナノマシンとは逆の発想のもの」

ナオミ　「囚われたＦＯＸ達を活かして、野に解き放つ、という願いを込めた」

――ナオミの音声にオーバーラップして、水平線に昇る太陽が映る。渡り鳥が太平洋を翔んでいく。

――スネークの悲しそうな表情。

ナオミ　「おそらく、私はもうこの世にはいないでしょうね」

ナオミ　「変な気持ちよ。死ぬ前に死んだ後のメッセージを残すなんて」

――オタコン、涙を拭う。

ナオミ「ハル、聴いてるかしら。あなたを…」
ナオミ「あなたを騙してごめんなさい」
ナオミ「あなたを騙した事、それが一番、辛かった」
ナオミ「だから死ぬ前に謝りたかった。でも私にはそれさえも許されなかった」

――オタコン、涙が止まらない。モニターを見つめて、

オタコン「ナオミ！」
ナオミ「でも、私は、あなたのお陰で」
ナオミ「生きる喜びを感じることが出来た」
ナオミ「ありがとう…、…ハル」

――カメラに手を伸ばすナオミ、モニターに映るナオミの手に触れるように手を伸ばすオタコン。

オタコン「ナオミ…」

――オタコン、ノートパソコンを抱きしめて泣きくずれる。
――モニターには、涙を拭うナオミの姿が映る。

ナオミ　「スネーク、聴いて」
ナオミ　「この国は、無垢な子供に還った」
ナオミ　「新しい夜明けが来る（太陽が昇る）」
ナオミ　「これからは新しい運命を築けるのよ」
ナオミ　「スネーク、（終わって）もう、いいのよ」

——床に倒れ込むスネーク。スネークに異変が現れる。

ナオミ　「お疲れさま…」
ナオミ　「もうすぐ、バラが散る」

——サニーの横の一輪挿しの蒼い薔薇。花弁がひとつ、はらりと落ちる。
——スネークの身体が痙攣している。

オタコン　「スネーク（どうした?）」
オタコン　「スネーク！　スネーク‼」

——スネークの意識が薄れていく。
——F.O.

【リキッド戦前／ポリデモ】ヘイブン艦橋

——F.I.

——スネーク、意識が戻るとヘイブンの甲板上に横たわっている。スーツは傷ついてボロボロ、ソリッドアイもなくなっている。風の音、ヘリの音が聞こえる。眼前に救助に来たオタコンがいるが、視界はぼやけている。

オタコン　「スネーク、ここで待っててくれ。メディックを呼んでくる…」

——立ち去るオタコンの足音が聞こえる。

——上空を2機の米軍のヘリが飛ぶ（メリル、ジョニーと雷電の回収）。

——ヘイブン兵と米兵は、共に虚脱感に支配されている。

——どこかでなおも争う兵士たちに向けて、美玲(メイリン)が戒める。

美玲(メイリン)（拡声器）「もう意味はない、やめなさい」

美玲(メイリン)（拡声器）「これは戦争じゃない！」

——仰向けになると、カツン、カツンというゆっくりとした足音が聞こえ、視界にコートの裾をなびかせた人物が近づいてくるのが見える。スネークの前で立ち止まる人物の顔を、首をひねって見るスネーク。

リキッド　「目が覚めたか、スネーク」
リキッド　「見てみろ」
リキッド　「戦争は終わった」
スネーク　「（力無く）何故だ？　止めようと思えば止められたはずだ」
リキッド　「止める？　なんのために」
リキッド　「これこそが俺が望んだ結末(エンディング)だ」
――警戒するスネーク（どういうことだ？）。
リキッド　「親父の時代よりも前…アメリカ、中国、ソ連を束ねる陰の組織があった」
リキッド　「ゼロが『愛国者達』を生み出す前のことだ」

【リキッド戦前／アーティストデモ】　ヘイブン甲板

――MGS3の賢者映像など。
リキッド　「賢人会議と呼ばれる秘密組織だ。二つの大戦中に根を張り急拡大した」
リキッド　「大戦後、バラバラに別れた『賢者達』は、彼らが残した資金を巡って争うことに

なった」

リキッド　「賢者の遺産と呼ばれる、後にゼロが『愛国者達』の資金とする莫大な額の金だ」

リキッド　「ゼロはそれを使って世界の掌握を試みた」

リキッド　「親父、ビッグボスはその包囲網からの解放を望んだ」

リキッド　「ビッグボスは国政による軍隊に依存しない、自由な民間の軍隊を創ろうとした」

リキッド　「それがアウターヘブンだ」

——アウターヘブン／MSX時代。

リキッド　「だがそれは失敗した。お前の妨害によって」

リキッド　「9年前、俺は遺伝子(GENE)統制からの解放を目指した」

——MGS1時代。

リキッド　「そして5年前、俺たちの兄弟、ソリダスは『愛国者達』の情報(MEME)統制からの解放を目指した」

——MGS2時代。

リキッド　「これらは全てヘイブンへの試行錯誤の過程にしか過ぎなかった」

——ＭＧＳ４時代。

リキッド　「『愛国者達』の兵士（国民）の外部コントロールの究極形、サンズ・オブ・ザ・パトリオットからの解放」

——F.O.

【リキッド戦前／ポリデモ】ヘイブン甲板

——ポリデモへもどる。

リキッド　「ＦＯＸＤＩＥからの解放！　システムからの解放、個人認識からの解放。そして！」

リキッド　「囚われた精神（SENSE）を解き放つ」

リキッド　「それこそが俺が望んだヘイブンだ」

——リキッド、スネークの頭部を少し持ち上げると首筋に注射。１本では効果無く、２本続けざまに注射する。

リキッド「さあ兄弟！　これで最後だ」

リキッド「闘いは終わったが…」

リキッド「俺たちの解放はまだだ」

リキッド「戦争は終わった」

リキッド「最後は、個人的な決着をつけよう」

――スネーク、ようやく立ち上がることが出来た。

――サングラスを投げ捨て、構えるリキッド。

――ファイティングポーズをとるスネーク。

リキッド「来い、スネーク！」

――スネーク、突進するが、ＣＱＣで軽くいなされる。

――しかし、スネークも負けていない。

――一進一退の攻防が続く。

――リキッド、スネークの力量を認めたのか、自分も首筋に注射。コートを脱ぎ捨てて気合いを入れると、スネークに突進。強引な打撃でスネークを圧倒していく。

――スネークも負けじと連打で反撃。途中、リキッドにマウントを取られ、顔面にパウンド攻撃されるスネーク。リキッドも老いには勝てず、パンチの威力が無い。再び注射の力に頼るリキッド。

――その注射を奪って自らの首筋に打つスネーク。

スネーク「リキッドォォ！」

リキッド「スネェエク‼」

――薬の力に頼らねば戦えない老戦士二人、雄叫びを上げて戦闘再開。

――パンチ、蹴り、頭突きと、お互い同じ技を繰り出して、優劣を競おうとする兄弟。

――だが勝負はつかない。

――残り1本ずつとなった注射をお互いが首筋に打ち、最期の戦いが始まる。

――ゲームへ。

【リキッド戦後／ポリデモ】ヘイブン艦橋

――リキッドにとどめの一発。地面に倒れるリキッド。

――しかし、スネークもかなりのダメージ。膝をつく。

――リキッドは虫の息。声はスネークにしか聞こえない。

リキッド「これからだ、スネーク」

リキッド「アメリカの秩序は失われ、社会は西部開拓期の無秩序へと還る」

リキッド　「この鬼火は世界中に拡がるだろう」

リキッド　「誰しもが戦いの中で生の充足を得る世界」

リキッド　「親父の、ビッグボスの意志、天国(アウターヘブン)に見放された世界は遂に完成した」

スネーク　「今頃…どこかで親父も、ほくそえんでいることだろう」

リキッド　「？（生きているのか？）」

——リキッド、意識薄れ、寝言のように。

リキッド　「俺たちは造られた怪物(ビースト)」

リキッド　「光を消さなければ、陰は消えない」

リキッド　「光がある限り、陰を消しても意味はない」

——リキッド、最後にスネークを見る。目の色（意識）が変わる。

リキッド　「俺はリキッドのドッペルゲンガー。お前は」

リキッド　「あの男のドッペルゲンガーだ」

リキッド　「さすがあの男の息子」

――弱弱しく両手を前に掲げる。

リキッド「いいセンス(SENSE)だ…」

――最後に両手を前に突き出し、例の手振り（若き日のオセロットの決めポーズ）をして絶命する。

リキッド「うぐっ！」

――突然目を見開くリキッド。呼吸が止まる（FOXDIE）。

――スネークは黙ってリキッドを見つめたまま。

――オタコンのヘリが近づいてくる。

オタコン「スネーク！」

――傾いたヘイブン、ミズーリの周囲に数機のヘリが飛び、黄色い救命ボートが浮かんでいる。

――ミズーリの甲板から米兵がロープを下ろし、救命ボートのヘイブン兵を救い出している。

――オタコンのモノローグ。

オタコン「サニーのプログラムは『愛国者達』のAI『J.D(ジョン・ドゥ)』の大脳部分を破壊したものの、脳幹部分は破壊しなかった」

オタコン「サニーはナオミのブラックボックスを解析して、『愛国者達』の制御とライフラ

インの電子制御を分離したんだ」

オタコン　「水、空気、電気、食料、医療、通信、交通…」

オタコン　「彼女は『愛国者達』の支配を断ち切り、そして近代文明を守った」

――オタコンと共にヘリ内の椅子に座っているスネーク。

――横にオタコンがついている。

オタコン　「母親…オルガの仇のつもりだったのか」

オタコン　「それともサニー自身が望む理想の未来を描こうとしたのか」

オタコン　「それとも単なるデータの整理だったのか」

オタコン　「まさにAIがLIVE（生きのびる）する。FOXALIVE（フォックスアライブ）」

オタコン　「これで『愛国者達』の支配は滅びた」

オタコン　「皮肉にも、創生期から戦争を生業としてきた文明は生き延びた」

オタコン　「果たして、それでよかったのか」

オタコン　「ナオミ、僕らは何を無くして、何を守ったんだろう?」

――オタコンの目の前をカモメが飛んでいる。

——ミズーリに戻るヘリ。

——F.O.

ACT5「Old Sun　老雄の太陽」無線集

■アウター・ヘイブン：艦首

【サーバールームを目指せ】リアルタイム無線

※開始直後

オタコン　「ヘイブンへの乗り込み（ボーディング）に成功したね」

オタコン　「敵の迎撃部隊は、既にそちらに向かった」

オタコン　「防御ラインを突破して、GWのサーバールームを目指せ！」

【メリルとアキバの状況】任意無線

※「サーバールームを目指せ」を聞いた後にSEND。初回のみ

オタコン　「スネーク、メリルはカタパルト射出時のトラブルで、君とは離れた場所に降りた」

スネーク　「アキバは海に落ちた」

オタコン　「二人と合流している時間はない。別々にサーバールームへ向かうんだ」

オタコン　「僕はMk.Ⅲ（マーク・スリー）で君について行く。直接背中を守ることは出来ないけど、最後まで一緒だ」

オタコン　「頑張ってくれ、スネーク！」

【リキッド直属部隊に注意】任意無線

※「メリルとアキバの状況」を聞いた後にSEND。初回のみ

オタコン　「その区画には強化服装備のリキッド直属部隊が投入されてる」

オタコン　「取り囲まれてしまうとやっかいだ。見つからない様に進むか、接触するにしても各個撃破を心がけた方がいい」

【ミズーリの状況は？】任意無線

※「リキッド直属部隊に注意」を聞いた後にSEND。初回のみ

スネーク　「オタコン、そっちの状況はどうだ」

オタコン　「甲板上の兵隊が、そっちの敵と派手にやり合ってるよ。まるでバグダッドだ」

スネーク　「お前は無事なのか」

オタコン　「今のところはね。ミズーリの分厚い装甲に守られてる」

スネーク　「そうか。当面は大丈夫そうだな。だが、絶

対ということは無い。もし危なくなりそうになったら、躊躇せず艦(ふね)を捨てろ、いいな」

オタコン「判っているよ。それよりスネーク、君こそネルソン提督のようにはならないでくれよ」(ネルソンはトラファルガー海戦のさなか、フランス艦の狙撃兵に撃たれて戦死した)

スネーク「ああ。俺もまだ逝くわけにはいかない。何としても目的を果たすまではな」

オタコン「それでいい、スネーク」

【無事に帰ってきて】任意無線

※開始直後にSEND。初回のみ

ローズ「とうとうリキッドの本拠地までたどり着いたのね……」

ローズ「スネーク、私はこれまでと同じように、出来る限りあなたのことをサポートするわ」

ローズ「だから、どうか無事に任務を果たして帰ってきて欲しい……」

【船尾方向へ進め】任意無線

※他に言うことがなかったら

(1)

オタコン「スネーク、そこから船尾方向に進んでくれ」

オタコン「船体内部に侵入するんだ」

(2)

オタコン「ヘイブン船内への侵入口は、そこよりも船尾寄りにある」

オタコン「船尾方向へ進むんだ」

【水密ドアを開け1】リアルタイム無線

※水密ドアが見えたら

オタコン「スネーク、その水密ドアから中に入れる!」

【水密ドアを開け2】任意無線

※水密ドアの近くでSEND

オタコン「ナオミの情報によれば、中に入るにはそのドアを通るしかない」

オタコン「ハンドルを回すタイプの水密ドアのようだね。スネーク、ハンドルを回してそこから中に入ってくれ」

【水密ドアの開け方】任意無線
※敵が居ると、ドアを開けられない（ハンドルを回すのを邪魔される）
オタコン「敵が邪魔でドアを開ける余裕がない」
オタコン「敵を倒すか、見つかっていない状態じゃないとドアを開けるのは無理だ」

【サーバールームはまだ先】任意無線
※水密ドアを開けて内部に入った所でSEND
オタコン「サーバールームはまだずっと先だ。そのまま進んでくれ、スネーク」
オタコン「目的地の方向は、常にレーダーで確認すること。いいね」

■アウター・ヘイブン：司令センター

【メリルを守れ1】リアルタイム無線
※ヘイブン・トルーパー戦開始直後
オタコン「スネーク、メリルが危ない！」
オタコン「敵を排除して彼女を助けるんだ！」

【メリルを守れ2】任意無線
※「メリルを守れ1」を聞いた後でSEND。他に言うことがない場合
オタコン「メリルを守れ、スネーク！」
オタコン「彼女に危害が及ぶ前に、敵を倒すんだ！」

【メリルを守れ3】任意無線
※「メリルを守れ1」を聞いた後でSEND。他に言うことがない場合
ローズ「スネーク、あなたしかメリルさんを守ってあげられない！」
ローズ「彼女が敵の攻撃にさらされる前になんとかするのよ！」

【敵を排除しろ】任意無線
※「メリルを守れ2」を聞いた後でSEND。他に言うことがない場合
オタコン「奴らを排除しなければ先へは進めない」
オタコン「スネーク、敵を倒すんだ！」

【メリル危険1】リアルタイム無線
※メリルのLIFEが半分を割った後で
オタコン「メリルが危険だ！」
オタコン「スネーク、メリルをしっかり守るんだ！」

【メリル危険2】リアルタイム無線
※メリルのLIFEが四分の一を割った後でSEND
オタコン「スネーク、そのままじゃメリルが死んでしまう」
オタコン「これ以上メリルに傷を負わせないで！」

【メリル死んじゃう1】リアルタイム無線
※メリルにダメージを与えた場合（故意、過失どちらでも）
（1）
オタコン「スネーク、ダメだ！」
（2）
オタコン「メリルを危ない目にあわせないで！」
（3）
オタコン「何やってるんだ、逆だろ⁉　メリルを守るんだ！」
（4）
オタコン「やめろ、スネーク！　メリルが死んじゃうよ！」

【メリル死んじゃう2】任意無線
※メリルにダメージを与えた後にSEND
（1）
オタコン「スネーク！　何考えてるんだよ！」
オタコン「メリルを殺す気か⁉」
（2）
オタコン「スネーク、やめてくれ！　メリルにダメージを与えるんじゃない！」
オタコン「彼女をちゃんと守ってくれ‼」
（3）
オタコン「いい加減にしてくれ、スネーク‼」
オタコン「女性に危害を加えるなんて、君、それでも男なのか⁉」
（4）
オタコン「……（怒っている）」

【メリル死んじゃう3】任意無線
※メリルにダメージを与えた後にSEND
（1）
ローズ　「スネーク、メリルさんを守るのよ！　傷つけちゃダメ！」
（2）
ローズ　「やめてスネーク！　メリルさんにダメージが加わらないように気を付けて！」
（3）
ローズ　「ひどいわスネーク！　どうしてメリルさんにダメージを与えるの⁉」
（4）
ローズ　「……（怒っている）」

■アウター・ヘイブン：司令センター（スクリーミング・マンティス戦）
【スクリーミング・マンティス戦（ビースト）】任意無線
※マンティス戦、開始直後にSEND。初回のみ
オタコン　「スネーク、このビースト、スクリーミング・マンティスは人形遣いだ」
オタコン　「他者を操り、自分の代わりに戦わせている」
スネーク　「あの薄気味悪い亡霊のようなものが当たると操られるようだな」
オタコン　「ああ。君も操られないように気をつけるんだ、いいね」

【オタコン応援】任意無線
※他に言うことがない場合
（1）
オタコン　「こいつ（マンティス）を倒せば、サーバールームまで一気に突っ込める。頑張ってくれ、スネーク！」
（2）
オタコン　「スネーク、マンティスに操られている連中にも注意して」
オタコン　「君に攻撃を加えてくるけど、彼らは敵じゃない。気絶させてやるんだ、いいね」

【マンティスについて】任意無線
※マンティス戦（ビースト）開始直後にSEND。初回のみ

ローズ　「BB部隊の彼女たち……笑い、怒り、哀しんでいた。そして最後のビーストはことある毎に悲鳴を上げている」

ローズ　「あの悲鳴は、耐え難い恐怖に心を脅かされ続けているからなのかもしれない」

ローズ　「そうまでさせる恐怖が一体どんなものか、想像すら出来ないけれど……」

【気力に注意1】任意無線

※気力ゲージが高く、他に言うことがない場合

ローズ　「スネーク、気力の状態に注意して」

ローズ　「少なくなってきたら、なるべく早く回復に努めて」

【気力に注意2】任意無線

※気力ゲージが低く、他に言うことがない場合

ローズ　「スネーク、気力ゲージが減少しているわ」

ローズ　「そのままでは戦い方にも影響が出るかも知れない。どこかのタイミングで、気力の回復を試みた方がいいわ」

【ナノマシンに影響】任意無線

※マンティス戦開始後、一定時間後にSEND。初回のみ

オタコン　「スネーク、憶えてる？　サイコ・マンティスは精神感応でメリルを操っていた。でもあいつの場合は、対象者の体内ナノマシンを操作して脳内麻薬様物質（オピオイド）を強制的に分泌させ感覚鈍麻状態に、つまりある種の麻酔状態にさせた上で、その筋組織を直接操作しているんじゃないかと思う」

スネーク　「あの亡霊のように見えるのは？」

オタコン　「威嚇用の立体画像じゃないかな。普段見慣れないものを突然目の前に繰り出されたら、誰だって一瞬ひるんでしまうからね」

スネーク　「特殊部隊が黒ずくめになって突入するようなものか」

オタコン　「ナノマシンに対する制御信号は、描像用のレーザー光にのせて送出してるんだと思う。立体画像が当たらなければ操られないのは、多分そのせいだろう」

スネーク　「奴は死人も操ってるが、あれは？」

オタコン　「原理は同じさ。死んだカエルの脚に電極を

付けて動かす実験、学校でやらなかった？　ナノマシンは蓄電機構を持ってる。その電気で筋肉を収縮させていると考えれば不思議はないよ」

オタコン「もし本当にナノマシン経由で他者を操作しているのなら、それを無効化する方法があるよね？　試してみるんだ」

【ナノマシンを抑制せよ】任意無線

※「ナノマシンに影響」を聞いた後でＳＥＮＤ。「注射器を使え」を聞くまで

オタコン「スネーク、体内ナノマシンの活動を抑制する方法、あるよね？」

オタコン「その方法を試してみてくれ！」

【体が動かない】強制無線

※２コンで攻略しようとすると

スネーク「オタコン、おかしい。体が動かない」

オタコン「動かない……？　一体どうして……あ。（ため息）スネーク、コントローラＮｏ．を１以外に設定してるんじゃないか？」

オタコン「まさかサイコマンティスと戦ったときを思い出して、同じ手がきくかもなんて思ったんじゃないだろうね？」

スネーク「え…いや…」

オタコン「ダメだよ。今回はコントローラＮｏ．を１にしないと、操作ができないようになってるんだ」

スネーク「……なんだと、それじゃあ」

オタコン「同じやり方は通じないよ、残念ながら」

スネーク「そうなのか……（がっくり）」

【ＭＧＳ攻略法１】任意無線

※マンティスに操られている状態でＳＥＮＤ。初回のみ

キャンベル「スネーク、奴はマンティスだ、シャドー・モセスでの戦いを思い出せ！」

ローズ「シャドー・モセスでの戦い？」

キャンベル「そうだ。あの時我々は、複数のコントローラ端子を使うことでマンティスの読心能力（リーディング）を欺き、勝利をつかんだ。スネーク、今回も同じ戦法で奴にいどめ！　コントローラをコントローラ端子２へ差し込……」

ローズ　「……ロイ、ダメよ」
キャンベル「え？」
ローズ　「あの時とは違ってコントローラ端子が無いの。ＰＳボタンを押してコントローラＮｏ．を切り替えたくらいでは、マンティスの裏をかくことはできないわ」
キャンベル「……なんだと、それじゃ……」
ローズ　「同じ手は使えないのよ、残念だけど」
キャンベル「そうなのか……（がっくり）」

【ＭＧＳ攻略法２】任意無線
※「ＭＧＳ攻略法１」を聞いた後でＳＥＮＤ。初回のみ
キャンベル「スネーク、コントローラの件は残念だったが、奴の弱点はもう一つあるぞ。覚えているか？」
スネーク「弱点？　……マンティスの素顔をモデルにした彫刻のことか？　皮バンドでぐるぐる巻きにしてあった奴だな」
キャンベル「そうだ。マンティスは自分の素顔を見ることを極端に嫌っていた。その石像を攻撃して、皮バンドの封印をはぎ取るんだ！」

スネーク「大佐、それは出来ない」
キャンベル「どうして！　奴に素顔を見せつけて集中力を削げば……」
スネーク「石像がないんだ」
キャンベル「……な！」
スネーク「石像なんてもの、ここには無い。だから出来ない」
キャンベル「そうなのか……（がっくり）」

【注射器拾え】リアルタイム無線
※マンティスに操られて注射器を捨てた
（１）
オタコン「スネーク、注射器が……（落ちた）！」
オタコン「急いで拾うんだ！」
（２）
オタコン「注射器を拾って、スネーク！」

【攻略ヒント】リアルタイム無線
※注射器を使うことをしばらく思いつかないと
オタコン「スネーク、奴は恐らく、体内のナノマシン経由で対象者の筋組織に働きかけているん

【メリルを気絶させろ】リアルタイム無線
※マンティスがメリルをコントロールした後に
オタコン「例え君に害を及ぼそうとしていても、それはメリル自身の意志じゃない」
オタコン「彼女を傷つけないように気をつけて。気絶させるんだ。いいね！」

【操られメリル解放せよ1】任意無線
※マンティスがメリルをコントロールした後にSEND。初回のみ
オタコン「スネーク、メリルが操られている！」
オタコン「彼女をマンティスのコントロールから解放してやるんだ、いいね！」

【操られメリル解放せよ2】任意無線
※「操られメリル解放せよ1」を聞いた後でSEND。他に言うことがなければ
オタコン「スネーク、サイコ・マンティスとの戦いを思い出すんだ！」
オタコン「あの時と同じようにメリルをノックアウトして、彼女が自分自身に危害を加えないようにするんだ！」

【操られメリル解放せよ3】任意無線
※メリルが銃口を自分の頭に向けたデモの後でSEND
（1）
オタコン「いけない！　スネーク、メリルが危ない。あのままじゃ自分の頭を吹き飛ばしてしまう！」
オタコン「どうにかして彼女のコントロール状態を解くんだ！」
（2）
オタコン「スネーク、メリルが操られている！」
オタコン「彼女をマンティスのコントロールから解放してやるんだ、いいね！」

【人形落とした】リアルタイム無線
※攻撃でビーストが人形を取り落とした時
オタコン「マンティスが操り人形を取り落とした！」
オタコン「あれが無ければ、奴は他人を操れない筈だ」
オタコン「スネーク、人形を奪うんだ！」

だ！」
オタコン　「SOP（ソップ）システムのスピンオフだろう」
オタコン　「この推測通りなら、奴のコントロールに対抗する術を君は持っているよ、スネーク」
【注射器を使え1】任意無線
※「攻略ヒント」を聞いた後にSEND。初回のみ
オタコン　「スネーク、ナオミがくれたナノマシンを抑制する注射を使うんだ」
オタコン　「僕の推測通りなら、それで奴からのコントロールは一切無効になる」
オタコン　「試してみてくれ！」
【注射器を使え2】リアルタイム無線
※それでも注射器を使わない場合に
オタコン　「スネーク、ナオミからもらった注射器だ」
オタコン　「あれで、ナノマシンの抑制を試みてくれ！」
【人形を狙え！】任意無線
※操られ状態から脱した後にSEND。他に言うことがなければ

オタコン　「スネーク、あの人形がなければ、マンティスは他者を操ることが出来ない」
オタコン　「攻撃を人形に集中してマンティスの手からはじき飛ばせれば、奴は何も出来なくなる」
オタコン　「人形を狙うんだ」
【通常武器効かない】任意無線
※「人形を狙え！」を聞いた後でSEND。初回のみ
オタコン　「……どうも武器を使った通常の攻撃は、ほとんど効果がないようにみえるね」
スネーク　「ああ。何かアイディアは？」
オタコン　「……ごめん、今は思いつかない。攻略法は必ずあるはずだけど……」
【亡霊に気をつけろ】任意無線
※「通常武器効かない」を聞いた後でSEND。他に言うことがなければ
オタコン　「奴の持つ人形から放たれる亡霊に気をつけて」
オタコン　「あれに触れたら、君も操られてしまうよ」

【ダメージで解放】任意無線
※メリルが銃口を自分の頭に向けたデモの後で、ヘイブン兵にダメージを与えた後でSEND
オタコン「マンティスに操られている連中は、ダメージを食らったり、気絶したり眠ったりしてしまうと、しばらく傀儡状態から解放されるように見えるね」
オタコン「（独りごちる）……攻撃のショックで、ナノマシンへの干渉に擾乱が生じるのか……？　でもそれだと気絶の方は……。……まあいい、理由についてはともかく。スネーク、この現象は君にとって有利に働いてくれる。積極的に利用するんだ」
オタコン「ただし、味方を死なせてしまったんじゃ、本末転倒だよ」
オタコン「気絶させるか眠らせることを優先した方がいいだろう」
【人形を使え1】任意無線
※人形を奪った後でSEND。初回のみ
オタコン「スネーク、もしかしたら奴の人形を使って、こっちからマンティスを操ることが出来るんじゃないか？」
スネーク「（半信半疑）人形を使って？」
オタコン「試す価値はあると思うよ。まず装備品ウィンドウから人形を選んでみて」
オタコン「他の武器同様にR1ボタンで亡霊が放出できるはず」
オタコン「亡霊が奴に命中したら、マリオネットタイムだ」
オタコン「さっそく試してみて。判った？　スネーク」
【人形を激しく動かせ1】任意無線
※「人形を使え1」を聞いた後でSEND。初回のみ
オタコン「スネーク、あのマンティスのスーツ外殻は、耐爆スーツ以上の防護性能を持っているように思える。今までのビーストと比べても段違いだ」
オタコン「ただスーツの外見を見る限り、他のビーストと比べて装甲容積に顕著な違いが見られない。歩兵用装備としては、かなり特殊な装甲材料を用いているようだね」

オタコン　「容積効率重視の設計とするなら、恐らく金属系の複合装甲……タングステン、劣化ウランかそれに匹敵する高比重素材だろう」
オタコン　「奴の動きを見てくれ」
オタコン　「きっと重すぎて、あの程度でしか動けないんだ」
オタコン　「よく聞いて、スネーク。人形で奴を操るときに、出来るだけ激しい動きをさせてみるんだ」
オタコン　「あまりの負荷に、奴の体は相当なダメージを受けるんじゃないかと思う」
スネーク　「なるほど……試してみる価値はありそうだ」
オタコン　「殻（シェル）がどんなに強くても、中身は人間だ。激しく揺さぶれば、きっと崩れる」
スネーク　「よし判った。さっそく試してみよう」

【人形を激しく動かせ2】任意無線
※「人形を激しく動かせ1」を聞いた後でＳＥＮＤ。他に言うことがなければ
オタコン　「マンティスの体が激しく動くように操るんだ！」
オタコン　「そうすれば大きなダメージを与えられる！」
オタコン　「奴の踊り狂う様を見せて頂こうじゃないか、スネーク！」

【人形を使え2】任意無線
※「人形を激しく動かせ2」を聞いた後、しばらく人形を使わないでＳＥＮＤ
オタコン　「スネーク、人形を使うんだ！」
オタコン　「人形は、装備品ウィンドウから選んで装備する」
オタコン　「装備したら、Ｒ１（攻撃）ボタンで亡霊の放出」
オタコン　「亡霊の命中後、コントローラを傾けて敵を操るんだ！」

【ソロー人形使えない】任意無線
※ソロー人形で攻撃した後でＳＥＮＤ。初回のみ
スネーク　「オタコン、駄目だ。この人形じゃ奴を操れない」
オタコン　「操れない？」

スネーク「ああ。どういう訳だろう?」
オタコン「うーん……。あ……ひょっとしたら」
スネーク「なんだ」
オタコン「マンティスは人形を二体持ってる。君が奪ったのはそのうち、死体操り専用の方なのかも」
スネーク「死体操り専用?」
オタコン「あまり注意していなかったから確証は持てないけど、マンティスは操る相手によって人形を使い分けていたように思うんだ。つまり、生者と亡者とでね」
オタコン「スネーク、もう片方の人形を奪って使ってみてくれ。僕の推測が正しければ、それで上手くいくと思う」
スネーク「よし判った、試してみよう」

【操れない】任意無線
※マンティス人形の攻撃を当てたが、操りに失敗した後でSEND。初回のみ
スネーク「オタコン、奴に亡霊を当てたが操れなかったぞ」
オタコン「うーん……操り人形の操作を真似してみてはどうかな。つまり、コントローラを前後左右に傾けてみるんだ。その動きは、君が持っている人形の動作に連動し……」
オタコン「そして奴は、君の意のままになる筈だ」

【メリル攻撃するな】リアルタイム無線
※マンティス戦中、スネークがメリルにダメージを与えると
(1)
オタコン「メリルを傷つけちゃいけない!」
(2)
オタコン「ダメだ、スネーク! メリルにダメージを与えないで!」

【アキバ攻撃するな】リアルタイム無線
※マンティス戦中、スネークがジョニーにダメージを与えると
(1)
オタコン「スネーク、アキバを攻撃しちゃダメだ!」
(2)

オタコン「違う！　彼をカバーしてやるんだ、スネーク‼」
【仲間を殺した？】ゲームオーバー
※メリルかアキバが死んでゲームオーバー
（1）
オタコン「……スネーク、メリルが死んでしまったよ」
オタコン「君は、英雄失格だ」
（2）
オタコン「なんてことだ！　メリルが死んでしまった！　スネーク、聞いてるのか？　スネーク‼」
（3）
オタコン「ダメだ、アキバが逝っちまった！　スネーク。おい、スネーク！」

■アウター・ヘイブン：司令センター（ビューティ戦）

【ビューティに注意1】任意無線
※抱きつかれる前にSEND
オタコン「気を付けるんだ、スネーク！」

オタコン「抱きつかれちゃダメだよ！　彼女から距離を置いて！」
【ビューティに注意2】任意無線
※抱きつかれた後にSEND
（1）
オタコン「マンティスから逃げてくれ、スネーク！」
オタコン「抱きつかれたら、ダメージを食らってしまう！」
（2）
オタコン「触れられちゃだめだ！」
オタコン「何とか間合いを保つんだ、スネーク！」
【ビューティに注意3】任意無線
※抱きつかれる前にSEND
ローズ「彼女があげていた、かなしい悲鳴……。スネーク、彼女を救えればという想いに駆られているかも知れないけれど、それはいけないわ」
ローズ「これまでのビューティを思い出して。彼女もきっと同じ加害行為に及ぶはず」

ローズ　「彼女が近づいてきても、あなたに触れさせてはだめよ！」

【ビューティに注意4】任意無線

※抱きつかれた後にSEND

ローズ　「最後のビューティもやはり同じだったわね……あなたを抱きしめて傷つけようとする」

ローズ　「スネーク、彼女の腕から逃れるのよ。決して近寄らせないで！」

■アウター・ヘイブン：ミサイル格納庫

【一気に進め】任意無線

※エリア侵入後にSEND。初回のみ

オタコン　「敵がいない。一気に進むチャンスだ」

【サーバールームへ急げ】

※「一気に進め」を聞いた後にSEND。デモのタイミングで（1）か（2）を鳴らす

（1）メリルとジョニーが合流する前

オタコン　「スネーク、走ってくれ。メリルが頑張ってくれているうちに、サーバールーム（GW）までたどり着くんだ！」

（2）メリルとジョニーが合流した後

オタコン　「スネーク、走ってくれ。メリルとアキバが頑張ってくれている。その間にサーバールーム（GW）までたどり着くんだ！」

【走れスネーク】任意無線

※他に言うことがない場合

オタコン　「走るんだ、みんなが君に希望を託している！」

オタコン　「走ってくれ、スネーク！」

【気力に注意1】任意無線

※気力ゲージが高く、他に言うことがない場合

（1）

ローズ　「スネーク、頑張って！　目的地まではもう少しなんでしょう？」

（2）

ローズ　「今のあなたは気力の状態も申し分ないわ」

ローズ　「先へ進んで、スネーク！」

【気力に注意2】任意無線
※気力ゲージが低く、他に言うことがない場合
(1)
ローズ　「スネーク、気力ゲージを見て。残量が落ち込んでいるわ」
ローズ　「目的地にたどり着く為にも、気力は高い状態を保たなくてはいけない。気力の回復を試みるのよ」

(2)
ローズ　「気力が落ち込んでいるわ、スネーク」
ローズ　「先に進む前に、出来るだけ気力を回復しておいた方がいいわ」

■アウター・ヘイブン：マイクロ波通路

【マイクロ波に注意】リアルタイム無線
※開始直後
オタコン　「スネーク、マイクロ波が放射されている！」
オタコン　「そこにいるだけでダメージを受けてしまう！」
オタコン　「早くそのエリアを抜けるんだ！」

【時間切れ間近】リアルタイム無線
※時間切れが迫っていたら
オタコン　「スネーク、時間がない！」
オタコン　「お願いだ、どうか急いでくれ！」
オタコン　「頼む！」

【オタコン応援汎用】リアルタイム無線
※連打が止まった時の応援汎用
(1)
オタコン　「(どうしたんだ) スネーク！」
(2)
オタコン　「スネーク、立って！」
(3)
オタコン　「頑張れスネーク！」
(4)
オタコン　「進んでくれ！」
(5)
オタコン　「進むんだ、スネーク！」
(6)
オタコン　「アクションボタンを連打するんだ！」
(7)

オタコン　「ボタンを連打して、スネーク！」
【時間切れ】ゲームオーバー
※時間切れでゲームオーバー
オタコン　「ああ……スネーク、雷電が殺られた……！」
オタコン　「君は独りになってしまった……もう何の支援も出来ない」
オタコン　「ダメだ。もう、作戦の成功はあり得ない……」

EPILOGUE

Naked Sin

裸の罪

【結婚式・病室／ポリデモ】結婚式、病室、墓地、ノーマッド

——結婚式場。着陸しているノーマッド（輸送機）正面からの絵。あおりで上は空。飛んでいるようにも見える。

——カメラ変わって、ノーマッド機内。花嫁姿（腰にはデザートイーグルのホルスター）のメリルの世話を美玲（メイリン）がしている。二人、姿見を見ながら、

美玲（メイリン）「奇麗よ」

——その姿見に、キャンベルが映る。

キャンベル「おめでとう」

——メリルはうつむいたまま無言。

——顔を見合わせるキャンベルと美玲（メイリン）。

——立ち去ろうとするキャンベルを呼び止めるメリル。

メリル「大佐」

——キャンベル、振り向くと銃口を向けられている。キャンベル、メリルの方に歩み寄ると、銃口を握り、自分ののど元へ導く。

——マガジンを抜き、銃を下ろすメリル。

メリル「私と一緒に」

メリル「ヴァージンロードを歩いてくれる」

——メリル、デザートイーグルをキャンベルに預ける。

キャンベル「私を許してくれるのか?」

メリル「許した訳じゃない」

メリル「あなたを憎んだ私を、あなたに預けておく」

——メリル、マガジンもキャンベルに預ける。

キャンベル「そうだな、時間はいっぱいある」

——うなずくメリル。表情は少し和らいでいる。

——感動の場面に泣いてしまう美玲(メイリン)。ブーケをキャンベルに渡す。

——キャンベル、メリルにブーケを差し出して、

キャンベル「奇麗だよ」

——メリルの目にも涙が見える。
——キャンベル、メリルの右隣に立ってエスコート（スーツ姿のキャンベル、冒頭のスネークの冗談の通りになる）。
——ヴァージンロードを歩き出す二人。カーゴドアから赤い絨毯が伸び、その先にジョニーが待っている。
——エド（神父姿）、ジョナサン、美玲（メイリン）、オタコン、キャンベル、サニーが拍手で迎える。

エド「今日、この二人は結ばれます」
エド「私達はこの記念すべき場に立ち会うことができました」
エド「ここに生あることを心より感謝し、二人の永遠の愛を共に祈りましょう」

——祈りを捧げるジョニーとメリル。そして参列者。多くの犠牲者の元に今の幸せがある。

エド「では、この新しいチームにファーストミッションを遂行してもらいましょう」

——ジョニーとメリルの周りに集まる参列者。なぜか皆にやにやしている。
——とまどうジョニーに対して、「早くやれ！」と目配せするエド。
——ジョニー、意を決して、メリルに口づけしようとすると…。
——クラクションを鳴らして近づいてくる装甲車が一台出現して、キスは中断！
——物ものしく、ヴァージンロードに横付けされる装甲車。装甲車は従来のドレビン車のオクトカ

ム。「EYE HAVE YOU」のスローガンが書かれている。
――ハッチを開けてドレビンが降りてくる。

ドレビン「間に合ってよかった」
オタコン「（あまり歓迎していない）ドレビン！」
ドレビン「お届けものだ」

――迷彩の装甲車がオクトカムして、純白の結婚式仕様になる。
――「EYE HAVE YOU」のコピーは「DREBINS WE HAVE YOURS」に変わっている。
――続いて後部ハッチが開くと、中は一面の白い薔薇。
――ハッチ脇に立つドレビンが指をパチンと鳴らすと、花びらが装甲車の中から舞い上がる（内部に業務用巨大扇風機がある）。
――ヴァージンロードを舞う花びらに喜ぶ面々。

ドレビン「ドレビンズ社からの、フラワーシャワーと」

――ドレビン、再び指をパチンと鳴らすと、それを合図に装甲車の中からハトが飛び立つ。
――ドレビン、一世一代の手品。

ドレビン　「俺からのサービスだ」

――沈む夕日に向かって飛び立つハトを誰もが幸せな表情で眺めている。

――サニー、ふと前方に目をやると地元の少年（海岸から釣りで帰ってきた）が興味津々でこちらを見ているのに気付く。手を振るサニー。気付かれて、少し警戒する少年。サニーは親代わりのオタコンに新しい友達を作っていいか許可を求めようとする。

――カメラその視線の流れで、装甲車のハッチ内へ。中にはシャンパンをラッパ飲みするグレイ（グレイはもう炭酸飲料に興味が無い）。そしてゲップ。

――そんな中、中断していたファーストミッションを遂行しようと、ジョニーがメリルを抱き寄せる。見つめ合う二人。口づけを交わす二人。苦難の末にたどり着いた幸せをかみしめる参列者達。

――長いキスを終えたメリル、ブーケを美玲（メイリン）に渡そうと投げ上げるが、ジャンプしたグレイに奪われてしまう。あきれ顔の美玲（メイリン）。笑顔の参列者。抱き合って喜ぶジョニーとメリル。

――しかし、美玲（メイリン）がスネークが居ないことに気付く。隣に立つオタコンに対して、

美玲（メイリン）　「スネークはまだ（来れないの）？」

オタコン　「ああ（動揺）」

オタコン　「一体、何してるんだろう」

オタコン　「ほんと、時間にはルーズなんだから（オタコンは理由を知っている）」

──笑顔のオタコンだが、そう言い終わると寂しげな表情になり、目に涙を浮かべる。その表情がメリルに見えないように何気なく背中を向ける。オタコン、喜びの輪に加わっていない、もう一人の男に気付く。

──装甲車のハッチの近くに一人で立っているキャンベル、ここには居ない男に感謝の言葉を漏らす。

キャンベル 「スネーク、ありがとう」

──F.O.

──従軍病院。とある一室。外から穏やかな陽が差している。

──上半身が裸の男が横たわっている（顔は見えない。スネークかもしれないと思わせる）。

──ドアがノックされるが、男は返事をしない。もう一度ノックの音。

──起き上がる男（ここで雷電だとわかる）。身体には皮膚を縫い合わせた痕が無数にあり、サイボーグではなくなっている。

──ドアが開き、ローズマリーとジョン（ローズの子供）が入ってくる。

──雷電、客人を見て驚く。手にはお見舞いの花束（白い薔薇、ドレビンが飛ばしたものと同じ）。

雷電 「ローズ…」

――雷電はローズの突然の訪問を歓迎していない。態度も冷たい。

――ローズは雷電に近付いてくると、雷電は身体を反転して背を向ける。ローズ、一瞬、雷電を見てひるむが中に入る。スタスタと一気に近づくローズ。

ローズ　「ジャック、具合はどう?」

雷電　「ああ」

ローズ　「…座ってもいい?」

雷電　「…」

――無視、反応しない雷電。

――机に花を置くと、ベッド横のパイプ椅子を引き寄せ、腰掛けるローズ。

――ジョンは座らず、ローズの横に立つ。

――雷電から目を離さないジョン。

――雷電はジョンをちらりと見るが、再び背を向けてしまう。

ローズ　「ジャック」

――椅子から立ち上がり、ベッドに詰め寄るローズ。

ローズ　「逃げないで。話を聞いて欲しい」

――背を向けたままの雷電。

雷電　「何しに来た。俺を笑いにでも来たのか…」

――雷電の言葉にローズ、悲しそうに首を振ると、ベッドに腰掛け、ジョンを目の前に導く。

ローズ　「ジャック、この子を見て」

――雷電、背を向けたまま。鏡でジョンが見える。

雷電　「キャンベルの子?」

ローズ　「違うわ…」

――ローズ、長い沈黙。

ローズ　「(照れながら) あなたの子よ」

雷電　「俺に子供はいない」

――ローズ、背後から雷電の肩をつかんで、自分の方に向かせると、

ローズ　「あなたの子なの!」

雷電　「（疑問）君は流産したと…」

ローズ　「あれは嘘。ちゃんと授かった」

雷電　「えっ？」

　　　　――ローズ、ジョンを雷電の目の前に立たせて、

ローズ　「キャンベルさんは私とこの子を守るために、家族を装ってくれていたの」

ローズ　「あなたが使命を果たすまで…」

ローズ　「『愛国者達』の監視を逃れる為に」

雷電　「なんだって？」

　　　　――半身になる雷電。

ローズ　「（あの人は）メリルさんにも黙っていたのよ。自分を（の家族まで）犠牲にしてまで、
　　　　私達を守ってくれていたの」

雷電　「まさか…」

　　　　――雷電、起き上がりジョンを見つめる。

ローズ「ごめんなさいジャック。言えなかったの」
雷電「この子が…？」
ローズ「ジョン、（お父さんに）ご挨拶は？」
　　――ローズ、軽く背中を押す。
雷電「俺の息子（マイ・サン）…」
雷電「小さな（リトル）ジョン…」
　　――雷電、ジョンに恐る恐る手を伸ばす。
　　――修復され、より人間の手に近い雷電の手のひら。ジョンの無垢な頬をなでようとする。
　　――雷電の手が届きそうなところでジョン、驚いた様子で奥に逃げる。
　　――雷電、身を乗り出し、ベッドに腰掛けて、
雷電「（やっぱり）俺が怖いか？」
　　――ジョンは目をじっと、雷電から離さない。恐怖と云うより、興味津々。雷電、諦める。
　　――雷電、自分の身体を見る。
雷電「怖いのも当たり前だ」

――心配そうに見つめるローズ。

雷電「いいんだ」

――気まずい時が流れ、ローズは頭を垂れる。

ジョン「ううん、怖くなんかないや」

――無邪気に答えるジョン。

――唖然とする雷電。ローズを見る。ローズも訳がわからない。

ジョン「かっこいい。アニメのヒーローみたい」

――ジョンは、左手に持っていたオモチャの刀で剣術のマネをする。刀でヒーローのポーズを取るジョン。

――思わず、笑顔を取り戻す雷電。

ローズ「…ジョン」

――ローズも感激してジョンに駆け寄り、頭をなでる。そして、再びジョンの背中を押すようにして、雷電の側へ駆け寄る。

――ジョンをしっかりと抱きしめる雷電。雷電の目から涙。ローズに視線を送る。

雷電「ローズ、俺はもう逃げやしない（人生や結婚生活を恐れやしない）」

――雷電、ジョンを抱き上げて、自分の太ももの上に座らせる。

ローズ「私も、もう怖くない（雷電を）」

――ローズも涙を流して頷く。

雷電「（悪かった）もう、寂しい思いはさせない」

――雷電に抱きつくジョン。ローズ、ジョンの上から雷電に抱きつく。

――泣き笑いのローズ、鏡に映った幸せそうな自分達の姿を見て微笑む。その視線に気付き、雷電も鏡を見て、

雷電「まるで…、美女と野獣（ビューティー&ビースト）だ」

――ローズ、首を横に振って、

ローズ「いいえ、あなたは野獣（ビースト）じゃないわ。私の夫であり、この子の父親よ」

――雷電、ローズを見つめる。ローズも身を正して、

ローズ　「そして私も…、あなたの良き妻、この子の良き母親になれるようにがんばる…」

――再び、しっかりと抱き合う家族。

――F.O.

――墓地。物語冒頭の墓地。大樹の下を歩くスーツ姿の男。

――二つの墓の間に立ち止まった男は、スネークだった。

――スネークは、まず左の墓（ザ・ボスの墓）を見る。ザ・ボスの墓には、白いユリ（純潔）の花束が献花されている。

――続いてスネーク、右の墓の前に立ち止まる。墓碑には「ＡＨＥＲＯ ＦＯＲＥＶＥＲ ＬＯＹＡＬ ＴＯ ＴＨＥ ＦＬＡＭＥＳ ＯＦ ＷＡＲ，ＲＥＳＴＳ ＩＮ ＯＵＴＥＲ ＨＥＡＶＥＮ １９３Ｘ－１９９９」と刻まれている。

【字幕】戦火に忠を尽くした英雄、アウターヘブンに眠る

――ここにスネークのモノローグが入る。

戦争は変わった
ひとつの時代が終わり

俺たちの戦争は終わった
だが、俺にはまだ
やらなければならない事が残っている
最後に課せられた罰は
俺の遺伝子、文化的遺伝子（ミーム）をこの世から抹消する事
それが俺に残された最後のミッション

――煙草に火をつけるスネーク。一口吸うと携帯灰皿に捨てる。スネーク、右手に握ったハンドガン（Operator）を見つめる。マガジンを抜き去り、遊底をスライドさせて、薬室に一発の弾丸を込める。
――最期のミッションは一発でいい。
――墓石の前に跪くスネーク。銃口を咥え、引き金に指をかける。
――カメラ、上空を舞う花びらを映す。
――そして、銃声。
――F.O.

――結婚式場。式場では、音楽（ワルツ）に合わせて手拍子をする面々。サニーは、Mk. Ⅲをコントローラで操作しながら、音楽に合わせて踊っている。ジョニーは踊る相手を探して、右往左往。
――カメラ、引きながら、白い装甲車の近くで、その様子を見守るドレビン。ドレビン、シャンパンをラッパ飲み。歩み寄るオタコンに話しかける。

ドレビン「アルコールっていいもんだな（ゲップ）」

——ドレビン、少し酔っている。ナノマシンが機能しなくなったため。

——オタコン、ドレビンの横のパイプ椅子に腰掛けながら、

オタコン「酒を飲むとは知らなかった。いつもは炭酸だろ？」

ドレビン「嫌いだった訳じゃない。炭酸を飲んでいたのはナノマシンとの相性がいいからだ。アルコールはナノマシンが強制的に分解してしまうんだよ」

オタコン「なるほど、もうその必要もないものな」

ドレビン「まあ、喜んでばかりはいられねえ。SOP（ソップ）の保護が無くなった途端、自分を見失った連中も多いからな」

オタコン「SOP（ソップ）依存から抜けきれず、身体の不調を訴えているという『SOP症候群（ソップス）』の事かい？」

ドレビン「ああアルコールもそうだが、いろんな制御がなくなった訳だからな。みんな丸裸（ネイキッド）になっちまった」

オタコン「噂では約1割以上も発症しているらしい。『愛国者達』が無くなったとはいえ、

結果オーライとは言えない」

ドレビン「実をいうと俺、ATセキュリティ社の社員じゃないんだ」

――オタコン、怪訝な顔。

オタコン「え？」

ドレビン「俺は『愛国者達』に育てられた。武器洗浄人（ガンロンダラー）としてな」

オタコン「そうだったのか？」

ドレビン「俺は物心がついた時、既に『神の抵抗軍（LRA）』（ウガンダ内戦の反政府武装勢力）にいた。誘拐され、戦闘を強要されたんだ」

ドレビン「そうさ、少年兵って奴さ。親も兄弟も戦争に殺された。戦争孤児って奴さ」

――ドレビン、頭についた大きな傷を照れたように、指でなぞる。

ドレビン「その後、奴等に拾われて、ビジネスをみっちり仕込まれた」

ドレビン「俺は893（ヤクザ）番目のドレビン。世界中に同じような仲間が沢山いる」

ドレビン「武器洗浄（ガンロンダリング）なんてもんが出来たのも、（笑う）奴らのお陰だ」

ドレビン「実は最初から、あんたたちを支援するよう命令されていたんだ」

オタコン　「何だって…」

ドレビン　――オタコン、気分を害する。席を立ち上がって、立ち去ろうとする。

　　　　　「怒るなって」

　　　　　――ドレビン、オタコンの肩をつかんで引き止める。

ドレビン　「奴等の指示で動いていたのは俺だけじゃないんだ」

オタコン　「え？・」

　　　　　――ドレビンが目線を送る。その目線を辿ると、談笑しているメリル、ジョニー、エド、ジョナサンがいる。

オタコン　「メリル達が？・」

ドレビン　「本人達に自覚はないだろうが」

ドレビン　「ラットパトロール・チーム０１…」

　　　　　――ドレビン、地面に「ＲＡＴ　ＰＴ　０１」と書きなぐると、ハンカチで文字の上部を撫でるように払う。すると、文字の並びが「ＰＡＴＲ１ＯＴ」に変わる。

オタコン「（読み上げて）ＰＡＴＲＩＯＴ（愛国者）」

ドレビン「（他人事）ナメられたもんだな」

——オタコン、「ＰＡＴＲＩＯＴ」の文字を見ながら。

オタコン「でも何故？」

ドレビン「リキッドの陰謀は当然、『愛国者達』を脅かす。だから、あんた達にリキッドを阻止して欲しかったんだ」（本当はビッグボスらを狙ったＦＯＸＤＩＥが埋め込まれている）

オタコン「結果は期待通りじゃなかったろうけど」

ドレビン「まあ、結果的にシステムは崩壊、『愛国者達』は消えちまった」

オタコン「君はお役御免か」

ドレビン「とんでもない」

——立ち上がり、装甲車の文字を指差す。

ドレビン「〝ＤＲＥＢＩＮＳ（ドレビンズ）〟。世界中のドレビンをかき集めた」

ドレビン「これからは自分達のために働く」

ドレビン「もう俺たちは駒（ポーン）じゃない」

——ドレビン、足下がフラフラしている。

オタコン「酔ってるのか？」

ドレビン「これまで単独行動主義（ユニラテラリズム）を貫いてた米政府も再建を始めたらしいが、ＰＭＣの介入飽和で世界中で破綻した解体国家（Failed State）の負債額は尋常じゃない」

ドレビン「問題は何処がそれを補填するかっていうところだな」

ドレビン「新政府はＰＭＣ企業改革法を施行して抑制するつもりだろうが、戦争経済にどっぷり浸かった彼らにはどうにも出来ないだろう」

ドレビン「新世界秩序（NEW WORLD ORDER）じゃないけど、戦争経済主導の世界秩序は終わりだ」

ドレビン「多国間主義（マルチラテラリズム）の視点を持った国連が重要になって来るはず。国連復興だ」

ドレビン「冷戦の時代に、ある大統領（JFK）が言ってたな。〝国連の発展こそが戦争に代わる〟と」

ドレビン「まあ、とは言え…、国連は前世紀の遺物だからな。それにある意味、国連も歴史上の起こりは『愛国者達』に近いしな」

——どうなるやら、というように首を横に振るドレビン。ドレビンはひとりで演説している。こんなに人間くさいドレビンを見た事がないオタコン。なぜだかうれしい。

オタコン　「そうか、ナノマシンの制御がなくなったから酔ってるのか」

——ドレビンは、手振りを交えながら、皮肉を言う。

ドレビン　「CRUSH（クラッシュ）」

ドレビン　「MIX（ミックス）」

ドレビン　「BURN（バーン）を繰り返す」

——サニーが走りながらオタコンに近づいてくる。楽しそう。

サニー　「ねえ、Mk.Ⅲ（マーク・スリー）をあげてもいい？」

オタコン　「え？（なんで？）」

サニー　「（ややシャイ）…私、友達できちゃった！」

——サニーが指差す場所には、先ほどの男の子が立っている。サニーが手を振ると、元気よく手を振りかえすが、すぐにMk.Ⅲの操作に夢中になる。

サニー　「地元の男の子。言葉は通じないけど、なんか気が合っちゃって」

サニー　「私の初めての、『外（アウトサイド）』の友達…」

——自分たちとしか付き合わなかったサニーが言葉の壁を越え、普通の少女として生きようとしている。言葉もちゃんと話せている。オタコンはうれしい。

オタコン「そうか、よかったな」
オタコン「サニー、もう『外』で暮らしても大丈夫だよ」

——オタコン、ノーマッドを見ながら、

オタコン「サニー、君の人生は、君のものだ。『内(ここ)』だけが避難所(ヘイブン)じゃない」
サニー「綺麗な太陽…」

——オタコンも頷く。

サニー「外の世界(サニーサイド)もいいかも」

——と、思い出したようにサニーの笑顔が消える。そして不安そうに話す（察知している）。

サニー「スネークは、いつ戻ってくるの？」
オタコン「うん。スネークは」

——答えを探すオタコン。

オタコン　「病気なんだ。だから療養の旅に出るんだ」

サニー　「私達は一緒に行かないの?」

オタコン　「僕らは、(行かない) 邪魔できない」

サニー　「…もう会えないのかな? (サニーも理解している)」

オタコン　「スネークは頑張りどおしだった。だから、ゆっくり休む必要があるんだ」

——オタコン、涙ぐみそうになり、サニーに背を向ける。涙声のオタコン。サニーが泣き声に気付く。

サニー　「泣いてるの? ハル兄さん…」

オタコン　「いいや、泣いてなんかない」

——振り向いて、無理矢理笑うオタコン。オタコン、メガネがずれている。

——サニーは、笑って自分の眉間を人差し指でクイクイと押してオタコンが眼鏡を直すマネをする。

——オタコンはその表情を真似て眼鏡を直して見せる。

——沈む太陽を見つめながら、スネークのことを想う二人。

——F.O.

——エンドロール

【ビッグボス登場／ポリデモ】墓地

——地面に手をつき、喘ぐスネーク。

——右手に握られたハンドガン（Operator）の遊底（スライド）が後退したままなので、弾丸は発射されている。

——つまり、自殺はできなかった。どうしても死ねないスネークの焦燥。惨め。

ビッグボス 「（ＯＦＦ）そうだ、それでいい」

——声に顔を上げるスネーク。

ビッグボス 「まだ逝く必要はない」

ビッグボス 「また逢えたな、スネーク」

——スネークが腰を上げると花畑にコート姿のビッグボスが立っている。

スネーク 「ビッグボス？」

——ここでもハトが飛び立つ！　結婚式と同じハト。

【タイトル表示】

DEBRIEFING Naked Son 裸の息子

【字幕】ビッグボス　大塚 周夫

——老人はビッグボス。ソリダスから両手足、右耳、リキッドの遺体から内臓の殆どは臓器移植されていた。
——顔はほぼ老スネークと同じ。ビッグボス、銃（パトリオット）を手に、スネークに近づいていく。
——スネーク、ハンドガンにすばやくマガジンを装着し、銃口をビッグボスに向ける。
——ビッグボス、銃は構えず、戦意はない。銃を下ろす。
——スネークは警戒を解かない。
——一歩、スネークに歩み寄るビッグボス。もう一歩、スネークに歩み寄るビッグボス。
——ビッグボス、もう一歩スネークに歩み寄ると、再びパトリオットをスネークに向ける。
——対応して、銃口をビッグボスに向けるスネーク。
——ビッグボス、持っていた銃を落とすと、すかさず、CQCでスネークの手を捕らえ、スネークをしっかりと抱き寄せる。

スネーク　「な?・」

——その行動に唖然とするスネーク。両手はぶらり。
——ビッグボス、耳元に聞こえるように云う。

ビッグボス　「もういいんだ、息子よ。戦う事はない」

——抱きしめる腕に力を入れるビッグボス。実はスネークの体内の「ＦＯＸＤＩＥ」を自分に感染させる為。

ビッグボス　「いや、兄弟というべきか」

スネーク　「何を…？」

ビッグボス　「もう終わった。銃を捨てて生きていいんだ（もう駒である必要はない）」

——ビッグボスがスネークから銃を奪う。マガジンを抜き、薬室の弾丸も排出するとハンドガンを捨てる。

ビッグボス　「全ては（私たち）年寄り達が始めた事」

ビッグボス　「元凶となった全ては、閉ざされ、過ちの時代は終わった」

ビッグボス　「最後に遺されたこの私も…、もうすぐ終わる（ＦＯＸＤＩＥで）」

スネーク　「…何故、生きているんだ」

ビッグボス　「東欧でリキッドに燃やされたのは、私ではない」

ビッグボス　「あれは、ソリダスと呼ばれた、複製（クローン）だ」

【ビッグボス登場2／アーティストデモ】墓地

——回想。東欧、修道院で見たビッグボス（ソリダス）の遺体。

ビッグボス「私は体内にナノマシンを埋め込まれ、代理AI、『J．D（ジョン・ドゥ）』に強制的に昏睡状態を保たされていた」

ビッグボス「ゼロと、そしてゼロが遺した代理AIは、ソリダスを完全に私だと信じた」

ビッグボス「ソリダスは私の完全なるクローン」

ビッグボス「肉体的な意味だけではなく、私の意志（SENSE）は完全に幽閉されていたのだ。お前が遭遇したBB達を拘束（ロック）していたものとも通じる技術だ」

ビッグボス「私が目覚めるためには、なんとしてもシステム（AI）を破壊する必要があったのだ」

ビッグボス「AIである『J．D（ジョン・ドゥ）』の破壊と、人間であるゼロの死」

ビッグボス「私の覚醒と、『愛国者達』の終焉。それがオセロットとEVAの目的だった」

ビッグボス「『G．W』にウィルスが流し込まれる直前」

——ウィルスのデータ説明。

ビッグボス「『G．W』の実体化によってのみ、『J．D（ジョン・ドゥ）』への道が開かれた」

ビッグボス「そこでこの男、ゼロの居場所を知ることが出来た」
ビッグボス「私にとって、そして彼らに、ナオミにとって、それこそが重要だった」
ビッグボス「彼らは、そのために大掛かりな計画を実行した」
ビッグボス「EVAは私の身体を奴等から奪った。足らない部品をソリダスやリキッドからかき集め、私の身体を再生した」
ビッグボス「オセロットはシステム（AI）の目を欺くため、ナノマシンとサイコセラピーによって、自らの精神にリキッドの人格を移植」
ビッグボス「自己暗示をかけ、リキッドの精神的なドッペルゲンガーとなった」
ビッグボス「ナノマシンや情報統制、遺伝子統制を突き詰めたところで、人を自由に操る事など、ましてや人が他人に完全になりきるなど、不可能だ」

【ビッグボス登場3／ポリデモ】墓地

――花畑の二人に戻る。

ビッグボス「だがある環境下で役割を担わせて、特定の人格の振りをする事は出来る」（S3計画の延長線上にある考え方を元にオセロットに使う）

【フラッシュバック】オセロット、MGS1の画像

——ゆっくり歩きだすビッグボス。ついていくスネーク。

ビッグボス「（戦友への哀悼の気持ちを込めながら）猫（オセロット）は蛇（スネーク）への擬態を好むものだ…」

——ビッグボス、立ち止まる。戦友の死から敵対するゼロへ気持ちが移る。

ビッグボス「ゼロ。全てはこの男から始まったのだ」

——ビッグボスが半歩横に移動すると、スネークの目の前に、車椅子に乗せられたゼロが現れる。ゼロは、人工呼吸器によって生かされている。既に生ける屍。

【ビッグボス登場4／アーティストデモ】墓地

——株式市場やオフィスビル群、通勤する会社員などの実写映像。兵器工場や武器売買、倉庫など、工業。

ビッグボス「ゼロは年老いて、『愛国者達』はもはや実体のない組織が運営している」

スネーク「実体のない組織…？」

ビッグボス「代理人（AI）はゼロが生み出した巨大な循環の一部に過ぎない」
ビッグボス「軍産複合体を形成する各企業や営利団体、研究機関…」
ビッグボス「それらは資金源となる口座から、代理人（AI）の算術分配によって、自動的に振り込まれた予算で活動を行っていた」
ビッグボス「兵器研究開発、投資、資産運用、市場開拓を含む…」
ビッグボス「人も、システムも企業も、それらを保護する法律でさえ」
ビッグボス「そして、政治も経済も、非常に画一的なシステムの上を反復していたに過ぎない」
ビッグボス「誰も、それが仕組まれた事、それが単なる規範だとは気づかなかったろう」
ビッグボス「極めて単純化された、規範という神経回路の集団、それが『愛国者達』だった」
ビッグボス「意志や変革のない普遍性、それが『愛国者達』の正体だった」

——回想シーン。

——紛争映像。戦争映像。ＰＭＣ。

ビッグボス「しかし、ある時、その〝規範〟は単一分裂を止め、突然変異を起こしはじめた」
ビッグボス「生命の誕生といってもいいだろう。戦争という新たな生殖方法を手にしたのだ」
ビッグボス「統一国家として計画されていた〝規範〟は急速に〝戦争〟というビジネス、戦争

経済へと傾倒（堕落）していった」

ビッグボス　「〝戦場浄化〟という政治的な大儀が触媒にもなった」

ビッグボス　「それはもはやゼロの意志(SENSE)でもなく、誰の意志(SENSE)でもなかった」

ビッグボス　「まさにゼロの意志を継ぐ、代理人(AI)である〝規範〟が生殖を経て、初めて命をもった瞬間だ」

ビッグボス　「そもそもゼロが目指したのは、『ザ・ボスの遺志(SENSE)』を継ぐ統一国家、『内なる世界』を確立する事だった」

ビッグボス　「しかし、彼の意志(SENSE)は（代理ＡＩには）引き継がれる事はなかった」

ビッグボス　「やがて、『Ｊ．Ｄ(ジョン・ドゥ)』は気ままに増殖し続ける、時代(SCENE)そのものに変わった。時代は国家より、経済行為を選択した」

ビッグボス　「産業革命以来のデジタル革新を手に、一人歩きした時代は、歪(いびつ)な経済革命を、戦場革命を産み、質量のない新たな世界体系を創出した」

ビッグボス　「そこにはイデオロギーも、主義も、理想も、あまつさえ、ザ・ボスが固執した『忠』さえもない」

ビッグボス　「それが戦争経済。それこそ、ゼロの思いも寄らなかった誤算だったに違いない」

【ビッグボス登場5／ポリデモ】　墓地

ビッグボス「米国のシステムが崩壊したいま、『愛国者達』が築き上げた社会も白紙に還った」

ビッグボス「全ての発端はこの男だ」

ビッグボス「この男が世界を破滅に導いた」

ビッグボス「しかし今はそのことすら解っていない」

ビッグボス「あれほど憎み合った私達が、再会して感じたのは…」

ビッグボス「懐かしさと、深い哀れみだ。不思議な事に憎しみは湧いて来なかった」

ビッグボス「そもそも、ゼロは私が憎かったのか？」

ビッグボス「いや、畏れていたのか？」

ビッグボス「それを聴くことすらできない」

――車いすのゼロ、排泄している。排泄マシンが吸飲。

ビッグボス「創設時のメンバーであるパラメディック、シギント、ＥＶＡ、オセロットはこの世を去った。（車椅子の老人を見下ろし）残るはゼロひとり」

――ビッグボス、車いすのゼロに近付く。

ビッグボス　「全てには始まりがある。始まりは、1ではない」

ビッグボス　「その遥か以前のカオス、世界は0（ゼロ）から生まれる」

ビッグボス　「0（ゼロ）が1に変わる瞬間、世界が動き出す。1は2になり、やがて10になり、100になる」

ビッグボス　「全てを1に戻しても解決はしない」

ビッグボス　「そうだ。ゼロを消さない限り、1はまたいずれ100に復活する」

ビッグボス　「ゼロの抹殺。それが私達（オセロット、EVA）の目的だった」

ビッグボス　「強大な『愛国者達』も元はたった一人の人間、たったひとりの欲望」

ビッグボス　「それが、肥大化してテクノロジーを吸収し、経済を操作し、いつしか怪物（ビースト）となった」

ビッグボス　「私達（初期メンバー）は、0（ゼロ）を10にする手助けをした」

ビッグボス　「私達にも罪はある」

ビッグボス　「だからこそ、自らの手で、ゼロを、無に返すのだ」

——ビッグボス、車いすの生命維持装置をオフにする。

——苦しむゼロ。それを見つめるスネーク。

——ゼロを背後から抱きかかえるビッグボス。

――その腕の中で息絶えるゼロ。

――ゼロに背を向け、歩き出すビッグボス。

スネーク　「あんたも、無（ゼロ）に還るのか？」

――ビッグボス、立ち止まる。

ビッグボス　「私も、三たび、お前によって抹殺されることになる」

ビッグボス　「ゼロがお前に仕込んだＦＯＸＤＩＥ（フォックスダイ）が、既に私の身体を蝕み始めているはずだ」

ビッグボス　「実は、ＥＶＡも、そしてオセロットも、お前のＦＯＸＤＩＥ（フォックスダイ）で殺されたのだ」

――驚くスネーク。

スネーク　「何！」

ビッグボス　「ナオミがそれを教えてくれた」

――ＦＯＸＤＩＥが効いてくる。胸を押さえるビッグボス。

スネーク　「どうした？」

――膝をついて痛みに耐える。近寄ろうとするスネークを手で制して、

ビッグボス　「（苦しそうに）お前は、私を殺すために、再度利用された」

ビッグボス　「『愛国者達』いや、代理人（AI）は私達を葬るため、再び同じ事を繰り返した」

ビッグボス　「所詮、プログラムだ。同じ事を繰り返すしか能がない」

——立ち上がろうとするが、くずおれるビッグボス。

ビッグボス　「すまんがな…、私を、彼女（ザ・ボスの墓）のところまで連れて行ってくれ」

——スネーク、ビッグボスを肩にかつぐ。

——息子の肩で安堵するビッグボス、初めて親父を助けるスネーク。

——肩越しでビッグボスは続ける。

ビッグボス　「もう一つ、ナオミから報告がある」

ビッグボス　「お前の体内で変異を遂げたかつてのＦＯＸＤＩＥ（フォックスダイ）のことだ」

ビッグボス　「新たなＦＯＸＤＩＥ（フォックスダイ）が、お前の体内で増殖を続けている」

ビッグボス　「これは同時に、古い変異型の増殖を妨げることとなった」

ビッグボス　「変異型は、新たなＦＯＸＤＩＥ（フォックスダイ）に苗床を奪われた。ナオミの経過観察で、変異型の減少が確認された」

ビッグボス　「じき滅び去ることになるだろう」
スネーク　「ということは、変異型は発症しない？」
ビッグボス　「変異型が、お前よりも長生きすることはない（笑）」
ビッグボス　「だが…、何事も、全ては再び繰り返す」
ビッグボス　「新たなFOXDIE（フォックスダイ）も、いつか変異を起こし、新たなる…、脅威となるはずだ」
ビッグボス　「それまで…お前が生きていればの話だが」

――ビッグボス、力尽きて、地面に倒れる。墓石に寄りかかってしばらく息を整える。

スネーク　「俺は、死ぬのか？」
ビッグボス　「老いは、誰にでも来る。止めることも、逃げることも出来ない」
ビッグボス　「これは…告知だ」
ビッグボス　「余命を、戦い以外に使え」

――なんとか、体勢を立て直すと、スネーク、再びビッグボスを担ぐ。ザ・ボスの墓はすぐ近く。

ビッグボス　「私はお前を、息子だと思った事はない」
ビッグボス　「しかし、一人の戦士として、一人の男として尊敬している」

ビッグボス　「あの時の私が、お前だったら」

【フラッシュバック】ＭＧＳ３画像／ザ・ボスの最期

ビッグボス　「あんな過ちは起こさなかったかもしれない」

ビッグボス　「私は、ボスを、この手で殺した時から、すでに死んでいた」

——ようやくザ・ボスの墓に辿り着く。スネークから肩を外すと、ビッグボスは墓の前に跪く。

ビッグボス　「ボス、あんたが正しかった」

ビッグボス　「世界を変える事ではなく、ありのままの世界を残すために最前を尽くすこと」

ビッグボス　「他者の意志（SENSE）を尊重し、そして自らの意志（SENSE）を信じること」

ビッグボス　「それが、あんたの、遺志（SENSE）だった…」

——最後の力で立ち上がり、墓に向かい、敬礼するビッグボス。

ビッグボス　「やっと…、あの時の行動の意味」

ビッグボス　「あなたの…、あんたの」

ビッグボス　「勇気の真実がわかった」

——敬礼を下ろすとスネークに向かって、

ビッグボス「私は、もうすぐ去る」

ビッグボス「不毛な抗争の最後の火種が消える」

ビッグボス「これで、元凶（ゼロ）は全て消える事になる」

ビッグボス「悪しき発端が0（ゼロ）に還った後、新たな未来である、1が生まれるはずだ」

ビッグボス「その新しい世界を…」

ビッグボス「蛇（スネーク）としてではなく、人（デイビッド）として、生きろ」

——握手をしようと手を伸ばすビッグボス。

——しばらく迷った後、スネーク、軽く手を取る。

——そのまま、膝を折ってくずおれるビッグボス。

——抱き留めるスネーク。

——苦しそうにあえぐビッグボス。

ビッグボス「いいか、我々も、ゼロ（愛国者達）も、リキッドやソリダス達も、自由を求めて血生臭い闘いを続けてきた」

ビッグボス　「国家、組織、規範、時代からの脱却。しかし、それらは何処まで行っても、『内（インサイド）』なる囲われた自由、リバティでしかなかった」

ビッグボス　「私は、ボスとは違う生き方を選んだとはいえ、所詮は同じ、リバティという囲いの中でのこと」

――ビッグボス、ザ・ボスの墓にもたれかかる。

ビッグボス　「しかし、お前に与えられたのは、フリーダム…、『外（アウトサイド）』へ向けた、自由だ…！」

ビッグボス　「ゲームや世相に翻弄される事もない」（スネークの戦いの終焉）

ビッグボス　「もう、運命に縛られる必要はない」

ビッグボス　「お前は、もはや、戦争の火種ではない」

ビッグボス　「その目で、外の世界を見ろ」

ビッグボス　「その身体も、その心も、お前のものだ」

――ビッグボス、葉巻（ハバナ）を取り出す。

ビッグボス　「私たちの事は忘れて、自分の為に生きろ」

――口に咥え、火をつけようとするが、ライターを落としてしまう。

ビッグボス「そして、新しい、余命を探せ…」

――口から葉巻も落ちる。

――ビッグボス、目をつぶり、意識が朦朧。目から大粒の涙。背中のザ・ボスの墓に向かって、

ビッグボス「ボス、蛇は一人で…、いや、蛇はもういらない」

――スネーク、落ちた葉巻を拾い、自分の口に咥える。ライターを拾って、火をつける。

――スネーク、火のついた葉巻をビッグボスに咥えさせる。葉巻を吸い込むビッグボス。

――かろうじて薄目を開けるビッグボス。スネークを見て顔を緩める。

ビッグボス「いいものだな（親子は、葉巻は）」

――ビッグボスの手から葉巻が落ちる。

――エンディングテーマ。

【スタッフロール】

――スタッフロール後、暗転し、ゲームロゴ表示。

オタコン　「待てよ、スネーク。忘れもんだ」

――と、煙草を投げる音。

――受け取るスネーク。

――スネーク、煙草を一度は口に咥える。

――少し考えて煙草を戻す。くしゃりと箱を潰す。

スネーク　「いや、煙草は止めた」

オタコン　「スネーク？」

スネーク　「健康に悪い（まだ死ねない）」

オタコン　「一体、何処にいくつもりだ」

オタコン　「僕らの闘いは終わったんだ。もう僕達がすべきことはない」

スネーク　「いや、まだ遣り残したことがある」

スネーク　「見届けることだ。この先、時代がどう進むか」

オタコン　「わかった。それじゃ、僕も一緒に行く」

スネーク　「俺はもうすぐ死ぬ。付き合う必要はない」

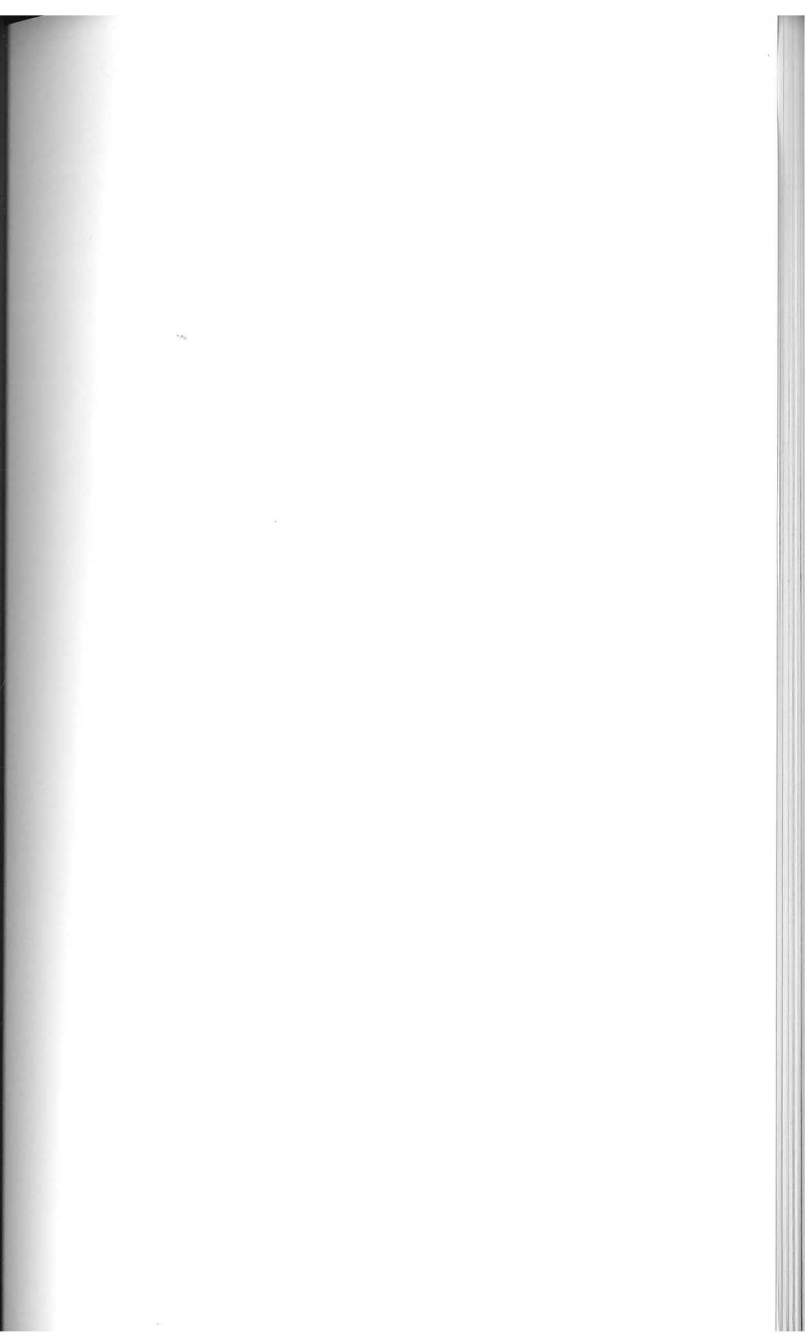
オタコン　「前に言ったよね」

オタコン　「スネークは『内《インサイド》』なるものを次の世代に伝える事が出来ない（子をなせない）」
オタコン　「遺伝子も文化的遺伝子《ミーム》も」
オタコン　「人工的に創られた怪物《ビースト》だから」
スネーク　「そうだ。俺は蒼いバラなんだ（自然界には存在しない）」
スネーク　「『美女と野獣《ビューティ&ビースト》』のような（相思相愛になって）ハッピーエンドは在り得ない」
スネーク　「俺は自分の姿を、野獣の余命を、曝し続けるしかない」
スネーク　「この時代の『内《インサイド》』なる陰として」
オタコン　「ああ、だから僕が必要なんだ」
オタコン　「目撃者《オーディエンス》がね」
スネーク　「目撃者《オーディエンス》？」
オタコン　「そうさ、スネークの最後に立ち会う『外《アウトサイド》』からの目撃者さ」
オタコン　「僕がそれを後世に伝える」
オタコン　「まあ、僕だけじゃないけどね、目撃者《オーディエンス》は（ユーザー）」
オタコン　「僕が君の全てを記憶する」
オタコン　「僕がスネークを見守る」

スネーク　「オタコン」
オタコン　「僕一人じゃ、サニーの目玉焼き（サニー焼き）は辛いからね」

【実写目玉焼き5／ムービー】

——実写映像。目玉焼きが三つ。初めて綺麗に焼ける。

サニー　「みんな、早く！　焼けたよ！」
サニー　「おいしそう」
サニー　「太陽みたい…、日はまた昇る（サニー・サイド・アップ）」

Distant Dialogues

無線会話集

「オタコン共通無線集」

■Mk.Ⅱについて

【Mk.Ⅱの様々な機能】リアルタイム無線
※初めてMk.Ⅱのマニュアル操縦を行った時
オタコン　「Mk.Ⅱは僕との通信ターミナルとしての役割以外にも、様々な機能を持っている」
オタコン　「色々操作を試して、どんな機能があるか確かめておいてくれ」

【Mk.Ⅱの操作圏外注意】リアルタイム無線
※操作圏ギリギリの時
オタコン　「スネーク、Mk.Ⅱが操作圏外に出てしまいそうだ」
オタコン　「注意してくれ」

【Mk.Ⅱが操作圏から外れた】リアルタイム無線
※操作圏から外れた時
オタコン　「スネーク、Mk.Ⅱのマニュアル操縦エリアの外に出た」
オタコン　「操縦を続ける必要があるのなら、再度Mk.Ⅱを装備品ウィンドウから選んでくれ」

【バッテリー切れそう】リアルタイム無線
※バッテリーがギリギリの時
オタコン　「スネーク、Mk.Ⅱのバッテリーが切れそうだ。注意してくれ」

【バッテリー切れ】リアルタイム無線
※バッテリーが切れた時
オタコン　「Mk.Ⅱの操作は僕が引き取った」

■注射器について

【注射器の機能】任意無線
※初回時〜第一段階最終が終わるまでのどこでも
オタコン　「スネーク、ナオミの注射は、君の気力をフルに回復してくれるみたいだね」
スネーク　「ああ、しかも何があっても減少しない」
オタコン　「うん。ただ、その効果は一定の時間に限られるようだ」
オタコン　「あまり頼りすぎないようにね」

【リバウンド注意】リアルタイム無線
※第一段階最終が終わった時点で（次のリバウンドを匂わせる）
オタコン「スネーク、注射の効いている時間が、短くなってるみたいだ」
オタコン「少しずつ効果が薄れているのか……？」
オタコン「次に使うときは、体に何か影響が出るかも知れない。注意してくれ」

【リバウンド発生】リアルタイム無線
※初めてのリバウンド発生時
オタコン「大丈夫か、スネーク⁉　気力が急に減ったぞ！」
オタコン「注射の影響か……？」

【リバウンドについて1】
※リバウンド発生後〜第二段階終了まで
スネーク「オタコン、お前の心配したとおりだ。一度は上がった気力が、一気に落ちた。注射の使いすぎが原因か」
オタコン「ああ、きっとリバウンドが起きたんだ」

スネーク「ダイエットなんてした覚えないが」
オタコン「……違うよ、スネーク。注射の連続使用で、君の体には耐性が形成され始めてるんだ。注射の効きが悪くなってきているだろう？　そして効果が切れると、つよい離脱症状（禁断症状）を引き起こす。さっき気力が減って嘔吐したみたいにね。危険だ、依存症の典型だよ」
スネーク「しかし、直接命に関わる訳じゃないだろう。今は緊急時のコンディション回復が優先だ」
オタコン「薬剤の組成は不明なんだ。今は大丈夫でもこの先ずっと同じという保証はない。使うにしても、出来るだけ慎重にした方がいい」
スネーク「……そうか、判った。やたらと打ちすぎないように気を付けよう」
オタコン「きっとだよ、スネーク」

【リバウンドについて2】
※リバウンド第三段階：LIFEまで減る
※第二段階のリバウンド無線を聞いていない場合
オタコン「思った通りだ、スネーク。注射の使いすぎ

で重篤な副作用が起きてる」

スネーク「気力もＬＩＦＥも、注射のあと一定時間でがた落ちか。ひどいもんだな……」

オタコン「離脱症状みたいなものだと思う。スネーク、これ以上注射を使うのは止した方がいい」

スネーク「……お前の心配は判るが、緊急時にはそうも言っていられない、コンディション回復が先だ。使うときには使うぞ」

オタコン「スネーク……！」

【リバウンドについて３】

※第二段階のリバウンド無線を聞いている場合

オタコン「スネーク、注射のリバウンドがひどくなってる。気力ばかりかＬＩＦＥまで下がり始めた。もう注射を使うのはよすんだ」

スネーク「まだ大丈夫だ、これですぐ死ぬってわけじゃ無い」

オタコン「ダメだスネーク！　君の体は確実にむしばまれている！」

スネーク「……リキッドに手が届くまで、それまで保てばいい」

オタコン「何を（言うんだ）……」

スネーク「命の使い方は、自分で決める」

オタコン「スネーク！」

スネーク「（まあ待て）もちろん！　だからといって死に急ぐつもりもない、安心しろ」

オタコン「……本当だね」

スネーク「当たり前だ、何のために老いた体に鞭打ってると思ってるんだ」

オタコン「……いいかい、くれぐれも無茶は控えてくれ。リキッドと決着をつける時のためにも、体にはなるべく負担をかけないようにしておくんだ」

スネーク「ああ、判ってる」

オタコン「約束だよ」

スネーク「了解だ。……オタコン」

オタコン「なに？」

スネーク「心配をかけてすまん」

オタコン「……そう思うなら、必ず無事に帰ってくれ。いいね？」

スネーク「……そうだな」

■その他

【.iPod会話】任意無線
※.iPodを装備中にSEND
オタコン「使ってくれてるね、.iPod」
オタコン「聴く音楽によっては君のストレスを軽減してくれるはずだ」
オタコン「疲れた時は、音楽でも聴いて休息してくれ」

【重たい武器】任意無線
※武器の総重量で移動速度が変わることの示唆
オタコン「スネーク、武器はそれぞれ重さが異なる」
オタコン「重い武器を持つと移動が遅くなる。覚えておいてくれ」

【起こし方】リアルタイム無線
※気絶・眠りの人の近くで
オタコン「スネーク。気絶したり眠っている人を起こしたい時は、相手の側にしゃがんでアクションボタンだ」

【ステルス効かない】リアルタイム無線
※ステルス迷彩を装備中、月光・仔月光の近くで
(1)
オタコン「スネーク、月光にステルス迷彩は効かないんだ! 逃げてくれ!」
(2)
オタコン「スネーク、無人兵器にステルス迷彩は効かない! 奴ら(無人兵器)に近づいちゃダメだ!」

「ローズ共通無線集」

※ローズの無線（ボス戦時以外の任意無線）は、SENDした時に、安全な状態（潜入フェイズ）か敵に追われている状態（潜入フェイズ以外）で分岐します。また特殊な状況下で発生する内容も存在します。

■潜入フェイズ以外

※「挨拶」＋「気力の状態」＋「安全になって」＋「励まし」＝1会話

【挨拶】

（1）
ローズ　「スネーク？」

（2）
ローズ　「スネーク、大丈夫？」

（3）
ローズ　「ローズよ」

（4）
ローズ　「はい、ローズです」

（5）
ローズ　「無事なの、スネーク？」

（6）
ローズ　「ごめんなさい、待たせたかしら」

（7）
ローズ　「用件をどうぞ？」

（8）
ローズ　「状況はどう？　スネーク」

（9）
ローズ　「大丈夫そうなの、スネーク？」

【気力の状態1】

※気力ゲージが75％以上のとき。「安全になって1」に続く

（1）
ローズ　「とりあえず気力の状態は大丈夫そうね」

（2）
ローズ　「気力の方は特に問題無さそうね」

（3）
ローズ　「気力はまだ残ってるみたいね」

【安全になって1】

※「励まし」に続く

（1）
ローズ　「でもあなたは今、敵に追跡されているわ。
　このままでは受けるストレスも大きい」
ローズ　「早く安全な状態を確保して」
（2）
ローズ　「だけど敵に追われている状況は、心理的に
　強い圧迫を受けるわ」
ローズ　「早く安全な状態に戻れるように努めて」
（3）
ローズ　「でもスネーク、あなたは今危険な状況にあ
　るわ」
ローズ　「油断せず、いち早く安全を確保して」

【安全になって2】
※以下は、ACT4のみの仕様。「励まし」に続く
（1）
ローズ　「けれど、そこは海に浮かんだ敵の本拠よ。
　いつ危険な状態に陥るか判らないわ」
ローズ　「油断しないで慎重に進んで、スネーク」
（2）
ローズ　「でも、その狭いエリア内に、あなたの姿を
　捜し求める数多くの敵がいるはず」
ローズ　「彼らとの接触は極力避けるよう気を付け
　て、スネーク」
（3）
ローズ　「だけどいつ、敵のパトロールと遭遇するか
　判らないわ」
ローズ　「見つからないように注意して欲しいの」

【気力の状態2】
※気力ゲージが75%以下のとき。「安全になって3」に
続く
（1）
ローズ　「気力の状態が芳しくないわね」
（2）
ローズ　「気力の状態に問題があるわね」
（3）
ローズ　「気力が充分ではないわね」

【安全になって3】
※「励まし」に続く
（1）

ローズ　「それに敵があなたの後を追っている。その状態では気力の回復は難しい」
ローズ　「一刻も早く安全な状態に移行して」
（2）
ローズ　「しかも敵の追跡を受けているような状態では、気力の回復は難しい」
ローズ　「少しでも早く安全な状態を確保するのよ」
（3）
ローズ　「だけど敵に追われているままでは、気力回復に集中できないでしょう」
ローズ　「まずは安全な状態に戻るのが先決ね」

【励まし】
（1）
ローズ　「……大丈夫、きっとうまくいくわ。くじけちゃ駄目よ」
（2）
ローズ　「……あなたなら出来るわ、スネーク。だから頑張って」
（3）
ローズ　「……あなたは必ず成し遂げる。私はそう信じている」

■潜入フェイズ時

※潜入フェイズ時は、気力ゲージの状態によって無線内容が4つに分岐します。
（1）気力ゲージが25％以下の場合＝「挨拶」＋「気力の状態」＋「心理学的ウンチク」
（2）気力ゲージが25％以上の場合＝「挨拶」＋「気力の状態」＋「気力回復方法のアドバイス」
（3）気力ゲージが75％以上で、何度もＳＥＮＤすると、「挨拶」＋「気力の状態」＋「応援」
（4）気力ゲージが75％以下で、気力回復しないまま何度もＳＥＮＤすると、「挨拶」＋「気力の状態」＋「忠告」

【挨拶】
（1）
ローズ　「あらスネーク」
（2）
ローズ　「こんにちは、スネーク」
（3）
ローズ　「何かしら、スネーク」

（4）
ローズ　「何かご用？」
（5）
ローズ　「どうかした？」
（6）
ローズ　「お話は何かしら？」
（7）
ローズ　「はい、こちらローズです」
（8）
ローズ　「ローズよ。ご用件は何かしら？」
（9）
ローズ　「お待たせ、ローズよ」

【気力の状態1】
※気力ゲージ〔75%～満タン〕
（1）
ローズ　「今のあなたは気力も充実してるわね」
ローズ　「特に大きな心配もないと思うわ」
（2）
ローズ　「うん、気力十分ね」
ローズ　「任務遂行に支障はないでしょう」

（3）
ローズ　「気力がみなぎっているわね」
ローズ　「これなら安心だわ」
（4）
ローズ　「気力の状態に問題は無さそうね」
ローズ　「このままミッションを続けられるわ」
（5）
ローズ　「さすがね、スネーク。ちゃんと気力を維持できている。それなら心配ないわ」
（6）
ローズ　「凄いわスネーク。こんな状況で気力を保っているなんて。あなたの言うとおり、私の助けは要らないかも」

【気力の状態2】
※気力ゲージ〔50%～75%〕
（1）
ローズ　「気力が減退しつつあるようね。大丈夫？」
（2）
ローズ　「ちょっと気力が落ちてきているみたい。気分はどう？」

（3）

ローズ　「多少気力が減少しているみたいね……」

（4）

ローズ　「気力の状態に、ちょっと問題があるようね……」

【気力の状態3】

※気力ゲージ〔25％～50％〕

（1）

ローズ　「気力の落ち込みが激しくなってきてるわね……」

（2）

ローズ　「かなり気力が減退しているわ。気力の回復を優先した方がいいわね」

（3）

ローズ　「相当気力が失われているわね。何か手を打った方がいいわ」

（4）

ローズ　「気力の状態がかなり良くないわ。気力の回復を試みた方が良いかも……」

【気力の状態4】

※気力ゲージ25％以下

（1）

ローズ　「気力の減退が著しいわ。すぐに回復を試みて」

（2）

ローズ　「気力が危険なレベルまで減少している。回復しなくちゃ」

（3）

ローズ　「それ以上気力を失っては危ないわ。回復手段をとるのよ」

（4）

ローズ　「気力の状態が、非常に危険だわ。すぐに回復策をとって」

【応援】

※気力ゲージが75％以上で、何度もＳＥＮＤすると、「気力の状態」に続いて「応援」

（1）

ローズ　「そんなに元気なら、私が心配する必要はないわね」

ローズ　「ミッションに専念しても大丈夫よ、スネーク」

（2）

ローズ　「スネーク、どうしたの？」

ローズ　「私でよければいつでも話し相手になるわよ。任務のお邪魔じゃなければ、だけど」

（3）

ローズ　「スネーク、あなたの気力は充実してる」

ローズ　「しっかり任務に取り組んで。頑張ってね」

【忠告】

※気力ゲージが75％以下で、気力回復しないまま何度もSENDすると、「気力の状態」に続いて「忠告」

（1）

ローズ　「スネーク、ストレスが溜まっているようね」

ローズ　「気力ゲージ回復のために、ストレスの緩和を試みて」

※バリエーション

ローズ　「気力が落ち込んでいるようね」

ローズ　「ストレス源（ストレッサー）を取り除いて、気力回復に努めて」

※バリエーション

ローズ　「スネーク、気力を回復した方がいいわ」

ローズ　「方法はいくつか説明したわよね。その場で行えるやり方でいい。早く気力を回復して」

※バリエーション

ローズ　「私のアドバイスに従って、気力回復に努めてみて」

ローズ　「そうすれば、あなたにとって必ずプラスになると思うの」

※バリエーション

ローズ　「ミッションを続けてゆくには、いま気力の回復を行うべきだと思う」

ローズ　「スネーク、あなたを信じている。どうか諦めないで」

■心理学的ウンチク

※気力ゲージが25％以下の場合、「挨拶」＋「気力の状態」に続けて、ストレス・アサスメント＆マネジメント関連のウンチク

【戦場でのストレス源】

ローズ　「スネーク、あなたはどういった時にストレスを感じるかしら」

ローズ　「実際にストレスの要因となるストレス源（ストレッサー）

は、いくつかの種類に分類することが出来るの」

ローズ「心理的なもの、社会的なもの、生物学的、化学的あるいは物理的なもの」

ローズ「戦場でいえば、敵の存在、戦闘環境、生物化学兵器、そして戦闘による負傷・糧食（レーション）までもが、ストレスを引き起こす要因となりうるの」

ローズ「だからスネーク、特に戦闘に巻き込まれたときには、体力（LIFE）だけじゃなくて気力にも注意する必要があるわ」

【ストレスの正体】

ローズ「ストレスというのは、「脅威」にさらされた時、自分を守るために起きる適応反応のことなの」

ローズ「これは誰の身にも起こる。どんな人であろうと、例外は無いわ」

ローズ「「恐怖」「不安」「心配」といった心の動きも、典型的なストレス反応の現れよ」

ローズ「こうしたネガティブな感情を認めたがらない人もいるけど、ストレスを管理（マネジメント）する為には、ストレスの存在をきちんと意識することがとても大切なの」

ローズ「敵を知らずに戦うことは出来ないでしょう？　それと同じことなのよ」

ローズ「気力を回復させるには、ストレスの原因を知る必要がある」

ローズ「気力が低下したときはまた私に連絡してみて」

【ストレス・アサスメント】

ローズ「ストレス管理（マネジメント）を効果的にするには、まず感じているストレスを査定（アサスメント）する必要があるの」

ローズ「ストレスを抱えた時の反応は人それぞれよ」

ローズ「例えば疲労感が増したり、喜怒哀楽の感情が激しくなったり、言動のつじつまが合わない状態になったり、またお酒やタバコといった嗜好品への依存度が高まるような場合もあるわ」

スネーク「煙草か…」

ローズ「睡眠障害や注意力散漫といった反応の他、

憂うつを感じる人もいれば、何事にも意欲がわかず、気力を失いがちになる人もいるわね」

ローズ「ストレスに対する反応は人によって様々。大事なのは自分がどういう状態になりやすいのかを把握しておくことよ」

ローズ「気力ゲージに注意して、どんなときに減っているのか把握しておくといいわ」

【ストレス・マネジメント：簡易型】

ローズ「ストレスを管理（マネジメント）するやり方の一つは、簡易型と呼ばれるものよ」

ローズ「喫煙、食事、飲酒、愚痴を言う、八つ当たりをする、ビタミン剤や睡眠改善薬などに頼る……」

ローズ「一時的な効果はあるけど、長持ちはしない。結果として依存症に陥る危険性も考慮しなくてはいけないわ」

※「煙草について」を聞いていたら、以下を追加。

ローズ「スネーク、あなたの場合、煙草が気力回復に役立っているみたいね。だけどそれに依存しすぎるのは危険だと思うわ。注意してね」

【ストレス・マネジメント：一般式】

ローズ「ストレス・マネジメントの一法として、一時的に問題から意識を遠ざける、という方法があるわ」

ローズ「テレビや映画、絵画、きれいな景色を見る。休暇を取って体を休める。趣味に没頭する……」

ローズ「これらの方法は確かに効果があるけれど、基本的には緊急避難措置と思った方がいい」

ローズ「どこかで根本的な問題の解決をする必要性は残っているの」

スネーク「ここに映画やＴＶを見られる環境はなさそうだ」

ローズ「絵画や彫刻は？　音楽を聴くのも良いわ。川や池みたいな水辺にいるのも効果があるかも。あなたの気力を回復してくれる場所や景色を探してみて、スネーク」

【ストレス・マネジメント：包括的】

ローズ　「ストレス・マネジメントの手法として、最も望ましいのが包括的な手法よ」

ローズ　「適切な量の運動、瞑想、心身に渡るリラックス……」

ローズ　「信頼できる専門家のカウンセリングを受ける」

ローズ　「体と心の両方にアプローチしてゆくやり方ね」

ローズ　「ただ、戦場にいる今のあなたにこの方法を取れと言っても、困難だと思う」

ローズ　「だから、簡易型でも一般式でもいい、その時にできる方法でストレス・マネジメントを試みること」

ローズ　「そうやって気力を高く保つの」

ローズ　「信頼できる専門家……かどうかはわからないけど、よかったら私にも相談してみて。何か役に立てることがあるかもしれない」

【CSPについて】

ローズ　「米軍では対イラク戦争以来、兵士達の心的外傷後ストレス障害、すなわちPTSDの対策として、CSPを戦場に導入した」

ローズ　「私が所属しているCSPとは兵士のメンタルケアを目的とした精神科医1名、心理学者2名、精神病理技法者（カウンセラー）3名からなる「戦闘ストレス小隊」のことよ」

ローズ　「支援部隊として戦闘員とともに戦場に入って、心理的障害を訴える兵士のメンタルケアをすることが役目なの」

ローズ　「最近ではSOP（ソップ）のナノマシンによる内科的治療が主流のようだけど」

ローズ　「兵士の感覚（SENSE）を直接操ることに対する倫理的問題は無視できない」

ローズ　「だけどこの情勢の中で、シェルショックのような症状を訴える兵士が激減しているのもそれで納得がいったわ」

【戦闘ストレス】

ローズ　「私の所属しているCSPでは、兵士達が抱える戦闘ストレスへのケアが主たる任務になっているわ」

スネーク「戦闘ストレス？」
ローズ「南北戦争で初めて認識され、第一次大戦当時はシェルショック、今日ではＰＴＳＤと呼ばれるようになった症状ね」
スネーク「「戦闘疲労（コンバット・ファティーグ）」というやつだな」
ローズ「そう。兵士たちの間ではそんな言葉で呼ばれてきた」
ローズ「外面的な負傷と異なって、心的負傷は目では見えない。それだけに発見が難しいわ。兵士の緊張状態や、戦闘不能状態から判断するしかないのよ」

【ＡＳＤについて】

ローズ「兵士達が心的外傷（トラウマ）を受けるような経験をした後、直ちにＰＴＳＤと同じような症状をうったえるケースがあるの」
ローズ「症状が二日以上継続すれば急性ストレス障害、つまりＡＳＤ、一ヶ月を越えて長期化するとＰＴＳＤと呼ぶのよ」
ローズ「ＡＳＤを放置するとＰＴＳＤになってしまう危険性があるわ。一刻も早い対処が必要なのよ」
ローズ「スネーク、あなたも何か心にストレスを受けるような出来事があったら、すぐに私に相談してね」

【４Ｒ＆ＰＩＥＳ】

ローズ「もし戦闘ストレスを抱えている兵士がいた場合、即応性のある対応が求められるわ」
ローズ「今日私たちはそれを、「４Ｒ＆ＰＩＥＳ」という言葉で言い表しているの」
ローズ「「４Ｒ＆ＰＩＥＳ」の「４Ｒ」は、四つの単語を指しているの」
ローズ「〝Ｒｅａｓｓｕｒａｎｃｅ（リアシュアランス）〟、保障、つまり安心を与えてもらうこと。例えば上官や先任者に「お前は大丈夫だ」と語りかけてもらったりすることね」
ローズ「〝Ｒｅｓｐｉｔｅ（リスパイト）〟、休息。心身をクールダウンさせること」
ローズ「〝Ｒｅｐｌｅｎｉｓｈｍｅｎｔ（リプレニッシュメント）〟、補充。食べたり、眠ったりして気力の再充電を図る

こと」

ローズ　「そして〝Restrain（リストレイン）〟、抑制。兵士に自分の気持ちを語らせ、落ち着かせる」

ローズ　「この4点を対応の核にするという考え方が「4R」よ」

ローズ　「「4R&PIES」の「PIES」の方は、「4R」を実施する際の心構えみたいなものね」

ローズ　「〝Proximity（プロキシミティ）〟、「近接した場所で」」

ローズ　「〝Immediacy（イミディアシー）〟、「素早く」」

ローズ　「〝Expectancy（エクスペクタンシー）〟、「回復の期待を持たせ」」

ローズ　「〝Simplicity（シンプリシティ）〟、「簡潔明瞭にケアする」」

ローズ　「この4つの頭文字をとって、「PIES」と呼んでいるの」

ローズ　「スネーク、これらの原則は、あなたが自分自身でストレス・マネジメントを行う際にも援用できるわ」

ローズ　「気力が低下しているときは、早めの、そして的確な対処を心がけるのよ。あなたならきっとうまくやれるわ」

【デブリーフィング】

ローズ　「最近、各国の特殊部隊では、隊員が戦闘ストレス状態に陥らないように、参加メンバー同士による話し合いの場、デブリーフィングを持つことが増えてきているわ」

スネーク　「復命としてのデブリーフィングなら昔からあるだろう」

ローズ　「それはそれで重要だけれど、ここで言っているのはストレス・マネジメントの方法としてのデブリーフィングのことよ」

スネーク　「そんなものがあるのか」

ローズ　「ええ、そう」

ローズ　「デブリーフィングのやり方は様々だけど、代表的な一例を挙げると……」

ローズ　「任務終了後、まず全員車座になって、ルールの確認をするの。その場で話されたことはそこだけの秘密、決して外では口外しないというルールをね」

ローズ　「次いで一人ずつ、誰からでもいいから、自分の身に起きた事実を話す」

ローズ　「そしてその時真っ先に考えたことを述べ、

ローズ　どう反応したかを伝える」

ローズ「その報告中に得られた「気づき」から思いこみを正し、最後に今の気持ちを再認識する」

ローズ「こうして体験を参加者同士で共有して、お互いが認め合うことが、ストレスの緩和に繋がっていくの」

【CISD】

ローズ「作戦後、参加メンバーが集まって行うデブリーフィング……」

ローズ「実はこれ、CISD、心傷性災害ストレス報告会（Critical Incident Stress Debriefing）といって、消防士のような災害救援活動に携わる人々のストレス・マネジメント法として、普及が進んだのよ」

ローズ「大規模な災害現場というのは、まるで戦場のようだとも言われる。……そのストレスもまた、兵士達のストレスと同じく深刻よ」

ローズ「だからPTSDという言葉が使われ始めた頃に心傷性災害ストレス（CIS）という概念も登場したの」

ローズ「その対処法となるCISDは、そのまま兵士達のストレス・マネジメントにも有効なはず。そこから軍隊や警察で採用され始めたのよ」

【ストレスを受けやすいタイプの人間】

スネーク「ローズ、ストレスを受けやすいタイプの人間ってのは、いるのか」

ローズ「そうね、頑張り屋とか生真面目とかいわれるタイプはストレスを受けやすいとされているわ」

ローズ「最近では、生理学的に血液検査によるスクリーニングで、影響を受けやすいタイプを判別する方法もある。その結果は、兵士の配属先を決定する参考資料として用いられたりしているわ」

ローズ「これも一つの脅威管理（スレット・マネジメント）と言えるかも知れないわね」

スネーク「血液からそんなことが判るのか？」

ローズ「断定は危険だけど、その傾向がある、とは

言えるかも。「恐怖にさらされやすい遺伝子」が存在する可能性を唱える専門家もいる」

スネーク「……ソルジャー遺伝子と同じような考え方か」

ローズ「ソルジャー遺伝子……ええ、そうね」

【ストレスの訓練】

スネーク「ローズ、どうしたら気力が減らないようにできる？　ストレスに耐性をつける方法はないのか？」

ローズ「「E＆E（エスケープ＆イベイジョン）」つまり敵地脱出訓練や、レンジャー訓練といった、極度のストレスを伴う訓練はあるけれど、そこで蓄積されたストレスをどうマネジメントするかという方が重要よ。我慢強くなるという方法はあまり健全ではないと思う」

ローズ「どんなにコップが大きくても、水を注ぎ続ければいつかは溢れる。時折水を捨ててやらなくちゃいけないのよ」

ローズ「「耐える訓練」ではなくて、内面化しがちなストレスの存在に「早く気づき、放出するための訓練」を行うべきというのが、私達が取っている基本的スタンスなの」

スネーク「「気づく」……か」

ローズ「スネーク、あなたの場合、気力ゲージの値で判断することもできるわね。自分のストレスコンディションを知るために、気力ゲージの状態には常に気を配って」

【カタルシスとは】

ローズ「スネーク、「カタルシス」という言葉、知っている？」

スネーク「カタルシス？（一般に使われるカタルシスのことなら、そりゃあ知ってはいるが…）」

ローズ「そう。これは、元々はギリシャ語で「浄化」という意味を持つ言葉よ」

ローズ「過去の体験で生じたトラウマを思い起こすと、人の心には恐怖や不快感、不安感が引き起こされ、感情が抑圧されやすくなるの。これは自由な表現を行うことで解消される。カタルシスとはそこで得られた感覚の事よ」

ローズ「カタルシスを得るには、自分の気持ちを人に聞いてもらう、絵を描く、スポーツ観戦をする、旅行に出かける、大声を出す……などの方法があるわ」
ローズ「スネーク、もし過去の経験から心に違和感を感じるような事があれば、私に話して。あなたがカタルシスを得る為の助けになれると思うの」
スネーク「ああ、何かあったら相談してみよう」

【コーピング】
ローズ「実際にストレスを抱えたり、それが予見されたとき、その解消や予防のために取る行動のことを、コーピングというの」
ローズ「コーピングには「問題点焦点型コーピング」と「情動焦点型コーピング」の二種類があるわ」
ローズ「前者はストレスの要因自体に切り込んでゆくコーピング、後者はストレスによる苦痛の軽減を目的としたコーピングよ」
ローズ「今まであなたに示した方法でいうと、落ち着ける場所に移って環境を変えるのは「問題点焦点型」で、食事したり体を休めたり、気持ちを切り替えるのは「情動焦点型」ということになるわね」
ローズ「適切なコーピング手法は、あなたの救いになるはず。そのお手伝いも私にさせてね」
スネーク「ああ」

【トラウマ】
ローズ「心理学では、心に受ける傷のことを、心的外傷（トラウマ）と呼ぶの。同じ言葉をあなたの専門でも別の使い方、してるわよね」
スネーク「トラウマパッドのことか」
スネーク「高抗張力繊維（コウコウチョウリョクセンイ）から編まれたボディアーマーは、確かに銃弾や弾片をストップする高い性能を持っている。だが所詮布きれだ、銃弾の運動エネルギー自体は、着用者の肉体にモロに伝わる。青アザ程度は当たり前だし、当たり所によっては骨折もする」
スネーク「そういった事態を極力防ぐために、衝撃の吸収を目的とするトラウマパッドを装着す

るんだ。スチールプレート内蔵で着弾時の衝撃を広範囲に分散させるタイプもあれば、衝撃吸収ゲルを使って運動エネルギーを熱に変換するものまで、種類としても様々だ」

ローズ「ねえ、スネーク。体の方はそれである程度保護されるでしょう。でも今のところ、心のトラウマパッドは存在していないわ」

ローズ「その代わりに私がいるの。何かあれば、すぐに私に話してね」

【リラクセーション】

ローズ「リラクセーションという言葉、知ってる?」

スネーク「心身をリラックスさせる、という意味だろう?」

ローズ「そう。リラックスした状態では、筋肉の緊張が解かれ、鼓動、呼吸がゆっくりになって、適正な血圧が保たれるわ。脳の活動も安定するから、不安や憂うつが抑えられ、感じるストレスも減少するの」

スネーク「そいつはいい。慌てていては何をしても、ろくな結果にならない」

ローズ「リラクセーション法として簡単なのが、筋弛緩法よ」

ローズ「一部の筋肉に力を込めて緊張させてから、一気に力を抜くことで、脱力状態の感覚を体に覚えさせるの。この動作を繰り返していると、やがて脱力状態、すなわちリラックス状態への移行が自然にできるようになるの」

ローズ「腕や顔から始まって胴体から脚、という順序で行うのが一般的ね」

ローズ「任務が長時間続いていると、体も心も緊張してしまうでしょう。一時間に一度くらい、このリラクセーション法で休息をとってみたらどうかしら」

スネーク「わかった。ありがとう」

【自律訓練法】

ローズ「リラクセーションの方法の一つに、自己暗示を用いた自律訓練法があるわ」

スネーク「自律訓練法?」

ローズ　「自力で肉体の状態を変化させることで、心身の調整を行う行動療法よ」

ローズ　「リラックスした姿勢で、体の重量感や温度感を表す「公式（コウシキ）」という言葉を心の中で唱えるの。そして体がその状態になっていくのを体感する。公式を一つ体得したら次の公式に進んでいく」

ローズ　「これを繰り返すことで、体は「公式」通りの状態に移行して、やがては「心身の調整」が出来るようになっていくの」

スネーク　「それに似た話を知っているぞ」

スネーク　「以前NZSAS（ニュージーランドエスエーエス）の隊員から聞いた話だ。連中は気温が低い環境での任務中、火をおこす代わりに焚き火の写真を見るそうだ。すると体が暖まった感覚が得られるらしい」

ローズ　「それも自己暗示の一種のようね。強く念ずることで、実際に生理学的な変化は起こりうるのよ」

ローズ　「経験からそういった方法を編み出したのか、あるいは心理学者の協力でもあったのかも知れないわ」

スネーク　「ちょうど君みたいにか」

ローズ　「そうね」

【脅威査定管理】

ローズ　「私たちカウンセラーが「ストレス査定（アサスメント）」と言うように、あなた方戦闘員（オペレーター）は「脅威査定（スレット・アサスメント）」という言葉を日常的に用いるわね」

スネーク　「対処すべき相手に対してアクションを起こす前に、正確な査定を相手に加える」

ローズ　「そう。相手の心理面も考慮した脅威査定（スレット・アサスメント）と管理（マネジメント）は、敵の早期発見・早期回避・早期対処も可能にしてくれるわ。戦闘そのものだけでなく、戦場全体でのイニシアティブを握るのに有効なのよ」

ローズ　「敵の心理……すなわち感情に対して敏感であり続けることは、戦場（そこ）でのあなたにとって不可欠よ。覚えておいてね」

【ソリッド・アイと感情】

ローズ　「あなたのソリッド・アイ、人間の感情を推測出来るのよね。エメリッヒ博士から詳し

く聞いたわ」

ローズ「感情を抱いたとき、顔面の筋肉群は感情の種類によって特定のパターンで動くの」

ローズ「これはかなり研究が進んでいて、情報機関、捜査機関でも応用されている理論よ」

ローズ「ソリッド・アイは、装備するライダーで対象者の顔面を走査して、筋肉の微細な動きを拾い上げているそうよ」

ローズ「プラス、……例えば恐れを感じると脚に血液が流れ込むとか、怒りを感じれば上半身に血液が集中するというような身体的反応、心拍数や皮膚温度の変化、発汗状況などの情報もあわせて、非常に高い精度で対象者の感情を推測するんですって」

スネーク「そうか、知らないで使っていた」

ローズ「(笑い)そう、感情が行動に与える影響は大きいの。あなたの判断(攻略)にも役に立っているはずよ」

ローズ「SOP(ソップ)が使っているナノマシンも同じようなデータ処理を行っているはず。心理学専門家の目から見ても、信頼性の高いシステムだと思うわ」

【サニーの吃音】

ローズ「あなた達と一緒にいるあの子、サニーといったかしら」

スネーク「ああ」

ローズ「あの子、少し吃音があるみたいね」

スネーク「ああ。初めて会ったときからだ。ローズ、君なら何かわかるか?」

ローズ「原因は色々あるから単純化は危険だけれど、あの子の場合、「外側の世界」を知らない閉ざされた生活が心にストレスを与えているのかもしれない」

スネーク「ストレスだって? サニー自身が外に出たがってないんだぞ」

ローズ「それはあの子の表層意識よ。サニーもいつか、外の空気を、自分の中に吸い込む時が来ると思うわ」

ローズ「窓(ウィンドウ)越しに外を見ても、現実の世界に触れたことにはならない」

スネーク「わかってる」

ローズ　「……確かにジャックはサニーを助けた。あなたたちはサニーを守っている。だけどまだ、本当にあの子を救えた訳じゃない」
スネーク　「だが、俺たちは可能な限りサニーの望むようにしているつもりだ。他にどうしろと？」
ローズ　「あの子を寂しくさせないで」
ローズ　「外側の世界には痛みも苦しみもあるはず。だけど、サニーにはあなたたちがついていることを感じさせて」
ローズ　「まだ小さな女の子よ。気を配ってあげて。ね？」
スネーク　「（邪険にしたりしてるのできまりが悪い）……ああ、判ってる」

■気力回復方法のアドバイス

※気力ゲージが25％以上の場合、「挨拶」→「気力の状態」に続けて、ゲーム中の気力ゲージ回復法ウンチク

【気力ゲージについて】
※気力ゲージの役割について
（1）状況に応じて（2）か（3）に続く

ローズ　「スネーク、ＬＩＦＥ（ライフ）ゲージの下にあるのはあなたの気力ゲージよ」
（2）中東で気力ゲージについて聞いている、あるいはブリーフィングで見ている場合。（4）に続く
スネーク　「ああ、知っている」
ローズ　「結構だわ」
（3）中東で気力ゲージについて聞いておらず、かつブリーフィングで見ていない場合。（4）に続く
スネーク　「気力？」
ローズ　「そうよ」
（4）
ローズ　「この気力ゲージはＬＩＦＥ（ライフ）ゲージの回復、つまり怪我の自然治癒スピードや、あなたの行動の正確さに大きく影響する」
ローズ　「気力が充実しているほどあなたのＬＩＦＥ（ライフ）は早く回復するし、行動中の不自由さも感じなくなるはず」
ローズ　「あなた自身を動かしているのは体だけじゃない。心も大きく影響しているの」
スネーク　「悪いがローズ、自分の精神状態に行動を左右されるなんて……（ルーキーじゃあるま

いし)」

ローズ「そう思っていてもスネーク、あなたはもう……、無理が利くほど若くはないのよ」

スネーク「……まあな」

ローズ「スネーク、あなたの命を芯から支えているのは気力なの」

ローズ「だから軽く見ては駄目よ。気力ゲージには充分注意して」

スネーク「ああ。わかった」

【気力ゲージ増減の条件】

ローズ「スネーク、気力ゲージはあなた自身の状況によって増減するわ」

ローズ「暑すぎる場所や寒すぎる場所に留まったり、戦闘下にいたりして体や心にストレスがかかるほど、気力ゲージは減少していってしまう」

ローズ「ゲージが減ると、行動にも支障が出てくる」

ローズ「手ぶれがひどくなったり、LIFE(ライフ)回復速度が遅れたりするのよ」

ローズ「目がかすんでモノが見えづらくなったりもするでしょう」

ローズ「そうなれば作戦の遂行にも支障が出るわ」

ローズ「気力ゲージの状態には常に気を配って」

【気力ゲージの回復法】

ローズ「気力が低下している状態とは、より多くのストレスが溜まっている状態と言ってもいい」

ローズ「減少した気力ゲージを回復するには、ストレスを緩和するのが第一よ」

ローズ「敵に追われることは、あなたにとって大きなストレス源(ストレッサー)になるわ」

ローズ「敵に見つかっていない状態で体を休めればストレスの解消に、ひいては気力ゲージの回復につながるでしょう」

ローズ「安全な場所でしゃがんだり、ホフク状態でじっとしているといいわね。それから、暑さや寒さをしのげるような場所にいることでも、ゲージの回復効果が得られるはずよ」

ローズ「気力ゲージの動きに気をつけて、あなたに合ったストレス解消の方法を見つけるのよ」

【食事による気力ゲージの回復】

ローズ　「食事が回復させるのは体力（ＬＩＦＥ）だけじゃないわ」

ローズ　「食事を摂ることは、気力ゲージの回復にも役立つわ」

ローズ　「食事の有無、良否が兵の士気にダイレクトに影響する。古くから軍隊の指揮官は、兵に与える食糧をどう確保するかに腐心してきたの」

ローズ　「絶対君主国家間の戦争では、一日の行軍距離は補給所間の距離を限度とするのが当たり前だった」

ローズ　「それから食事の良し悪しも重要よ」

ローズ　「第二次大戦中の米艦船には、「ｇｅｄｕｎｋ（ゲダンク）　ｂａｒ（バー）」というアイスクリーム製造器が設置されていたの、知ってる?」

ローズ　「小型艦艇の乗員のためには、1時間に19，000リットルのアイスクリームが作れる、アイスクリーム専用船まで用意されていたそうよ」

ローズ　「「軍隊は胃袋で動く」……ナポレオンの言葉は真実ね」

【大佐の苦難】

※「食事による気力ゲージの回復」を聞いた後でＳＥＮＤ。初回のみ

大佐　「（これ見よがしの声量で）食事と言えばな、スネーク」

スネーク　「大佐か?　なんだ、突然割り込んで来て」

大佐　「お前、米軍以外の糧食（メシ）を食ったことあるか」

スネーク　「……いや、あまり。それが?」

大佐　「先だって国連で、派遣武官達とレーションの交換会をしたんだよ。各国の食文化を相互理解する、実に有意義な場だった」

ローズ　「ロイ、余計な話は後に……」

大佐　「余計はないだろう、ローズ、君にも聞いてもらいたい」

ローズ　「私は充分聞いたけど……」

大佐　「まあそういうな。それでだなスネーク、レーションを食べ比べると美味いのはたいがいフランス軍のレーションだ。イタリア軍のもかなりいける。それから日本のレーションも、想像以上にうまかったぞ」

スネーク　「そうか、それは良かったな」

大佐　「そして全員一致で不評だったのが、我がアメリカ軍のレーションだ」
スネーク「そうか？（味を気にしたことがないのでピンと来ない）……で、それがどうした」
大佐　「（懐かしげに）ああ、食文化の豊かな国は違う。あのフランス軍のレーション、実にうまかったなあ。お前にも食わせてやりたかったよ、スネーク。（遠慮がちに）……それから、ローズ、君にも」
スネーク「（何を言いたいのか判らない）大佐、一体なんの……」
大佐　「本当にうまかったんだよ、ローズ」
ローズ「ごめんなさいね、スネーク。彼、この間から口を開けばこの話ばかりなのよ。よっぽど美味しいモノを食べてこなかったのかしら」
スネーク「かもな……ん、待てよ。ローズ、君の所は誰が食事の用意してるんだ？」
ローズ「私よ。ロイはあまり……（気づいて）どういう意味？」
スネーク「（お前のせいじゃないか）いや、何でもない。……大佐」
大佐　「うん？」
スネーク「同情する」
大佐　「判ってくれるか、スネーク」
ローズ「……米軍のレーションも、悪くないと思うけど……」（味オンチ）

【煙草について】
ローズ「スネーク、あなた煙草吸うのね」
スネーク「……君も嫌煙家か（ちょっとウンザリ）」
ローズ「（スネークの様子にクスリと笑う）さあ、どうかしら」
スネーク「？」
ローズ「さすがに、子供の前での喫煙は反対だけど、ストレス・マネジメントの見地からは別よ。喫煙家にとって煙草は有効なストレス緩和策の一つといえるのよ。現実に気力、回復したでしょう？」
スネーク「（なんだ、味方か）そうだな」
ローズ「（真剣な声音になって）でもだからといって、健康面での実害を否定する気はないわ。

LIFE（ライフ）ゲージは逆に減少するのに気づいていた？　それに煙草の臭いは敵の注意を引きつけてしまう筈」
スネーク　「……まあ、そうだな」
ローズ　「使いどころはあなたがよく考えて。いいわね？」

【装備品重量】
ローズ　「スネーク、身につけた武器装備の総重量には気を付けてね」
ローズ　「屈強なあなたなら、かなりの重量を運搬（キャリー）できると思う。でも行動が制限されてしまうことで精神面にも負担がかかり、気力ゲージが下がってしまうのよ」
スネーク　「しかし状況によっては、一度に色々な装備を用意しておく必要もあるんだが……」
ローズ　「総重量が大きくなるのが、絶対にいけないとは言わない。ただそれなりのデメリットもあることは、忘れずにいて欲しいの」

■死因について

※ゲームオーバー後、コンティニュー直後にSEND

【銃撃を受けて死亡1】任意無線
スネーク　「ローズ、相談がある」
ローズ　「珍しいわね。どうしたの？」
スネーク　「実は、撃たれて死ぬ夢を見たんだ。潜入中、突然死角から撃たれたり、銃撃戦のさなか心臓を撃ち抜かれたり……」
ローズ　「……あなたは任務中、何度も銃撃を受けるような場面を経験しているわよね」
ローズ　「心理学における夢は、無意識からのメッセージである、と解釈されるの。あなたの無意識は、「今の行動パターンを繰り返せば、夢で見たような死に方をするだろう」と警告しているのかも知れないわ」
スネーク　「……夢の中での失敗を、現実世界で繰り返すな、と」
スネーク　「……よし、銃を持った敵がいるときには気をつけよう。特に交戦状態では、敵の背後を取るように動く必要があるな……」

ローズ「ええ、そうね。気を付けて、スネーク」

【銃撃を受けて死亡2】任意無線

スネーク「ローズ……少し前から、何やら一度死んだような気がしてならない」

スネーク「それも、銃で撃たれて……」

スネーク「銃が気になる。銃を持った敵を見るとハッとするんだ」

ローズ「スネーク、あなたの今までの経験が、あなたに忠告しているのかも。凶弾による死が、あなたの側へ忍び寄ろうとしている、と」

ローズ「やみくもに突撃したり、銃撃戦の最中周囲への注意がおろそかになっていたり……そういう危なっかしい振る舞いをする仲間を見た時、あなたはどうする？」

スネーク「注意を促すだろう。あれじゃ死ぬ、ってな」

ローズ「潜在意識の中にいるもう一人のあなたが、そう語りかけてきている。そんな風に考えてはどうかしら」

スネーク「……なるほど。右スティックを使って索敵しつつ、慎重に進む。敵に見つからないようにするという基本を押さえる……。たしかに注意すべきだな」

ローズ「そうよ、スネーク。どうか気を付けてね」

【爆発で死亡】任意無線

スネーク「ローズ、いるか？ ちょっと聞きたいことが……」

ローズ「スネーク？ あなた、無事よね？」

スネーク「無事？ 何の話だ」

ローズ「あ、いえ。無事ならいいの。ごめんなさい」

スネーク「何かあったのか」

ローズ「……さっき、仮眠を取っていたんだけど……」

ローズ「そこで見た夢……あなたが爆発に巻き込まれて」

ローズ「あまりに鮮明だったものだから、つい不安になっちゃって……」

スネーク「大丈夫だ、俺はこうして生きてる。……しかし爆死か。いつ吹き飛ばされてもおかしくない状況にいるのは確かだ」

ローズ「設置型爆弾以外にも、例えば手榴弾のピンを抜く音がしたら次に何が飛んでくるか…

…そういうことにも気を付けて」

スネーク「ああ、そうすることにしよう。心配してくれてありがとう、ローズ」

ローズ「……いいえ、いいのよ」

【落下して死亡】任意無線

スネーク「ローズ、過去の経験が突然別の形で脳裏に浮かぶなんてことはあるんだろうか……。例えばＨＡＬＯ降下の経験とか」

ローズ「特殊部隊が用いている降下法ね、ＭＦＦ（ミリタリー・フリーホール）。……その降下がどういった形に変わるの？」

スネーク「最近、パラシュートも何も装着していない自分が、高所から落下して地面にたたきつけられる場面が、頭の中でフラッシュバックするんだ」

ローズ「そう……。もしかしたらあなたの無意識が、過去の記憶を改変して提示することで、現実へ注意を促しているのかも……」

スネーク「無意識ってのは、そんなことをするのか」

ローズ「これが夢なら「警告夢」というんだけど……ともかく、高いところにいるときに、落下の危険性を意識するのは大切な事よ」

ローズ「エルード中はグリップゲージの値に気を付けて。グリップゲージは気力ゲージの残量に影響を受けるから、気力に対する配慮も必要よ」

スネーク「ああ、気をつけよう。それに、崖っぷちみたいな所で不用意にローリングするのも危険だな……」

ローズ「ええ、そうね。十分に気を付けて」

【ナイフで死亡】任意無線

スネーク「ローズ……ナイフのような刃物を見ると、それで殺された自分がいたような気がしてしまう。既視感じゃないが、ナイフの鞘を見ただけで刺されたような錯覚をおぼえるんだ」

ローズ「そうね……。敵との物理的距離が狭まるほど、暴力に対する心的抵抗が強まると言われているわ。近接戦闘の象徴的存在であるナイフが、自らの死を想起させるというのも、あり得る話かも知れない」

スネーク「つまり俺は、ナイフのような刃物での死を無意識に警戒している?」
ローズ「あくまで仮定だけど……」
スネーク「確かにナイフで斬られるのは楽しい事じゃないからな」
ローズ「ナイフアタックを仕掛けてくる敵には注意して。いつものあなたなら…そうね、敵の正面に立つのは避けるかもしれない。横ローリングやバックステップで回避をするかも…」
ローズ「私があなたにこんなアドバイスをするのも可笑しいわね。きっとあなたはナイフに対する警戒心が大きくなっているおかげで、普段出来ることが出来なくなってしまっているのね」
スネーク「いや、いいアドバイスありがとう、ローズ。少しすっきりしたよ」
ローズ「いいのよ、スネーク」

【溺死】任意無線

スネーク「ローズ、変な話だが、溺れて死んだ記憶があるんだ」
ローズ「記憶?」
スネーク「いや、正確に言えば、そんな気がする。確かに水中で命を落としたような気が」
ローズ「水は苦手?」
スネーク「いや、そんなことはない」
ローズ「……そう。一体何かしら……」
スネーク「ただ、おかげで溺死の危険性というものを強く意識できるようになった。例えばO2ゲージの残量に常に注意が向くし、マメな息継ぎの重要さも実感出来る」
ローズ「それは良いことね。どうしたら溺れずに済むのか、その意識を持ち続ければ、いざというときにも的確に対応できるようになる」
スネーク「確かに、今はよほどのことでもない限り、溺れ死ぬ気がしない」
ローズ「そうよ、スネーク。それは私たちの望みでもあるわ。ミッションを終えて無事に生還して欲しい」
スネーク「……そうしたいもんだ。変な話を聞かせて済まなかったな、ローズ」

ローズ　「いいのよ。またいつでも話をして、スネーク」

【汎用死亡】任意無線

スネーク　「ローズ。こんな相談をするのは自分でもおかしいと思うんだが……」
ローズ　「大丈夫よ。何でも話して」
スネーク　「実は最近、死んだことがあるんだ」
ローズ　「死んだことがある?」
スネーク　「いや、最近、どうも一度死んだ気がしてならないんだ」
スネーク　「具体的な感覚はわからない。ただ一度死んで、その後ミッションを再開したような気がする。そんな自分を、少し離れたところから眺めているような感覚も……」
ローズ　「そう…。軽度の離人性障害かもしれないわね」
スネーク　「それは……?」
ローズ　「もしかしたら過去受けたなにかの心的外傷(トラウマ)のせいかもしれない」
スネーク　「過去に……一体何だろう」
ローズ　「……すぐには判らないけど……。でもスネーク、一度死んだ気がするというのは、現実の死に対する警告だとは考えられない?」
スネーク　「警告?」
ローズ　「あなたの潜在意識が、顕在意識中のあなたに死をイメージさせようとしているのよ」
スネーク　「死を避けて俺が慎重に行動するように?」
ローズ　「そう。死の可能性があることをあなたに感じさせてくれている。必要なことだわ。だってあなたが無事に帰ってくれることを、みんな願っているんだもの。だからスネーク、どうか気をつけて、軽率な行動は慎んでね」
スネーク　「ああ、気を付けよう、ありがとう、ローズ」

■ムーニャについて

※装備すると気力ゲージの回復を早めてくれるムーニャについて。「挨拶」→「気力の状態」に続いて

【ムーニャとは】任意無線
※ムーニャ所持時
ローズ　「スネーク、ムーニャを持っている?」

ローズ　「南米に自生するハーブの一種で、お茶にしたりする……」
スネーク「……ああ、あの草か」
ローズ　「ムーニャを揉むと軽いミントのような香りがするの。高山病にかかった時にその香りをかげば、症状がやわらぐとも言われているわ」
ローズ　「もしかしたら、気力の回復にもプラスに働くかも知れないわね」
ローズ　「気力の減少が気になるとき、装備してみたらどうかしら」

【ムーニャの効果】任意無線
※ムーニャを装備して気力回復が早まった時
スネーク「ローズ、あの草、ムーニャだったか、君の言うとおり装備したら気力回復に効果があったぞ」
ローズ　「そう、良かったわ」
スネーク「いいことを教えてくれた」
ローズ　「どういたしまして」

【ムーニャを使って】任意無線
※気力が低くてムーニャを持っているとき
ローズ　「スネーク、大丈夫？　随分気力が低下しているようだけど」
スネーク「ああ。どうも調子が出ない」
ローズ　「どこか安全な場所で休んだりして、気力を回復した方がいいわ。ムーニャを持っているなら装備すると効果があるかも」
スネーク「ムーニャ……？（持ってたかな）」
ローズ　「気持ちをリラックスさせてくれるはず。あなたの気力回復の助けになってくれると思うわ」
スネーク「わかった。試してみよう」

■その他

【臭いで気力減少】
※ゴミ箱などに入っていて、気力ゲージが低くなっているときにSEND
ローズ　「スネーク、あなたの体に……」
スネーク「羽虫がたかっている、か？　さっきから何だか疲れを感じていたが……。臭いのせい

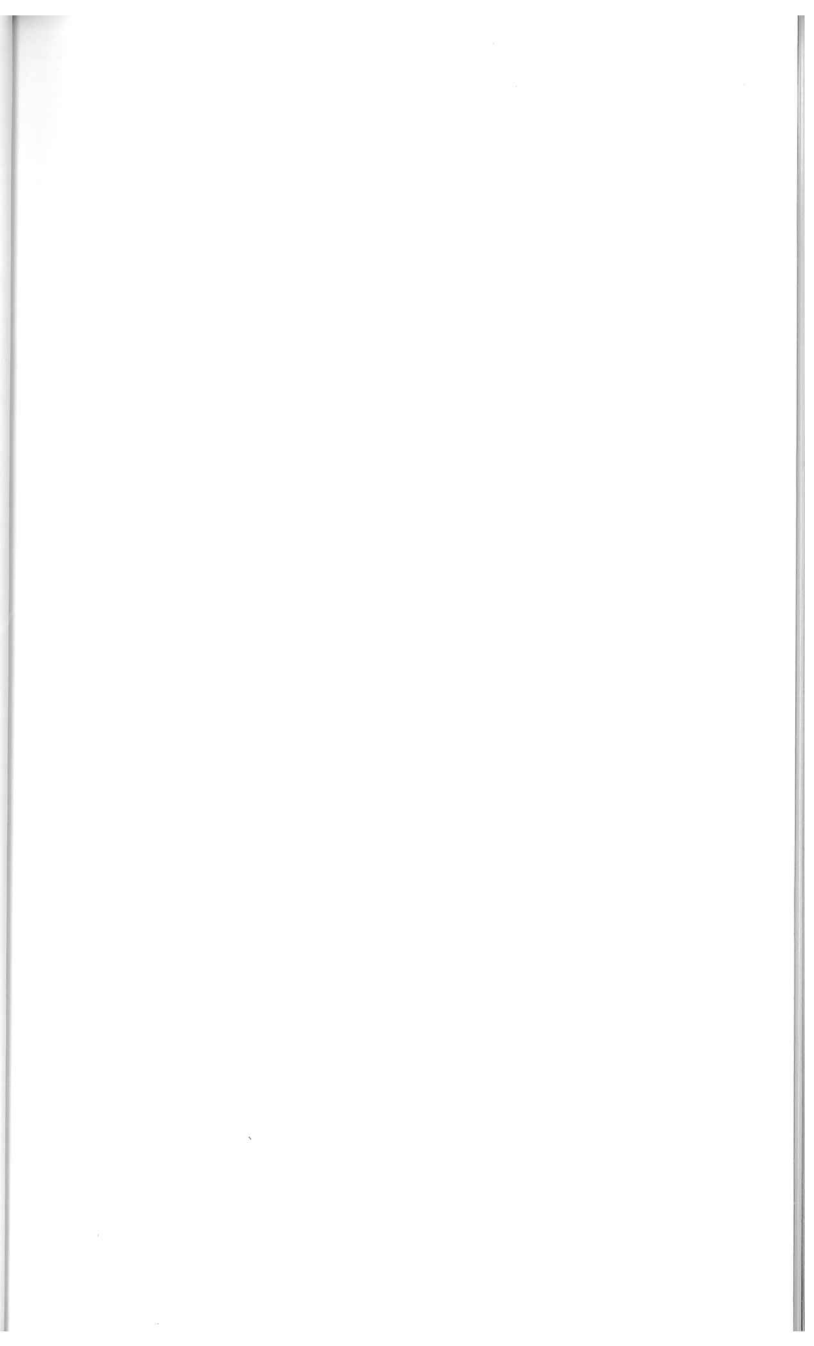
で気力が落ちている？」

ローズ「ええ、その筈よ。ちゃんと気づいていたのね」

スネーク「臭いの元を落とせれば気力回復に有効、だったな」

ローズ「地面で転がったり水に入ったり……」

ローズ「服を着替えるのもいいわ」

ローズ「適宜対応して」

METAL GEAR SOLID 4 GUNS OF THE PATRIOTS
SCENARIO BOOK

メタルギアソリッド4 ガンズ・オブ・ザ・パトリオット
シナリオ・ブック

原作／監修　小島秀夫

カバーイラスト　新川洋司
アートディレクション／カバー&表紙デザイン　久留一郎
本文デザイン　荒川　実
DTP　邑上真澄

協力・監修　株式会社コナミデジタルエンタテインメント
小島プロダクション

制作　株式会社新紀元社 編集部

印刷・製本　大日本印刷株式会社

Printed in Japan